山岳

LXXI·LXXII

好日山荘®

Mountaineering & Skiing Goods

エーデルワイス・マークの好日山荘

何時か、また、きっと会うな…

好日山荘®

●東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7〒104☎03(561)3600・(567)9031 スキーショップ☎03(561)0966
●吉祥寺近鉄店 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1〒180吉祥寺近鉄7F☎0422(21)3331㈹ 内線3318
●大阪店 大阪市北区曽根崎上1-47〒530☎06(364)0933㈹ 登山プロショップ 芳沢ビル2F
スキーショップ マルビル・芳沢ビル1F
●セルシー店 豊中市千里中央"セルシー1階"〒565☎06(833)0123
●大阪三越店 大阪・北浜三越新館2F
●福岡店 福岡市博多区須崎町1-4〒812☎092(281)3440
伝統と信用の好日山荘は6店舗です ―― 最近類似店名の店がありますが、当店とは無関係です

山岳

第七十一・七十二年

山岳　第七十一・七十二年　目次　（一九七六・七年度）

ナンダ・デヴィ縦走（一九七六年）……鹿野勝彦……一
ドゥナギリ・北稜からの登頂（一九七六年秋）……牧野内昭武……二五
シェルピ・カンリ登頂（一九七六年）……平井一正……二九
ジャヌー北壁（一九七六年春）――そのタクティクスについて――……小西政継……四〇
RCCⅡによる岩場グレーディング……須田義信……五〇
大台ヶ原の自然保護について……田村聡明……六二

☆

≪座談会≫
日本山岳会の戦後三十年
――ルーム再建からエベレスト登山まで――……〔出席者〕望月達夫……七四
折井健一
浜野正男
山崎安治
金坂一郎
松田雄一
（司会）近藤信行

プリアン・サール登頂（一九七五年）――天使のいるオトギの国――……内田嘉弘……一〇〇
アプサラサス登頂（一九七六年）……石原敏雄……一〇七

シンギ・カンリ登頂（一九七六年）……中津哲夫……二一四
バルトロ・カンリ（一九七六年）……高原三平……二一〇
チャンガバン南西岩稜（一九七六年）……戸田直樹……二二四
アンデスの太陽の下で……柿本育夫……二二九
マルビティン中央峰登頂（一九七五年）……佐藤敏彦……二三七
スキャン・カンリ登頂（一九七六年）……森一彦……二三七
アビ・ガミン登頂（一九七六年）……贄田統亜……二四二
……伏見紀子……二五〇

☆

追悼

日高信六郎氏（大木操　金坂一郎）、藤島敏男氏（望月達夫　島田巽）、伊藤秀五郎氏（山口健児）、斎藤直一氏（伴野清）、又木周夫氏（大木操）、中原万次郎氏（宮原巍）、酒戸弥二郎氏（岩坪五郎）、藤田佳宏氏（大塚博美）、関田美智子氏（山田靖子）、阿岸充穂氏（高沢光雄）、石田吟松氏（山崎安治）……二五七

図書紹介

島田巽著『山・人・本』（望月達夫）、渡辺公平著『山は満員』（柿原謙二）、川崎精雄著『山を見る日』（中村純二）、五百沢智也著『ヒマラヤ・トレッキング』（向後元彦）、小西政継著『ジャヌー北壁』（橋村一豊）、Hankinson 編『Changabang』（梶正彦）、伊藤秀五郎著『北の山・続編』（川崎精雄）……二八九

会務報告（一九七六年一月～一九七七年六月）……二〇四
英文梗概……巻末

写真

ナンダ・デヴィに関するもの　五枚
ドゥナギリに関するもの　三枚
シェルピ・カンリに関するもの　四枚
ジャヌーに関するもの　三枚
大台ケ原に関するもの　一枚
プリアン・サールに関するもの　二枚
アブサラサスに関するもの　二枚
シンギ・カンリに関するもの　二枚
バルトロ・カンリに関するもの　一枚
チャンガバンに関するもの　四枚
アンデスに関するもの　一枚
マルビティンに関するもの　二枚
スキャン・カンリに関するもの　三枚
アビ・ガミンに関するもの　二枚

〔追悼〕　日高信六郎氏、藤島敏男氏、伊藤秀五郎氏、斎藤直一氏、中原万次郎氏、又木周夫氏、酒戸弥二郎氏、藤田佳宏氏、関田美智子氏、阿岸充穂氏、石田吟松氏

図版

ナンダ・デヴィに関するもの　二枚
ドゥナギリに関するもの　三枚
シェルピ・カンリに関するもの　三枚
ジャヌーに関するもの　一枚
岩場グレードに関するもの　二枚
大台ケ原に関するもの　一枚
プリアン・サールに関するもの　二枚
アブサラサスに関するもの　二枚
シンギ・カンリに関するもの　二枚
バルトロ・カンリに関するもの　一枚
アンデスに関するもの　三枚
マルビティンに関するもの　一枚
スキャン・カンリに関するもの　一枚
アビ・ガミンに関するもの　一枚

表紙カット　山里寿男

ナンダ・デヴィ縦走（一九七六年）

鹿野勝彦

日本山岳会の若い会員有志で形成されたナンダ・デヴィ計画グループは、日本山岳会とインド山岳財団の合同登山隊を組織し、一九七六年にナンダ・デヴィ東峰より主峰への初縦走を行った。以下はその時の遠征記録である。

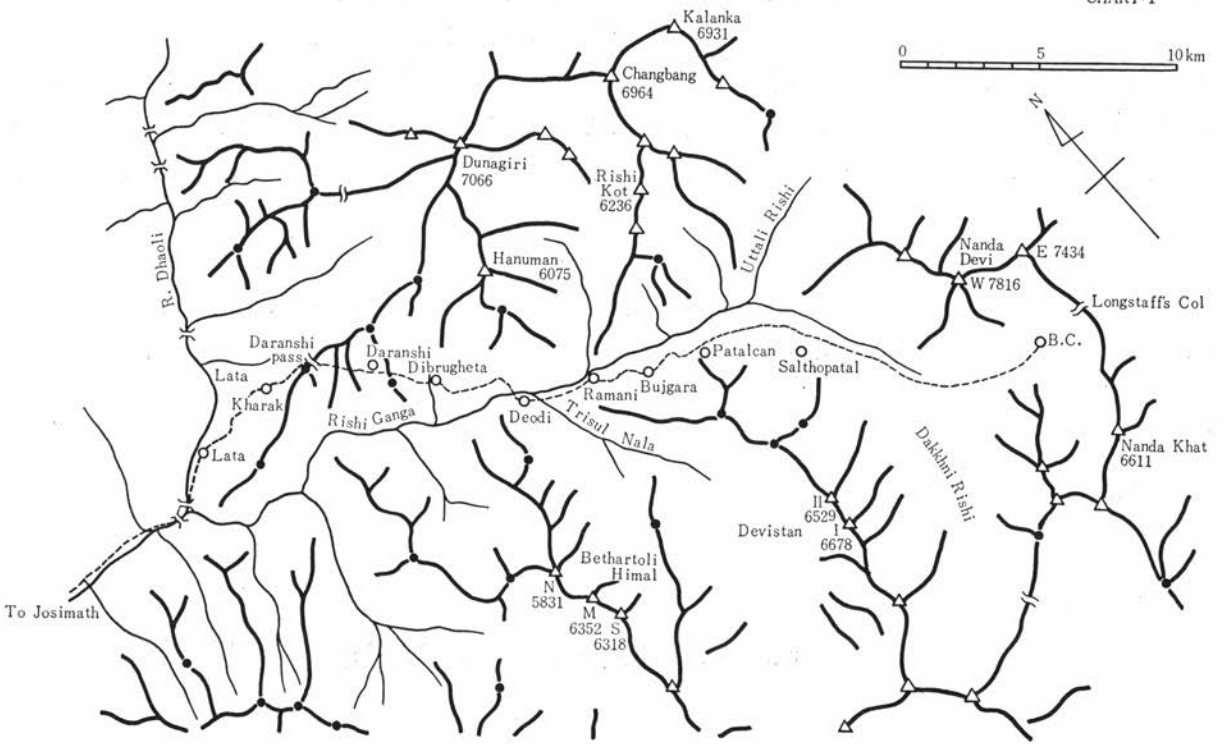
ベースキャンプへの行程

五月十二日、私達はようやく待望のベースキャンプ建設にこぎつけた。ナンダ・デヴィの双峰を正面にあおぐダクニ・ナンダ氷河の源頭、標高四九〇〇メートルの地点である。それにしても、それはなんとささやかなベースキャンプだったろう。二張の小さなテント、三人の隊員と二人の高所ポーター、十日分たらずの食糧、小指ほどの太さの燃料用のブッシュの束がいくつか、それが当面のベースキャンプ用の装備のほとんどであった。

このベースキャンプをめざして、十九名の隊員、十五名のハイポーター、百名余の一般ポーターからなる大部隊が、キャラバンの起点、ジョシマートを出発したのは四月二十五日である。歩きだしてすぐ通過するラタは、全行程

Route Map to Nanda Devi

CHART 1



中唯一の村で、これから先、ルートは標高三五〇〇メートルを下ることはない。キャラバンは予想通り困難をきわめた。出発してすぐぶつかる標高四二五〇メートルのダランシ峠の突破には、ルート工作だけで三日を要し、隊は早くも二分、三分された。後半のリシ・ガンガのゴルジュ帯の通過にも、ルート偵察と工作のパーティを連日先行させねばならなかった。しかし、さいわい隊員は連日のハードワークにも体調をくずすこともなく、むしろ全体としては調子も上向いてきていたし、日本、インド双方の隊員の間にあった一種のかたさも日がたつにつれてほぐれてきていた。五月六日には隊の主力はゴルジュ帯を抜けて、ナンダ・デヴィ内院の一角、パタルカンに集結した。ベースキャンプまではあと二行程、長い、だが平凡な氷河上の道のりが残るだけである。

次のキャンプ地、サルソパタルは、実は私達のヘリポート予定地であった。ナンダ・デヴィ縦走を目指す私達の計画は、実際には東峰、主峰各々へまず極地法による登山を展開することを前提としている。隊の規模もかなりふくれ上り、ベースキャンプへの輸送量も、どんなに切り詰めても五トンに近いという結果になってしまった。キャラバンルートの技術的な困難さ、途中で一切食糧の補給ができないという効率の悪さ、なによりもポーターの人数の不足といった条件の下で採用されたのが、ヘリコプターによるサルソパタルへの空輸である。基地となるジョシマートには、二名のインド側隊員と三名のハイポーターが空輸要員として残り、高所用の物資の大部分も、空輸の対象として残されていた。空輸はインド陸軍の協力によるもので、ポーター輸送に比べれば、はるかに経済的でもある。ただ、輸送手段を私達自身では全くコントロールできない形であるだけに、一抹の不安があったのも事実である。しかし、昨年のインド・フランス隊もこれに頼ったという実績があったし、今年度も、ベースキャンプへの輸送について責任をもつことがあらかじめ決っていたインド側隊員の方針もあって、空輸を主輸送手段とすることに踏み切ったのである。五月六日には、その第一回の空輸が行なわれることになっており、五日ベースキャンプ建設という当初の予定からは数日おくれるにしても、すべては順調に運んでいるように思われた。

その空輸が事情により打ち切られる、という無電が突然まいこんだのは、八日朝である。まさにそれは晴天の霹靂とでもいう感じであった。キャラバンをはじめる前なら、いや、せめて四月中であれば、態勢のたてなおしようもある。しかし、ここまできて、輸送の方針をくつがえし、ほとんどゼロから再出発しろといわれても、それは無理というものだ。すでに天候も安定し、頭上にのしかからんばかりに近づいたナンダ・デヴィの頂稜が、朝から夕方まで、様々の姿で私達をひきつける。隊員も、二週間近く、三五〇〇メートルから四〇〇〇メートルの高度で活動を続けてきただけに、すぐにでも山にとりつける状態にある。にもかかわらず、私達はサルソパタルに釘づけになってしまった。焦り、後悔、ぐち、そんな形でしか表現できないような言葉が頭の中をかけめぐる。それをなんとか口に出さないのが精一杯、というのが、正直なところであった。神頼みのような気持で、空輸再開を依頼する無線を打ち続けた三日間を、私達は決して忘れないだろう。

十一日朝九時、前ぶれもなく、突然、サルソパタル上空にヘリの爆音が轟いた。今度はうれしい不意打ちであった。私達がテントからヘリポートまで馳けつける間にも、後部のハッチからバラバラと荷が投下されはじめた。麻袋が落下の衝撃で裂け、小麦粉が白い煙をあげる。紫の玉ネギはくだけ散って花びらがまきちらされたような有様になる。いささか荒っぽい補給ではあったが、ともかくこれで一トン半余の物資が到着し、私達はひとまず危機を脱した形となった。

だが、この日は投下できない物資、高所用の食糧ボックス、燃料（プロパン）のボンベやコンロ、テントのポールなどが届かなかったため、これで輸送の問題が解決したというわけではなかった。今後の空輸の見通しもたたない。ジョシマートに残った隊員の要請で、若干名の隊員、ハイポーターは、ポーターによる輸送を強化するために、ベースキャンプを目前にして、いったん下へむかうこととなった。平行して、ベースキャンプも建設し、とにかく手持の装備、食糧で登山もやれるところまでやってみよう、ベースキャンプから手の届く範囲だけでも、偵察とルート工作

をしてみよう、ささやかなベースキャンプはかくしてでき上ったのである。

その後、十八日には、さらに若干の空輸が、今後は投下でなく行なわれ、最も緊急に必要とされる高所用物資の一部が到着した。だが、それで空輸は打ち切られ、その後は、ポーターによる輸送が続けられた。隊員は順次ベースキャンプ入りしたが、最後の隊員のベースキャンプ到着は六月二日で、結局ジョシマート出発以来二十九日目、ベースキャンプ建設から数えても二十二日目であった。

東峰への登攀

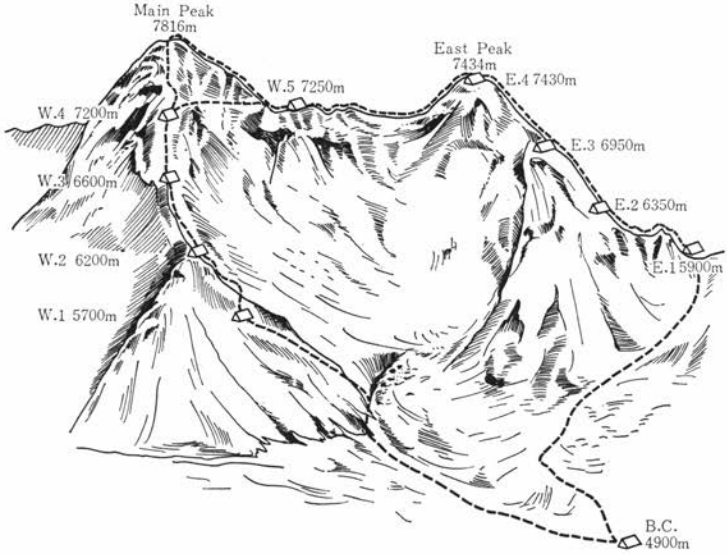
ベースキャンプから上へむけて行動を開始したのは、五月十五日である。はじめの計画では、縦走隊が出発する東峰側と、これをサポートし、収容する主峰側とに、平行して隊を送るつもりだったが、もちろん現状ではそんなことはできない。もっとも、これほどとは思っていなかったものの、輸送の困難さや、その結果生じる事態についてはある程度予想もしており、対応策も考えていたので、さして慌てることもなかった。それになんといっても三日間、手の届かない空の一角をにらんで待ち暮した後である。隊員の気持にも、はずみがついている。当面、下部が困難な東峰側に行動を集中し、ルートをのばせるだけのばすこととする。

東峰側へは、まず氷河上のガレ場をたどり、右へ折れて東峰南稜の西斜面へとりつくと、あとは最低鞍部、ロングスタッフのコルまで、標高差一〇〇〇メートルをひたすら登りつめる。下部は雪で傾斜も三十度程度だが、上部へ行くに従って氷と変り、傾斜もしだいに増して、コル直下では六十度近い氷壁となる。途中、腰をおろせるような場所もなく、辛い、きびしい登りだ。それだけに、ベースキャンプ入りしたばかりの隊員にとっては、ここをどの位の時間で、どんな感じで往復できたかは、体調をはかる絶好のバロメーターにもなる。

トップでベース入りした高見、重広、プレムチャンドらは流石に快調で、二日間でコルまでのルート工作を終え

Nanda Devi　　CHART 2

—The Traverse Route of IMF-JAC Joint Expedition



た。コルは文字通りのナイフリッジで、雪をけずり、それをさらにはりつけるようにして作った台地に、ようやくテントを張った。標高五九〇〇メートルの尾根上にキャラバン用テントは一寸きびしいが、この際、ぜいたくはいっていられない。

「これでもティルマンのころのテントよりましだろう」と、隊員の意気は軒昂たるものだ。眺望は文句なしにすばらしい。北は、頭上を岩塔に押えられているが、西は、私達がたどることになる、東峰からつづく主峰の稜線の上部と、南稜とが手にとるように見え、闘志をかきたてる。南は、ナンダ・カートへのびる稜線をはさんで、両側へ一〇〇〇メートル以上切れおち、南東にはナンダ・コットの端麗な山容がひときわ目立っている。東にはネパールの山々が、はるかにかすんでいる。その中には私達のうちの何人かになじみの深いアピやダウラギリ山群の山々も含まれているはずだ。

十九日から東峰南稜上での活動がはじまった。ルートは稜線をほぼ忠実にたどる。まず、コルの東第一キ

ャンプ（E1、以下東峰上のキャンプをE、主峰上のキャンプをWで現わす）上の岩塔を東側の雪壁からのりこし、あとは雪と氷と岩のまじったリッジを小ピークをいくつか越しながら、切目なくフィックスロープをのばしていった。標高六三〇〇メートルをこえたあたりで、リッジからいったん岩がなくなり、雪と氷ばかりになる。その最後の岩かげを私達はE2地点と決めた。E2建設は五月二十二日、標高約六三五〇メートルの地点である。

このころになって、ようやく隊の主力がベースキャンプにそろい、高所用の物資も、充分とはいえないまでも到着しはじめていた。だが隊員の四分の一と、高所ポーターの約半数は、まだベースの輸送にあたっている。加えて、二十日からは、主峰側でも行動を開始したので、メンバーは二分され、ルートがのびるわりに荷上げがおいつかない、というのが常態になってきた。だが、ここで無理をして一人でも体調をくずせば、他のメンバーの負担はいよいよ重くなる。がんばれ、だが無理をするな、と口で言うのは易しいが、ヒマラヤの高所でそれを実行するのは、仲々どうして容易でない。隊員の豊富なキャリアだけがたよりであった。

さいわい天候は、ベースキャンプ入りして以来おだやかで、午前中は判で押したように晴れ、午後雪が降っても、翌日の行動にさしつかえるほどの積雪にはならなかった。

E2から上は氷のリッジをしばらくたどると、傾斜がいったんおちて、雪の台地へ出る。このあたりが、東峰南稜上でロープを固定しなかった唯一の場所である。台地の末端から尾根は再び岩稜状となる。ここから先は、ベースからみると、ナンダ・デヴィ双峰と、それをつなぐ稜線の上部一帯をおおう岩壁帯の一部であり、私達は頂上岩壁帯と呼んでいた。東峰側ではその中段に顕著な雪のバンドがあるので、それを境に上部、下部に分けることができる。私達としては、縦走隊を出発させるキャンプ、E4を東峰頂上におくつもりであったから、E3もできるだけ高く、できれば七〇〇〇メートル近くまで上げたかった。岩壁帯へ入って、ルート工作のスピードもややにぶったが、それ以上に荷上げが苦しくなってきた。二十六日、下部岩壁を三分の二ほど登った標高六九五〇メートルのE3予定地点ま

でロープはのびたが、長谷川、高見がここから東峰へむかって最後のルート工作を開始したのは、六月二日である。

二人はこの日、下部岩壁を抜け、さらに中央雪田を突破して上部岩壁中段の七三〇〇メートル地点までロープを固定した。すでに東峰と主峰を結ぶ稜線上のコルより、はるかに高く登っている。岩壁の傾斜は増し、岩質は硬いが大まかで悪い。ルートはこの岩壁をぬうように凹角をつないでいる。ところどころ、一九三九年のポーランド隊以降の三つの隊の残置ハーケンが目についた。いかにも大ぶりなそれらのハーケンが、二人をふるいたたせる。三日、ハイポーターのザンブーを加えた三人は、昨日の到達点からさらに二〇〇メートルロープをのばし、十二時丁度、東峰の頂上にたった。

登頂の報は、ただちに定時交信で、各キャンプに伝えられた。ふつうならピークへの登頂は、登山の成功を意味する。だが、私達の場合、それはいくつもの中間ステップの一つに達した、というにすぎない。けれども二人がここまで快調にルートをのばし、さらに自らの眼で主峰へつらなる稜線を確認したことの意味は大きかった。縦走ルート中、最も困難な部分の一つと目されていた東峰からコルの下降については、ほぼ一様な傾斜の雪のリッジで、特にルート工作の必要もないと判断された。期待は半ば確信に変った。

九日、プレムチャンド、重広、桐生、ハイポーターのラトゥン・シンの四名は、荷上隊として東峰に第二回目の登頂をし、E4建設に必要な物資をデポした。東峰頂上はテニスコート位はとれそうな広い雪原で、そこから縦走隊の目指す主峰の他に、さえぎるものは何一つない。第一回の登頂後、ベースで休養をとった長谷川、高見は、十二日、ザンブーとダラムチャンドの二人のハイポーターにサポートされて再び東峰に立った。しかし、今度はそこにテントをたて、一晩をすごすのだ。そして翌朝は西へ、主峰への稜線をたどることになる。

主峰の登攀

主峰側では五月二十日から行動を開始した。こちら側の当面の目標は、できるだけ早く主峰南稜に達し、標高七二〇〇メートル付近から主峰頂上岩壁の中段を右にトラバースして、東峰との稜線へ出ることにある。そこにサポートキャンプを設け、東峰から来る縦走隊を収容する。縦走隊はここに一泊して主峰を目指し、一方、サポート隊はあわよくば東峰への逆縦走を狙おう、私達はそう考えていた。

ルートはまず、正面からおしよせている懸垂氷河と、主峰南稜末端のバットレス状岩壁のコンタクトラインの雪面をたどり、標高六〇〇〇メートル付近で左手の雪まじりの岩壁へとりついて、バットレスの頂部で南稜へ出る。雪面の上部、五七〇〇メートルあたりに設けたW1までは技術的な問題は全くない。単調な登りで、暑さだけが厳しい敵となった。W1からバットレスへとりつくあたりから、傾斜も増し、又、岩がもろいのに神経を使うようになる。しかし東側のルートに比べれば、技術的には概して容易で、はじめからハイポーターがある程度荷上げに使えるのが、この際はありがたい。

しかし全体的には、荷上げ要員の不足は、主峰側では東峰側以上に深刻であった。五月二十八日、主峰南稜へ出る直下、標高六二〇〇メートル付近にW2を建設したころから、特にその傾向は著しくなっていた。

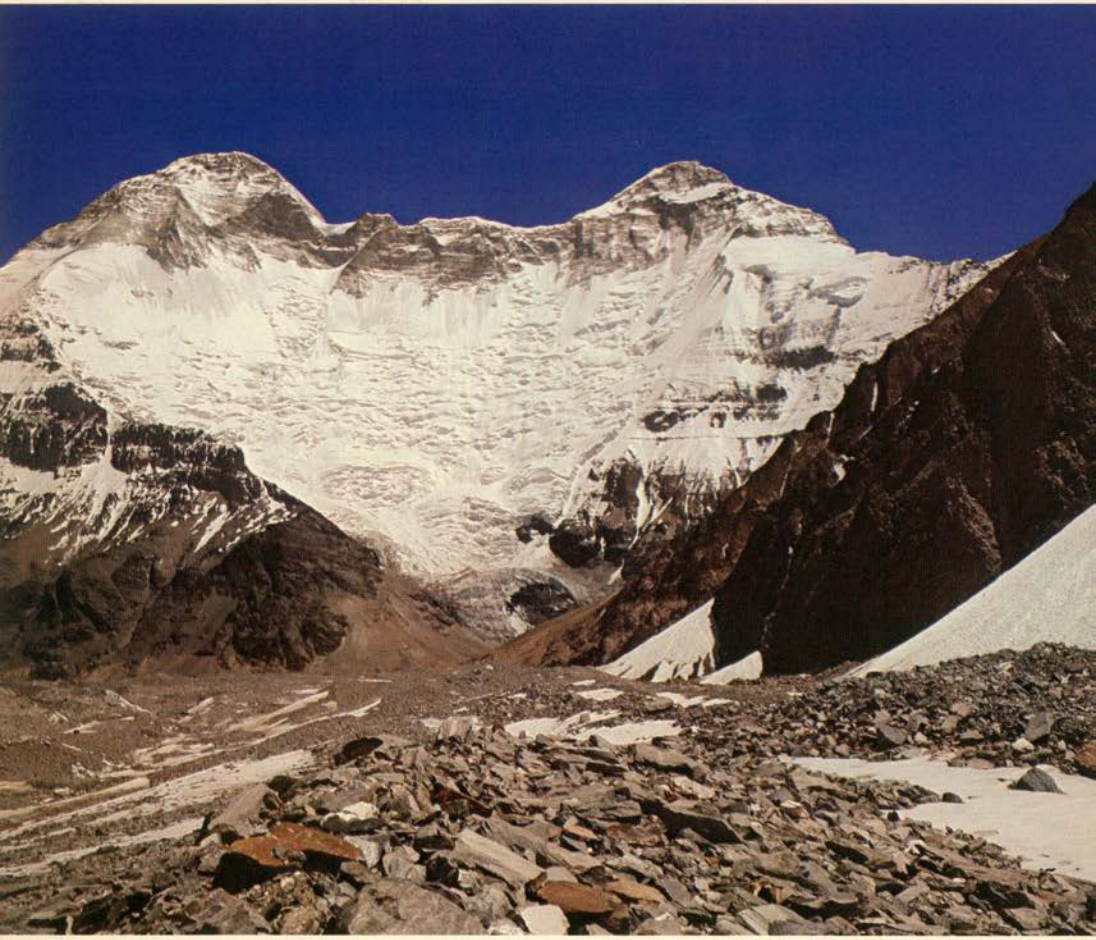
このころには、ほぼベースキャンプに人員はそろったのだが、ルートはすでに東側では七〇〇〇メートルを、西では六〇〇〇メートルをこえてのびている。新しくベースに入ったメンバーは、いくら四〇〇〇メートル段階に長くいて順化が進んでいるといっても、それで通用するのは精々五〇〇〇メートル台までで、六〇〇〇メートル台へ入って活躍できるまでには、まだ時間がかかる。ハイポーターもその点では隊員と大差ない。彼等のほとんどはシェルパといってもダージリン生れの若手で、キャリアも浅いから、考えてみれば無理もない。早目にベースへ入ったメンバーは、どうしてもルートのより延びている東へ多目に投入せざるをえないので、西側はいよいよ苦しくなる。五月末に入って、それまで孤軍奮闘していた小林、チャンドーラ、ピンジューに加えて、加藤、寺本が東からまわって、よう

やく本格的な上部での行動が可能な状態になったとはいえ、ルートがのびても荷上げがおいつかない、という状況は相変らずであった。

主峰南稜へ出たあたりからしばらく、もろいスレート状の岩稜を登ると、リッジからいったん岩が消え、氷の尾根となる。氷稜は六六〇〇メートルあたりでひろいプラトー状の雪の斜面にきえ、その上には巨大なドーム状の頂上岩壁がひろがっている。このプラトーの中段に私達がW3を設けたのは、東峰の第一回登頂におくれること二日の六月五日である。主峰から東峰へいたる稜線が正面に見わたせ、サポート隊の前進ベースとしては絶好の位置にあるが、地形の関係か、終始烈風のふきすさぶきびしいキャンプでもあった。昨年のインド・フランス隊もこの風には悩まされたらしい。彼らの掘った雪洞が完全に氷化したまま残っていて、私達もそれを倉庫兼キッチンとして利用することにした。

六日から、主峰頂上岩壁でのルート工作が開始された。広大な岩壁は、傾斜は四十五度ほどだが逆層できわめてもろく、落石に苦労させられる。昨年のフィックスロープもすでにズタズタに切れて、無惨な有様になっている。加えて、このころより天候もくずれはじめていた。降雪のはじまる時刻が早まり、雪質も湿ってきた。無線によれば、モンスーンの襲来までまだしばらく間があるということだが、私達のネパールでの経験などから推測すると、あまり時間の余裕があるとは思えない。加えて、東側では着々と縦走隊出発の態勢が整いつつある。

九日、夕方六時近くまでがんばって、頂上岩壁の中段、W4予定地である七二〇〇メートル付近までルートをのばした加藤、寺本、小林、ピンジューらは、一日休養をとった後、十一日W4へ入り、十二日、主峰を大きくまわりこんで東峰主峰を結ぶ稜線へ達するべく、ルート工作を開始した。ルートは、W4から六〇メートルほど、急だがしっかりした岩質の岩壁を登り、そこから雪のバンドを右手にトラバースして行く。荷上げがおいつかないまま、ロープを固定せずに進んだが、雪質不安定なため苦労させられた。昼すぎからは風雪となり、視界不良のため、この日はつ



(Fig. 1) 双耳峰ナンダ・デヴィの全景
—右、東峰(7,434)、左、西峰(7,813)
Panoramic view of the twins peak of Nanda Devi: Right-East peak(7,434), Left-West peak(7,813) (by. K. Kano)

←
(Fig. 2)
リシ・ガンガから見上げる
ナンダ・デヴィ西峰
Nanda Devi West dominating in distance beyond the notorious Rishi Gorge.

(Fig. 3)
↓ 西峰第四キャンプ上を登る
Climbing above Camp West 4.

←
(Fig. 4)
縦走路よりナンダ・デヴィ東峰を振り返る
Looking back the East peak from the snow field on the traverse ridge

→
(Fig. 5)
東峰頂上より縦走路となったヤセ尾根を望む
Looking down the razor-edged traverse ridge from the summit of the East peak

(Fig. 2～5, by K. Kano)

↑(Fig. 6(a) ドウナギリ：C3・C4間から見た北稜核心部。

Dunagiri: The north ridge seen from between C3 and C4.
(by JAC Student Section Garhwal Exp.)

↓(Fig. 6(b) ドウナギリ：C4から見た北稜。頂上は左手後方の雪のピーク。

Dunagiri: The north ridge seen from C4. The Summit seen at the left in the back

いに出ることができないまま、荷物をデポしてひきかえすことになったが、帰路、トレースはすっかりきえてしまっていた。このトラバースルートは、予想以上に苦労させられそうである。

十二日夜、縦走出発を控えて、最後の打合せが各キャンプを結び無線で行なわれた。本来なら、少なくともW5の位置までルートが確保されていなければならない。だが、縦走隊は絶好調でE4に入った。天候から判断しても、決行は早い時期ほど有利と考えられる。結局、原則として明日、縦走隊は出発する、ただし、天候、ルートの状況、双方のメンバーのコンディション等をみて、明朝四時半、最終的に決定する、という含みのある結論となった。最終配置は、E4に長谷川、高見、E3にプレムチャンド、ザンブー、ダラムチャンド、E2に梶、重広、磯野、E1に丸尾、他ハイポーター二名、W4に加藤、寺本、小林、ピンジュー、W3に鹿野、チャンドーラ、ラトウ、ナムギャル、クサン、W2に小原、他ハイポーター三名、W1に伊丹、他ハイポーター二名、BCにJ・シン、桐生、関、K・P・B・シン他ハイポーター、以上である。

縦　走

十三日早朝、分厚い雲が七〇〇〇メートル付近から下をおおっていたが、昨夜の積雪はたいしたこともなく、風もおだやかでまずまずの天候であった。四時半の交信で、予定通り縦走決行を確認、五時十分、長谷川、高見は東峰頂上を後に、未知のルートへと足をふみ入れた。

東峰の下降は北側にはりだした雪庇に気をつかう他はさしたる困難もなく、六時半、コルに着く。このころからナンダ・デヴィはすっかり晴れ上り、予想以上のスピードで前進する縦走隊の姿は、各キャンプから肉眼でもはっきり見えた。ここからW5予定地である主峰直下の雪の台地までの間には、まず丸味をおびたゆるやかな台形のピークがあり、ついで私達がジャンダルムと呼んだ、そこだけ顕著に岩の露出したピークがある。コルについたあとも、縦走

隊は相変らず着実に雪のリッジを前進し、十時半にはジャンダルムの基地へ達した。距離的にはすでに四分の三を越している。

この日も、むしろサポート隊の方が苦戦を強いられていた。連日のハードワークからくる疲労、W5建設をかねているため二十キロをこす荷物、それをカバーするのは、もはや気力しかない。昨日のトレースは再びすっかり消えていて、ラッセルと足下から出る表層雪崩に苦労する。

十一時ごろから、ここ数日同様、天候がしだいに崩れてきた。縦走隊はジャンダルムにとりついたが、もろい岩と不安定な雪に行手をはばまれ、登攀は極度に困難になってきた。サポート隊は昨日の到達点から、何度か稜線へ出ようと試みるが、バンドは岩壁の中へすいこまれるように消えてしまい、思うにまかせない。だが、今日はどちらも、もう引きかえすわけにはいかない。なんとしてでも突破するしかない。

二時すぎ、サポート隊は、いったん三十メートルほど直上し少しトラバースしてから、雪壁を強引に下って目標としていた雪田上に達した。ついで三時すぎ、三〇〇メートルたらずのジャンダルムに五時間近い苦闘を続けていた縦走隊も、ようやくそこを抜け出し、雪田の東の端にあらわれた。二つのルートはついに一つになった。縦走は半ば成功した。無線機をオープンにしたまま、全神経を集中していた各キャンプにも歓声があがり、ひとまず、おめでとうのコールがかわされた。

だが、この日の行動はこれで終りではなかった。サポート隊の中でも疲労の著しい小林、ピンジューは縦走隊とともにW5に残ったが、条件が許せばここから東へむかう予定だったが加藤、寺本は逆縦走を断念してW4へひきかえした。二人がキャンプに帰着した十時すぎまで、各キャンプは再び極度の緊張につつまれた。長い一日であった。

十四日は終日はげしい風雪で、全キャンプが停滞した。これによって重広、プレムチャンドによって予定されていた第二次縦走も完全に断念せざるをえなくなり、東峰側は撤収の態勢に入った。縦走の成否は十五日の天候にかかっ

ていた。

その十五日早朝は、久しぶりの雲一つない快晴にあけた。長谷川、高見は六時四十分、W5を後に頂上へむかった。彼等のトランシーバーが不調で連絡がとれなかったため、W4の加藤、寺本は、E1から二人が直接頂上へむかうのを確認した、との報をうけて、九時、サポートのため、頂上へむかった。主峰の頂上へむけて、東と南の、ほぼ九〇度はなれた稜から、しだいに高度を上げてゆく。どちらももろい逆層の岩と、深いラッセルに苦しめられる。この日も天候は昼すぎから悪化し、視界はほとんどきかない。お互いに、むしろ相手のパーティの状態を心配しながらの登攀となった。今、どこにいるのか、頂上でどの位待てばいいのだろうか。

三時、サポート隊はついに傾斜のゆるくなった最後の雪面を登り切って、頂上にたった。とりあえず縦走隊を待つための場所をさがそうとあたりを見まわすと、前方から霧の中を近づいてくる人影がぼんやりと見えた。縦走隊である。幸運にも、両隊は十五分たらずの差で頂上に達したのである。ナンダ・デヴィ縦走は、ここに完成した。今度こそ、心からのおめでとうのコールがとびかった。

撤　収

六月十七日、ベースキャンプ以上の撤収が終り、二十二日にはベースも撤収された。すっかり雪の溶けたキャラバンルートは往路の困難さもなく、二十五日ころよりは皮肉にも天候は好転して快適なキャラバンとなった。二十六日には、全員がジョシマートに集結し、七月一日、無事ニューデリーに帰着した。

おわりに

本稿では紙数の制限もあり、隊を派遣するまでの経過や、国内や現地での準備活動などは一切省略した。又、タク

ティクスやルートの技術的な解説などについても細かくのべることはできなかった。詳細については、報告書（一九七七年九月発行、左記概要欄参照）を参照していただきたい。隊の派遣にあたっては、会員各位をはじめ、多くの方々の並々ならぬ御援助をいただいた。心から御礼申しあげる。

＜記録概要＞

隊の名称　日印ナンダ・デヴィ登山隊

活動期間　一九七六年四月―六月

目　的　ナンダ・デヴィ東峰から主峰への縦走

隊の構成　総隊長＝渡辺兵力（61）、隊長＝鹿野勝彦（33）、副隊長＝J・シン（46）、マネージャー＝梶正彦（28）、隊員＝長谷川良典（28）、高見和成（30）、小原俊（29）、重広恒夫（28）、寺本正史（27）、加藤保男（26）、小林政志（26）、伊丹紹泰（25）、桐生恒治（25）、磯野剛太（25）、プレムチャンド（34）、A・チャンドーラ（28）、P・チャクラバティ（32）、ドルジェ・ラトウ（28）、ナワン・ピンジュー（37）、医師＝関章司（38）、K・P・B・シン（33）、調査隊員丸尾祐治（31）、うち渡辺は健康上の理由により出発を断念。隊員二十一名のうち、日本山岳会より十四名、インド登山財団より七名。ハイポーター十八名、インド陸軍通信兵二名。

報告書　『ナンダ・デヴィ縦走　一九七六』日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編、茗渓堂刊。

ドゥナギリ・北稜からの登頂（一九七六年秋）

牧野内　昭武

一九七六年ポスト・モンスーン期に、日本山岳会学生部は未踏の北面からドゥナギリの登頂をめざした。そして、無事北稜からの登頂に成功することができた。以下はその時の記録である。

故障者だらけの出発

医者の関さんと隊長の私とをのぞくと、海外へ出るのは初めてという学生ばかりでできあがっている隊にとって、勝手の分らない、暑いニューデリーの街を、準備のため時間に追われて走りまわるのが、遠征の最初の難関であった。まず、磯野が四十度もの熱を出して倒れた。日本山岳会のナンダ・デヴィ隊に参加した後一人ニューデリーに残って交渉にあたっていたのだが、その疲れが出たらしい。医者に見せると肝炎だと言う。簡単に回復しないことが分ったので残念ながら日本に帰すことにする。ニューデリーを出発する前日になって今度は増田が熱を出した。仕方がない。寺前をつけてニューデリーに残し、あとから本隊を追わせることにする。九月十一日ついにスライトータへの

トラックの旅が始まった。ともかくニューデリーを離れることができた、とほっとするのも束の間、炎熱の中をほこりにまみれて十二時間以上も揺られ続けるうち、二日目になって酒井が、続いて梅本と連絡将校のチャアが不調を訴え始めた。熱を計ると皆かなり高い。苦しそうだが置いて行くわけにはいかず、そのまま旅を続ける。三日目の夕方、やっとの思いでスライトータ部落にたどり着いた。翌日から荷物を整理してキャラバンの準備を始める。と、今度は竹中が虫歯を腫らして四十度近い熱を出した。ついに正常なのは大杉と私の二人だけになってしまった。

ビザの関係で日本出発が遅れてしまい、その分、ニューデリーでの準備もトラックの旅も強行スケジュールであったことは確かだ。多少の故障者が出ることも仕方がないと思っていた。しかし山へ入る前にほとんど全員がダウンしてしまうなど予想もしなかったことだ。隊長としては内心おだやかでない。

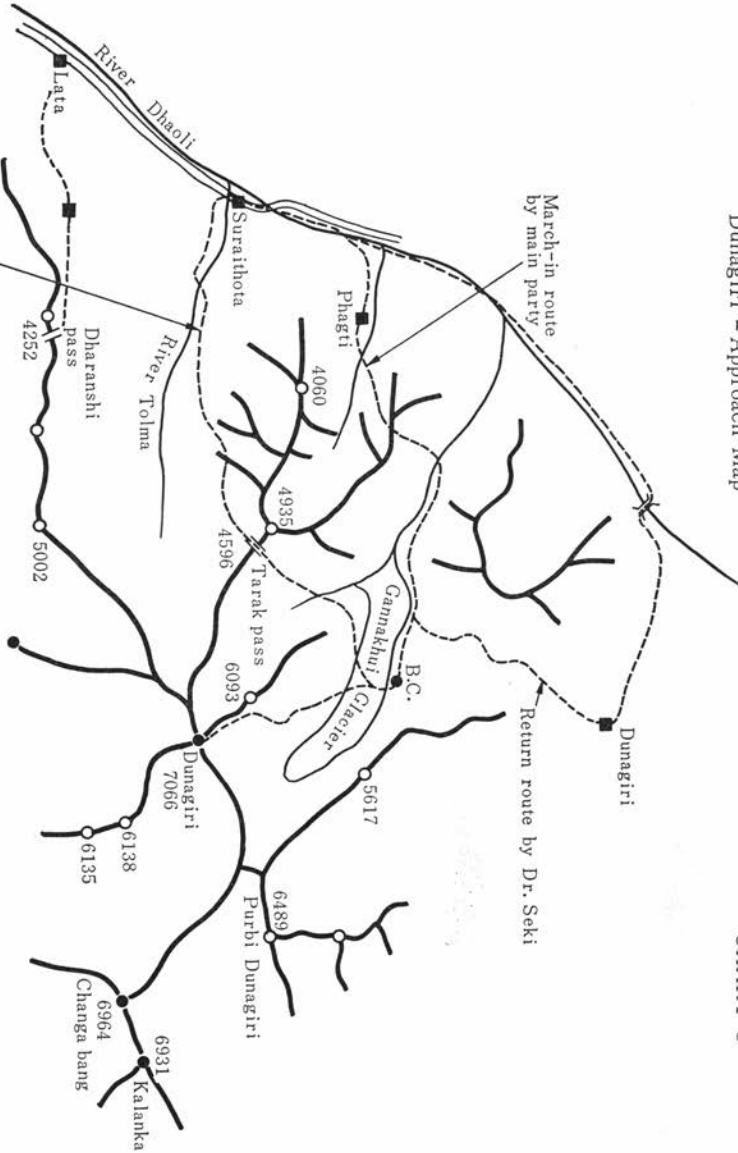
「若い連中の腑甲斐無さはどうだ。こんなことで本当に山登りなんかできるのか」

こんなわけで、登山隊の出だしはたいへんに心もとないものであった。

キャラバン

九月十五日、熱が下がってどうやら元気を回復した酒井と私は、先発隊として十八人のポーターを連れてキャラバンに出発する。隊長はついに隊の先頭を切る突撃隊長になった。私達先発隊はスライトータからトルマ川ぞいに登り、タラクカール峠を越えてガンナクイ氷河へ入る道をとった。しかし、これは所々かろうじて残る踏み跡をたよりにきわどいへつりを続ける長く悪いルートで、ポーターをなだめすかして四日間でベースキャンプ予定地まで入ることができたものの、連日十時間以上も歩きづめという強行軍であった。

本隊六名は六十人のポーターと四十頭の羊を連れて九月十八日にスライトータを出発した。羊飼が良い道を知っているというので、それを採る。ファグティ部落のすぐ裏の峠を越えてガンナクイ川に出、川をそのまま遡るそのルー


Dunagiri - Approach Map
CHART 3
Dunagiri
Return route by Dr. Seki
B.C.
Gannakhuji (Glacier)
5617
6489
Purbi Dunagiri
6931
Kalanka
6964
Changa bang
Dunagiri
7066
6138
6135
Tarak pass
6093
4596
4935
4060
Phagti
March-in route
by main party
Suraithota
River Dhaoli
River Tolma
Lata
Dharanshi
pass
4252
5002
March-in route by advance party

トは同じ四日間のキラャバンだったが、道もしっかりしており距離も先発隊のものに比べると短く、結果的にはこの方がずっと楽だった。

ついでに付け加えておくと、九月末、関ドクターが仕事の都合で一人下山したが、その時のドゥナギリ部落経由のルートが一番容易であることが分った。危険な所は一個所もなく距離も短い。関ドクターはBCを朝出て正午にはスライトータに着いてしまったとのこと、最初からこれをキャラバンルートとすべきであった。

ベースキャンプ

九月二十一日、とうとう全隊員八人がBCへ集結した。キャンプはガンナクイ氷河右岸のアブレイション・バレーに設ける。羊や馬などの放牧地で牧童達の仮小屋もあり、お花畑と清冽な涌水の流れる黒部五郎のカールに似た気持の良い所だ。ドゥナギリは氷河の対岸に、あおぐと首が痛くなるほどの高さでそびえ立っている。北稜はひどくギザギザした岩稜だし、側壁はむき出しの岩が黒々として急だし、さてどこをルートとしたら良いのか。

ドゥナギリは標高七〇六六メートル。一九三九年にはすでにアンドレ・ロックの率いるスイス隊によって東南稜から初登頂され、また昨年（一九七五年）には、イギリスのジョー・タスカー、ディック・レンシーという二人の優れたクライマーによって南壁から第二登がなされている。二度も登られている山に登るんだから、当然バリエーションルートだ、それには未登の北面からがいい。どうせならハイポーターを使わず隊員だけで総ての登攀活動を行い、全員登頂を目指すことにしよう。私達の計画はなかなか景気の良いものであった。しかし、このBCでドゥナギリに対していると、東京で作りあげたこのプランは、どうも若気のあやまち、とんでもない無鉄砲なもののように思えて来る。タラクカール峠から見た北稜上部の岩稜帯は、赤茶けた岩肌が雪をつけずにほとんど垂直に頂上に向ってせり上っていたし……、いやそんな上の方のことを心配する前に、まず目の前の北稜へどこから取付くのか。

一方、この山へ出かけて来た私達の隊は、典型的な寄せ集めパーティーだ。たまたま参加できる条件にあった、いろいろな大学の学生が寄り合ってできた隊であるから、最近顔を合わせた連中ばかりだ。関ドクターを除くと登攀要員は七人。出発前に黒部別山や屏風岩などで三度ほど合宿はやったけれど、誰が高所で強いのか、岩や氷をこなせるやつが居るのか、私には本当のところはさっぱり分らない。おまけに私がずっと以前カラコルムに行ったことがある以外、この七人のうちに海外の山を経験した者は誰も居ない。標高四一〇〇メートルのこのBCでも皆初めて体験する高度なのだ。

こんなパーティーでどうもえらい所へ来てしまったぞ、と思う。しかし入山前に体調をくずしていた隊員が元気な顔をそろえたのは、明るい要素であった。若い連中はさすがに回復が早い。

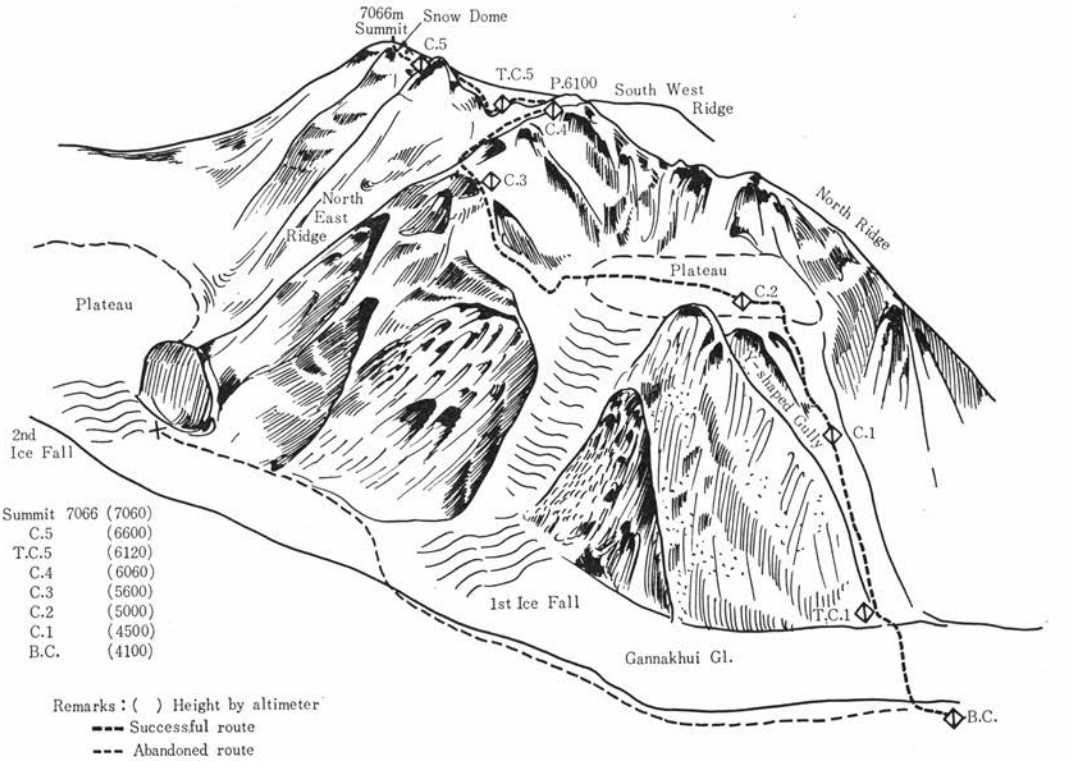
ガンナクイ氷河でアイスフォールの大崩壊に会う

連日の行動で全員がかなり疲労しているが、日程の遅れをとりもどすために、BCに入った翌日に、早速ルートの偵察に出かける。ガンナクイ氷河を遡って北稜の六一〇〇メートルピークへ直接突き上げるルートを探る隊、BC対岸から北稜側壁に食い込む顕著なガリーを登って北稜の中腹にあるプラトーへ出るルートを試登する隊、BCの裏手の山へ登って双眼鏡により北稜の上部を観察する隊の三つを派遣する。偵察の結果、ガンナクイ氷河をつめるルートをとることにした。氷河にかかる二つのアイスフォールを越えさえすれば、あとは比較的容易な雪壁が六一〇〇メートルピークまで続いている。このルートなら北稜の核心部となるに違いない悪い岩稜帯の手前まで、かなりのスピードで達することができるものと予想された。

最初のアイスフォールは右岸のモレーンの上を通れるが、二つ目は左右とも垂直のスラブになっているためアイスフォールの中を登らざるを得ない。高度差二〇〇メートル。氷のブロックが至るところに散乱しており、足元もズタ

Dunagiri-Route Map(1)
(Successful Ascent on Oct.21 & 24, 1976)

CHART 4



ズタに切れていて気味が悪いが、偵察の結果では何とかルート工作はできそうに思われた。

九月二十四日、氷河のモレーン上にC1を作り、翌朝アイスフォールのルート工作に向う。竹中、寺前が先行し、大杉と私が工作資材を持って後を追う。私達がアイスフォールの下に着いてアンザイレンしていると、先行した二人が早々に下りて来た。アイスフォール全体がミシミシ音を立てていて危くてだめだという。そうか、それでは下って様子を見ようと話していた時、突然、腹の底をゆすぶるような音がして巨大なアイスビルディングが頭上にのしかかって来た。やった、だめか、と一瞬思う。四人とも必死で逃げる。クレバスを二つ跳び越え、その陰に伏せた。雪煙が頭の上に降りかかって来る。しかしそれもどうやらおさまった。寺前がクレバスを跳ぶ時にひざを打って痛がっている他は皆無事だ。幸にもブロックはここまでやって来なかったのだ。先行の二人が下りて来た辺りは、アイスフォールの様相が全く変ってしまっている。まさに間一髪であった。

こんな危険は二度と冒したくない。このルートはやめだ。

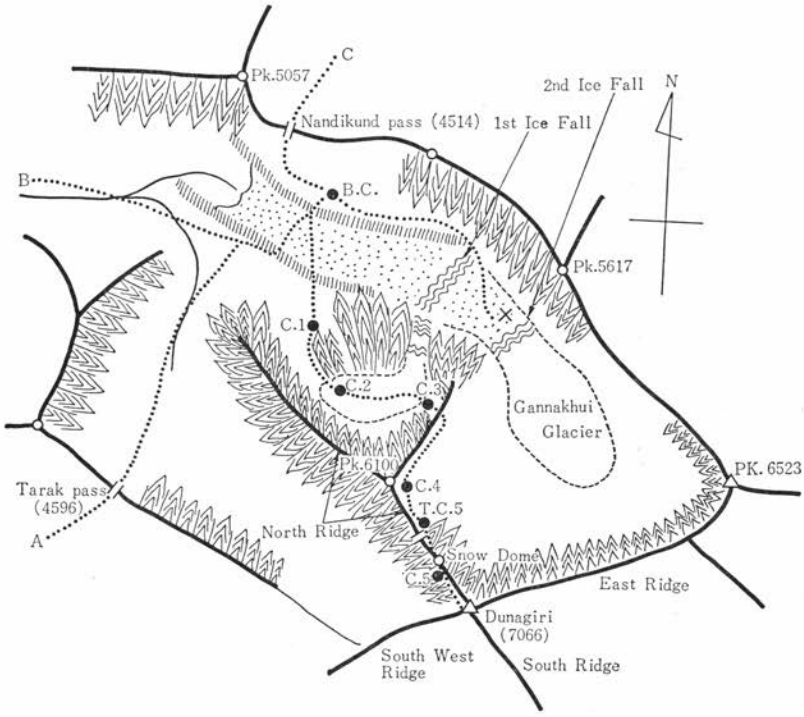
ガリーを登るルートへの変更

この日の夜、BCに全員集まってルートの再検討をした。変更先は偵察の時に試登した北稜側壁に食込むガリーを登るルートしか無い。ガリーがプラトーへ突き上げる所は、高さ三〇メートルほどの全体にかぶった氷壁が行手を塞いでいるし、プラトーから六一〇〇メートルピークまでは高度差一〇〇〇メートル近い急な岩と雪の壁だ。このルートが、長く、技術的に難しいものであることは確かだが、アイスフォールのルートより危険は少ないだろう。C1まで上げた荷物を下らさなくてはならないし、無駄も多いが、ブロックにつぶされるよりはましだ。明日から、振り出しにもどってやり直すことを決めた。

翌二十六日、ルート工作のためにガリーを登っているとき、酒井が大きな落石に当って飛ばされるという事故が起

Dunagiri-Route Map(2)

CHART 5



A : March-in by advance party
B : March-in & Return by main party
C : Return route by Dr.Seki

● Camp
····· Route
Side Moraine
Ice Fall
Rock Wall

B.C.	4100m
C.1	4500
C.2	5000
C.3	5600
C.4	6060
T.C.5	6120
C.5	6600
Summit	7066

った。幸い外傷は無かったが、右手と左足が動かず、関ドクターの診断ではしばらく行動は無理だろうとのことで、以後一週間BCで休まなくてはならないはめになった。新ルートの工作を始めた矢先だっただけに、動ける人間が一人でも減るのは痛手だった。

この日から二十九日まで四日間を費やして、プラトーへのルートが完成した。ガリーが氷壁へ突き当たる手前で砕石の溜まったルンゼに入り、五十メートル二ピッチで右手のリッジに出る。このリッジを七ピッチ登るとプラトーから押出している氷の末端に達する。斜度約七十度の、アイゼンの前爪もアイスハンマーも受け付けない、黒いおそろしく硬い氷を苦労してはい上ると、五十メートル一ぱいで傾斜が緩くなり、そこがプラトーの端であった。ルンゼの取付からここまでロープ五〇〇メートル、氷壁下のスラブに縄梯子十メートルをフィックスした。このルートは重荷に悩まされながら全員が五度以上も往復したが、何度通ってももろい足場と落石の不安に緊張を強いられるつらい登りだった。この間、ガリーの中、四五〇〇メートル地点の岩陰に新しいC1を、そしてフィックスをたどってプラトーに出た高度五〇〇〇メートルの地点にC2を建設した。C1までは池の谷のようなガラガラの登りで技術的にはさして困難な所はないので、ここまでポーターを使うことにする。

六一〇〇メートルピークを目指し、雪壁を登る

C2を建てたプラトーは明かるく開けたカールであるが、周りを取巻く壁は岩の露出した急峻な雪壁で、至る所落石や雪崩の跡を示す深い溝が刻まれている。C2からはデブリで埋まったプラトーを横切って、比較的雪の安定しているように見える左手を直上することにする。上部に帯状の岩壁があるが、その下をさらに左へトラバースすれば、六一〇〇メートルピークから派生する北東支稜へ抜け出られそうだ。その先、ピークへ続く雪稜はあまり悪く無いだろう。

九月三十日、関ドクターが下山して行った。今後のことが不安だが、幸にも増田が時々頭痛を訴えるのと、寺前がむくんだ丸い顔をしている以外、それほどひどい高度障害も出ず、入山前に比べると皆調子をあげて来ている。十月三日には落石による打撲のいえた酒井がC1入りをして全員七名がそろい、ルート工作、ボッカとローテーションが予定通り組めるようになった。七日間あるいは八日間動いて一日休むというハードスケジュールで、好天が続いているうちにどんどんルートを伸ばす。

雪壁は見かけよりずっと不安定だった。そのため壁に張り出している岩稜とのコンタクトラインに沿い、岩稜のフランケにハーケンを打ち、それを支点にして雪壁に固定ロープを張る。途中、壁の真中に突出した小さなナイフリッジにC3を設けてさらに雪壁を登り、十月七日ついに北東支稜に出、六一〇〇メートルピークに達した。プラトーからピークまで固定ザイルを一二〇〇メートルも張った。

六一〇〇メートルピークに到達することは登山活動を区切る一つの重要な目標であった。そこまで登ればあとは岩稜帯を突破して頂上へ立つだけだ。悪くてもこれは何とかなる、そう自分達に言い聞かせて来た、その目標が達成されたのだ。

しかし、そこで見た岩稜帯は考えていたよりもさらに長く悪いものであった。手前のナイフリッジを入れると少なくとも固定ザイルが一五〇〇メートルは必要だろう。手持ちのザイルは残り一〇〇〇メートルと少し、これだけではとても足りない。六一〇〇メートルピークに達した余勢を駆って一気に岩稜帯攻撃をしようと思っていたが、それが不可能なことが一目で分った。

そこで、まず岩稜攻略の足固めのため、C2に、必要な資材をすべて集結することとし、全員でC1〜C2間のボッカを行う。もうこれで登頂をすますまでC2より下へ降りないぞ、と腹をすえる。一方固定ザイルの不足をカバーするため、BCのポーターを一人スライトータ部落まで下ろし、麻縄を買わせることにする。直径約十ミリ、所によ

って太かったり細かったりする、ごわごわの縄六〇〇メートルが手に入った。

ともかくこれで登頂態勢が整った。天候もまだ比較的安定している。ジェットストリームが吹き出す前に岩稜帯を抜けて登頂してしまおう。

悪い岩稜帯の突破

十月十日、六一〇〇メートルピーク直下にC4を作り、酒井と私が入る。ところが翌朝になると、酒井が頭痛のために動けないという。仕方無く私一人でルート工作に出かけ、スノーバーとデッドマンで自己確保しながら、ナイフリッジに二〇〇メートル固定ザイルを伸ばす。

翌日、私達と交替した大杉、竹中のパーティーがルート工作にとりかかろうとしたとき、竹中がザイル二〇〇メートル、三ッ道具、トランシーバー等を入れたザックをリッジの右側へ落してしまった。下は氷河まで垂直に切れ落ちている岩壁だ。回収は不可能と思ったが、登頂の成否を決める重要な装備ばかりなので探さないわけにいかない。手持ちのザイルをつないで、竹中がアップザイレンで三〇〇メートル近く下り、途中に引掛かっていたザイル一五〇メートルと三ッ道具少々とを回収することができた。しかしこのために丸二日間を無駄にしてしまう。

十月十四日、竹中、大杉に寺前、増田が加わり、四人でスノーリッジにルートを伸ばし、岩稜にかかる手前のコルに仮のC5を作る。翌日は寺前、増田のパーティーが岩稜の核心部にルートを開き、気がかりだった垂直のフェースも下部二十メートルを人工で越し、ワイヤ梯子十メートルをセットする。遅々とではあるがやっとルートが伸び始めたと喜ぶ。ところが、次の日、氷の張り付いたひどく悪いスラブをトップで登っていた増田が滑落した。寺前が止めて大事には至らなかったが、このアクシデントが響いて、この日はわずか三十メートル進んだだけであった。C4を作ってから一週間になるというのに、まだ岩稜の下部を少し登っただけ。もう残された日数は少い。風も強くなっている

し、寒さも日に日に増して来ている。全員連日動きづめで疲労がたまっているのが良く分るが、ここは時間との勝負だ。がんばらねば、と思う。

十月十七日、トップを寺前、竹中パーティーに交代し、フェースの上段とかぶり気味の不安定極まりない雪壁とを越えて二ピッチ、最悪部をついに突破した。この部分にさらにワイヤ梯子、あぶみなどを固定する。その先もまだ悪いリッジが続く。七人全員がC4と仮のC5に入り、連日ルート工作とそのサポートにあたる。ザイルは以前に比べるとかなりの速さで伸びるようになった。しかしもう時間がない。

十月二十日、今日中に何としてもC5を作ることを決心し、竹中、酒井をルート工作に先行させ、残り五人全員でC5に必要な資材を持ってあとを追う。固定ザイルがあっても荷を背負っているとひどく悪い。岩稜帯を完全に抜けて、傾斜のいくらか緩くなったスノーリッジにたどりついたのは、夕暮迫る五時だった。ここをくずしてC5のテントを張る。高度六六〇〇メートル。アタック隊として、大杉、竹中、酒井を残して、あとの四人は暗闇の中を固定ザイルを頼りに下る。

登　頂

十月二十一日、朝七時過ぎにアタック隊の三人はテントを出た。C5のすぐ上のスノードームを越すとあとは堅雪の緩斜面であった。手持のザイルはここまでで総て使いつくした。この斜面を黙々と登って行くと、突然目の前が開けて、ナンダ・デヴィの美しい双耳峰が視野に飛び込んできた。そこが頂上だった。正午。昨日までの厳しさに比べるとあっけない登頂だった。

十月二十四日、寺前、梅本、増田の第二次隊が登頂。これで隊員六名の全員登頂をはたしたわけである。しかし、第一次隊が頂上に立った二十一日に、安心したためか、十二指腸潰瘍の悪化していた私はついに動けなくなり、登頂

(Fig. 7) 北東より見たドゥナギリの全景と登攀ルート

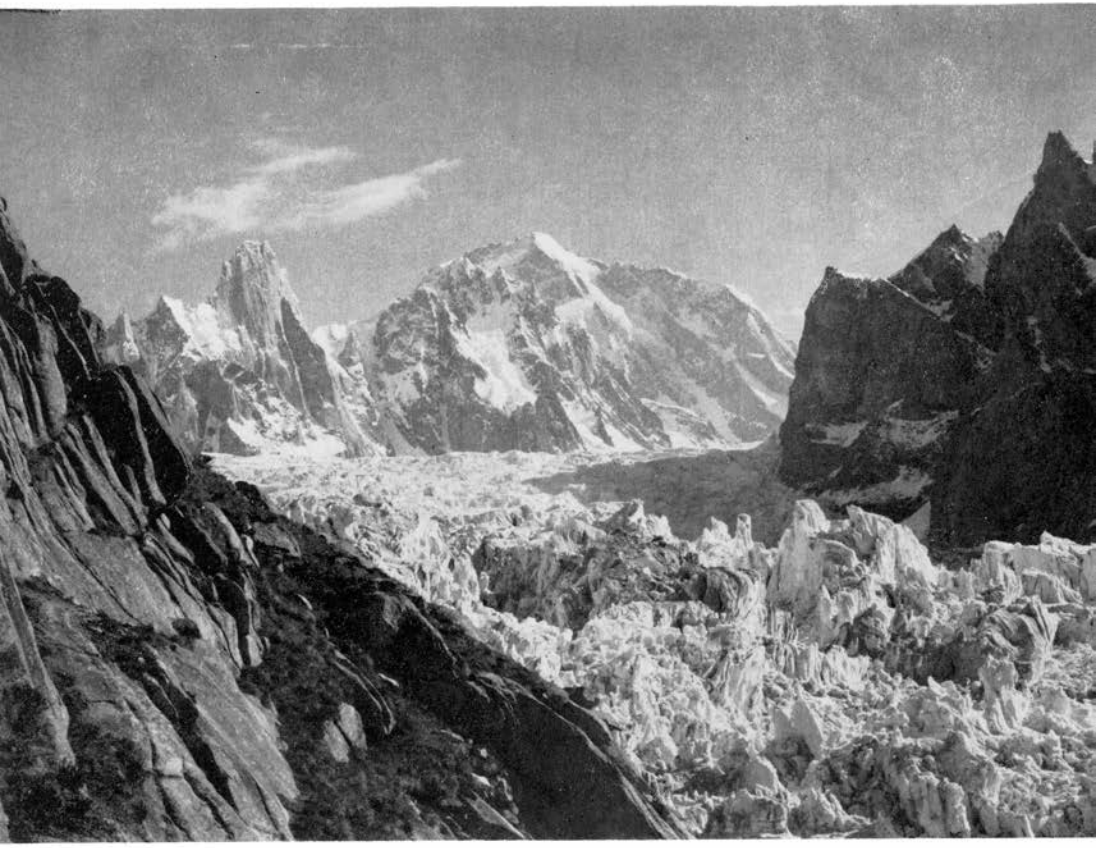
Dunagiri (7,066), seen from north-east

(by JAC students Sec. Garhwal Exp.)

(Fig. 8) ドゥナギリ北東支稜への氷壁を登る

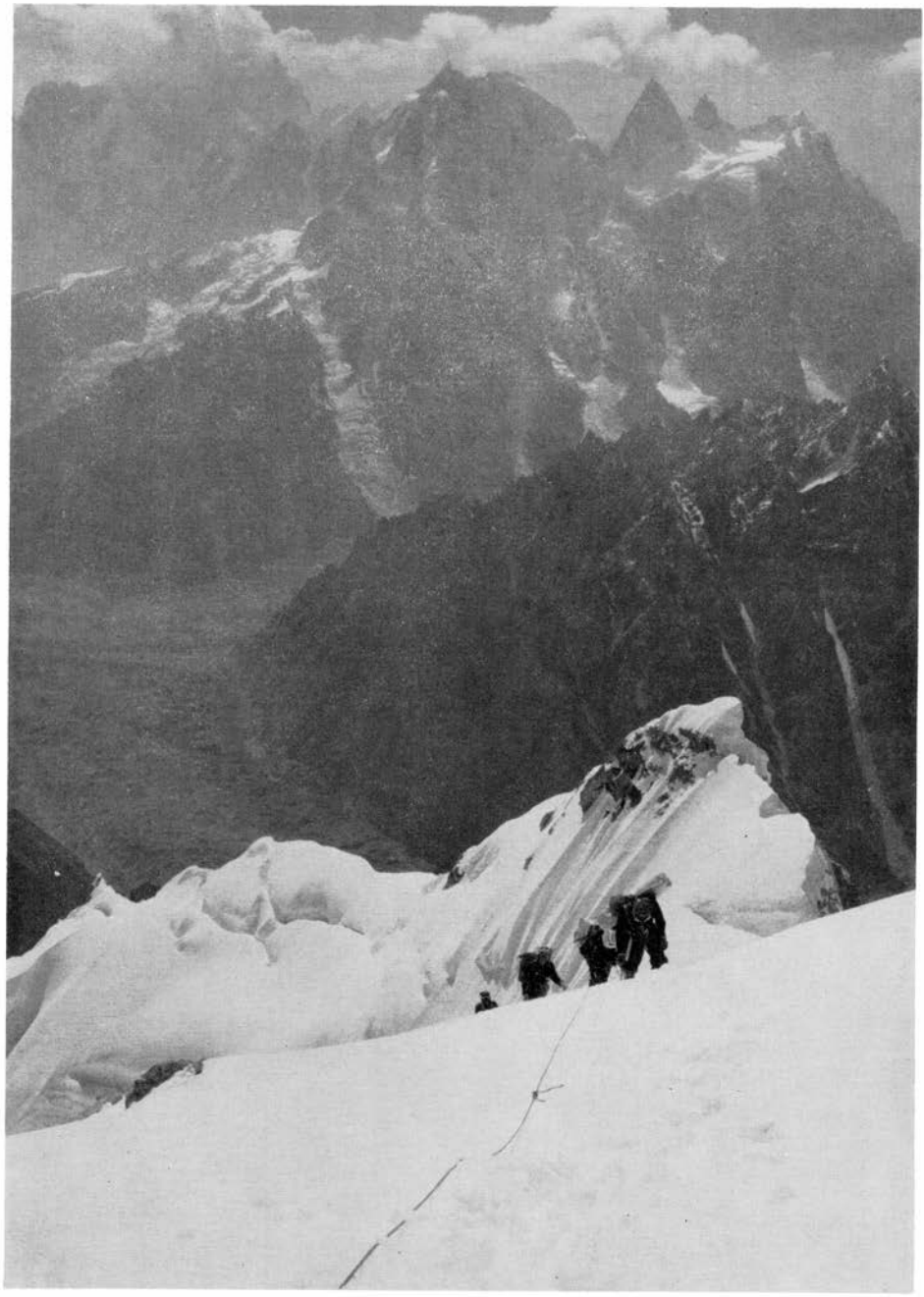
Dunagiri: climbing ice face lead to the north-east ridge.

(by JAC students sec. Garhwal Exp.)



(Fig. 9) 仮ベースキャンプより望むシェルピ・カンリ(7,380)
第2アイスフォールが右下に見える。
Sherpi Kangri(7,380), looking from T.B.C. The second ice fall is in the right

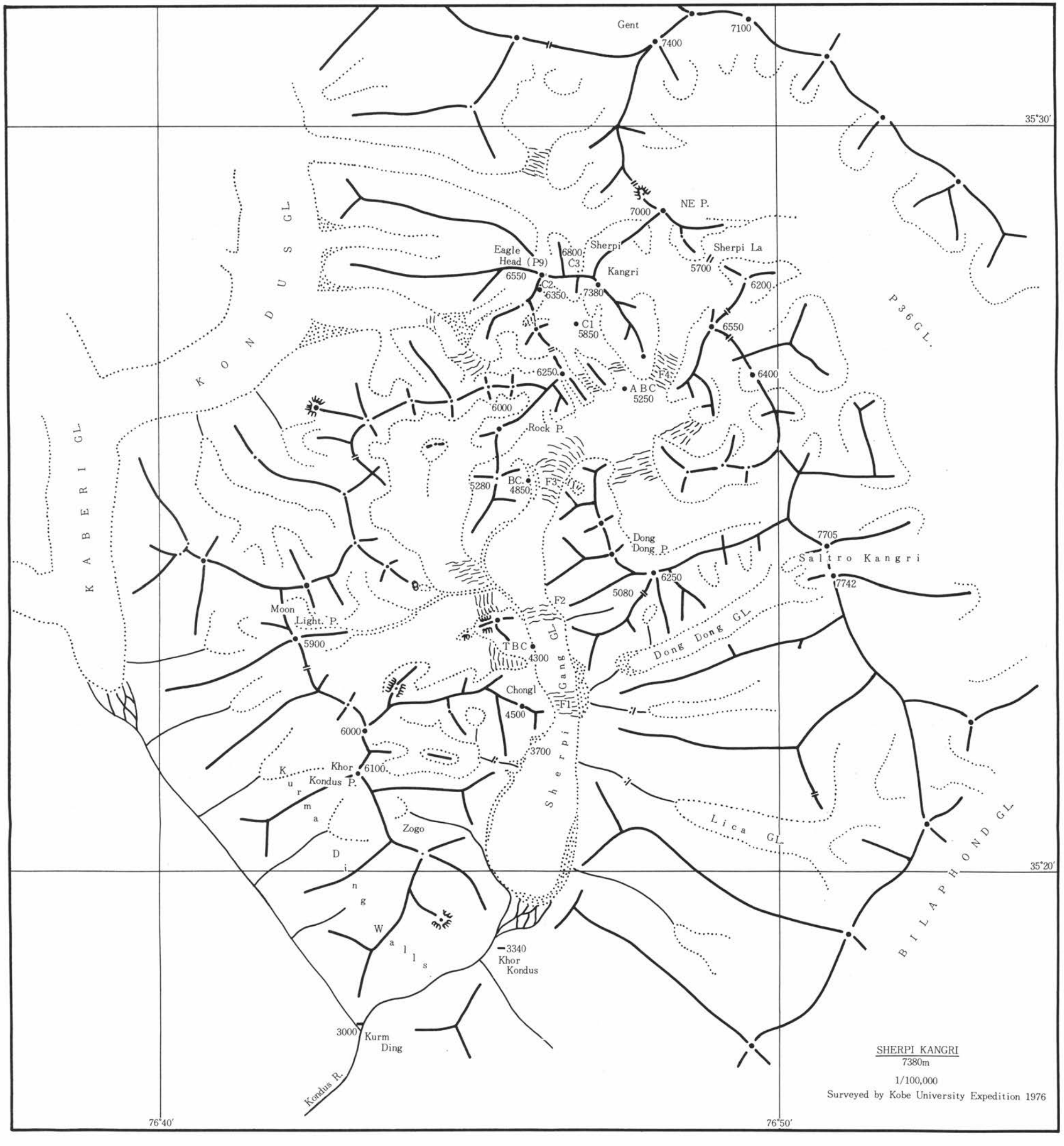
(by. . K. Hirai)



(Fig.10) シェルピ・カンリC3へ登る。下方稜線上にイーグルヘッド(右)およびP10(左)が見える。

Sherpi Kangri: climbing to C3. The Eagle Head(right) and P10(left below) can be seen.

(by. K. Hirai)



SHERPI KANGRI
7380m
1/100,000
Surveyed by Kobe University Expedition 1976

をあきらめてC4から下山した。

おわりに

私達のパーティーに前後して、一九七六年春、八戸隊、同年秋アメリカ隊（私達と同じシーズンに南面から）、そして一九七七年春、労山隊と、三つの遠征隊がドゥナギリに出かけている。しかし、その三隊はいずれも登頂に失敗し、特にアメリカ隊は滑落で四人の隊員を失っている。私達の隊が他のパーティーに比べて勝れた実力を持っていたとは、どんなにひいきめに見ても言えない。そんな隊が登頂できたのは、ともかく「ついていた」という一言につきるのではないだろうか。山登りにはかけの要素が常につきまとう。

ただ、リーダーとしては、今度のようにサイコロの目がいつどっちに転ぶか分らないような山登りは、面白いけれどまたひどくしんどかった。おかげで神経性の潰瘍というぶざまな結果になってしまい、這うようにして命からがらBCにたどり着いた時は、もうこんな山登りは誰が何と言おうと絶対にやめようと堅く心にちかった。

しかし、三日後、雪の吹きつける中を、夜になって撤収を終え、下山して来た隊員と、熱い紅茶で登頂を喜び会ったときには、そんな考えはもうすっかりどっかへ飛んでしまっていた。

「おい、今度はもっと高い山にしようぜ」

△記録概要▽

隊の名称　日本山岳会学生部ガルワール・ヒマラヤ登山隊

活動期間　一九七六年九月～十一月

目　的　ドゥナギリ北稜の初登攀

隊の構成　隊長＝牧野内昭武（37）、隊員＝寺前紀夫（27）、梅本実（24）、大杉直彦（24）、竹中昇（23）、増田多喜男（22）、酒井敬士（22）、医師＝関章司（41）

行動概要

9月18日スライトータ出発。21日ガンナクイ氷河上四〇〇〇メートル地点にBC建設。北東支稜につき上げるガリーにルートをとり、29日C1、30日C2を設営。さらに、ガリー上のリッジに、10月6日C3を、そして北東支稜をたどって10日六一〇〇メートルピーク直下にC4を建設した。そこより北稜上をたどり、20日C5を六七〇〇メートル地点に設置し、そこより21日竹中、酒井、大杉が登頂。さらに、24日には、寺前、梅本、増田が頂上に立った。

シェルピ・カンリ登頂（一九七六年）

平井一正

はじめに

シェルピ・カンリ（七三八〇メートル）は、カラコルムのサルトロ山群に残された、ただひとつの処女峰であった。屏風のように切れおちている北壁、長大なシェルピ・ガン氷河に囲まれて、長い間人をよせつけなかった。登路はもとより、その地形すら全くわからない状態であった。

この山は、すでにワークマンの一九一一年の東カラコルム探検では、ピーク33という名前で登場している（註1）。シェルピ・ガン氷河の名前もはじめて紹介された。彼はシェルピ・ガン氷河の入口を少しのぞき、対岸から写真をとっているが、それ以後、一九七四年までここを訪れる者はなかった。一九三五年、イギリスのハントらが、サルトロ・カンリの偵察にリカー氷河を登ったが、そのときはまだピーク33という名前が記されている（註2）。一方、一九三三年のシドニー・バラードの地図には、この山はシェルピ・ガンと名前をかえている（註3）。

一九六一年、オーストリア隊が隣接するゲントに登ったが、このときはもうシェルピ・カンリという名前は定着していたようである。同年リカー氷河に単独で入った京大学士山岳会高村氏も、これはたしかめている。いつの間にピーク33からシェルピ・ガンに、そしてシェルピ・カンリに名前が変ったのであろうか、興味あるところである。

最近のアメリカン・アルパイン・ジャーナルで、アダムス・カーターは〝シェルピ〟の意味を“east rising, prosperous”であると書いている（註4）。〝カンリ〟はよく知られているように「氷の山」という意味なので、シェルピ・カンリとは「太陽の昇る氷の山」という意味であろうか。ばくぜんとしかわからないが、何となくめでたいような感じである。

山名考察はおもしろいが、長くなるので本文にもどる。

シェルピ・カンリを神戸大学山岳部とそのOB団体である山岳会の有志で、カラコルム遠征の目標ときめたのは一九七〇年のことであった。神戸大学山岳部は、その前身の神戸高商時代からかぞえて六〇年以上の伝統をもっている。戦後でも、一九五八年の日本チリ合同のパタゴニア探検とアレナレスの初登頂（註5）をはじめとし、ボリビア・アンデス、カナダ・ユーコン、アラスカなど海外に広く足跡を残している。しかしながら、カラコルム、ヒマラヤにはまだ一隊も出していない。ぜひわれわれの手で、七千メートル級の処女峰を、という願いのもとにこの計画がスタートした。

シェルピ・カンリという山は、すでに述べたように、いまだかつて誰も近づいたことのない、全くの処女峰である。山は深く、シェルピ・ガン氷河の舌端から頂上まで直線距離にして二十キロメートルはあり、その間人跡未踏、地図はもとより、近くからとった写真もないという、多分に探検的要素の濃い山であった。コンダスの女王といわれるほど美しい山でもあり、ぜひ地形の解明から登頂までを神戸大学の手でやりたい、そのような気持で毎年パキスタ

ン政府に許可申請書を出していた。そしてとうとう一九七四年五月、シェルピ・カンリの登山許可がおりた。

登路も地形も全くわからない山に、いきなり行っても登れる可能性は少ない。一九七四年の隊はその意味から、偵察を主目的とし、もし可能ならば登頂という意図のもとに編成された。田中俊甫を隊長に、以下八名から成っていた。この隊を神戸大学第一次カラコルム遠征隊、略して一次隊と称した。彼らは未知のシェルピ・ガン氷河を、四つのアイスフォールを越してその源頭までつめ、シァチェン氷河に至る広大な峠（五七〇〇メートル）を発見し、これをシェルピ・ラと名付けた。コンダス谷とシアチェン氷河を結ぶ新らしい峠の発見と、今まで不明であったシェルピ・カンリ周辺の地形をあきらかにしたことは、この隊の大きな業績であった。しかし、うち続く隊員の故障、装備や食糧の不足などから、シェルピ・カンリⅡ峰の下、六四〇〇メートルの地点から引き返している。

彼らの偵察の結果、シェルピ・カンリの登頂ルートとして、東尾根と西尾根の二つがあることがわかった。東尾根はシェルピ・カンリ本峰とⅡ峰を結ぶ顕著な吊尾根であって、尾根自体にあまり困難はないが、この尾根にいかにして取付くか、そのルートが問題であった。第一次隊はそのルートが発見できず、Ⅱ峰を越えて吊尾根をたどろうと試みたが、しかしそれには時間がなかった。一方西尾根は急峻な岩と氷のやせ尾根であり、とくに頂上直下の鋸歯状の岩尾根が問題であった。またシェルピ・ガン氷河からこの西尾根にいかにして取付くか、そのルートは一次隊の偵察でもあきらかではなかった。

一次隊の帰国から一年はまたたく間に過ぎた。おどろいたことにイギリス隊が、失敗に終ったもののシェルピ・カンリに登頂を試みたというニュースが入った。一次隊と同じルートをとり、同じ所で引き返している。国内でもシェルピ・カンリをゆずってほしいという人たちがあらわれた。しかし、ぜひわれわれの手で登りたい。このような気持でいよいよ第二次隊が発足することとなるのである。

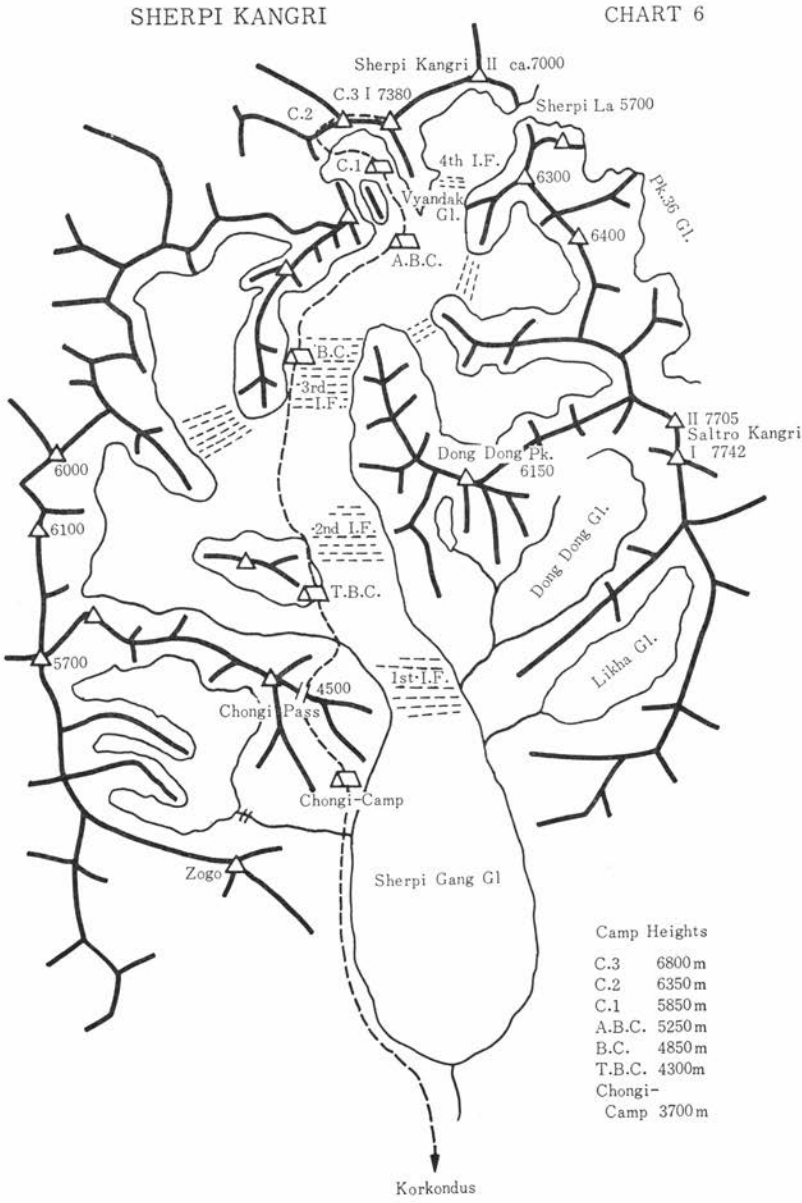
出発からＢＣまで

一九七六年二月、再びシェルピ・カンリ登山許可がおりた。第二次隊は平井以下九人の構成で、一九七六年五月十日、井上、木本、居谷が、同二十四日にのこり全員が日本を出発した。ラワルピンディで三週間近い飛行機待ちのち、スカルドにとび、ただちに九台のジープに分乗してカパルへ。東京～熱海間ぐらいを行くのにジープ代として四十万円も払わされた。ジープ代だけではない、ポーター賃も日当、食費、帰りの日当を入れると一日六十ルピー、一週間に一日の休日、雨天の際の雨具支給、保険代など、金のかかることばかりである。

六月十六日、キャラバンを開始する。ポーター一三八人、ハイポーター六人、隊員十人、連絡将校一人、総勢一五五人の大部隊である。ハイポーター頭には、私の旧知のオラム・ラスールをえらんだ。キャラバン中、天気はずっとぐずついていた。そして六月二十四日、シェルピ・ガン氷河末端のチョンギ下と名付けたテント地に到着。五十人を残して全員解雇した。

シェルピ・カンリ登頂のカギは、シェルピ・ガン氷河の三つのアイスフォールをこえた五千メートル近くのＢＣまで、いかに三トン半近くの荷物を安全確実に輸送できるかどうかにかかっている。高度差二千メートルを約二十キロメートルの距離で流れ下っているシェルピ・ガン氷河のアイスフォールは、いずれもズタズタに裂けたクレバスと乱立する氷塔で危険きわまりない。われわれの立てた計画はこうである。まず五十人のポーターを使って、四五〇〇メートルのチョンギ峠を経由、第一アイスフォール（以下Ｆ１と略す、他も同様）とＦ２の中間地点に設けた仮ＢＣ（四三〇〇メートル）に荷物を輸送、さらに十人のポーターを選抜し、ハイポーターと共にＦ３上部のＢＣ（四八五〇メートル）に荷物を輸送、その間隊員は、輸送ルートの確保、高度順応、上部ルートの偵察、キャンプ設営を行う。

幸い好天に恵まれ、荷物輸送計画は順調に進んだ。そして遂に七月六日、すべての荷物をＢＣに集結することがで


SHERPI KANGRI
CHART 6
Sherpi Kangri II ca.7000
C.3 I 7380
Sherpi La 5700
C.2
C.1
4th I.F.
6300
Vyandak Gl.
Pk.35 Gl.
6400
A.B.C.
B.C.
3rd I.F.
II 7705
Saltro Kangri
I 7742
Dong Dong Pk. 6150
6000
6100
2nd I.F.
Dong Dong Gl.
T.B.C.
5700
Likha Gl.
Ist I.F.
4500
Chongi Pass
Chongi-Camp
Zogo
Sherpi Gang Gl
Korkondus
Camp Heights
C.3 6800 m
C.2 6350 m
C.1 5850 m
A.B.C. 5250 m
B.C. 4850 m
T.B.C. 4300m
Chongi-Camp 3700 m

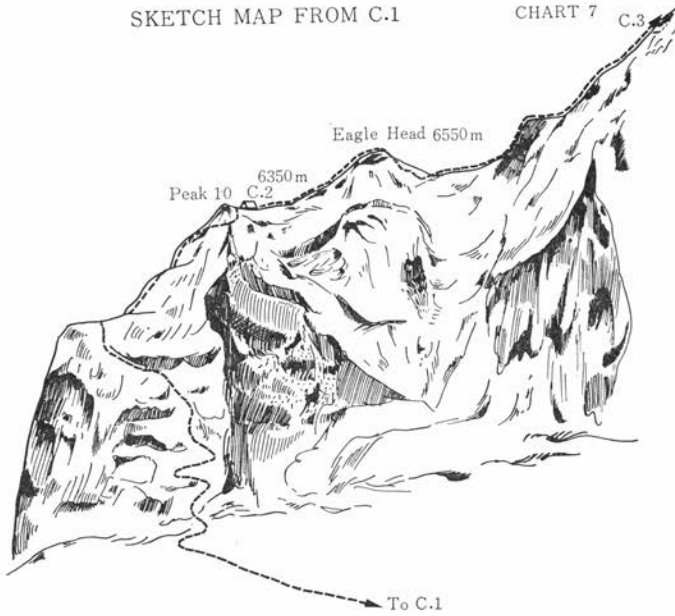
きた。困難であった氷河上の荷物輸送は、無事に完了した。仮ＢＣともうひとつ上部の前進ベースキャンプ（ＡＢＣ）と、この山は実に三つのベースキャンプを必要とした。長く、困難なアプローチであった。

氷壁と西尾根

ＢＣからシェルピ・ガン氷河は傾斜をおとし、ゆるやかな、しかしクレバスの多い登りが続く。荷物輸送のかたわら、すでにＡＢＣが五二五〇メートル地点にたてられていた。ＡＢＣのあたりは三本の氷河の合流点となり、かなりのひろがりを見せている。左岸から流入している氷河に、われわれはビャンダック（わしの意）氷河と名付け、ここから当初の目的である西尾根ルートをめざすことにした。この氷河は、アイスフォールはないが大きなクレバスが縦横に走り、前進をはばんでいた。その源頭が大雪原になっており、雪原の奥に屏風をたてたような西尾根がそびえていた。

七月十二日、雪原の端にＣ１（五八五〇メートル）が建設された。西尾根のこちら側は、いずれも雪崩の脅威にさらされた氷壁となっており、一見した所登れそうなルートはなかった。しかしただ一カ所、Ｐ10と名付けた岩峰につきあげる約四〇〇メートルの氷壁に、かろうじてルートをみつけた。これはむつかしいルートであった。平均斜度約六十度のテカテカの氷壁を約一五〇メートル程登ると大きなテラスがある。ここは頭上が二メートル程、大きな雪のひさしになっていて、この下に入れば上からおちてくる雪崩からは安全だ。このテラスを左に五十メートル程トラバースし、垂直な氷壁をなわばしごをかけて約五十メートル登ると、Ｐ10からおりてくる支尾根の端にでる。あとは急な尾根を基部まで登る所は問題ない。しかし、Ｐ10基部の岩壁をまいて西尾根の上にでる所が、ほとんど垂直の氷と岩のミックスでかなりむつかしい。

七月十三日から二人づつ、二日交代でこの氷壁に挑んだ。序々にではあるが、ルートは確実にのびていった。結



局、この氷壁に固定ロープをはり終えるのに一週間を費した。C2（六三五〇メートル）を、P10をこえた西尾根の端に建設したのは、七月二十三日のことであった。氷壁を登った余勢をかって、次に西尾根最初の難関、イーグル・ヘッド（六五五〇メートル）に挑んだ。これはABCからも顕著にみえる西尾根上の岩まじりのピークで、その下りは垂直に近く、カマ首をもたげているわしのような形からイーグル・ヘッドと命名した。両側がそぎおとしたような氷の斜面となっており、頂稜部は大きな雪庇がカベリ氷河側にはり出している難所である。しかし、ここのルート工作は二日で完了した。あとは岩と氷の急峻なナイフリッジが頂上に続いている。黒々とした岩稜が大きく立ちはだかっている頂上稜線は、果して突破できるのか不安にかられる。

七月二十七日、朝からどうも雲行きがあやしく風が強い。この日C3予定地までルート工作するはずであった田中、木本をC1におろす。これはいいタイミングであった。この日を境に天候が悪化し、氷壁は通過

不可能となった。C2に再びあがったのは、二週間後であった。連日雪がふりつづいた。八月一日には全員がC1からABCにおりて、じっと好天のくるのを待っていた。カラコルムとは思えない湿雪に、テントの中は水びたしになった。

八月四日、深い雪をラッセルして再びC1に上った。しかし五日は一転してまた雪。六日の午後からようやく晴れ間がみえた。久しぶりに見るサルトロ・カンリが青空に輝いていた。

八月七日、久しぶりにC2にあがる。雪崩と積雪のために完全に埋った固定ロープを掘り出しながら、九時間かかってC2に到着。完全に雪の下になっていたC2を掘り出し、中村ら六人が泊った。次いで八日、C2の六人は一気にC3を建設しようと出発したが、重荷とラッセルと、ふり出した小雪のため、イーグル・ヘッドをこした六五〇〇メートル地点までしか行けなかった。彼らは午後二時、この地点に仮C3を建設し、アタック隊員二人が残り、四人はC2に帰って、翌日もう一度C3建設をやりなおすことにした。

八月九日、アタック隊員の井上、緒方は仮C3を撤収し、ルート工作資材と個人装備だけをもって、上部のルート工作に当った。田中、木本、居谷、広石のサポート隊は、昨日の六人分の荷物を四人でかつぎ、井上らが固定ロープを張り終えた六八〇〇メートルのC3予定地で彼らに追いついた。C3はここに建設され、アタック態勢はととのった。サポート隊の四人はC2に引きかえし、岡本、中村とともに六人でC2を固めた。私は鶴谷とC1に待機した。BC出発以来、悪天候のすき間をぬうようにして、ようやくここまでキャンプを進めてきたのだ。幸い全員好調で、まだ誰も故障者はいない。遠征の大詰めをむかえて、私は明日の好天を祈るのみであった。

登頂、そして下山

八月十日、午前一時五十分起床。睡眠用として二人（井上、緒方）は酸素を吸って寝たのだが、興奮のためか眠りは

浅かった。風は強いが満天の星だ。気温も零下十五度を指している。プロパンストーブに点火し、雑煮を作って食べる。二人とも好調だ。四時十五分、緒方、井上の順でC3をあとにする。夜空に黒々と肩の岩峰がシルエットになっていて、果して突破できるのか脅威を感じさせる。岩壁の下まで雪稜が続き、ここで終っていた。十メートル程の一枚岩は登れそうになく、右手の七十度ほどのおそろしく急な氷壁をトラバースし、肩の上にでた。こわいトラバースであった。

さらに雪壁を登って稜線に出、しばらく行くと、下からもそれと顕著にみえる例の鋸歯状岩稜の基部についた。最悪の場合はここを直登と覚悟をきめて来たが、よく見ると、この岩峰の左側、つまりカベリ氷河側は、東尾根と西尾根のジャンクションとなっており、雪の大斜面になっていた。しかも岩稜の東側は幅五メートル程の雪稜が頂上まで続いていた。前途の見通しはあかるくなり、二人は心もかるく頂上にむかった。頂上手前の岩稜を登り切ると、目の前に高さ約三十メートルの煙突のような奇怪な形の岩峰があらわれた。頂上はその右後方に白く丸いどっしりした姿をみせている。ここから雪稜が、吊橋のように弓形の弧を描いて頂上に続いていた。岩峰はちょうどその真中に門番のように左手の斜面の中に立っていた(註6)。岩峰の横で休憩し、いよいよ頂上にむかう。

九時十五分、二人は遂に頂上に立った。仮BCから四十五日目、計画をたてから六年目、念願のシェルピ・カンリの登頂である。雲ひとつない快晴で、カラコルムのすべての山がみえる。二〇〇ミリ望遠レンズも使って何枚も写真をとる。頂上での四十分は夢のようにすぎた。十時、二人は帰路についた。肩の岩峰の下りは、一本残ったスノーバーを使ってロープを固定しておりた。C3着午後一時。サポートにあがってきた中村、居谷に暖かく迎えられた。

第二登ははじめから計画に入っていなかった。八月十一日、上のテントの八名は無事におりてきた。上部雪原で測量や氷河の年代測定などをして、翌日は全員ABCにおりた。BCをあとにしたのは、氷雨のふる八月十七日のこと

であった。カパルには八月二十二日に帰着した。

（註1）F.B. Workman et al. : Two Summers in the Ice Wilds of Eastern Karakoram, Fisher Unwin Ltd., 1917.

（註2）J.Hunt : Peak 36, Saltoro Karakoram, 1935, A.J., 47, 282, pp. 14～24.

（註3）薬師義美氏による。

（註4）A. Carter : A.A.J., No. 49, p. 53, 1975.

（註5）アレナレス山の初登頂『山岳』五十三年、一～二十四頁

（註6）一九七七年一月十六日、朝日新聞スポーツ欄（東京版）に、この岩峰の高さをめぐる記事がのった。岩峰を頂上より高いとする説や、これに北峰（七三八〇メートル）と名付けようとする人の説が紹介されている。岩峰の高さは、登頂者の井上が云っているように、頂上とほぼ同じ高さとみてもよいだろう。井上らが登った地点より岩峰は少し高いように見えるが、頂上は大きな雪庇がはり出していて、その雪庇の上に立てば、岩峰と同じ高さになると思われる。私は頂上には頂上の風格が必要であり、登山者が頂上と判断する所が頂上であろうと考える。だから稜線の途中に立っている貧相な岩峰にあえて登ることはないと判断した二人の登頂者の考えが正しいと考える。余裕たっぷりな登頂であったので、もし疑問が生ずれば必ず二人はそこに登っていただろう。

＜記録概要＞

隊の名称　神戸大学カラコルム遠征隊

活動期間　一九七六年五月～九月

目　的　シェルピ・カンリ峰（七三八〇メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝平井一正（44）、副隊長＝田中俊甫（33）、隊員＝鶴谷将俊（31）、岡本信洋（31、医師）、中村正男（29）、井上達男（28）、緒方俊治（27）、木本義治（26）、居谷千春（25）、広石一英（22）、連絡将校＝アサド大尉（28）。

尚、一九七四年第一次隊の構成は次のとおりであった。隊長＝田中俊甫、副隊長＝井上達男、隊員＝河本卓生、八田義一、山口幸久、西内博、酒井利直、船津登。

行動概要　6月16日カパル発。33日BC（四八五〇メートル）建設。7月12日C1（五八五〇メートル）、23日C2（六三五〇メ

報告書

ートル)、8月9日C3(六八〇〇メートル)設営。10日シェルピ・カンリ登頂。14日BC撤収。22日カパル帰着。

『シェルピ・カンリ登頂報告書』神戸大学カラコルム遠征隊編(一九七六年刊)

ジャヌー北壁（一九七六年春）

——そのタクティクスについて——

小西政継

準備・偵察

カンチェンジュンガ山群の一角にそびえ立つ怪峰ジャヌー（七七一〇メートル）は、我々、山学同志会のヒマラヤの象徴であり、憧れの高峰であった。この憧れへの情熱を持ち続けて約十年、我々はアルプスやヒマラヤで精力的なトレーニングを続け、ジャヌーの白き頂きに一矢をつきさすことに成功した。その「喜び」と「充実感」は何物にもかえがたいものである。

ふりかえってみると、ジャヌー北壁へ進む一歩一歩は長く辛いものであったが、ひとくぎりがついた現在、どの山行もなつかしいものだし、それらは我々が小さな力から大きな力を発揮することができた歴史でもある。すなわち、一九六七年二月・冬期マッターホルン北壁、一九七〇年三月・冬期アイガー北壁直登ルート、同年夏期・アルプス登攀（トリオレ北壁、ドロワット北壁、クルト北壁等）、一九七一年一月・グランド・ジョラス北壁、同年夏期・フレネイ中

央岩稜及びブルイヤール赤い岩稜、一九七二年一月・ブルイヤール赤い岩稜、一九七三年春期・アンナプルナⅡ峰、また個人的に会員が参加した一九六九年、七〇年・エベレスト南西壁（日本山岳会隊）、一九七一年春期・国際エベレスト隊、一九七四年秋期・エベレスト南西壁（RCCⅡ隊）等がある。これらの歩みの中で、我々は「垂直の岩壁と高度」をこなせる総合力をつけることができた。

目標の高峰を攻略するためには、文献や理論だけでは不充分だ。成功はその山のもつ危険と困難と、アルピニスト側の力とのバランス次第であろう。未登のジャヌー北壁を計画、実行に移せたのは、我々の力が十年にしてようやく北壁の力と同等になったからである。

一九七三年夏に計画が生れ、我々は同年秋期、一九七三年春期の二シーズンに偵察隊を送りこんでいる。この偵察行は大北壁を落すための最低の義務でもあった。すなわち、第一次偵察隊（一九七三年秋期）は、キャラバンルートの調査と北壁の可能性を確認した。約七〇％の確率ありとの報告であった。また、第二次偵察隊（一九七五年春期）は、北壁の核心部へ通じるアイスフォールの試登を行った。

この二回の偵察行で判明した北壁の概要は次のようなものであった。ジャヌーの南西稜を初登攀したフランスのプロガイドが、一見したのみで登攀不可能と判断したこの北壁の直線高度差は、三二一〇メートルである。二〇〇〇メートル以上直立した正面の驚くべき大垂壁の左、すなわち、北東の位置に、斜度五十度～六十度の大氷雪壁がある。そこから七〇〇〇メートルラインを越した長大な東稜（左肩の稜線）を結ぶ線が、可能性を求められる唯一の弱点であり登路であった。といっても、未知に対する不安は多かった。アイスフォール通過の危険性（ブロック雪崩、クレバス）、高度差一五〇〇メートルの大氷雪壁の雪崩とスノーシャワー、東稜へ抜け出る部分にある岩壁帯、東稜の困難性、等々。また、午後から必ずやってくる降雪も壁全体の危険率を高め、頭の痛い大問題であった。しかしこれらのことは実際現場にいって身体を張って解決する以外方法はなかった。

キャラバン

ＢＣまでのアプローチは、カトマンズ〜ダーランバザール間は陸路をとり、キャラバンに入った。キャラバンは約十五日〜二十日の間で完了し、行程は大きく、ダーラン〜ドバン、ドバン〜グンサ〜ＢＣの、高原と渓谷沿いの道に二分される。シヤカトン〜アムジラッサ間の崖沿いの一日行程のみ注意すれば全く問題のないアプローチである。

最終部落のグンサでポーターチェンジを行った。グンサ〜ＢＣ間は一度に十トンの隊荷をあげるだけのポーター、ヤクが集まらず、二〜三回でようやく完了させることができた。ポーターの賃金は低所、高所、また天候の良し悪し、熱い寒い等の変化で多少の変動があったが、十五ルピー〜十八ルピーの間で調整しながらすべてうまくいった。当然このトランスポートの仕事に関しては、サーダーの力量によることが多かったように思う。

我々は二月二十五日ダーランを出発し、全員がＢＣに揃ったのは三月十五日である。ヒマラヤ初参加の隊員はカンバチェン（四〇〇〇メートル）〜ＢＣ（四五〇〇メートル）間で一〜二日の高度順化を行い、順調にＢＣ入りをはたした。

ＢＣはホワイトウェーブ、ヤルンピーク、ジャヌー、三本槍といった高峰群の大障壁に囲まれたジャヌー氷河沿いの素晴しい大草原であった。

攻　撃

紙面が少ないので攻撃の詳細については記すことができぬが、北壁の内容及び基本となった作戦について記しておこう。

＜北壁について＞

(Fig.11) シェルピ・カンリよりチョゴリザ(7,654)(右)とマッシャーブルム(7,821)(左)を望む

Chogolisa(7,654)-right, and Masherbrum(7,821)-left, seen from Sherpi Kangri

(by. K. Hirai)

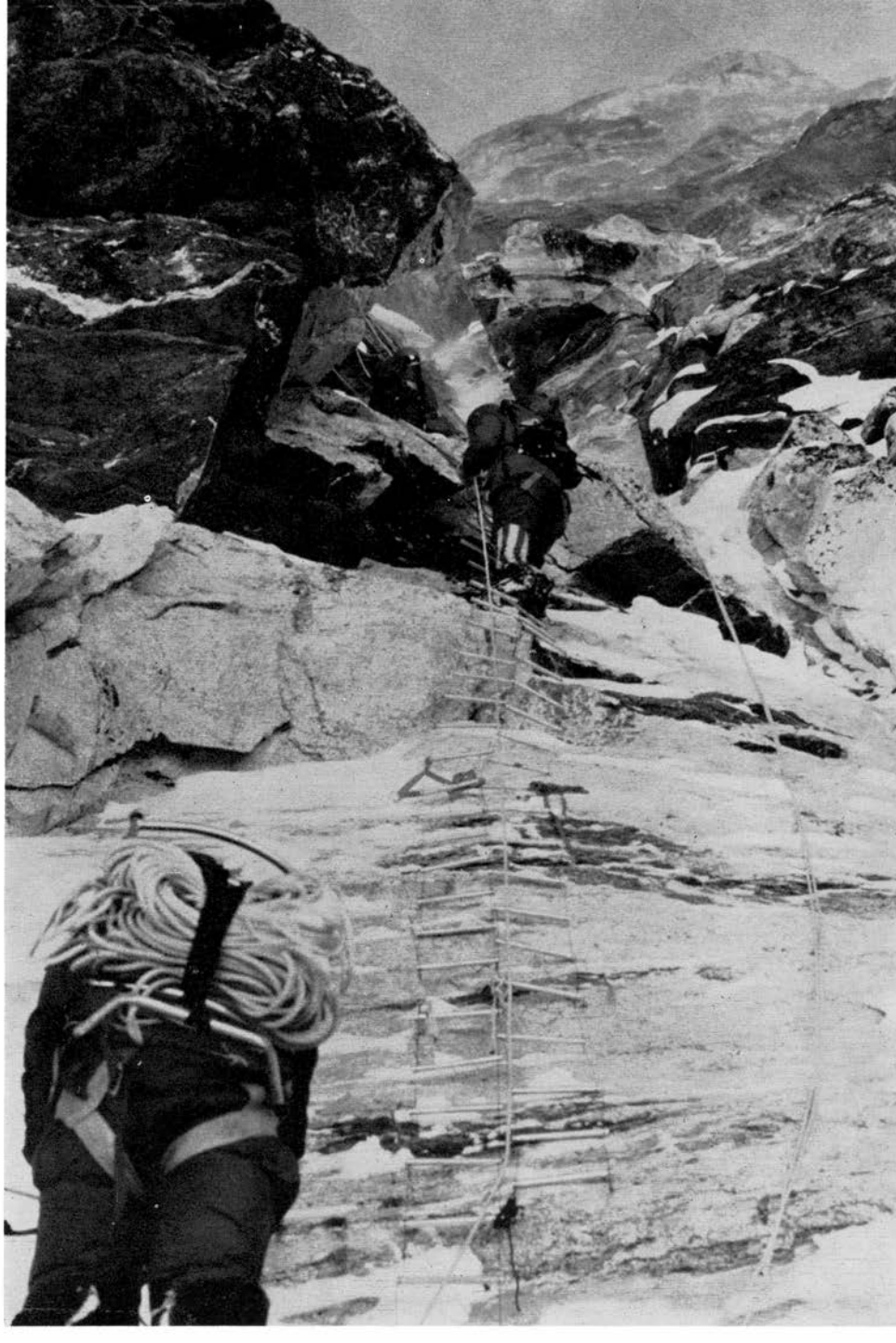
(Fig.12) ロック・ピナクルの向うに望むシェルピ・カンリ頂上。右端にサルトロ・カンリが見える。

Sherpi Kangri: the snow-covered summit can be seen behind the rock pinnacle. Saltoro Kangri is in the right. (by K. Hirai)

(Fig.13) ベースキャンプから望むジャヌー北壁の全容

The north face of Jannu seen from Base Camp

(by. M. Konishi)



(Fig.14) ジャヌーC3下の北壁最悪部取付 (5,700m付近)

Jannu: the way to the most difficult part of the north face under C3 (about 5,700m)

(by. M. Konishi)

(Fig.15) ジャヌー東稜と頂上台座(7,300メートル地点より)

Jannu: the east ridge and the summit seen from 7,300m.

(by. M. Konishi)

(Fig.16) 大台ヶ原山上一帯の歩道はコンクリート舗装が始められた。補修費用を負担する奈良県はコンクリートで固めれば長持ちして出費がへると思っているのだろうか。出来るだけ自然をそのままに保全する整備こそ望ましい管理ではないのか。

(撮影・田村聡明)

North Face of Jannu — The route climbed by Sangakudoshi-Kai Expedition

CHART 8

我々のたどった北壁のルートについては、ルート図をみればほぼ全容がおわかりいただけると思う。北壁のルートは、①ＢＣからアイスフォール右側の高度差一〇〇〇メートルの岩稜（ニュージーランド人の岩稜）、②正面の大垂壁直下をせりあがる一七〇〇メートルの大氷雪壁、③頂上に至る東稜、と三分されている。実際の登攀距離は六七五〇メートル。スケール的には、マッターホルン北壁を三つ重ねた岩壁と考えていただけばよい。以下、順を追って説明する。

(1) ニュージーランド人の岩稜

ＢＣ（四五〇〇メートル）―Ｃ１（五〇五〇メートル）―Ｃ２（五五〇〇メートル）。直線高度差一〇〇〇メートル、登攀距離二一七〇メートル。

ＢＣはジャヌー氷河右岸の広大な草原である。北壁の本格的な難しさが始まる五五〇〇メートル地点の雪原とＢＣを結ぶ登路は、①アイスフォール、②アイスフォール右岸の岩稜の二通りあるが、我々は岩稜をルートとして選んだ。アイスフォールは、左壁からのブロックの落下が危険すぎて、ルートには採用できなかった。我々のルートとした岩稜は、前年の秋期にニュージーランド隊が採用したものであり、「ニュージーランド人の岩稜」という名称にした。

この岩稜の中に、我々はＣ１を設置し中継点にして、五五〇〇メートルの盆地状の雪原に達した。難度は部分的に垂直の六級も現れるが、全体的には三～四級といったところである。Ｃ１地点は、岩稜とアイスフォール右側の接点となった絶好の雪の小さなキャンプサイトになっている。

登攀（荷上）はすべてユマール登攀であり、下降はすべてアップザイレンとした。この間は、隊員十キロ、シェルパ十五キロの荷上重量であった。

(2) 大氷雪壁

C2（五五〇〇メートル）―C3（六二〇〇メートル）―C4（六五〇〇メートル）―C5（七一五〇メートル）。直線高度差一六五〇メートル、登攀距離三二一〇メートル。

この間が北壁の核心部で高度差一七〇〇メートルの大氷雪壁である。平均斜度五十～六十度の大氷雪壁の上端は約七二〇〇メートルラインの東稜につきあげている。ジャヌーの天候は、午前中晴、午後は降雪というパターンを必ずくり返す関係上、この大氷壁はスノーシャワー、雪崩の危険が大であり、攻撃ルートはどうしても中心線から左へ寄せられてしまう。

C2～C3間は、この大氷雪壁左端の側壁を登路とし、北壁の最悪部となった。高度差五〇〇メートルにわたって、ほぼ垂直の五級、六級の岩と氷のミックス帯で、ルート工作、整備に約十五日間が費された。C3は氷雪壁を階段状にきりくずし、ウィランズ・ボックステントをはめこんだ。

C3～C4間は、巨大なハンギング・グレイシャーの下部の岩と氷の壁を抜けきり、東稜にせりあがる広大な氷雪壁の基部にC4を設置した。C4は毎日午後からの降雪で、常時、スノーシャワー、雪崩の危険にさらされており、攻撃期間中ほぼ天幕の片側半分は雪に埋もれていた。

C4～C5間は、五十度の氷雪壁なので、難度的には全く問題はなかったが、高度が七〇〇〇メートルラインに達するため、高度順化の苦しさがあった。東稜直下七一五〇メートル地点にグラン・キャピサンに似た大岩塔があり、我々はこの基部にC5を設置した。C3同様ここもまともなキャンプサイトがなく、氷雪壁を崩し、ボックステントをはめこんだ。

(3) 東稜から頂上へ

C5（七一五〇メートル）―C6（七四〇〇メートル）―頂上（七七一〇メートル）。直線高度差五六〇メートル、登攀距離一三七五メートル。

C5から東稜にとびだすまでの岩と氷の壁が最後の障壁（五級）となったが、二日間の攻撃で突破し、東稜にとびだした。東稜は東壁（ヤルン氷河側）と北壁（ジャヌー氷河側）をわける頂稜で、比較的ゆるやかに頂上台座と連結している。北稜側にすっぽり切れおち、東壁側に巨大な雪庇をはりだしているのが特長である。波状になっている北壁側上端にルートをとり、頂上台座基部に最終キャンプを設置した。

頂上台座は急峻、部分的に垂直の三一〇メートルの氷雪壁である。核心部は七五〇〇メートル付近の一〇〇メートルで、五級、六級のアイステクニックを強いられる。国内の壁にたとえると、三月頃の鹿島槍北壁のキノコ雪乗越し、垂直部のクライムと同質のものである。他は五十度～六十度のアイスクライムで、頂上のナイフリッヂに達する。ナイフリッヂの南西稜との接点から頂上までは、約七十メートル、カミソリの刃のように、南西壁のヤマタリ氷河側と北壁にきれおちて、高度感がある。我々は北壁側の氷雪壁をナイフリッヂに沿ってトラバースし、頂上直下で短い垂直部を越し、頂上に達した。

＜作戦について＞

(1) パーティ編成

住吉ドクターを除いた十五名のメンバーを四隊にわけ、①ルート工作②ルート整備③荷上④休養のローテーションで攻撃を行った。各隊とも完全に独立した強力なパーティが組めたので、ほぼ完全にこの四つの歯車がまわった。この編成は従来どの隊でも採用している方法であり、ちがう点はこれに垂直が加わったことだけである。冬期アイガー北壁直登ルートの経験がおおいに役立っていた。

僕がこの作戦で最も注意したことは、隊員一人一人の高度順化で、最前戦からBCの間をくまなく行動し万全を期した。一人の隊員もつぶさず、全員で登頂する為にどうしても必要なことでもあった。

(2) 全員登頂とルート工作

全員登頂の目標を定めた我々は、この目的を達成するために、頂上までフィックス・ザイルをはりめぐらした。BCから頂上まで、合計六七五〇メートルも使用したが、安全かつスピーディに目標を達するために採用したものである。

(3) 軽量化作戦

重量は高所の敵である。ゆえに我々は、できうる限りの軽量化作戦をはかり、ザイル一本まで気をつかった。例えば岩壁、氷壁、氷雪壁、ナイフリッヂの難度、斜度によって、フィックス・ザイルの質、太さを変えたこと。また最終の登頂段階では、登頂隊が登頂の際必要とする食糧、燃料は自分のザックでかつぎあげ攻撃するといったものである。これだけの難しいルートになると思うように荷上ができない。だからといって、最終キャンプに登頂の為の食糧、燃料等がそろっていないから攻撃できない、ではすまされないのである。しかし、よくトレーニングされた隊員ならば、これは可能であるし、また第二登目からはファイナル・キャンプからではなく、さらにもう一つ下のキャンプからラッシュすることも、攻撃をスピーディにするものであろう。我々は十五名中、十三名が登頂し、二名の隊員を残してしまったことは残念であったが、ほぼこれらの作戦は的中した。

(4) 酸　素

酸素は医療用のみ用意し、攻撃には使用しなかった。南西稜からの第一登、第二登（フランス隊、成城隊）では、七五〇〇メートル以上からのジャヌーの難度から考えて採用しているが、隊員の体力、技術、また最良の高度順化をほどこせば、酸素不要という、当初からの自信があったため、採用しなかった。

おわりに

遠征が終って感じることは、我々は二つの幸運に恵まれたということである。一つは前年の秋期にニュージーランド隊が同一ルートを攻撃し、東稜直下七二〇〇メートルまで達し、部分的に彼等のフィックス・ザイル、キャンプサイトの跡が残っていたことである。これでルートファインディングが容易になり、精神的にも大いに助かっている。もう一つは運である。合計六七五〇メートルにもおよぶ長大なフィックス・ザイルのどこかで、隊員十五名、シェルパ十一名の、計二十六名の男たちが行動し、傷一つなかったことは、幸運以外のなにものでもなかった。落石、スノーシャワー、雪崩、ブロック崩落等の危険に連日さらされながらの活動であっただけに、よけいにこの感が強い。すでにこの遠征から一年以上がすぎ去ってしまった今、また自分の血を湧かすようなヒマラヤの高峰へ行きたいと思う。せっせと仕事にはげみ、貯金をして、次の素晴しい夢を追っている今日このごろである。

＜記録概要＞

隊の名称　山学同志会ジャヌー登山隊

活動期間　一九七六年二月～五月

目　的　ジャヌー北壁初登攀

隊の構成　隊長＝小西政継（37）、副隊長＝深田良一（33）、住吉仙也（49）、リーダー＝三羽勝（33）、小川信之（31）、今野和義（29）、隊員＝片平和志（26）、川村晴一（27）、坂下直枝（28）、上不俊朗（25）、秋山俊男（24）、鈴木昇己（22）、河上清美（27）、湯田一男（25）、竹田幸司（24）

ドクター＝坂野俊孝（31）

サーダー＝カルマ（タクトール出身、40）

セカンド・サーダー＝ウガッティ（タクトール出身、28）

シェルパ＝ギャルツェン（タクトール出身、27）プリ（トウンブック出身、30）ペヌリ（チャングリカルカ出身、26）ペンバツェリン（ターメ出身、38）アンツェリン（ターメ出身、26）ニマ（パンボチェ出身、25）ソナザンブウー（パンボチェ出身、25）ガウンチョンビイ（パンボチェ出身、35）ミンマ（ナムチェ出身、33）

コック＝パサンツェリン
キッチン＝パサンテンバ、ジェッタ
メール＝オメ、ダワ
キッチンヘルプ＝ミンマ、トウデュウ、ダワ、パタンバドール
リェゾンオフィサー＝シブラムＫＣ

尚、第一次偵察隊の構成は、小川信之、片平和志、岡本泰輔、菊地幸昌。第二次偵察隊は、嶋村幸男、坂下直枝、秋山俊男、サーダー・カルマ。

行動概要

2月25日ダーラン出発。3月15日ＢＣ（四五〇〇メートル）建設。19日Ｃ１（五〇五〇メートル）、26日Ｃ２（五五〇〇メートル）を各々設営。一週間で下部岩壁を突破し、4月10日Ｃ３（六二〇〇メートル）を設置。18日Ｃ４（六五〇〇メートル）を上部氷壁上に建設し、25日にＣ５（七一五〇メートル）を東稜直下に設営。5月9日、東稜上にＣ６（七四〇〇メートル）建設。11日、小川、鈴木、坂下がジャヌー登頂。12日今野、小西、三羽、ペンバ・ツェリン、プリ登頂。13日川村、秋山、河上登頂。14日上不、深田、片平、坂野、ギャルツェン登頂。20日ＢＣ帰着。

報告書

『JANNU SUCCESS REPORT』山学同志会ジャヌー登山隊編、刊行。
『ジャヌー北壁』小西政継著（白水社、一九七六年十月刊行）。

RCCⅡによる岩場グレーディング

須田義信

はやいもので、日本の岩場にグレードが付けられてから、もう十二年が経過した。はじめてRCCⅡ（第二次ロック・クライミング・クラブ）がグレードを発表した一九六五年当時と比べれば、グレード観念は驚くほど浸透した。現在では、岩場の難かしさをいうとき、数字で第何級と呼ぶことが一般的になっている。

RCCⅡでは、一九七二年にはグレードの小改訂を日本の岩場全般にわたって実施した。

此度の改訂は、旧RCC方式とは異なるものである。改訂した新グレード体系について詳しくは『新版・日本の岩場グレードとルート図集』（RCCⅡ著、山と渓谷社刊）を参照されたいが、新体系の基本的構成を理解いただくため、その中から代表的な例を二つほどとり出し掲載した（図9及び図10参照）。新体系では、こうした形で一四七ルートをグレーディングした。

さて、岩場を物理的に客観視し、でき得る限り科学的に把握し表現しようとしたのが、旧方式であった。一定の枠

を造り、その中に各岩場ルートをあてはめていったが、現実の岩場の様態はそう簡単には数値化される筈もなく、明確には困難度を表示できなかった。それに反して、此度の改訂は、あくまでも主観、経験論をその根底としている。枠を設けることをせず、AルートとBルートとの比較をすることから作業を開始した。つまり「滝谷第一尾根の方がクラック尾根より難かしい」、「そしてドーム西壁の方が上だ」、「西壁とP2フランケじゃあどっちが苦労するかね」といったようなやりとりの後、相対グレードシステムの中に資料が次第に蓄積されていった。改訂委員七人の、かつて攀じてきたかなりの量の岩場、周囲の信頼するに足るクライマーからの情報、さらには、未グレードの岩壁を新たに登りにも行った。ピッチグレードに関しては、三ツ峠ゲレンデで合宿し、できる限り新鮮な気持で、難易度基準とすべきピッチをトレースした。これは一見非合理的な方法のように思われるが、皮相的な科学信奉、数値化に頼った客観グレードシステムよりも、いくらかは実像にちかいグレード体系ができたと自負している。もとより主観重視ゆえの欠陥も多々ある。ゆえに集団討議により客観化させる手続きが必要だったことはいうまでもない。しかし、ヴェルツェンバッハ以来の伝統を持つこの方法は、私達に成し得たもっとも妥当性ある方式であったと信じている。

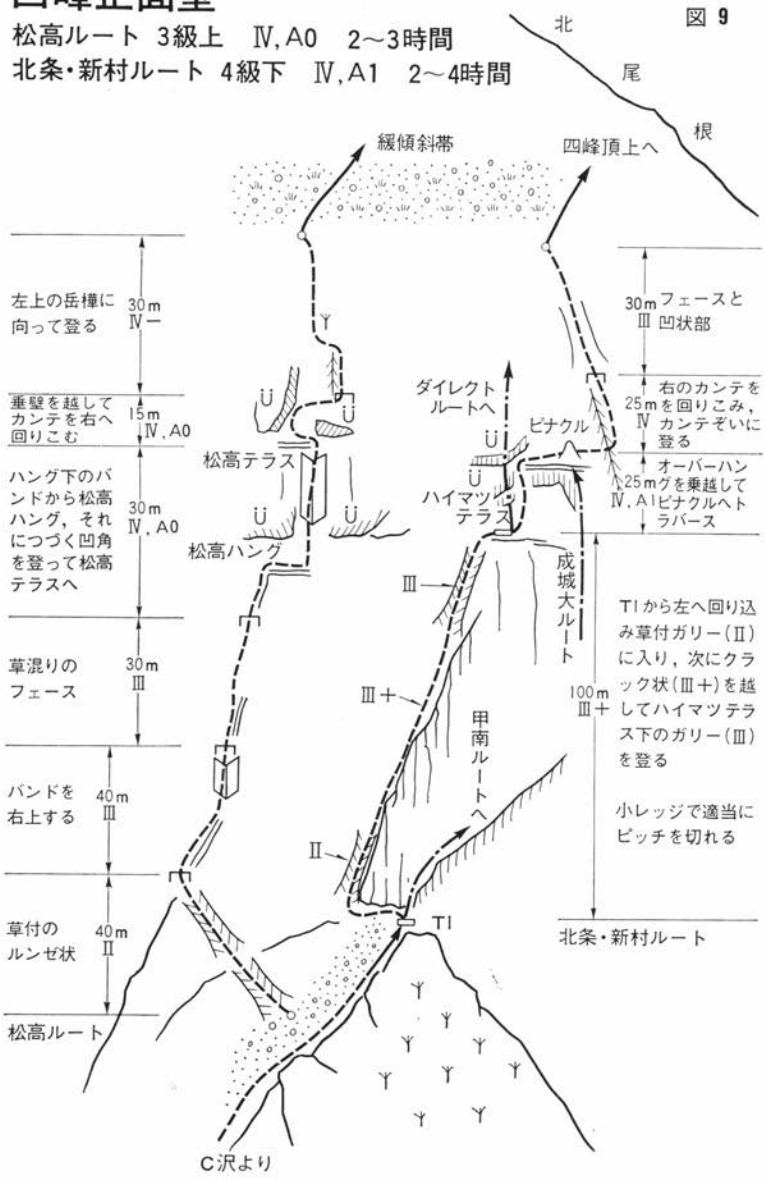
いうまでもなく、グレードの持つ意味でもっとも大切なものは、岩場の難かしさについてより正確な情報を伝える、ということである。この一九七六年度の改訂で、その目的にまた一歩近づくことはできた。しかし、より正確なというもっとも基本的で重要な面を考えると、まだまだ未完成である。

改訂の担当者たる私が、このような発言をするのは無責任かも知れないが、実感である。それは、私達がグレード作業の適任者であったか否かということである。グレードをもっとも必要とするのは、易しいルートからより難かしいルートへと目指す初級クラスのひと達である。このひと達が自分に合った適切なルート選択をするとき、その判断に少しでも助力しようとするのがグレードの使命である。この点から鑑みて、初級者が少しずつ難かしいルートへ進んで行くとき、どんな内容のルートを難かしく感じ、また易しく感じるのかを、しっかりと把握していなければなら

四峰正面壁

松高ルート 3級上 Ⅳ, A0 2～3時間
北条・新村ルート 4級下 Ⅳ, A1 2～4時間

図 9



ない。そのうえで、難易度評価をするのでなければ、正しい等級付けは行ない難い。したがって、初級段階を過ぎてしまった私達に、果して初級者が感じる困難度の印象を、どの程度まで同一のものとして自ら感じることができたかという点が、問題であった。これは、ルートグレード（ルート全体の難かしさ）を決定する際に、もっとも考慮を要することであった。今回の改訂作業が、どこまでこの問題に肉薄することができたか、どうも私は疑問を感じざるを得ないのである。

たとえば、比較的易しいピッチが続く長いルート、短かいが困難なピッチで構成された二つのルートがあるとする。この二つのルートのどちらが難かしいかの判断を下す際、初級者とそうでない者とでは食い違いが生じるに違いない。ここで、滝谷クラック尾根とドーム北壁右ルートを例にとって考えてみよう。結論として、技術程度が未完成な者はドーム北壁のほうを難かしいと感じ、技術の高い者はクラック尾根を難かしいと評価する傾向がある。この理由は、ドーム北壁のフリークライミングと人工登攀を含む二ピッチを拡大してとらえるか、それともクラック尾根のフリーⅢ、Ⅳ級程度で構成された九ピッチ全体を評価するかの違いである。

フリーⅣ＋と人工A1を難なく処理できる者ならば、アプローチも短かく僅か一時間ほどで登れるドーム北壁は、近郊のゲレンデと同様に感じるだろう。反面、フリーの能力がⅣ級どまりで、アブミにも慣れていない者にとっては、フリーと人工が交互に現われ垂直の傾斜を持つドーム北壁では、墜落の恐怖をいやというほど味わうだろう。しかし、クラック尾根では自分の技術で十分処理でき、恐怖は覚えないだろうから、易しいと感じる。この印象の差のとらえ方が重要である。故に初級段階を過ぎてしまった私達が、このようなルートの難易度評価を、初級者のような感覚で果たして受けとめられるだろうか。おそらく、自分の技術内で楽に処理できるものについては、一般に考えられるのとは逆に、その判断力は鈍感だと思われる。微妙な差まで敏感に感じ取ることが可能なのは、自分の能力の限界付近においてであると思うのである。

奥鐘山西壁

図 10

岡山クライマースクラブルート　6級下　V, A2　10～15時間

露岩帯の下をトラバースし，中央ルンゼをわたり，対岸の岩稜のトレールを登る。

300 m		急峻な灌木とブッシュ帯をコンテニュアス
40 m	Ⅲ	スラブとブッシュのコンタクトを右上
30 m	Ⅲ	急峻なブッシュ帯
25 m	A2, Ⅳ＋	3段6mのハングから小ハングを越えてブッシュへ
35 m	Ⅴ, A1	スラブと悪い草付凹角
40 m	Ⅴ, A1	ホールドの細かい逆層のスラブ
15 m	A2, Ⅳ＋	5mのハングを松の木から取付く。ハング上はルートファインディングが難しい
20 m	A1, Ⅳ	フェースの人工からフリー
15 m	A2	4mのハング
20 m	A1	フェースを人工で
35 m	Ⅴ, A1	草付フェース。左に回りこむところが最悪
20 m	Ⅳ＋	草付フェース。テラス手前が悪い
30 m	Ⅳ＋, A1	ところどころかぶり気味の草付フェース
35 m	Ⅳ－	快適なスラブ
35 m	Ⅳ, A1	草付凹角を直上しバンドへ
20 m	A1	右へトラバースし1mのハングを越える
15 m	A2	5mのハング。
25 m	Ⅲ	ホールド豊富なフェース
40 m	Ⅲ	草付フェースを左上
40 m	Ⅲ	草付をトラバース
30 m	Ⅳ	滑りやすいクラック状から取付く

つまり、今回のグレード委員会のメンバーにとって、もっとも鋭敏にその差異が分るのは、クラック尾根やドーム北壁ではなく、もう少し難かしいルートにおいてであった。故に、上級ルートの難易度評価は高い妥当性を保持できたと言える。その反面、易しいルートの評価は、はっきり言って自信が持てない。一般には、一九七六年度の全面改訂はかなり高く評価していただいたようであるが、以上のように私には幾つかの疑問点も分っているので、少々面映ゆい。

それでは誰がそれを成しうるのか。私も初級者の印象を聞きたいと思ったが、それはあまりにも主観的に過ぎ、参考とするにはためらいを感じた。彼らは、本当は私達が感じられない程に微妙に難かしさの差異を感じ取っているに違いない。しかし、それは自分では良く分らないのではないだろうか。なぜなら、当然のこととして、初級者はルートの経験度も少なく、比較する術を持たないし、先輩或いは書物からの先入観のほうが強すぎて自分の印象が素直に定着せず、それらをもとに難易度評価をしてしまうからである。従って、やはり初級者の印象というのは、どうも頼れるものとは思えないのである。

そこで、現状で考えられるもっとも理想的な方法は、複数のまったくの素人を養成し、その過程で彼等の意見を資料として収集し、集団討議によって難易度評価をしていくことだろう。この方法ならば、かなり高い妥当性を保持できるだろう。もっともこれとても完全ではない。登山技術を教える方法や技術習得の順序によっても、その感じ方に影響を与えてしまうからである。この辺が、感覚を頼りにしたグレーディングの限界だろうが、私達が行なった一九七六年度改訂のやり方よりは、数倍優れているだろう。次の改訂では、ぜひ共このような方法を採りたいと考えている。その為には、ＲＣＣⅡも新人の受入れ態勢を整える必要がある。

しかしながら、これにはＲＣＣⅡとしての制約がある。まず新人が一人前になるまで責任をとれるかということ。まさかこちら側の都合で、途中でおっぽり出してしまうわけにはいかないから、その裏付けが必要なこと。つぎに指

導方法の確立が挙げられる。いちばん注意を要することは、初級者はこちら側の考え方や教え方によって、その後の登山観や方法に影響を受けやすい位置にいることだ。つまりカラーが決まりやすい。これは登山だけではなく、ゴルフやほかのスポーツの分野でも同じようなものである。教える側が独善的であると、もっとも自由な精神性を要求される筈の登山を、窮屈で教条的なものにしてしまう恐れがある。これは、教えられる本人の為に、教える側の責任として十分に注意を払うべき点である。

技術は確実に、精神は自由に、ということであるが、実際にはなかなか難かしいことだろう。しかし、その目安が立たないようなら、なまじ手を付けないほうがいいのかも知れない。

ここで、RCCⅡが何故グレードを日本に持ちこんだのか、簡単に説明しておきたい。

話は十五年位前に遡るが、RCCⅡは登山を研究する団体として、アルピニズムを総合的に解明したいと考えた。その一環として、ロッククライミングの習熟を効果的に行なうには、という課題を立てた。この課題の意味することは、易から難へと序々にレベルを上げながら、登攀能力を高めていくことであった。その為には、数々の岩場を経験する必要があるが、その過程において、無理なルート選択を避け、また現在の自分の能力を知る基準として、岩場の難易度が明示されていることが望ましかった。そこで一九六五年「日本の岩場」を上梓し、岩場の難易度を明示した。

以後、グレードに関する研究は続けられ現在に至っているが、当時もう一つの研究をすることが決定していた。それは登山指導教程である。ロッククライミングを習得する際の教科書とも言えるものであり、リーダーには参考書ともなり得るはずのものであった。しかし、この教程は未だ完成していない。グレードも、この指導教程と表裏一体を成してこそ始めて有機的に作用するものであって、どちらか一方だけでは本当の効果は望めない。

この点でRCCⅡは、たんにグレードを発表しただけというにとどまってきた。もう時宜は大分遅れてしまったが、とにかく指導教程にとりかからなければならないことは明白である。とくに、グレードをより完成させる為には、教程と切り離しては考えられないところまできている。とは言っても、従来の技術書のように、机上で理論を組みたてても、実践書としては役に立たない場合も起こりうる。グレードに基づいた教程、教程を無理なく実行させるグレードシステム、といった相関関係を維持させることが大切である。どうしても、グレードと教程は共同研究が必要なのである。もっと広く考えれば、登山思潮の変化がその基盤に大きな影響を与えるし、海外登山等との関連性も無視できない。必要とされる最少限の条件として、グレードと教程、この共同作業だけはぜひとも実行したい。その為にはRCCⅡも、ある一定資格以上の同人によって運営される、などと閉鎖的なことは言っていられない。どんな組織でも人材が不足すればその行動は鈍る。もっと広く合目的的に同人を拡充する必要が迫られているのである。

さて、つぎに岩場の部分的な面の難かしさを表示するピッチグレードについて、少し述べてみたい。私達は、ピッチグレードはUIAA基準（国際山岳連盟基準）に従った。しかし、人工表示にはUIAA基準にも欠点が見うけられた。

例えば、A1の概念は支点も動作も安定、A2はそれらのいずれかが不安定、A3は両方不安定ということである。私達もこの概念によってグレーディングしたが、あまりに大雑把すぎ、実際にはたいした意味は成さなかった。

UIAA基準によれば、傾斜七十～八十度位のスラブに打たれたボルトの列を登る行為はA1表示となり、易しく気楽である。反面、かぶり気味の壁でピトンを使用して攀る行為も、A1である。体力の消耗やアブミ上でのバランスの取り方は、前者と後者とではずい分差がある。この差は想像以上に大きく、アブミに慣れない者にとっては、同一グレードとはとても思えない。このようなことでは、正確な情報を提供する筈のグレーディングが意味を成さない。

私達は、ＵＩＡＡ基準を守ろうとするあまり、結果的にはマイナス効果をまねいてしまった。今後のより良い在り方としては、人工グレードにも、フリーと同じように、上限と下限を設定する必要が有るだろう。Ａ１－、Ａ１、Ａ１＋というような表示こそが望ましい。このことは、Ａ２概念にも言える。僅か一メートルのオーバーハングでも、五メートルのものでも、全てピトンさえしっかりしていれば、同じ難かしさというものではない。体力の消耗度からして違い、実際の登攀に及ぼす影響は大きい。同様なことは、Ａ３概念にも言えることである。

ＵＩＡＡ基準は、世界の優秀な岳人たちの到達した結論として導き出されたものだから、それはそれなりにすばらしいものだが、絶対的な基準と考える必要は無かったのである。あくまでも基準は基準として尊重し、そのうえに、より正確さを求める為のバリエーションを加えることは、大いに結構なことなのだと、つい最近気付いた。次の改訂では是非これを付け加えたいと思っている。

つぎに、グレードは、より正確な情報を提供することが目的であって、ある思想やそれに基づく規範を提示することではない。

これが私達の基本方針の一つであった。そこで、ピトンが多数残置されていて、その使用をためらわなければⅣ・Ａ１、フリーを完遂すればⅤといったピッチの場合、私達の希望としてはフリーで登りたい。故に、Ⅴ級表示にしてもよいのでははないかといった議論がしょっちゅうなされた。しかし実際には、簡単にアブミがセットできるような場所は、やはりそのように表示すべきではないか。そうでなければ、フリーで登るべしという規範を押しつけるだけで、そのピッチを正しく表示したことにはならないといったこともあった。

結局、フリーで登ればⅤという表示も併用しようということで解決したが、実はこの問題はもっと深い。今回は単に併記するだけで片付けておいたが、今後の日本の岩登りそのものの方向と、大いに関わりを持ってくるからである。現在では、完登の事実よりも、どのように登ったかのプロセスを大切にする風潮が、静かに助長されつつある。

困難度序列表（ただし、一部のルートのみ抜粋）

ルート・グレード ＼ 山域	谷川岳	穂高岳周辺	剣岳・黒部川周辺	南アルプス・八ガ岳その他
Ⅰ級	東尾根（シンセン右俣より）	前穂高岳北尾根（Ⅴ・Ⅵのコルより）	剣岳八ツ峰（上半）	
Ⅱ級		前穂高岳北尾根Ⅲ峰フェースRCCルート	剣岳源治郎尾根Ⅱ峰平蔵谷側A・Bフェース	
Ⅲ級 下	幽ノ沢Ⅴ状岩壁右ルート 一ノ倉沢2ルンゼ～Bルンゼ	前穂高岳北壁～Aフェース 北穂高岳滝谷第3尾根	剣岳チンネ中央チムニー～Aバンド～Bクラック 剣岳八ツ峰Cフェース剣稜会ルート・RCCルート	北岳バットレス第1尾根商大ルート（クラシックルート）
Ⅲ級 標準	一ノ倉沢南稜	北穂高岳滝谷ドーム中央稜 〃 クラック尾根	剣岳チンネ北条・新村ルート～チムニーC・Dクラック剣岳八ツ峰Ⅵ峰Aフェース中大ルート	北岳バットレス第4尾根
Ⅲ級 上	一ノ倉沢中央稜 幕岩Cフェース洞穴ルート	北穂高岳滝谷第4尾根 〃 ドーム西壁 前穂高岳北尾根Ⅳ峰正面壁	剣岳源治郎尾根Ⅱ峰平蔵谷側Dフェース	北岳バットレスDガリー奥壁
Ⅳ級 下	一ノ倉沢烏帽子沢奥壁変形 カンテルート 幽ノ沢中央壁正面フェース	北穂高岳滝谷第4尾根 ミP2フランケ早大ルート 前穂高岳北尾根Ⅳ峰正面壁 北条・新村ルート	剣岳チンネ左稜線 〃 八ツ峰Ⅵ峰Dフェース 剣岳久留米大・富山大ルート 池ノ谷右俣奥壁ルート	北岳バットレス中央稜 〃 第4尾根下部フランケ 佐梨川奥壁第5スラブ
Ⅳ級 標準	一ノ倉沢烏帽子沢奥壁中央 チムニールート 一ノ倉沢コップ状岩壁正面壁 一ノ倉沢衝立岩ダイレクトカンテ	前穂高岳北尾根Ⅳ峰正面壁 前穂高岳北尾根屏風岩東稜 〃 中央カンテ・インゼルルート	剣岳源治郎尾根Ⅰ峰平蔵谷 側名古屋大ルート 剣岳剣尾根（下半） 〃 剣尾根中央ルンゼ上半 〃 チンネ左下カンテ～左方カンテ	北岳バットレス・ピラミッドフェース 甲斐駒ガ岳摩利支天中央壁 独標ルート 八ガ岳横岳西壁大同心中央壁雲稜会ルート
Ⅳ級 上	幽ノ沢中央壁左フェース 一ノ倉沢コップ状左右岩壁 〃 滝沢下部～第1スラブドーム壁	前穂高岳北尾根屏風岩東壁 前穂高岳北尾根屏風岩1ルンゼ 明神岳Ⅴ峰東壁中央リンネ	剣岳源治郎尾根Ⅰ峰平蔵谷 鵬翔成城大ルート 剣岳チンネ中央チムニー左フェース・ベルニナルート～Hクラック	甲斐駒ガ岳赤石沢奥壁中央壁 〃 サデの大岩YCCルート

V級	下	一ノ倉沢衝立岩正面壁雲稜一会ルート一ノ倉沢滝沢下部～第3スラブドーム壁	前穂高岳北尾根屏風岩東壁緑ルート前穂高岳北尾根屏風岩中央壁ダイレクトルート	剣岳源治郎尾根I峰平蔵谷側フェース下部～上部黒部丸山東壁緑ルート	甲斐駒ガ岳赤石沢奥壁左ルンゼ		
	標準	一ノ倉沢衝立岩正面壁A字ハングルート一ノ倉沢烏帽子沢奥壁ダイレクトルート	前穂高岳屏風岩東壁ルンゼルート	黒部丸山南東壁塚田ルート〃奥鐘山西壁紫岳会ノーマルルート			
	上		前穂高岳下又白谷菱形岩壁（ピトン89本使用して）	黒部奥鐘山西壁紫岳会直上ルート			
VI級	下			黒部奥鐘山西壁正面岡山クライマースクラブルート			
	標準						
	上						
VI級を超える概念		←	←	←	←		

このような風潮とともに、各ピッチの内容の検証がより厳しくされることは、時間の問題となっているからである。

最後に、今回の改訂によりグレーディングした一四七ルートの内から、代表的と思われるものを幾つか選んで、それぞれのルートに対する私達のグレード評価を右に表記した。読者諸氏の御批判をあおぎ、さらに完全なものに近付けたいと思う次第である。

大台ヶ原の自然保護について

田村聡明

大台ヶ原自然破壊の始まり

『山岳』第三十年第一号に、笹谷良造氏が「天保五年の大台登山記」と題して、仁井田長群撰の「登大台記」の全文を紹介している。その冒頭に「大台登山の歴史は、たとへ確たる史上の証左はないにしろ、千年の古に遡り得るに反して、僅か数里の距離にある大台ケ原山は、江戸中期に至って二三の地理書にその断片的な記述があるに過ぎない」とあるように、大台ヶ原山が世に知られるようになったのは明治に入ってからのことといえよう。

明治二十八年八月一日に大台ヶ原山に登った白井光太郎氏は『山岳』第二年第二号にくわしい紀行文と略図を寄せている。その中で、松浦武四郎氏の乙酉掌記を引いて、明治三年に西大台の原生林の真直中、高野谷で試みられた京都の寺侍による開拓事業の失敗が述べられている。生態学者好みに言えば、これが人間の手による原生林破壊の最初ということになるが、三町四方の開拓は現代の自然破壊の規模とは比較にならないささやかなものであった。

大正時代に入って、東大台の原生林約二百ヘクタールがパルプ材として濫伐されたが、これが大掛りな伐採の最初である。いま、駐車場から山上周遊路にそってあちこちにみられる切株はこの時の名残りである。しかし当時は、今のような皆伐ではなく択伐であったため、伐り残された木が、伐採を思わせないくらい大きく成長しているが、牛石ヶ原や正木ヶ原にみられるイトザサは、ついに樹林が回復できなかった結果であるとされている。

伐採の始まった大正六年、徳川頼倫氏に随行して登山した遅塚麗水氏は『大台か原登山の記』に濫伐のありさまを悲しみと嘆きをこめて綴っている。今や自然保護は流行語になり、開発側に先取りされてコマーシャルにまでとりあげられるようになったが、自然保護とか公害の文字の一つもでてこない六十年前のこの文章が、今読むわれわれの魂に、新鮮な感動を与えてくれるのはなぜであろう。自然科学的認識は自然認識の一方法であるにも関わらず、そのすべてであるとする今日の生態学主導型の自然保護運動の中で、感性的認識に基いて開発に異義を申し立てる登山者の自然保護の原点がこの文章には結晶されており、その精神性の香気がわれわれに感動を与えてくれるのではないだろうか。少し長いが引用をお許しいただきたい。

「(略) 斯くばかり蒼古昿閑なる境域を破壊し去らんとするもの現はれたるは悲むべく又た嘆ずべし、伯母が峯より続く当面の辻堂山、橡が谷、北山川の峡谷に傍へる西原一帯の原始林は、今より十数年前に、四日市製紙株式会社の買収するところとなりしが、欧洲大戦の影響によりて紙価の騰貴したるを奇貨居くべしとして遽かに斧斤を此の山に入れ製紙原料として今や盛んに濫伐しつつあり、曽っては頽嵐峭緑、美しかりし古林の峯は頓みに童禿の山となりて、無数の切株の参差として碑碣のごとくと立てるさまは、さながらの大墓田を見る心地して満目荒寥たり、実に此の山の懐より、吉野川熊野川宮川の水は湧いて、和紀勢三州の土を潤す、斯くてあらばいかで其の源を涵養し得べきぞ、山に代へたる其の価は十四万五千円とぞ聞く、三県の有志、保安林に録せらるべく政府に訴願しつつあれど、其の裁決の下らん日までに、製紙会社は数百人の工夫を督して慌だしくも木を伐り倒しつつあるなり、一行の秀が岳に

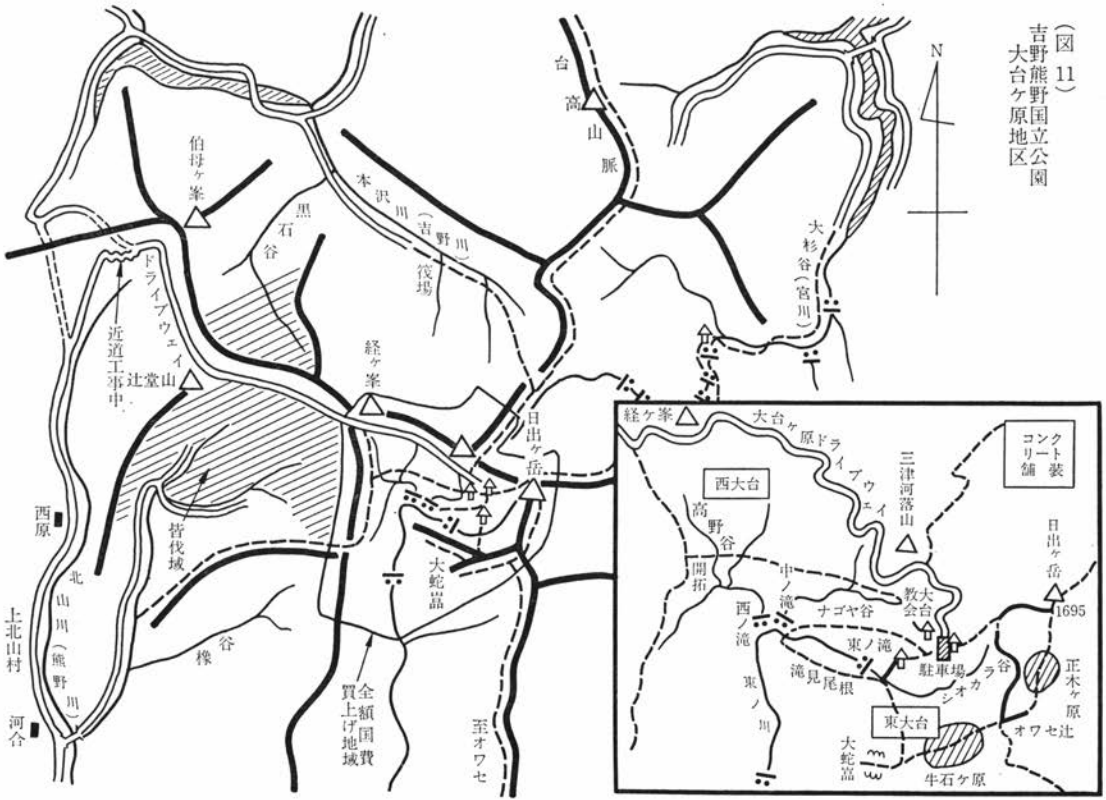
響ふ途中、伐られたる巨木の僵るる響の遥雷の度るがごときを聞く、其の声山谷に谺して物凄く、古林の木精声を合せて慟哭するものに似たるなり、僵木の声を聞くごとに、古川道場主は鉄枴のさましたる例の杖を掲げて、あれあれ又た悪魔が木を倒すよと叫ぶなり、一行惆悵として低回去るに忍びず、白井博士（筆者註、白井光太郎氏）将に亡びんとするの山を悲しみて、国風を作る。（国風略）」

普通地域の皆伐

昭和八年、わが国でも国立公園制度が発足し、十一年には大台ヶ原を含む吉野熊野国立公園が指定され、十五年には大台ヶ原の山上台地と渓谷が特別地域に指定された。

第二次大戦に突入したわが国では、国策資源として至るところの山で森林が伐られた。そして国は敗れたが、幸いにも大台ヶ原の山河は残った。当然国民的遺産として子孫に伝えられるべきであった。ところが、森林のもつ治水、景観、学術上の意味を無視した経済優先の思想が、広葉樹をパルプ材として利用する技術、搬出技術、人工造林技術、道路建設技術を駆使して、大台ヶ原の自然に潰滅的な破壊を加えることになった。

昭和三十三年、ブナの原生林をなぎ倒して奈良県営のドライブウェイ工事が始められた。ブルトーザーで山腹をそぎ落しただけの工事は日本三大悪路の一つといわれ、特別地域の中にまで食込んで行った。日本一の多雨地帯のため、山肌に爪跡を印す土砂の崩落は建設後二十年たった現在もまだ続いている。そして、このような林道建設による直接的破壊以上に悲しいことが、昭和三十六年、十六・三キロの道路完成によって生じた。それはこの道路を利用した周辺普通地域の皆伐であった。数年のうちに原生林は保山帯も残さず丸裸にされ、谷は埋められて水を失った。伐採の跡には火が放たれ、焼土の上にスギの苗が植えられたが、雨の度に土は流れ、高冷地のためもあって生育は思わしくない。よしんば成林したとしてもそれは針葉樹の人工林であって、失われた自然林はもはや永久にもどらない。



（図11）吉野熊野国立公園大台ヶ原地区

昭和五十二年六月に行われた日本山岳会自然保護委員会の現地視察会の一行は、その惨状に息をのみ、何一つ策の見出せない絶望的な見通しに時のたつのを忘れて立ちすくんだ。後で述べるように、この皆伐地帯に隣接する特別地域のブナ林は、その後国に買上げられたが「周辺がこの惨状では、ブナ林が残ったからそれでよいとはいえない。今後の民有地の買上げについても考え直さなければならない」と語る村井米子氏の表情は暗かった。そしてその夜、自然保護委員会大台ヶ原集会の決議として「その破壊の実態は想像をはるかに超えるものがあった」と、織内信彦氏起草になるメッセージが報道陣に発表された。

特別地域の国費買上げ

普通地域をなぎ倒した皆伐の波が特別地域の境にまで及んだ昭和四十年、そこにブナ林を所有する本州製紙が伐採許可を申請したことがきっかけで、ブナの原生林を守ろう、の運動がおこった。一方、本州製紙も国費買上げを環境庁にはたらきかけた。そして、多くの紆余曲折を経た後、四十七年に地方交付公債による国立公園内の民有地買上げ制度が発足し、先のブナ林を含む山上一帯の特別地域千六十九ヘクタールの全額国費買上げが決定した。国立公園行政のネックといわれる私権の問題を解決する方法として期待されている民有地買上げ制度は、大台ヶ原がきっかけになって生れたといえる。全額国費買上げの対象になったのは今のところ大台ヶ原だけである。

買上げを自然保護運動の成果だという人もある。しかし、私事にわたって恐縮であるが、学問的に貴重だからとブナ林買上げに没頭している間に、周辺の「普通」の森林がすっかり皆伐されてしまった現実をみるとき、果してこれで良かったのだろうか、という疑問につきまとわれて心が晴れない。又、運動に共に関わってきた植物学者が、ブナ林を学術的に保護するために登山者を立入禁止にせよ、と説くのをきくとき、守ろうとしてきたブナ林から、登山者であるが故に追われようとしている我が身をふりかえり、自分がしてきたことは学者エゴを満足させるだけのもので

しかなかったのか、と自虐の想にかられるのが情無い。

自然保護運動の立場

今、自然保護運動は変らなければならないときにきている。それは科学至上主義、その結果としての貴重地域主義からの脱却であり、科学を超えた精神運動としての再興であろう。

『山岳』第六十九年に、渡辺公平氏が「日本山岳会と自然保護」と題して、半世紀をつらぬく日本山岳会の先人たちの強烈な情熱と使命感に支えられた自然保護の歴史を詳述されている。思うに、先人たちを使命感にかりたてたものは、生態学者風の科学技術をもって自然を保護しようという発想ではなかったであろう。自らの精神世界としての自然を、破壊から守るための異義申し立てであったといえよう。登山者にとって自然は感性的精神的存在である。その自然を破壊から守ろうとする行為は、必然的に精神運動、文化運動にならざるをえない。

生態学者は科学的データのない運動を冷笑する。しかし、渡辺公平氏の一文に紹介されている、小島烏水、武田久吉、松方三郎氏をはじめ、会の先人たちの格調高い文章の中に、科学的データはあるのであろうか。科学的データとやらが、今や開発の尖兵をつとめるようになってきたのが現実である。

歩道のコンクリート舗装

ともあれ、今までに約三十五億円の巨費を投じて、ほぼ八割の買収を終った買上げ地域は、今後十年間は県有地であるが、その後は環境庁が初めて自ら土地を所有する国立自然公園地域として生れかわることになり、国立公園行政のモデルケースになるであろう。環境庁でも尾瀬、上高地の次に位する重要な地域であるとしている。

その大台ヶ原で、今、何が行われているか。

奈良県は半額国費補助を得て、五十年度から山上一帯の歩道のコンクリート舗装を始めている。駐車場を中心として放射状に、尾鷲辻、日出ヶ岳、シオカラ谷に至る観光客が最も多く利用する道を、コケを削り木の根を伐り、岩を砕いて道幅を拡げ、切り石を積んで階段を造り、路肩の土が見えないまでにセメントで塗り固めた、周囲の自然景観に全くそぐわない異様な歩道にかえられた。

牛石ヶ原にあるような自然石を敷き並べただけの歩道であれば、隙間には草が生え、トカゲが隠れたりできる。野面積みの石垣であればシジュウカラやオオルリが巣をかけることもできるが、目地をセメントで塗り固めてしまったのでは、道も石垣も死んでしまう。

大台教会（山小屋）に泊る登山者の九割がこの舗装に反対している。その理由は、土のソフトな感触が失われて非常に歩きにくい、自然を求めてやってきたのにこれでは全く興醒めだ、というのが大方の意見である。登山者が山に求めるのは原始へのノスタルジーであり、それは生物としての人間の根源的な欲求でもあろう。日本山岳会自然保護委員会の現地視察会の途中、いくら母親が注意してもコンクリート舗装を嫌って路肩の土の上を歩いていた三、四才の子供に出会った。自然が人間に与えてくれるこのすばらしい感性の喜びを、人工化された日々の生活の中で忘れてしまった現代人の技術信仰が、この悲劇的でも、喜劇的でもあるコンクリート舗装を生んだのであろう。

環境庁編になる五十年、五十一年版の環境白書によると「自然公園の利用の促進に役立つとともに過密利用の解消に役立つ歩道、園地、野営場及び駐車場」の施設整備を行ったとある。大台ヶ原における歩道の拡幅と舗装がこの方針に基いて行われたとすれば話は全く逆であろう。

何故歩道の舗装がされたか

そこで、歩道の舗装という施設整備という名で行われた自然破壊について考えてみたい。

この山は年間四千ミリ以上の大雨が降り、その侵蝕作用を受けて歩道は荒れる。それを毎年補修する費用は県が負担しなければならないが、今度のような環境庁長官の承認を得た公園事業ということになると、半額国費の補助がつく。しかも、コンクリートで固めておけば、少なくとも五、六年は補修の手をまぬがれると関係者の一人が語った。

尾瀬では、木道のかわりに軽量コンクリート板やアルミ板など、いろいろ試みた結果、やはり木道が一番良いということで、年間四千万円（半額国費補助）をかけて木道が維持されているときく。大台ヶ原に於て、このような研究がなされたとはきかない。

奈良県は、この工事のひどいのは業者の上手下手に原因があるという。しかし、奈良公園をはじめとして歴史的な公園管理の実積をもつ県が、都市公園管理の感覚と技術をもって、千五百米の高みにある自然公園の整備を行ったとすれば、責を業者の優劣に帰すべきではなく、問われるべきは行政の自然認識であろう。自然を満足に知り得ていない自然科学や土木技術をもって、意のままに自然に手を加える思い上りを捨てて、出来るだけ自然をそのままに保全していくことが望ましい整備であろう。

又、自己中心的世相の反映か、酔っぱらって海に落ちても道路管理者の責任が問われる昨今では、行政側にすれば、その様な場合に備えて普段から整備管理に瑕疵のないように完璧を期したいということになるのであろう。そこで、無制限に観光客を山に運び上げた以上、事故防止のために歩道を拡幅、舗装し、西大台の小さな流れに鉄とセメントで必要のない大きな橋を架け、どこにでもある普通の山道にすぎない滝見尾根を「危険立入禁止」にして責任のがれをする。大蛇嵓の岩頭が太い鉄柱と鎖で囲まれている異様な風景、そしてその手前に立つ、これから先は装備不充分な者は行くなという制札は、元来そこに来るべきでない人々を安易に運び入れた行政の自己矛盾のあらわれだといえよう。制札よりは、自然がいかに危険に満ちた存在であるかを知らない観光客を安易に自然の中に運び込むことをまず止めるべきであろう。国家賠償法によって自動車道路の穴ぼこと原生的自然の中の山道を同じ次元で論ずるこ

とは、登山者の感覚からすればナンセンスである。厳しい自然の中での事故は、登山者にとっては自責行為である。

ドライブウェイと環境整備

大台ヶ原はすでにオーバーユースの状態にある。年間利用者は十六万人をこえた。その中で汗をしぼって歩いて登ってくる登山者は一割以下で、ほとんどはドライブウェイを車でやってくる。最盛期には三百台収容の駐車場に八百台から一千台の車が入りこみ、あふれた車はドライブウェイの両側に数キロにわたって並ぶ。昨年のピークには一千百台の車が押しかけ超過密状態になった。駐車場を利用できない日が年間四十日あるが、シーズンの短いこの山ではこの数字は小さい数ではない。車がこの様な状態であるため、宿泊の方も三軒の山小屋で、合計六百二十人の定員のところに、最盛期には二千人が宿泊する。

環境庁もこの現実をふまえて、五十一年度に尾瀬、上高地、大雪山と共に、この山に於て入山者の利用状況調査を行った。岳人三四二号はこの調査を「国立公園の入山制限を検討」と報じた。ところが奈良県は二十万人を目標に更に観光客を呼ぶつもりでいる。自然保護のない数少い県として、観光課が自然公園管理を主管する観光立県奈良県の、これが限界なのであろうか。大台ヶ原で、今行政がなさねばならないことは「利用の促進」や「過密利用の解消のための歩道の拡幅と舗装」ではなくて、本来徒歩探勝にふさわしい山上にまで車で簡単にやって来る観光客の入山制限こそ急務であろう。

環境白書の四十九年版には「自然公園の利用上不可欠な施設である歩道（探勝歩道、登山歩道）園地及び野営場の整備」を行ったとある。それが翌年になると、先程述べたように「利用を促進しつつ過密利用の解消に役立つ歩道」に変化し、更にそのための駐車場が新しく追加された。上高地などで自動車の利用規制を行い、大きな成果を上げている環境庁が、何故このような矛盾、逆行した方針を出すのか理解に苦しむところである。

一方、総理府の観光白書、五十一年版では「これまで、自然公園等の風景地においては、利用者の増大に対応し、これを積極的に受入れる方向で道路その他の関連施設の整備が進められた。（略）このような利用関連施設の整備は、更にそれを上回る多くの利用者を誘引し、これがまた、道路、宿舎その他の利用施設の建設を促進させ、自然破壊につながっていく例も少なくなかったといえよう」として、利用の分散を新しい方向として出している。これでは逆に環境庁の存在意義が問われるというものである。

登山者の立場からの大台ヶ原

奈良県は大台ヶ原山を老若男女誰でもが利用できる場所にしておきたいという。しかし、千六百米の隆起準平原は深い樹海に包まれ、その周囲を数百米の崖がとりかこみ、溯行に二、三日かかる滝の連続した谷が何本もくいこむ大きな山岳であり、想像を絶する大雨が降る。舗装された歩道を街靴で歩く観光客のすぐ近くで、毎年遭難がおきている。このような危険に満ちた自然が、県の考える都市公園的な場所として、果してふさわしいのであろうか。きびしい自然に接するには、当然それなりの条件が要求されるであろう。

自動車やケーブルで簡単に頂に達し得る山は、京阪神の近くにすでに六甲、比良、生駒、金剛、葛城などがある。大台ヶ原を、荷を肩に額に汗して登る山として復権させたい願いは今ではすでに遅すぎた願いであろうか。

ところで、今、荷を肩に、と書いたが、奈良県は山上一帯でのキャンプを全面禁止している。その禁止措置の理由、法的根拠は一切公示、広報されていない。そのため、登山者は何も知らずにテントや食料を持って登って来るが、監視所でキャンプ地を尋ねた者は禁止を言い渡され、一方勝手にキャンプした者は黙認されて、ひどい時は三十張り近いテントが監視所の目と鼻のところに張られている。このような曖昧な態度の県は、五十年の三重国体の際、苔深いナゴヤ谷で二百人のキャンプを許可して、その矛盾した行政の姿勢を地元紙に指摘された。

この山は、もともと二、三日の幕営を必要とする不便な山であった。そして、登山者のささやかな幕営で「破壊」される程、大台ヶ原の自然はちゃちではなかった。ところが、県営ドライブウェイができ、車が観光客が殺到するようになるに及んで、いつしかキャンパーは「自然破壊者」の汚名をきせられ排斥されるようになった。自然科学系の教師もそれを支持した。奈良県は五十二年度の方針として「今年もキャンプは認めない。唯、キャンプ道具を持って来る者が後をたたないので、キャンパー収容地といったものを考えている」ことを明らかにした。何故、キャンプ指定地でなくて「キャンパー収容地」なのか。収容地という言葉のもつ異和感に不快なものを感じるのは私だけであろうか。

幕営が植生に負の影響を与えることは事実である。だからこそ、植生に影響を与えない場所に指定地をきめ、正しい指導、管理を行うことによって、無法キャンプによる植生破壊を防ぐことが出来るのではないか。自然公園を自然と人間の具体的な交流の場と考えるとき、テントに眠り、自然を肌で感じ、自然への愛と畏れを知ることが自然との対話を可能にするであろう。そのためのかけがえのない場所として、国立自然公園はその存在意義があるのではないだろうか。環境庁は大台ヶ原の集団施設地区に野営地がないのはおかしい、と県に再三申し入れているが、県はかたくなな態度を改めようとはしない。

大台ヶ原自然破壊の根本原因

行政と近視眼的な教師は「ゴミを捨てるな」「キャンプをするな」ということがあたかも自然保護であるかの如く、問題を個人のモラルに矮小化するが、大台ヶ原の自然破壊の根本原因は奈良県自身が作ったドライブウェイにあることは誰の目にも明らかであろう。

日本山岳会自然保護委員会に同行取材したＮＨＫテレビの小宅カメラマンは、コメンターとして放映に出演して、

「基本的には、美しい自然を破壊してまで車を使って簡単に山に入ることが必要かどうか、大変疑問に思った」と語った。大台ヶ原の自然保護の問題は、集約すれば、このドライブウェイの問題に帰結するのである。

県営ドライブウェイが開通し、舗装が完成すると同時に、観光公害と称される二次破壊が急激に増加した。排気ガス、騒音による自然環境への悪影響は勿論、組織的な盗木、密猟は後をたたない。路肩に車をとめたカーキャンパーが、焚火の炎を上げているのに出合うのはそう珍らしいことではない。ゴミは、人目につくところはアルバイトによって回収されているが、人目につかない所にはものすごい量のゴミが捨てられている。宿泊施設のし尿は浄化槽を素通りして生のまま清流に捨てられ、残飯、塵芥の腐った汁が谷を汚染している。このままでは、上高地の様に、渓谷の水が飲めなくなる日はそう遠いことではない。

日本山岳会自然保護委員会の一行が大台ヶ原山に着いた日、そこでは直径三十センチ程のトウヒが何本も伐り倒されて、地元上北山村直営の売店新設工事が始められていた。大台教会の田垣内政一氏は「日本山岳会の人達が下山するまで、工事を待ってくれたらよいのにと願っていたのに……」と絶句していた。又、ドライブウェイの途中では、同じ村から大台山上に至る近道工事の土砂が、ダンプで運ばれてきて、ようやく回復しかけた植生の上に無雑作に捨てられていた。

県営ドライブウェイは、道路整備特別措置法によってつくられたもので、総工費の全額国費償還後は無料化することが義務づけられている。現在年間三万台の車が利用しており、このままのペースで返済が進めば、五十六年度からは道路が無料化されるのは必至といわれている。そうなれば車が更に押しかけてくるのも又必至であり、県は償還期限をのばすか、料金を上げるか検討しているところであるが、それでは、問題の本質的な解決は望めない。

この道路は、基本的には廃止するのが最適であるが、それがもし不可能であるとすれば、少なくとも、マイカー乗入れは禁止して、公園専用バスと公園管理に必要な車の使用に限定すべきであろう。

自然保護運動の方法

当時の与論の支持を得て、巨額の国費をもって買収された国民的遺産である大台ヶ原の自然が、もし誰かを富ましむる観光資源でしかなかったとなれば、環境庁と、手弁当で自然保護運動に奔走した市民達は一体何をしたのかが改めて問い直されることになるであろう。ひょっとすれば、今がその時かもしれない。

先の渡辺公平氏の一文によれば、四十年前、武田久吉氏は『会報』五十号で「国民的風致区域を、一種の事業のために犠牲に供する」のが「日夜金銭上の利益のみを追うに汲々として、他を顧ることなどを知らない事業家側のみでなく、国家擁護を主眼として国利民福を計る可き立場にある官憲の間にさえ、是認されんとするは、寔に慨嘆す可きことでなくて何であろう」と喝破されている。

大台ヶ原にドライブウェイをつけたのは奈良県である。その開通と同時に、奈良県（三）、近鉄（三）、本州製紙（四）の共同出資による観光会社が設立され、山上に宿泊施設を建て、既設の山小屋も吸収して経営している。その会社の社長は奈良県副知事がつとめている。

生態学を手足に使った企業、行政の二人三脚に体して、登山者の心情的異義申し立ての道は困難を極めた道である。しかし登山がそうである如く、問題は結果ではない。登頂を目指して、如何に全力を尽してその困難にぶつかったかに意味があるのではないか。異義申し立てである限り、当然拒絶されることが多い。しかし、登頂出来なかったことが敗北でない如く、それは私の魂の敗北ではない。登山者は、唯、ねばり強く、登り続ける以外にない。

（筆者註）『山』三八二号（昭和五十二年四月）に、自然保護情報「これでいいのか？　矛盾した自然保護行政―奈良県大台ヶ原の場合―」と題して本稿と関連した記事を発表した。

《座談会》

日本山岳会の戦後三十年

―ルーム再建からエベレスト登山まで―

一九七六年（昭和五十一年）三月十四日（日）午後二時から約三時間
於　JAC ルーム

〔出席者〕望月達夫
折井健一
浜野正男
山崎安治
金坂一郎
松田雄一
司会　近藤信行

ルーム再建

司会　日本山岳会も七十周年を経たということで企画したのですが、JACの戦後三十年というお話を会の実務の運営に尽力されて来た先輩たちにお願いしたいと存じます。それでは最初にルームの焼失あたりから……。

望月　二十年の五月二十五日に虎の門のルームが焼失。その時のことを知っているのは、ここには誰もいないね。

山崎　わたしはそのころ東京でうろうろしていた。焼けてすぐ焼跡に行ってみて、おやおやと思ったことがありますよ。

浜野　わたしも見た。その時兵隊で東京にいたから。

山崎　かなり木暮さんの本がいっぱいで、それが最後までく

すぶっていた、という話ですよ。いちばん最初に皆が集まったのは、どういう契機で集まったのですか。

望月　それはここに書いてあるんだ、会報一三三号にね。「二十年六月、小島烏水方で役員総会、また十二月にも役員総会を開く」と書いてあるわけだ。「二十一年二月に、松方氏方で常務役員会を持った。」とも書いてある。

浜野　わたしは二十年の九月に帰ったんだから、当時いたわけだ。それでいちばん初めにスカウトされたわけだよ。どうせ君は若いんだから暇だろうというんで……(笑)。わたしを引張ったのは入沢文明、山下一夫。その人たちは体協と関係があったんだ。山登りという部門も、体協の中に多少残しておかなきゃいけないといわれたんだね。それで新しく体協の中で山の部門をやるということになって、ヒラ役員にさせられてしまった。

望月　理事だよ、皆。

浜野　それが体協の中に机が一つあって、塚本繁松さんが主事というのかな……。

望月　主事だ。

浜野　そこに常駐することになった。

望月　その頃にたとえば、関根吉郎君とか、垣内正彦君とか、堀田弥一さんなどがぼつぼつ帰って来たんだよ。

浜野　ぼつぼつだけれどもね。いちばん初めに捕ったのは関根とわたしかな。拉致されたわけですよ。理事会なんていうのは、その頃は部屋も、お金も、食うものもないでしょう、だからその時、国鉄の秘書をやっていた兼松学さんの世話で総裁の部屋や理事の部屋なんかで夜やったんだ。裏からそっと入っていってね。で、やると、あの人が池袋からウィスキーを持って来て飲ましてくれるんだ。それを出さないと、槙さんなんか出てこないんだ。

山崎　それにつられて出て行ったんですね(笑)。

望月　槙さんとか藤島(敏)さん、それに武田久吉さんも引っ張り出されていたでしょう。そういうほんとうの、今でいえば長老がお家の大事で皆かけつけたんだと思うなあ。体協に加盟したのはぼくのいないときだけれども、君なんかよく知っているだろう、戦後すぐかな。

浜野　わりに早かったね。おそらく二十一年の早くじゃないですか。

望月　まあ、それが再建に多少からんでいたと思うんだ。

山崎　松方さんなんかがかなり……。

浜野　いや、松方さんは山岳会の会長だった。

望月　臨時に会長みたいになっちゃったんだろう。

浜野　それで松方さんが登山協会の会長も兼ねていたんです。

望月　それは、木暮さんが亡くなって、槙さんが会長になっ

たが戦災をうけて東京から離れた、そこへ戦後が来たもんだから、松方さんを会長にしちゃったんだ。誰か適当な人が出来るまでやろうということで。

浜野　その時、槙さんはまだ大町にいたんじゃないか。

望月　ぼくは、思い出すと二十二年十二月の二十いく日に復員したんです。それで、家へ帰ってすぐ、山岳会へ行ったら焼けちゃったというんですね。岸体育会館の一室に机があると誰かから聞いたんで、そこへ行ってみたら確かにちっちゃな机があって、そこが日本山岳会の事務室というか、事務室ともいえないんだな……ともかくモトがここしかない。そこに大学ノートがぶら下げてあって、いろんな連絡が書いてある。ぼくが行った時誰も居なくて、それをこう、しげしげと見た。見ると関根吉郎とか谷口現吉、それからこの浜野君とか垣内君、今村正二君、藍田務君。そういう名前は学生時代からよく知っていたけれども、そういうのが引っ張り出されていて、昔は寄りつきもしなかったようなやつがいるわい、戦争で敗けたけれどこれは良いことになったな、というような感情を持って、ぼくも何か書いて家へ帰った。後世、松方さんに、お前は復員して家へ帰る前に、山岳会へ行ったそうじゃないか、といわれるような伝説ができちゃったわけです（笑）。

二十三年からぼくもさっそく狩り出されたほうだ。思い出すことは、部屋がないから陽気のいいときは体協の芝生の上に車座になって理事会やったことも何回かある。その頃は、松方さん、田辺主計さん、島田巽さん、とにかくわれわれより十年以上の先輩が役員でしょっちゅう出て来ていた。それから、これではいかんからどうしてもルームを持つという決心をして、それを非常に強く云ったのが小原勝郎君です。それで藤島（敏）さんがそれを引き受けて、金の方はおれが集める、会計の元締めもやろう、ということで、今はなくなったお茶の水のルームを作る建設委員会みたいなものが出来た。あれは非常に皆さん努力してほんとうの浄財でやったんだけれども、たまたま今日来ていないが加藤泰安君が三友建設というのをやっていて、それから小原君の親戚に安藤建設というのがあって、その関係が多少あると思う。

浜野　安藤の関係の人が全部設計してくれた。

望月　それで仕事は泰安君のところでやってもらおうということになった。あれは二十三年に決心をしてから始めて、二十四年の三月十日に竣工したんです。ですからその間がいわゆる放浪時代で、しかし皆意気に燃えて非常に努力した。竣工してすぐ、小島さんの記念展覧会をやったわけです。

浜野　できても本棚がないんだ。それなら本棚をこさえよう……ところがお金がないんだ。それからガラスをどうしよう。ガラスは成瀬岩雄さんが、旭硝子へいって、成蹊のバスケの選手で女子大の学長の息子の井上さんという人が旭硝子に居たん

で、その人に頼んだ。そしてガラスの切符をもらった、ただだったなあ。

望月　君が何か清水建設でやったんじゃないか。

浜野　それは本棚。ただ作れといって作らせたんだ。しかし本がないんだ、飾る本が。やっと寄付してもらって多少詰った。

山崎　資金はどういうふうに……。

望月　ほとんど会員の寄付ですよ。

浜野　約六十八万円かかっている。

望月　土地は体協が無償で貸してくれた。あといる時に返してくれればいいという条件で。

折井　募金の額が一人二百円とか三百円ですからね。

望月　法人からも少しもらっています。

金坂　山日記の印税も入っていた。山日記は二十四万八千五百円です。

会報のこと

浜野　『山』の金も入っていた。この『山』という題は今の会報と同じですが、その会報を出すのに金がない、紙の割り当てももらえない。そこで雑誌を出すということで割り当てをもらい、これを交通公社に持っていって、そこから販売することになった。

望月　入沢さんが非常に骨を折られたんだと思う。紙の配給がないから、会報を二つに分けて、事務的なものは会報にして、随想的なものは雑誌にしようということで分けた。これが五冊まで出た。

『山』の編集には垣内君が非常に骨を折った。編集委員は、今村正二、大洞陽一、垣内正彦、関根吉郎、谷口現吉、浜野正男林和夫。ぼくが帰って来た時にはたしか二、三冊でていて、これを非常にうれしく読んだ記憶があります。

もう一つ、これは皆が知らないんで申し上げておきたいのは戦後の会報のいちばん最初のは、二十一年の四月なんです。

山崎　一三三号。

望月　そう、一三三号。交通公社の『山』が二十二年の九月ですから、これの出る前に、会報というんじゃ紙がもらえなかったので山という名にして、二十一年の四月にはもう出しているんですよ。その時の印刷所を見ますと、新潟市になっている。一三四号(二十一年五月)、一三五号(二十一年六月)もそうだと思う。これはね、塚本繁松さんが苦労したんだね。藤島玄さんが非常に努力をして、塚本さんと連絡をとって新潟で刷ったんです。これはほとんど忘れられているが、たいへんな努力だったとぼくは思う。当時の玄さんの貢献は会としても忘れちゃいけないね。

その次に一三六号(二十一年九月)が出た。それから一三七

号で二つに分れた。

浜野　一三七号が交通公社の『山』の創刊号。そして二号が一三八号になっている。こういう風に一連にしなくてはいけないといわれた。

望月　会報の方も『山』と書いてあるけれど、こっちはまったく事務的なものになったわけです。それでぼくは、会報の一四一号から編集を担当したんだと思う。それが二十三年の五月です。交通公社の『山』は五冊でた。

司会　五冊で終ったのはどういうわけですか。

望月　交通公社で続かなくてね。この最後の号をみると、岡茂雄さんのところでやる、と書いてある。

浜野　岡さんも忙しくなって、どっか持っていくところないかというんで、河出書房に持っていった。それで大きさが変って小さくなった。

望月　A5判になって河出へいったんです。

浜野　それがまただめになって、最後に朋文堂にいった。

望月　朋文堂にいったころには、もう完全に山岳会の編集はくずれちゃって、編集は朋文堂に移った。その時、会報にも日本山岳会の編集でなくなったということを会告しましたよ。その辺を誤まられては困るというので。一方、会報の方はだんだんページ数がふえて、けっこう前のとうりになった。

『山岳』について

望月　それから『山岳』が河出書房に移った時、関根君が非常に努力したと記憶している。河出も大へん乗り気で、河出を発行所にして市販しましょう、というんで、第四三年の戦後第一号が出た。あの表紙の変ったやつです。あれは市販をするためにああいうスタイルにした。店頭に置いても少し目立つようにね。関根君の努力がなければおそらく『山岳』は出せなかった。ところが第一号を出したとたんに河出が左前になった。もう出せないというので、しばらく『山岳』が出せなくて、その次に出したのはたまたま小島さんが亡くなった時の、小島烏水記念号、第四四年の一号だ。それは結局会自身でやらざるを得なかった。一応発売所をくっつけようというんで、岡さんの所へ発売所を持っていったわけです。

あの時分会費はたしか二百円だか三百円くらいだったが、『山岳』代は含められなかった。本がいつでるか分からないから。だから山岳込みでない会費だった。『山岳』の欲しい方はといって別に本代を集めたわけです。ところがそれがなかなか集まらなくて、みな個人が立て替えて第四四年の一号、二号を作った。だから二号には、なるべく本代を払って買ってくれと書いてあるはずです。それで第四五年から会費込みになったんです。河出との関係は、河出の援助はかなりあったけれども、

非常に短期間で終った。だから第四三年は一号で終り、二号というのは出なかったのです。

それからもう一つ、戦前は第三八年の一号で終りましたね。第三八年二号というのは会報に予告や内容もすっかりでています。ところが、それが完成したときには印刷所で焼けてしまった。だから第三八年二号は出ずに終って、戦後第四三年一号を作るときに、号数はどうするかで、いろいろ激論があったんです。ところが、何年何号というのは、おそらく当初に山岳会の設立以来の年数と合わせるためにやったことじゃなかろうかという意見が強くて、ちょうどその年が四三年目だったから四三までとばそう、その代り第四三年一号には、これは三八年一号から続くものだということを明記しろ、ということになったのです。そういうことで、あそこから巻数がとんでおかしいのですが、その時の理事会の決定でそういうことになった。

『山日記』

山崎　ついでに『山日記』にも関連して……。

望月　戦後第一回の『山日記』は二十三年十一月一日発行なんだ。神山勉君が非常な努力をして、日大の山岳部のグループが中心になって全部作り上げたんです。このときに発行所が茗渓堂になっている。当時体協から入ってきた福井正吉さんという会員がいて、体協がお茶の水にあったので、そんな関係から茗渓堂を紹介してくれた。そのキッカケが直ちに『山日記』かどうかもう記憶にないが、当時中心になっていた谷口君はその辺の事情を覚えているかも知れない。とにかく、茗渓堂は引き受けましょうということで、これは当時としてはたいへんな冒険だったと思うんですよ。損を覚悟でやったのが茗渓堂との縁のはじまりで、それからだんだん会報もたのみ『山岳』もたのむというようになった。会報は二十五年の五月からだと思う。『山岳』は二十六年六月発行の第四十五年からです。

松田　最初の『山日記』を出す時、たしかわたしの記憶ですと二十三年の四月ごろ、山小屋調査に歩きましたよ、実際に。奥多摩に行って、真鍋健一さんをたずねてあの辺を調べたり。

金坂　時間もずいぶんかかりました。わたしが入会したのは二十二年九月ですが、その時の入会の言いぐされが、お前、山日記をやっているんだから入会しなきゃいかん。

冬山講習会・海外とのつながり

望月　戦前のJACは出版とか小集会というのは非常に熱を入れたけれども、アクティブな技術研究会とか冬山講習会というのはやったことがなかった。それがまあ、若い登山者層に魅力がないということではなかろうか、というので、質のいい講習会をやろうというのが、再建の当時の連中から起った言葉です。それと合せて関東学生山岳連盟が二十一年ごろ出来た。二

十二年九月号の『山』（交通公社）に谷口君が「関東学生山岳連盟の誕生」というのを書いている。戦後まもなくのころ、そういう動きが非常に強かった。山岳会も、そういう連中が理事ですから実際に講習会をやろうというわけで、二十三年十一月下旬の連休に、当時としては非常に大がかりな冬山講習会を富士山でやったんです。堀田弥一さんを総大将にして、いろいろな班をつくって、ぼくなんかは初級を受け持った記憶がありますよ。イグルーの班ていうのは林和夫君が、北海道出で当時イグルーの一番の専門家だから、あいつを使えというんでね。

山崎　関根さんなんかも講師できた。百瀬舜太郎さんなんかも、受講生でしたよ。海野治良さんとか高橋照さん、皆リーダーでオール・キャストですよ。

望月　それからおもしろかったのは、フリー参加で藤島(敏)さんや神谷(恭)さんなんかが来て、神谷さんは積雪期の富士山に生まれて初めて登ったなんて、そういうこともあった。学習院では舟橋明賢君なんかがよく働いてくれたのを覚えている。

山崎　あの講習会は学生連盟と一緒にやり、連盟の方は、大塚博美君だとか村木潤二郎君が学生を引っ張って来たわけです。

望月　それがきっかけになって、翌二十四年十一月には、富士山で国体をやるようになったんでしょう。

山崎　参加者は一般募集をした。何にも知らない人をね。

望月　だからあれはおそらく、戦後の講習会のハシリでしょう。戦前にはなかったことです。

浜野　その富士山の講習会と前後して、関根君なんかが交通博物館でエベレストの話をした。

松田　そうです。関根さんはあのころエベレストを研究してまして『山岳』にも載りました。

浜野　わたしもその時、ナンダ・コートの話をした。

松田　たしか浜野さんはロティとかツァンパとか、食糧の話なんかされましたね。

浜野　関根君は若い学生、あるいはそれにちょっと毛の生えた卒業生、そういうのを集めた講習会を三日ぐらい続けてやった。

山崎　いろんなテーマでね、装備とか、歴史だとか。

浜野　その時に話したことを覚えているんだが、みんなヒマラヤのことを頭の中に入れておいてくれ、戦争に敗けたが必ず行けるよ、といったんだ。

望月　一九四九年十一月二十一日付で、アメリカ山岳会のオバーリンとアイレスという二人のひとからアルバータの記念ピッケルというのがきた。三田さんあてに手紙が来て、きれいなアルバータのピッケルを再生したものを送ってくれたわけ。それで会としては大へんうれしくて、そのピッケルを囲んで十二月二十六日に会をやった。

折井　そのきっかけがおもしろいんだ。GHQにカーターという人がいて、今の花王石鹸の会長の福島さんが油脂の関係で因縁があって、ドタクー・カーターが日本の模という人に会いたいと云っているとぼくに云われた。それで松方さんのところへつないだわけだが、あれは福島さんとカーターの話から始まったんだ。

望月　ぼくはその時理事をやっていたから、この会をやったことをオバーリンとアイレスに知らせるお礼状を出した。その時、日本山岳会は戦前外国の山岳会との交渉が非常に多かったが、戦後出来なくなって残念だと思っている。アメリカは幸いちゃんとしているはずだから現在わかる外国の山岳会のアドレスを教えてくれと頼んだわけだ。そうしたらアイレスという人は非常に親切な人で、自分はポートランドに住んでいるのに、ニューヨークの会の方にわざわざ手紙を書いて、全部それをぼくのところに知らせてくれたわけです。それで日本山岳会は一九五〇年ごろから『山岳』ができれば、そういうところへ送り始めた。

それからもう一つ、アイレスは、今もいろんな人が利用しているギャストンという本屋のカタログも送ってくれた。それを山岳会へもっていって、島田さんや松方さんに見せたわけです。それであの方たちが後日ギャストンに行ったりした。いろんな形で外国との通信が出来るきっかけとなったのはアイレスだったわけです。また数年後アメリカ山岳会にアメリカン・アルパイン・ジャーナルのバックナンバーを懇請したら随分たくさん送ってくれました。今も残っているのがそれです。

松方邸の集会・ウェストン祭

浜野　毎年正月に霊南坂の松方邸でいっぱいやる会があった。その一回目は関根君と私とで段取りをしたんだ。酒もしょうゆも砂糖もない、それを集めに自転車でとびまわった。そのときに、今の大元老が皆来たんだ。

望月　正月会というのはずいぶん続いたね。

松田　家をとりこわすまで続きましたね。

折井　奥さんが亡くなったときからやめた。

望月　時代がもう戦後じゃないんだから、というのでやめたわけだけれども、実に長く続いた。役員ばかりでなく、グループができちゃった。長谷川伝次郎さんなんか会員じゃないけれどよく来た。当時のお金でたしか五百円とか、出してね。コンロはしいしりんだ。しいしりんに炭をおこしてスキヤキをやった。

山崎　話はもどりますが、カーターに関連してやはり外人で『山』にも書いてあるけれども、クラーク少佐。彼もやはり戦後はじめてわれわれが直接ヒマラヤの話を聞いた人だった。記録を見ると昭和二十三年六月に、明治大学の講堂でやった。日本語のうまいイギリス人で、上高地で知り合って連れてきたと

いうことでしょう。

浜野　ウェストン祭に来たんだ。ウェストンのレリーフの初代は虎の門で焼けてしまったんだが、それを佐藤久一朗さんがなおして来た。じゃあ、これを上高地へはめ込もう、と思ったけれど金はないし、はめ込む人もいない。たまたまわたしの会社の者が現場にいたから、ただで荷造りして車で持っていってはめてやるというんでやったんです。その時にクラーク少佐が来たわけです。

ウェストン祭は、ウェストンのレリーフをはめて、二十二年の六月十四日、それからもう二十数回になる。だが、今のウェストンのレリーフは違うんです。その頃のは四角いものだった。

松田　それはいつごろ替えたんですか。

山崎　四十年の六月に旧作に替えて取り付けられた。

松田　その時丸い方のを佐藤さんがたしか会に持って来られた。

国体・晩餐会・名誉会員

司会　日本山岳会と国体の関係はどうでしたか。

松田　国体登山は昭和二十二年秋、石川県で開催の第二回国民体育大会に、日本登山協会と合体して参加したのが、日本山岳会としては最初の記録でした。

山崎　その時は浜野さんと松方さんが行った。

松田　記録によると、第一回の昭和二十一年京都の時は、日本山岳会は体育協会に加盟しておらず、日本登山協会が代って参加したが、その時は登山行事はなく、大阪在住の本会会員の世話による講演展覧会があっただけでした。金沢での第二回大会には、日本山岳会から松方三郎、浜野正男が指導者として加わった、と記録にあります。それから、昭和二十三年の第三回福岡県国体には、日本山岳会として一本になって加わった。この久住山で行なわれたときから、日本山岳会になりました。

浜野　日本山岳会が体協の中の登山協会と協力して国体の行事をやったり、登山の底辺を広げるという運動に参画したわけだ。日本山岳会は体協の中にいて予算ももらっているんだから、もっとしっかりやってくれという意見もあって悩みが多かった。

松田　体協の指導をせよということです。それで日本山岳会も戦前のようなクラブでなく、誰でも入れるオープンな組織でなければいかんということで、昭和二十三、四年のころ、入会申込書を各支部にあずけて会員をどんどん集めた。だからあの当時の会員番号は必ずしも入会年月順に一致していない。

山崎　そのころの入会者は、番号と名前がずらっと並んでいるだけで、紹介者もぜんぜんわからない。

松田　そうですね。これではいけないというので、それから

そろえていったんですね。

浜野　塚本さんが亡くなってから、福井正吉さんが事務局をやったことがあった。体協の事務局と山岳会の事務局を兼ねて。

松田　それで、原全教さんが主事になってルームが出来たころから、事務が一応動くようになって来た。その原さんが主事になる前にちょっとブランクがあった。

山崎　年次晩餐会は、どういう風に復活してきたんですか。

望月　ぼくの調べによりますと、昭和二十六年十一月三十日にＹＭＣＡでやっている。

山崎　正式な晩餐会としては最初ですか。

望月　おそらく年次晩餐会という名前が付けられた最初だろう。その前の年の二十五年十一月二十四日には名誉会員を戦後はじめて推薦した。名誉会員招待晩餐会ということで、藤島、神谷、成瀬の三氏が世話人で、ＹＭＣＡでやった。その時、三枝、鳥山、加賀、中村、田部、近藤、槙の皆さんを名誉会員に推薦した、戦後初めてね。二十六年のときには、出席の会員はほぼ六十名くらいです。

山崎　名誉会員を推薦しようというのは、どういう経緯からですか。

望月　二十五年の十一月に藤島さんから、そろそろ名誉会員というものを出したらどうかという話があって、それで決まったんですが、その後はまたとぎれてしまった。推薦に関する規定も何もないから。

松田　それで昭和四十年の六十周年のとき、名誉会員を推薦しようという話がでて、内規がなければおかしいんじゃないかということで、望月さんにお願いして細則を作ったんです。

支　部

松田　支部についてですが、東京支部の場合、四十二年に発展的に解消するまでの事情は少し話しておきたい。とくにお茶の水時代なんか、ずいぶん支部が活動しています。

山崎　支部報も出したしね。あれは五十号で終ってしまった。

望月　集会なんか全部東京支部が担当したわけです。

折井　東京支部の十五周年の会をもったこともある。

松田　二十周年までやりましたよ。そのころの大きな問題として、日山協の一本化ということがあった。それまで、二本の柱を解消するということが問題となっていて、昭和四十年の九月に会報で、各支部は県岳連に入って下さいと通知して、非常に物議をかもしたんです。「日山協の新しい考え方について」という題で松方さんがみずから書いているんです。そこで二本の柱を一本化し、日本山岳会の各支部もみなそれぞれ各都道府県の岳連に入って名実ともに一本化しようという構想を打ち出

してですね。それで次の年の春の総会で、そういう形で日山協が名実ともに新日山協になったわけです。その時はまだ武田さんが会長だったんですが、そのあとで法人化を始めまして、二年後の四十三年五月二十五日に社団法人になったわけです。その時は槙さんが会長をやっていた。四十一年の二月に東京支部は日本山岳会の各支部の加盟申込書をとっておいて、都岳連に加盟した。一年たった四十二年春には東京支部を解散して、今度は日本山岳会そのものが東京都岳連に加盟したんです。

当時東京支部と都岳連とはうまくいっていなかった。しかし、東京支部はもともとクラブの一ローカル・セクションなわけで、外国の場合でも本部のある場所に支部はない。そういうわけで、むしろ本部自体に集会委員会とか婦人懇談会があればそういう機能は果せるんではないかということで、東京支部を解消して日本山岳会そのものが東京都岳連に入ったわけです。東京支部としてはつぶされたというような反発もあったように記憶しています。その後遺症みたいなものはやはり残っているかも知れませんが、そういう経過をたどって都岳連の方はすっきりしたわけです。

マナスル遠征まで

司会　ここらでマナスル遠征までの経緯についてふれて下さい。

望月　西堀栄三郎さんがネパールへ行ったのは、二十六年の秋でしょう。

松田　そうです。

望月　西堀さんが帰って来て、京都の方で登山の話が起ったが、東京の連中はわりあい知らなかった。松方さんは京都と非常に関係深かったから、すでに京都といろいろ話をしていたんだろうと、ぼくは想像しますね。ぼくは今でもよく覚えているけれども、お茶の水のルームで中二階を増設しましたね。あの中二階に集まっていたときに、理事会とかでなくて土曜会みたいな集りで役員もずいぶんいたけれども、その時に日本から登山隊が出るということも考えて、ということを松方さんは非常に暗示的に説明したことがありました。それは思い起せば二十七年の正月のことだと思う。その直後に、京都で考えてることを日本山岳会に移譲するという話が起った。おそらく京都では大反対があったろうと思う。だけれども、京都の上のほうと松方さんとの話し合いで、理事会に持って来たんですよ。それで、会は全面的にそれを受けた。それが四月ごろだと思う。とにかく秋にはポスト・モンスーンに今西錦司さんの偵察隊を出すというのでね、ものすごく準備を急いだ記憶がある。事務局は加藤泰安君がやってた。彼はその時分失職していたんだ(笑)。

その話を槙さんはすぐに毎日に持っていかれた。毎日に今は亡くなられたけれど森正蔵という人がいた。ぼくは槙さんに呼

ばれて、君は金の方を全部やってくれ、と云われたが、やってくれといっても、何とも雲をつかむような話でわからない。この話は毎日でもまだ正式な話になっていないから、毎日へ行ってもほかの人にしゃべってはいかん、森正蔵という人のところにだけいけ、というんだ。で、槙さんに、金はどうするんですか、いや、森さんのところにいけ(笑)。しょうがないから、おそるおそる、とにかく森さんという人のところへ行ったら、やっぱり役員で編集局長かなんかだったですかね。槙さんの使いで来て、この九月には偵察隊が出ますから、しかるべくお金をいただきたいと言ったら、ハイ、といってメモをちょこちょこ書いて給仕に渡した。しばらく待っていたら百万円という小切手をポンとくれた。それからぼくは、まあたまたま銀行にいたから、口座をつくって経理をちゃんとして、そこから全部支出してはいちいち槙さんに報告をして、一方では金も集めたと思いますが、そんなものじゃとても出来ないから、何回か森さんのところへもらいに行った。そのうちに毎日が正式に後援を決定してから、新聞に出た。こんなようなことで、初めは非常にシークレットなやり方でした。槙さんは非常に努力されたんだと思います。初めから。

偵察隊はやはり松方さんの考えで、京都から持って来たこともあって京都の連中を立てようということだった。今西さんが隊長で、高木正孝、田口二郎という氷河の経験者を入れ、毎日から竹節作太さんが参加、それに中尾佐助、林一彦の二君が京都から行った。

浜野　偵察隊は何年に出たの。

松田　二十七年ですね。

望月　田口二郎さんが、いろんな航空写真などを持って先に帰って来て、ああだ、こうだといって、翌年にとにかく外国に取られない前に行けというわけで、三田さんを隊長に第一次隊を出した。その備準委員会の事務局長みたいになって加藤泰安君が現われて来たんです。

折井　二十七年にヒマラヤ委員会というのが出来たろう。京都から引き受けて、やることについての委員会でしたね。

望月　それはえらい人ばかり集まったんだ。あとから早川種三さんなんかも入ってね。ぼくらの年代の連中はその下部機構で、準備委員会か実行委員会か、そんなものだった。

松田　ヒマラヤ委員会は、最初は槙さんが委員長で、松方、木原、日高、藤島、三田、今西、西堀、堀田、伊集院。そして、辰沼さんのところに事務局が置かれたんですね。

望月　会の仕事が混同するというか、会員に迷惑をかけてはいけないというんで、辰沼君のところで世話になって、あそこでずーっと泰安君が事務局長でやったわけです。おもしろいことには、泰安君は初め第一次隊のメンバーじゃなかったが、メンバーが決定しかかった段階で突然メンバーになった。そのい

きさつはくわしく知らないけれど、一部の連中は非常にけしからんといってむくれたことがある(笑)。そのこともあってわれわれ準備委員は松方さんによばれて、どこかでたいへんごちそうになったことがある(笑)。ぼくは今日、日記をもって来たから、その時の分を読むと、「二十八年一月二十八日、午後松方三郎氏来社」というからぼくの会社に来たわけだ。「隊員中に加藤泰安を加える件につき申し入れあり。小生は異論なきも、JAC理事会のプロセスに関し難問題あるやも知れずと答えた。夜、堀田氏と長いこと電話で話す。泰安のこと。」と書いてある。相当そういういざこざがあった。

そうしてまあとにかく、三田さんの隊が出た。それが二十八年で、二十九年に堀田さんの隊が出た。そのころまでぼくも準備に忙殺されていたが、あの隊の出る時は別に問題はなかったんじゃないかな。

松田　いや、そうでもなかったんでしょう。最初谷口さんが中心になって準備していて、あと堀田さんが乗っかった形になったんで、そういう意味では。いやモメるとか、そういうことではなくて。

望月　それは堀田さんが受けなかったんだ。堀田さんをどうしても出そうということが非常に大へんだった。

松田　なるほど。

望月　それで今でもぼくはよく覚えているのは、二十九年の一月、隊員を最終的に決定する会があって、槙さんも松方さんも出て、それが深更に及んだ。それで決まって、ホッとして家へ帰って、翌日会社へ行ったら、自分は神戸転勤の発令を受けた。そんなわけで覚えているんだが、なんか決定にはかなりいろんな問題があったかも知れない。

松田　装備の準備はどんどん進めていたでしょう。そうすると堀田さんの荷物なんかないわけですよ。それであとで急遽そういうのをそろえた記憶があります。

望月　たとえば着る物なんか、みんな名前をつけたわけで、早く隊員決めてくれなきゃといって、加藤喜一郎なんかガンガン怒るわけなんだ。

金坂　宮下秀樹君がはずされたのに、名前が付いちゃっていたとか……。

松田　そうそう、山崎英雄さんが宮下秀樹という黒のスタンプを押したのを着たんです。

望月　もう準備の段階で想定される者の分をどんどん作ってしまったわけですね。

松田　そうです。最初隊長が決まってメンバーの選考権を隊長がもっているという形でなかったものですから。それで槙さんの三次隊の時には、これではいけないというので、いちばん最初に隊長が決まった。

望月　五人委員会というのが出来たんだ。谷口君とかぼくも

入れられてね。その五人委員会がどんどん独断で進めちゃったんです。最後の成功した隊のときはちがいますけれど。

松田 第二次隊が登れなくて帰って来たあと、やはりなんとしてでも日本で登りたいということで、三十年に、もうその当時は槙さんが隊長に決まっていたんですが、先遣隊という形で、小原勝郎さんが隊長で村山雅美さんと橋本誠二さんでサマのネゴシェーションに行ったわけです。そして一応サマ問題を解決したということで、三十一年の隊が安心して出て行った。隊は予定どうり登りまして、一応マナスルにピリオドを打った、それがちょうど日本山岳会の創立五十一年目でした。五十周年の一つのそういう海外登山のピリオド、戦後十年目のピリオドを打った、ということでもありましたね。マナスルが終って、まあ一つのお祭り騒ぎが納まりましたから、それからしばらくの間、非常に地道な会の動きになったわけです。クラブ的なほうへ戻ったわけです。

望月 マナスルのことについてもう一つだけ。ぼくは神戸にいたんですが、外国にとられてはどうしようもないから、どうしても日本でキープして下さいということを、生意気に槙さん宛再三手紙を書いた。槙さんのその時の返事がここに残っているんだが、理事会の正式な認可も受けずに自分はすでにパーミッションを取ってます、と。外国に先きをこされるのをわれわれは非常に心配してたんですよ。せっかくわれわれがここまで努力してね。それはいちばん槙さん自身が心配して、そしてかなり独断専行してもう手を打っちゃった、たしかお金も払っている。その証拠になる長い手紙ですよ。

松田 あの時点では、槙さんがいちばん情熱をもやしていましたね。マナスルに対しては。執念というか……。

マナスル以降

松田 マナスルが終ってから、理事会も徐々にこう、変ってきましたね。

折井 マナスルの時分に、一般会員からの批判があったんだな、やはり。もっと国内の一般会員にサービスしろ、という要請がね、とくに地方から非常に多かった。支部の拡充とか、支部に対する後援とか、それから一般の講習会だね。それに、高校生の登山指導。

松田 そうなると、浜野さんの登場ですね。

浜野 わたしは三十二年に東京へ帰って来た。それから五年間、ギュウギュウ使われたんだ(笑)。遭難対策をやれ、底辺を広げろ、国体もからんでくる、といった風でした。また、高校生はいずれ登るようになるのだから、ちゃんとオーソドックスに鍛えておいてやらねばいかん。それから、高校の体育の先生、もう一度鍛えなおさなきゃだめだといって強引にやった。

松田 その時には、別宮さんが会長でしたね。そして、三十

三年に別宮さんが亡くなられて、日高さんが半年間代行した。わたしは、三十三年に理事になりましたが、あの当時マナスルへ行った最年少のメンバーとして、やはり次になんとか会としての計画を立てるのが義務であるような、一種の責任感を持ってました。それでヒマルチュリをやったらどうかといって持ち込むことになった。正式に派遣しようということになり、三十三年の秋に偵察隊に金坂さんと石坂さんが出た。そして翌三十四年に村木さんを隊長として八名の隊を送ったわけです。その準備の時に、別宮さんが亡くなられて、会長が日高さんに変ったわけです。

そのころは、とくにマナスルに続く若手を養成する必要があるという課題をもっていました。当時外貨が非常にきびしく、京都大学のチョゴリザとか慶応の隊などと外貨問題で競合し、トラブルなんかもありました。三十四年のヒマルチュリは結局登れず、その翌年も継続して行くかという時に、慶応の登高会の方で前の年に見送ったという事情もあって、慶応にゆずるという形で慶応が単独で行って登ったわけです。

日本山岳会の方はヒマラヤ委員会といって、名前は前と同じですが続いていまして、次の目標を一時カンチェンジュンガに置いて計画書を作ったりしたことがあります。しかしそれは機熟さずというか、立ち消えになりました。そのころ委員会のメンバーも少しづつ変ってきて、川上進さんだとか高橋進さんとか、そういう方々が指導という面でも力を入れまして、それで西穂の講習会や高校生の講習会につながったと思うのです。

折井　別宮さんはえらかったですね。マナスルは終ったんだから国内のことをやれ、という批判があったんですが、やはりヒマラヤは将来も続くんだから会の中にもそういうメンバーをずっと温存しなければいかん、その一方で国内の活動も並行してやらなければだめだ、ということをわたしに言われてました。そして別宮さん自らも、次の国体で立山へ行かれて、それから帰って来てすぐ亡くなられた。

別宮さんという人は、だまっていて、ぼうようとしていて、あまり意見もいわない人だけれど、言う時はバッチリ言った。それでヒマルチュリもずっと並行してやれたわけだ。国際的感覚も強いし、広い視野を持っておられた。

浜野　別宮さんが亡くなった時に、わたしはカバン持ちでいっしょに国体に行った。日高さんも岩永さんもいっしょでした。最後の解散の時に全部連れて下りて一緒に飲んで、別宮さんは、きょう帰るといって帰っていった。わたしたちも帰って来て、翌々日だったかな、亡くなられたというんでびっくりしました。

折井　別宮さんは神奈川の国体にも行かれたですね。

山崎　高校講習会、あれは木曽駒で。

浜野　初め木曽駒でやってね、ヒマラヤへ行った連中などが

直接肌で感じるように、高校生に教えなくちゃだめだというんで、だいぶヒマラヤ帰りの人に来てもらった。

折井　三十五年に駒ケ根市と共催で高校生登山講習会をしたわけです。市長がぜひ来てくれと言ったので。

浜野　千畳敷に新しい小屋ができたばかりの時で、そこでやった。オープンするかしないかの頃で、半分空いていた。それから雷鳥沢でやって、そのあと西穂だ。

山崎　西穂の方は、高校生でなくて、一般向けのです。

浜野　高校の先生は、汽車賃などは自弁でくるので、日高さんがそれではだめだというので、出光なんかに行って五十万ぐらい集めて来られた。

金坂　おそらく百万ぐらい、日高さんひとりで集めたんではないですか。たいへんなもんです。

山崎　しかしあの講習会は、かなり成果が上ったと思うんですね。金坂さんの制動確保なんて初めて教わった。

金坂　公開したのはあれが初めて。

山崎　実際の理論があそこで初めて一般の人に公開されることになったのだと思います。

浜野　あの頃の高校生で、あとでヒマラヤに行った人もいるんじゃないかと思う。

金坂　高校の先生を対象にした雷鳥沢での講習会では、受講生がまあり熱心でなかったので講師たちが怒っちゃった、一生懸命やろうと思っていたのに。日高さんは翌年もやろうというんだけれども、若い連中を納得させるのは無理です、と日高さんにアドバイスしたことがある。そしたら、今度は体協の方から金が出るようになった。

浜野　それは一般向けの講習会だね。

金坂　県岳連に、二名づつ推薦してもらって、北から日本全国を三つに区切って、それで三年間やった。あれでずいぶん一般の登山者の技術が向上したように感じるんです。こっちのうぬぼれかも知れないけれども。

山崎　それはそう言えると思う。山岳会があんなことをやるというのは、たいへんなことですよ。西穂を選んだというのは、何か理由があったんですか。

金坂　西穂は、結局出入りの問題もあるし、それから危険の問題ね。まさかいきなりナダレの落ちるようなところへは連れていけないし、あそこだったら多少天気が悪くてもスケジュールどうりやれるだろう、ということで決まったわけです。

折井　小屋の設備もいいし、それから支部が協力した。

金坂　そう、信濃支部が大いに力を貸してくれたり、自衛隊も車を出してくれたりした。

浜野　自衛隊は雷鳥沢の時も、ヘリを出してくれたり、協力してくれた。

折井　あれで自衛隊の人がずいぶん山岳会に入ったね。

松田　西穂のあと、三十四年に日山協が出来たんです。それでこの講習会が三十四、五、六年度と三年間続きました。日山協の会長は武田さんで、ＪＡＣ側からの選出役員は、副会長日高さん、専務理事浜野さん、理事で入沢文明、渡辺公平、折井健一、金坂一郎、後藤幹次、藤島玄、三井松男、津田周二、監事が太田敬。このころ特に国内の対外的問題で、岳連との関係、支部と県岳連の関係で問題が大きくなって、松方会長の一本化構想が出るまでかなりもめました。

西穂の講習会が終って一段落ついてから、川上さんなんかが中心になって海外に出掛けようと考えていました。当時もう松方さんが会長になられていて、三十八年には三田さんがエベレストのアプリケーションを持ってネパールへ行ったわけです。そのころエベレスト遠征計画が芽生えたんです。

山崎　その発端になったのが例の月山での海外登山技術研修会。これはやはり日山協が主催して、担当が日本山岳会でした。

松田　当時、国体は岳連、海外登山はＪＡＣというふうに分担していましたね。第一回の月山が三十八年四月で、会のほうではエベレスト委員会が動き出していた。十月三日の理事会で、ヒマラヤ委員会が解散し、新たにエベレスト登山のための委員会を再編成することが可決され、その人選について槙名誉会員、三田副会長に委任された。これに基ずき槙さんは、加藤泰安、折井健一、辰沼広吉の三氏とエベレスト委員会設立について相談し、十八名の委員候補者を選定した。それで十一月には正式に委員会ができて、ずっと折衝もつづけたわけですが、結局ネパール政府の登山禁止令にあって、そのまま中断してしまったわけです。折井さんなどがＮＨＫに働きかけて後援をとりつけたり、文部省にも接触した。そういうわけで、エベレストの発端は、西穂の講習会の実行委員会のメンバーからなんです。

山崎　月山の研修会あたりで動き出すわけですが、あの月山というのは非常に楽しい集まりでしたね。志津部落のビールを飲み干しちゃったというんだから(笑)。

金坂　山形の人たちがずいぶん力を貸してくれましたね。

山崎　外で伸びていたのが自衛隊の人にかつぎ込まれて、これはお宅の人じゃないですか、転んでいましたよ、なんて(笑)。平井一正なんていうのは、ゴロンゴロン雪の上に寝ているんだから。

松田　あのときは本当に、久し振りでうっせきしていたものが爆発した感じでしたね。

金坂　あれからだんだん、まじめになってきた。

松田　第二回が奥只見、第三回が発哺ですか。それから白馬でしたね。

折井　吾妻でもやった。

山崎　ああいう会をもう一回やりたいね。

松田　そうですね。今の高所登山委員会というのはそういう

ことをもくろんでやっているんですが、やはりなかなかああいう風に盛り上らないですね。

上高地山荘

松田　三十九年の六月にルームが移転しましたね。

山崎　体協が渋谷に移るので、お茶の水を立ちのくことになり、JACも新しいルームを探すことになったんだ。あまりいい所がないんで、とりあえず外苑コーポに移ったわけです。

折井　その間、買取りのルームをずいぶん手分けして探した。マンションのでき始めの頃でしたね。永久的に自分のものだといえるルームを作ろうということでした。

松田　事務員は、お茶の水時代に原さんから津軽さんに変って、その後吉野さんになって四十一年までつづいた。

山崎　それからもう一人、若村さんという女性もいた。家屋を持つという案は反対論もあったんですか。

望月　反対論はなかった。金の問題でしょう。

松田　お茶の水の土地からは追い立てを喰ってましたので、暫定的ということで移ったわけです。

望月　JACは非常にきれいなんですよ。土地をただで貸してくれたでしょう。だから何かの時にはすぐ出ますということで……。

折井　でも日立には立ちのき料二十万円もらったよ(笑)。

浜野　入沢文明さんが、あの先っぽの土地を東竜太郎から借りたんだから、きれいに返そう、ということですね。もっともあそこはいちばん先っぽで何も建たんところだよ(笑)。

山崎　今は駐車場か何かになっている。

金坂　小屋はどうなったのだろう。

折井　小屋は霧ケ峯へ持っていった。

山崎　ところで、上高地の山荘は、三十七年の六月ですね。

折井　山荘を持とうという話は、そもそも日高さんが会報に書いていますが、戦前、槙さんなんかが山荘をもとうということで涸沢の辺りをだいぶ調査したことがあった。要するに会員サービスという点から山小屋を作ろうじゃないかということなんだけれども、なかなか……。たまたま、松本の飯田屋がもっている小屋を売ってもいいという話があったんだ、村上守君を通じて。そこで金集めをやることにしたんだが、金の方は急ぐし、皆さんから五万円とか十万円を集めた。借りるということにして。一応そうして百万円程まかなって、そのあと募金して返すことにしたけれども……。

望月　あとで返してもらったかな。

折井　返したのもあるし、そのままになったのもある。

山崎　村上君は好意的に紹介してくれたんだが、売ってもうけようとしているなどと、いやみをいう人もあってもめたこともあった。

折井　それで、高山忠四朗さんと村上君がお茶の水のルームに来て、こういう話があるけれどもどうか、と申し入れがあった。上高地というのは国立公園でも特別の地域だから一般の人に小屋は売れない、日本山岳会ならよかろうというんで。じゃあ、引き受けようということになったわけです。当時の金で百三十万円を飯田屋へ払えばこっちに権利が移るということで、営林署にも内諾を得た。

そんないきさつで、とりあえず買ったわけですが、わたしは亡くなった橋本竜伍さんと一緒に上高地へいって見てきた。橋本さんは、これをベースにして青少年の訓練の場というものにしていこう、そのために小屋を改築するなり大きくするなりしよう、ということになって具体的に少しやりかけたわけです。そしたら、御当人が亡くなられてしまって、そのままになってしまった。

その内に台風のために、土台の中に土が入るわ、畳もボクボクになるわで、一時応急処置はしたけれど、それ以上の改修をしようという方へだんだん話をもっていった矢先、わたしも病気でダウンしてしまって……。

山崎　いや、あそこにとにかく営林署から土地を借りて建物を確保したということは、一種の橋頭堡をつくったようなもので、非常によかったと思うんです。あれがなかったら今の山研は出来なかった。あそこに建物を建てるということは、営林署、環境庁、文化庁など、とにかく法規でがんじがらめにされているから、とても新築なんかできないですよ。

折井　まあ今は、おかげさまで山研も改築してよくなったけれど、運営については今後の問題もなしとしない。しかし山岳会の一つのベースとしてこれはだいじにしたいものですね。

山崎　会員サービスとして、非常なプラスだ。山小屋をもつというのは昔からの夢の一つだったし。大いに利用していただきたい。

望月　会が単独で今やったとしたら、とてもむずかしいね。

折井　たまたま、松本の営林署の署長さんが日本山岳会の非常なシンパだった。それで山岳会なら、ということで許可してくれたわけです。

山崎　さっきの折井さんの話のつづきですが、責任者というか一生懸命やってた方がダウンして病院に入ってしまったわけですよ。それでまあ、理事会などで、改築しよう、やろうやろう、と掛け声だけは皆かけるんですが、じゃあ誰がやるかということになって、結局しょうがないからわたしが全部引っかぶっちゃった。それで、もう会社もずいぶん休みました。無断欠勤もしたし(笑)。松本には月に二、三回は行かなければならない、金はどうするか、金は自転車振興会から、こういう手続きをとればもらえる、と今井田研二郎さんなどからうかがった。じゃあ、誰が手続きするか、書類をつくるか、やる人が居ない。

村山さんに聞いたら、南極事務局で振興会から補助金をもらったから、そこで書類をみせてもらったら、という。あそこには鳥居鉄也さんという会員がいるので、鳥居さんにたのんで書類を見せてもらって、とにかく書いて出した。そうすると、これは古いやつだからだめだって却下される、じゃあ新しいのをもらって、という具合に補助金をもらうにしても、環境庁、文化庁、営林署などから許可をもらうにしても、大へんな手続きがあったんです。

設計図は、折井さんのころ石原憲治さんにお願いして、三階建ぐらいの大きなのを作ろうと考えていた。まああそこは大体百坪ぐらいあるわけですから。新しい委員会では、こじんまりしたのを建てようというので、五十坪ぐらいの二階家の設計図を環境庁にもっていった。ところがこんな高いのだめだとけとばされちゃって、じゃあどれ位にしたらいいのか、中二階だ、じゃあそれでOK、ということになったが、そうなってもなかなか許可はくれないわけです。また日参して、地元の高山さんや早乙女さんなどいろんな人に協力してもらって、ほんとうに苦労したですね。

浜野　設計はどなたですか。

山崎　芸大の山本学治先生という、山小屋を建てる専門の人なんです。

折井　それで石原さんがむくれちゃった。

山崎　そう、それをまたなだめるのに大騒ぎ(笑)。最初から石原さんに一言いえばよかったものの、そこまで手が回らなかった。とにかく、そういう風にやって、できた時はうれしかったですよ。わたし自身、足掛け三年越しでやっとできた。上棟式済んで、完成式を秋にやりました。松方さんにもずいぶん骨を折ってもらいました。

六十周年記念事業

松田　昭和四十年というのはちょうど会の六十周年に当ります。松方さんが二期目の会長の時ですね。二期目というか、その前にもやっておられましたので、二度目の二期目ですが。それまで松方さんはあまりビジョンのようなものを出さなかったのですが、その時には、会報を月刊にしようとか、もっとアット・ホームなルームを確保しようとか、支部の活動を強化しようとか、エベレストは当分延期だから少しその精力をそういう内部充実に使おうというわけで、四十年という年はかなりアクティブに動いた年ではなかったかと思うんです。たまたま六十周年という年でもありましたからね。それで、会報も吉沢一郎さんが担当して、月刊でボリュームも倍ぐらいにふえた。

四十年でやはり特筆すべきことは、六十周年の記念事業だと思います。それに内部の整備といいますか、名誉会員や永年会員の制度をつくって、それにともなう定款の変更もしました。

折井　六十周年の西武の展覧会、あれは山崎さんとわたしが総務担当でした。椿山荘でパーティもやった。

松田　秩父宮妃殿下も来られて、十月十四日にやったんでしたね。西武でヒマラヤ展をやったのはその前の昭和三十五年なんです。その時は「日本人によるヒマラヤ展」でした。そして六十周年には、西武で四十一年六月十一日から二十二日まで、「第三の極地をめざして」をやった。コーナーを四つに分け、エベレストが一つ、自然保護が一つ、もう一つは遭難対策、そして六十年史。

望月　日本山岳会というばかりでなく、この機会に自然保護、遭難対策のキャンペーンを行うということで、四つのセクションに分けた。

折井　あのときは自然保護の関係で展覧会に出したけれども、西武が自然破壊やってるときだった(笑)。

望月　開会の六月十一日には、秩父宮妃殿下も来られた。

ルーム移転

松田　外苑コーポにルームがあったのは三十九年から四十二年の六月まで、三年間でしたね。暫定的ではありましたが、あそこでもずいぶん苦労しました。吉野さんが住み込まれて、住めるようなところでない環境で、むりやり住んでもらって仕事したんです。

山崎　倉庫みたいなところで、天井から水がもってくるし、本がいたんでしまうし……。

松田　地下室でしたものね。あれで本はずいぶんダメージをうけました。

折井　とにかくあれは、本だけ使用できればいいということで借りたんだ。体協の方に事務所を置いて、あそこは倉庫にしようということで。

松田　ズンドーの部屋で談話室もなく、土曜会なんかが開けないというので、四十二年に向井ビルに移ることになった。

山崎　その時も、自分でもつか、借りるかという問題があって、加藤泰安さんの紹介の渋谷のマンションを買うか、錦町の向井ビルに移るか、いろいろ検討した。加藤さんは長い将来のためにマンションを買った方がいい、ということを主張してましたね。

松田　意見がいろいろあって、たしか渋谷の先の方では不便だとか……。

山崎　不便とそれから狭いということ。向井ビルに比べると渋谷の方のは一回り狭かった。

松田　それで向井ビルは三角形のビルだったけれど、場所もいいし、それで決った。ルームの改装などについては、当時竹中工務店にいた松本態次郎さんにかなりやってもらった記憶があります。それから、あの時初めてライブラリーも設立され

て、専門のライブラリアンを置くことになった。

あの時の募金もたいへんだった。でも募金はうまくいきまして、あの移転する時点では会の資産もかなりふえたと記憶してます。

折井　前は会費と入会金をみななしくずしに使ったんだ。ところが金坂さんが、少くとも入会金というのは会の基金に残せ、ということで、当時一部残すために太田敬さんが緊縮財政をやった。それから外苑コーポの権利金も戻り、それを向井ビルにも使えたわけです。金坂さんが非常に強引に主張したですね。

金坂　強引じゃない、何年もくりかえして言ってました。向井ビルを出たのはどういうわけですか。

浜野　あれは追い出しだ。

山崎　自分たちで使うから出てくれと向井組にいわれて。

松田　あそこは上下の階を向井ビルで使っていて、山岳会がサンドイッチになっていたわけ。それで交替してくれといわれたんですね。ところが、一階引越すといっても談話室なんか内装やってますからね、だめだといって一回けったんです。それで一年間はのびたんですが、やはりむこうが執拗にいってくるもんですから仕方なく……。ただあそこがよかったのは家賃が非常に安かった。それだけはとりえでした。十万円で済んだんです。

エベレスト以降

松田　ルーム移転が四十二年にありまして、四十三年は新ルームで特に何もイベントがないところへ、八月になって急にネパール政府がヒマラヤ登山を解禁しました。それであわてて、エベレスト態勢を組むということで、急遽今までねむっていたエベレストを起して、次の年の春にはやっと偵察隊を送りました。それからしばらくの間、戦時態勢といいますか、エベレスト中心の一年間か、一年半がつづきました。

エベレスト実行委員会の部屋を向井ビルの一階下に一部屋借りまして、そこで準備をし、四十五年の春にはエベレスト隊が出ていったわけです。

司会　宮下秀樹さんの偵察隊はその前年ですか。

松田　そうです。ですから四十五年の秋ですね。そうして実際にエベレストに行ったあと、やはりああいう大きな遠征がありますと、必ずひずみがあり、もう一度会の内部を充実した方がいいんじゃないかという意見がでてきました。そして四十六年からは、またそういう状態にもどって、今度は山崎さんと藤井運平さん、そして中屋健一さん、成瀬岩雄さん、それから伊倉さんが中心になって会の運営をされて来ました。

エベレスト登山はかなりムリをして強行したという面があって、アフター・エフェクトというか、あとのマイナスの効果が

強く出すぎた感じでしたね。わたしなんか気のせいか、エベレストのあと、山岳会の歴史の中でちょっと何かとぎれたような感じがします。

山崎　マナスル登山のときの会員というのは、あとずいぶん皆さん活躍しているわけですよね。だけれども、エベレストの関係の会員ですよ、除名になってしまうのがずいぶんいるんじゃないんですか。会費未納でね。

松田　それはある程度仕方がないでしょう。結局、魅力のない会にしていること自体を、むしろ反省すべきだということだと思います。

浜野　逆に云えば、そういうチャンスに会に入って利用していく、帰ったらもう払わん、ということでもいいじゃないか。

松田　申し訳ないんですけれども、会費が高すぎるんですね。会費八千五百円払って反対給付というかメリットがそれだけない、ということですね。

浜野　そのとおりだが、『山岳』もらって会報もらって、本自体が今高いだろう、それにルーム借りて人件費払う、ということになると、結果はそういうことになるんだな。

松田　結果はそういうことですね。

浜野　とにかく何もしないで本だけもらっている人、それ以外何の反対給付もないよ。地方の人はルームにも来ないし、地方支部でまた支部費とられて。もっと魅力があるのがほんとうだが、その魅力がない、とくに若い人にはね。

松田　ここに集まっているような人の場合は、何もなくたって、会費を払うことによって、プライドというか、なんかこう安心できるという気持でしょう。そういう人たちばかりならいいんですけれどもね。そういう人はわずかだから……。

浜野　メンバーになったら、何かいいことあるのかと、必ず聞くよ。ゴルフ場だったら、メンバーになれば安くなる(笑)。メンバーになっていて何もないなら、入らんでも入らなくても、ヒマラヤに行く力があれば、お前どうだ、行かないかといわれればそのときだけちょっと入りゃあいい(笑)。

望月　ぼくがそれよりも多少やはり心配するのは、海外登山のため、日本山岳会の推薦をもらうから、むりやりに皆入っちゃう、というような人はこれはまあしようがないけれど、たとえばナンダ・デヴィに行ったような連中が、全部が全部とはいわんけれども、ナンダ・デヴィに行くことについては、非常に熱心なんだね。それだけのために、会をある意味であらゆる点で利用している。部屋から、いろんな資料からね。それから日本山岳会の公認の隊であるがために、彼らは非常に有利であり、何でもできると。そういうことには熱心だけれども、それじゃ会そのものに今後、自分がどれだけのインタレストを持っていくかというと、目下のところまだまったく感じられないんだ。だから、それをどういう方法をもってそういうふうに、結

びつけていってやるか、これがぼくは問題だと思う。海外登山のようなことだけには非常に熱心だけれども、会の事務というか、会の運営とか山岳会の今後のことに力を貸すとかいうことは、目下のところはちょっと感じられないからね。それではとぎれちゃうと思うんだ。

山崎　ぜんぜん感じない人ばかり、でもないのではないかという気がします。あの中から将来山岳会のことをやる人が出ることは、パーセンテージの大小は別にして、わたしはその点あまり悲観していない。また学生部にいたときはルームにしょっ中出入りしていたけれど、学校出たら会に入っていなくても会に出入りできるという、いわゆる青年懇談会という場もつくってありますから、そういう点も将来プラスになるんじゃないか。

浜野　わたしは若いとき、山岳会なんか入らなくったっていいじゃないかと思った(笑)。それで外国へ行くときも入らなかった。帰って来てから入ったわけです。それも入れ、入れ、といわれてしょうがないから入ったわけです。そのまま兵隊に行って帰って来た時に、さっきちょっと話したように、ふんづかまってやられたんです(笑)。だけれども、自分が生き残ったのは、山岳会へ入ったから残ったんだ、そう感じています。これは戦後の若い人に教えなくては自分の義務が果せないというような考えを持っています。だからエベレストに行ったやつも、ほかに行ったやつも、だんだんじいさまになってくればだね、そういう考えになるんじゃないかと思う。

望月　まあだいたい、そういう傾向はある。間が離れすぎちゃうと、俗にいう敷居が高くなるので、なかなか会へ来にくくなる……。だから何かきっかけがあって引っ張るとか、やはりそういうことがないとなかなか自分から来るということはないでしょう。

山崎　七十年ということは一つのパターンができるんじゃないかという気がするわけです。昔はとにかく、終戦前後、望月さんなんか学生時代から会報を作ったりね。

望月　いや、学生時代じゃないよ。

山崎　あれ、出てからですか。吉阪隆正さんなんか学生のときからもう山岳会に出入りしていて、会報作ったりあるいは『山岳』手伝ったりしている。槙さんなんか、名誉会員になったのは五十代ですよ。そういうことは会の歴史が若いから、そういうことになったけれども、ここで七十年ということになれば、一応パターンがあって、たとえば名誉会員ならば七十にならなきゃいけないとか、会報編集なら、まあそれ相当の年輩の方にやっていただけるとか、理事にしたって、若い人もいるけれども、あまり年輩の人が出てくることもない、といったパターンはもうできてきているのではないかと思います。

浜野　今の理事の人たちも若いですよ。何回も出たり入った

りして、痛めつけられて……(笑)。わたしも痛めつけられた方です。会社の仕事もろくすっぽしないで、会の仕事をやり(笑)それはまあ、社長だとかなんかになった人は別だけれども、ああ、おれ損した、あのとき山岳会の仕事なんかしないで。

山崎　そうです。出世のさまたげになる(笑)。

浜野　一生懸命会社の仕事をやったら……、そう思うのもいるだろうけど、そんなものは、ほんとうは関係ないんだ。それでいいじゃないかと思うな。

松方さんのこと

望月　松方さんの話がわりと出なかったけれども、ぼくの印象に残っているのは、戦前の虎ノ門のルームで、ご存じの方が少いと思うんだけれども、あすこで洋書をぼくはずいぶん引っ張り出して若いときにみた。みな S. Matsukata というサインの本が、多かったんですね。松方さんとしては、自分がそういうものを会に寄贈したということは、何も言わないんだけれども、おそらく戦前の日本山岳会の蔵書の中で、洋書は全部とはいわないけれども、松方さんが昭和の初めにヨーロッパに行って、帰って来たときにかなり自分で持って来られた、その本をずいぶん寄贈されているんじゃないかと、ぼくは思います。それから戦後もぼくの記憶では、たとえば大島さんの『先蹤者』が、会でなくなったわけですよ。そうすると松方さんは自分のポケット・マネーで買って来て、オイ、これをのっけとけ。そういうふうに非常に気軽に、松方さんは本なんかでもやられたし、それからまあ、自分の家に何人かの人を、戦後の苦しい時分に毎年よんでね。それはみな、そういう会合だって、松方さんの負担されたものは大きいと思うし、ずいぶんいろんな連中をよんで会をやられた。ああいう人というのは、ぼくはおそらく戦前戦後を通じて、もう出ないんじゃないかと思う。松方さん自身の会に対する変らない、ほかの人には代えられない、大きな愛着というか、そういうものがぼくは非常に大きかったんだと思う。

折井　松方さんが、五反田の逓信病院に入ったの、いつだったかな。

望月　あれは亡くなるときの入院じゃなくて、前の病気のときだよ。

折井　わたしは当時理事をやっていたから、五反田の病院に連絡に行くわけです。松方さんはいろんな役職を持っているわけですが、ほうぼうの会社が四十いくつかあるんだ、五十近く。それを全部もうやめて、おれは山岳会だけを残す、とわたしに話していた。山岳会に対する執着というのは、これはたいへんなものだと思うんだ。

望月　わたしも長い間『山岳』の編集をやったんだけど、いちばん『山岳』について、しょっちゅういろんなことを言って

くれたのは、松方さんと藤島さんだった。だから茗渓堂でできるとね、松方邸にはつねにまず持って行けといって、必ず持って行かしたんです。そうするとすぐ、あの独特の字でね、「見た、ありがとう」、いいとか、悪いとか、書いてね、すぐハガキをくれたものです。

折井　そういう意味じゃ、松方さんは非常に反応のある人だった。例の調子で、げたはいて、さあーっと軽く歩いて……たいしたもんだ。

浜野　この『山』の中に、松方さんのいろんな原稿があるんだけれど、その原稿を書いてもらったとき、ゲラが出ると持って行くんだ、昼間、会社をドロンしてね(笑)。そうすると、ちょっと待ってくれ、これを直しちゃうから……と直すんだ。それがね、直した赤いペンが、どれがイキてどれがシヌのか、わからないんだ(笑)。自分で読んでね、どっちですかって……「これホラ、わかる？　わかった」というわけだ。あんな苦労したことないなあ。しかし、いろいろな意味でずいぶん教えられました。

司会　じゃあ、この辺で。どうもありがとうございました。いいお話をうかがいまして……。

〔編者付記〕本座談会にはこのほか関根吉郎、加藤泰安両氏の出席を予定していたが、都合で不参加のため多少話が片よっている点もあり、その点御了承いただきたい。

プリアン・サール登頂（一九七五年）

―天使のいるオトギの国―

内田嘉弘

山が決まるまで

私達、京都カラコルムクラブでは、数年前より、カンピレ・ディオールに熱をあげていた。一九七四年夏には土森、原田の両氏がカランバール氷河に入り、BC予定地よりカンピレ・ディオールの見事な写真を撮って帰国した。幻の山といわれたカンピレ・ディオールも、これでベールを脱いだのである。

この写真から登攀ルートを色々と検討して準備を進めたが、パキスタン政府は私達に許可を与えず、代りにマッシャーブルムを示して来た（カンピレ・ディオールは広島山の会に許可がおりた。これは登山時期が私達より早い時期だったので、このような結果になった）。しかし、同じ七〇〇〇メートルクラスの山といっても、七八二一メートルのマッシャーブルムは八〇〇〇メートルクラス級の山であり、カンピレの準備でこの山に向っても無理があり、又、隊員にも七〇〇〇メートルクラスの経験者がないこと、それに未踏峰でないことから、マッシャーブルムは私達には向いていないと結論を出して、他の山をもう一度検討し直した。

地図を拡げて未踏峰を探すが、どうしてもカンピレ周辺にしか目が届かなかった。色々検討した結果、カンピレに次期登山隊を出すことも考慮に入れて、カンピレと同じイシュコマン河沿いにある未踏峰プリアン・サール（六二九三メートル）に目標をかえて、五月上旬に再申請を出した。

ピンディにて

再申請の許可が六月に入っても連絡が来ないので、現地で許

可をとるべく六月十六日隊長以下三名が日本を発った。十七日には当クラブの代表の小谷氏もロンドンから駆けつけて観光省でアワン氏と会い、許可は六月末頃に出すとの約束を得たので、後発隊三名も六月二十三日に日本を発った。同日夜十一時にイスラマバート空港で全員揃ったが、この時隊長から

「カンピレは登られたよ！」

と聞いた時、多少ショックであった。もうカンピレへの登山隊の編成はあり得ないし、今年の隊が帰路カランバール氷河からカンピレの偵察も行く必要はなくなってしまった。

約束通り六月三十日に登山許可がおり、七月二日にリエゾンオフィサーのナワズ・カーンも来る。ピンディでの手続きは五日で完了し、フライト待ちとなる。三回空港へ足を運んだが、十七日にようやくギルギットへ飛ぶことが出来た。

ここで、スワート越えでギルギットに到着した当クラブの安田隊と会う。五〇〇〇メートルの峠を越えて来ただけあって、皆の顔は真っ黒であった。今後の予定はハラモシュ・ラに向うとのことであった。

キャラバン

七月十九日朝七時三〇分ジープ四台でイミットへ向う。青と茶色の世界へ、草木のみられないハゲ山の中を砂けむりをあげて、ギルギット河を進む。ガルムッシュ（六二四四メートル）へ向うオーストラリア隊も私達の後から二台で続いている。隊員五名で、荷物も私達の半分以下で、アルプス・スタイルのスマートさが感じられる。それに比べ私達の荷物は約一トンもある。彼等はガクーチより左の谷へ入って行った（帰路ギルギットで、彼等に会った。お互いに登頂成功したのでVサインで挨拶を交した）。ジープでイミットまでの予定であったが、橋の崩壊のためチャトルカン泊りとなり、いよいよキャンプ生活が始まった。ギルギット河の水は、氷河の水の為に、濁っており、これを飲み水に使うが、バケツに汲み入れて一時間経過しても沈殿物はあまりたまらず、黒色のままであった。

七月二十日、目覚めはドンキーの悲しげにしゃくりあげるような鳴き声で起こされた。六時三十分、ポーター二十六人（一人三十キロ）ドンキー十三頭（一頭六十キロ）で出発、小さな体のドンキーが六十キロも担ぐとは、想像もつかなかったが、みていると気の毒な程である。キャラバンは前方に聳えるシニキ峰（五九〇七メートル）を見ながらの行進であった。麦、トウモロコシの畑を見ながら、黄色いあんず（コバニ）の実を食べ、ヒマラヤの雄大さにすいこまれるようにしてイミットへ到着した。

七月二十一日、平坦な道のりで約三時間程歩いただけでブリハンザ泊り。

七月二十二日、出発間際になって、ポーターのストライキが

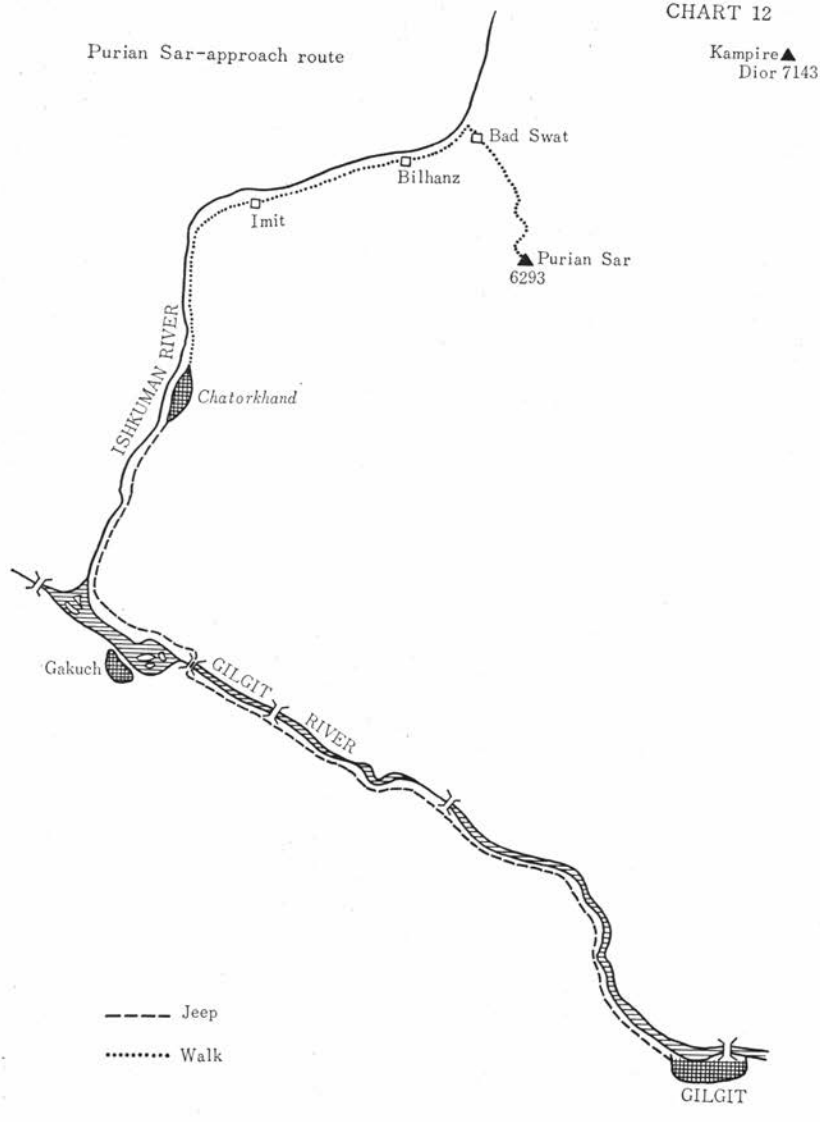


CHART 12
Purian Sar-approach route
Kampire▲
Dior 7143
Bad Swat
Bilhanz
Imit
Purian Sar
6293
ISHKUMAN RIVER
Chatorkhand
Gakuch
GILGIT
RIVER
Jeep
Walk
GILGIT

ある。一人当たり、五十ルピー要求が出るが、三時間後に二十五ルピーで解決する。BCへは急な所があるので、今日はポーターばかりで四十六人であった。好天なのにコウモリ傘をステッキ代りの巡査が終日ついて来た。バドスワート氷河の出合いでは、腰までの徒渉をし、河岸段丘を登り、最終部落のバドスワート村に着いたが、ここでバドスワートの村人達にストップを掛けられる。

「ポーターをここの村人と代えよ……」

と村長が言い張っている。現金収入が少ない村人達が、ひさしぶりの遠征隊がこの村に来たので、村長が頑張るのも判るような気がする。隊としてはめんどうなことになったが、結局二十六人をここの村人と交代する。

中には子供のポーターもいる、十二、三才ぐらいだろうか、三十キロも平気で担いでいる。右岸のアブレーション・バレイを登り、氷河を横断して左岸の森の中にBCを設けた。一九五六年の京大隊が建設したBCと同じ場所であった。この場所は、夏期の移牧小屋があり、羊、牛等が放牧されており、小さな水の流れもあり、草木の中で、快適な憩いの場所であった。

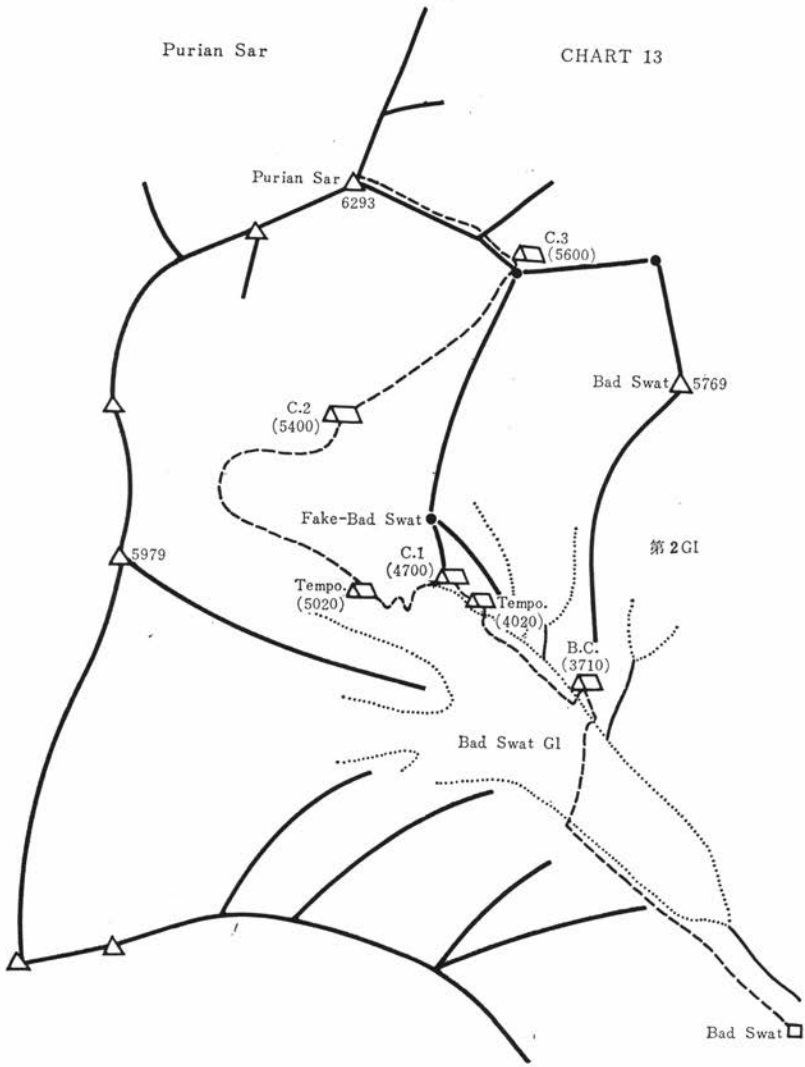
登山開始

休む間もなく、二十三日から元気な者でバドスワート氷河と第2氷河に偵察を出す。この結果、第2氷河は四三〇〇メートル付近から、クレバスが縦横に走り、上部へ突破するのに日数が掛ると判断して、バドスワート氷河沿いにルートを求めた。十九年前の京大隊もこの氷河沿いに試登しているので、可能性があると判断した。京大隊のルートはBCよりバドスワートの森を横切って第2氷河の末端へ抜けるコースであったが、昨年の西カラコルムの地震のためか崩壊があり、森を横断することは不可能になった。

私達はBCから氷河に下り、氷河の中を右に左にルートを求め、約四〇〇〇メートルの地点で左岸に渡り、権木地帯の中に仮C1（四〇二〇メートル）を建設して、ここを荷上げの中継点とした。仮C1からは氷河の中を避けて左岸沿いに、ニセ・バドスワート山の下のテラスへ向ってルートを求めた。このルートは落石の危険のある三本の沢を横断せねばならず、出来るだけ早朝に通過するようにした。テラスの直下は岩場から雪壁へとルートをとる。岩場といっても大きい岩塊がゴロゴロしている所でさほど困難ではなく、雪壁に一五〇メートル程フィックスロープを張り、七月二十七日にC1（四七〇〇メートル）を建設した。

このC1は京大隊の整地したテント跡があり、直下の雪田に京大隊と記されたダンボールケースの破片を見つけた。十九年前のものがよく残っていたものだと皆驚いた。

C1から、ニセ・バドスワート山の北側のテラスに一旦抜


Purian Sar
CHART 13
Purian Sar
6293
C.3
(5600)
Bad Swat
5769
C.2
(5400)
Fake-Bad Swat
C.1
(4700)
第2GI
5979
Tempo.
(5020)
Tempo.
(4020)
B.C.
(3710)
Bad Swat GI
Bad Swat

け、ここから氷河の押し出しの直下を横断してプラトーへ抜けようとしたが、氷河の活動がはげしいのと、陽があたると雪崩の危険がありそうなので、午前中で、行動を打ち切らざるをえなかったし、又、ルート工作も手間取った。

この氷河の押し出しを渡り切ったところに仮C2（五〇二〇メートル）を八月二日に建設し、仮C1C1の物資をここまで上げることに全力をつくした。仮C2からはコー・イ・チャインタール（六四一六メートル）、ガルムッシュ（六二四四メートル）が眺められた。

プリアン・サールは、BC、C1、仮C2からも姿は望めず、山頂へのルートが目で追えないのが不安であったが、BC建設後の十三日目の八月四日に大プラトーに抜け出た時、初めてプリアン・サールの全貌を眺めることが出来た。この時、この山であれば、自分達の力を出し切れば登れる山だと確信した。

八月五日に、この大プラトーの真ん中にC2（五四〇〇メートル）を建設した。C2から眺めるプリアン・サールは双耳峰になっており、右手奥が頂上であり、ルートは頂上から北西に延びる尾根を取るのが正しいと判断した。

八月六日、この大プラトーの内院へ、平坦な雪原を三時間ばかり進んだところで、北西稜に取り付いた。約六十度ぐらいの雪壁を登り切り、稜線に飛び出た。ここは拳の形をした岩の蔭になっており、雪庇もここだけないため、キャンプサイトに適していた。

ここにC3（五六〇〇メートル）を建設し、第一次アタック隊四名を残し、残り三名はC2へ戻った。

登　頂

八月七日、四名は五時二十分C3を出発する。心配していた天候も絶好のアタック日和となった。稜線は北側に雪庇が張り出しており、南側を登ることとなる。岩塔群を抜け、五九〇〇メートル付近で雪壁にぶつかる。フィックスロープはC3から六十メートルで終りになっており慎重に登る。頂上直下一五〇メートルの地点で幅四メートルのクレバスがあり、トップは腹這いになって通過した。ニセ・ピークを右に見て、最後の乗っ越しを登り切ると、小山のようなピークが見えた。それ以上高い所はなかった。

そこへ一歩一歩今迄の苦しみを忘れるようにして頂きに立った。

十時三十分、プリアン・サールは私達のものとなった。涙が流れ、BCにいる隊長の声もつまり気味であった。静寂そのものの中で四人の呼吸音とポロポロ流れる涙が皆の心を一つにしていた。頂上からは、コズサール、六六二八の無名峰、カンピレ・ディオール、クックサール、六八八五峰、バツーラ、ハッチンダールキッシュ、ディラン、ラカポシが眺められた。

第二次アタック隊も八日に登頂し、当初予定していた登攀メンバー七名全員が登頂に成功した。

＜記録概要＞

隊の名称　京都カラコルムクラブ登山隊一九七五

活動期間　一九七五年六月～八月

目　的　プリアン・サール（六二九三メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝堀田真一（39）副隊長＝内田嘉弘（38）隊員＝古市剛（28）井上博（26）伊藤康徳（25）林原隆二（24）中嶋輝彦（21）隊医＝高橋純一（26）リエゾン・オフィサー＝ナワズ・クリラン（25）

行動概要　7月19日ギルギット発。22日バドスワート氷河上BC（三七〇〇メートル）着。25日仮C1（四〇二〇メートル）建設。27日C1（四七〇〇メートル）建設。8月1日仮C2（五〇二〇メートル）建設。5日C2（五四〇〇メートル）、6日C3（五六〇〇メートル）建設。7日古市、井上、林原、伊藤、プリアン・サール初登頂。八日内田、高橋、中嶋第二登。12日BCを撤収。19日ギルギット帰着。

報告書　『PURIAN SAR 1975』内田嘉弘編（一九七六年十一月一日発行）

（Fig.17）C２から見たプリアンサール、右手奥が頂上
Purian Sar seen from C2

(by. Y. Uchida)

(Fig.18) プリアンサールC3から見た北西稜

The north-west ridge of Purian Sar

(by. Y. Uchida)

(Fig.19) C1(5,500m－最初のC1)から見たアプサラサス南西面、左が主峰(7,245)、右が南峰(7,117)

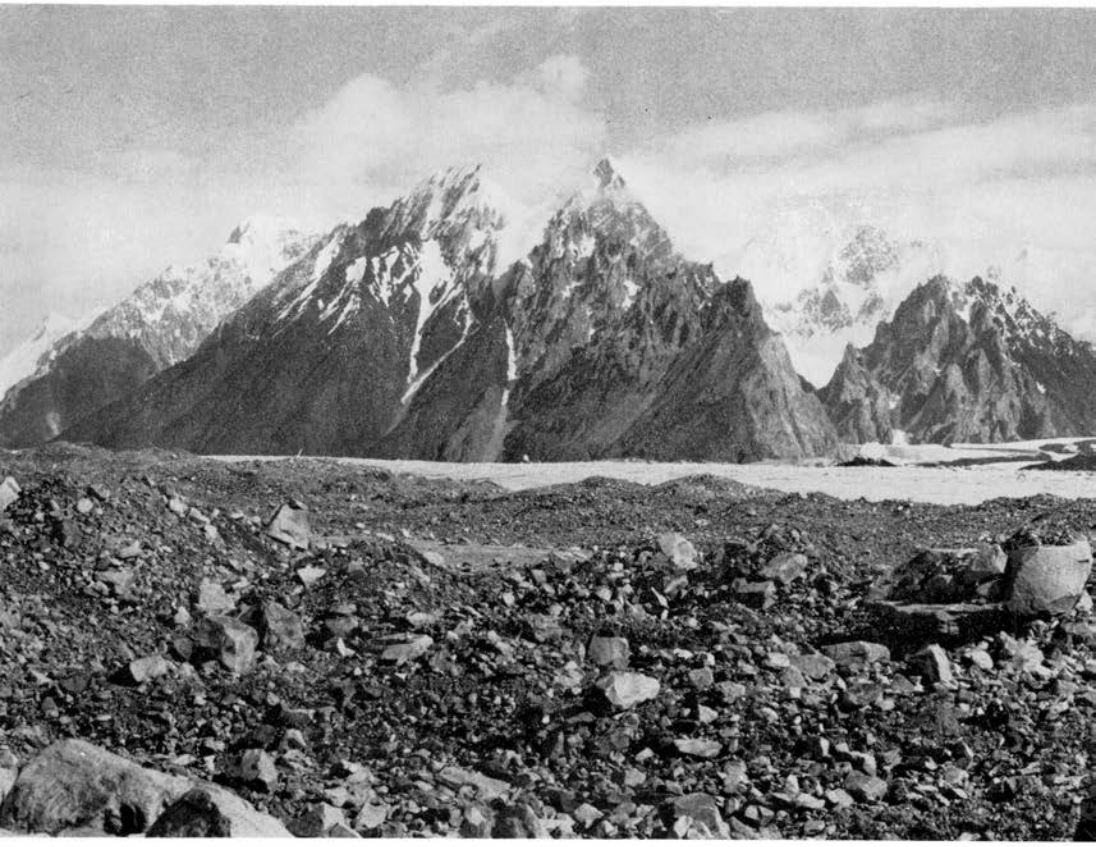
South-west face of Apsarasas seen from C1 built at 5,500m. The main peak(7,245) on the left and the south peak(7,117) on the right.

(by. T. Ishihara)

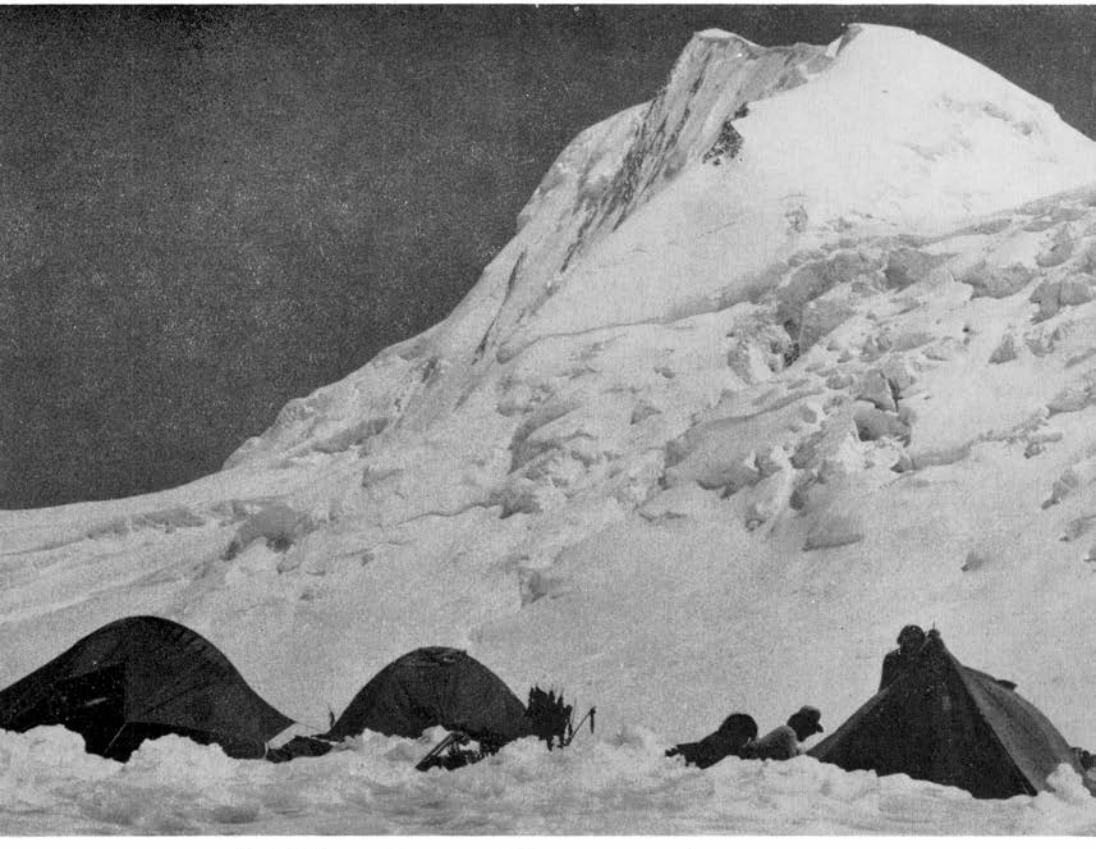
(Fig.20) アプサラスサス南稜上C 3 (6,300m) より、リモ山群を望む

Rimo Group seen from C3 (6,300m) on the south ridge of Apsarasas

(by. T. Ishihara)



(Fig.21) シアチェン氷河から見たシンギ・カンリ(7,202)
Singhi Kangri(7,202) seen from Siachen Glacier
(by. T. Nakatsu)



(Fig.22) シンギ・カンリ西面とスタガール氷河上のC2

West side of Singhi Kangri and C2 on the Staghar Glacier

(by. T. Nakatsu)

アプサラサス登頂（一九七六年）

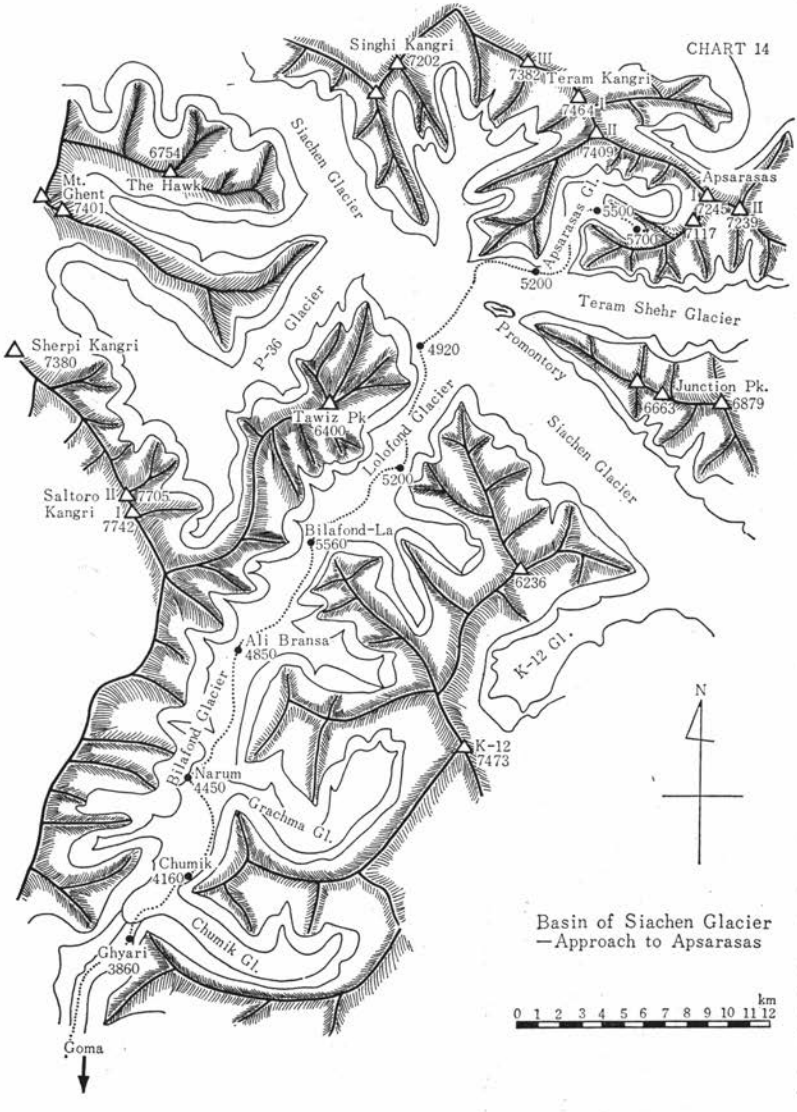
石原敏雄

はじめに

P二九峰に四回の遠征隊を送り出し、一九七〇年には宿願の初登頂を果した大阪大学山岳会のヒマラヤへの情熱は、若い現役に受け継がれていた。ヒマラヤの憧憬はいよいよ強く、夢はますます大きくふくらんでいた。シアチェン流域の七〇〇〇メートル処女峰を狙っていた我々は、一九七六年二月、パキスタン政府より第一志望のアプサラサス登山許可を得た。夢はついに現実となった。

アプサラサス登山の計画段階で次の点がもっとも議論された。まず、登頂ルートの選定であった。静岡大学隊、神戸大学隊から西面の写真を頂き、アプサラサス氷河内院から南稜に、可能性の高い登路を想定した。しかし、東面には未知の要素が多く、偵察の必要が痛感された。つぎに、長いアプローチに伴う輸送上の困難が予想された。これらは我々を悩ませる問題であると同時に、アプサラサス登山を一層魅力あるものにした。

以上のことをふまえて、登山計画を具体的に検討し、次のような原則にもとづいて準備を進めた。軽装備の機動力豊かな隊で、長いアプローチの輸送を少人数で敏速かつスムーズに行い、この間に予定している偵察などに適宜柔軟に対処しようと考えた。また、ACを頂上近くに設け、ローテーションによる全員登頂を計画した。国内の冬山行に準じた装備を用意し、荷上げと安全性の面から南稜ルートに予想される固定用ロープを準備した。BCまでの食料は現地購入を優先させ、登山期間の食料は徹底的に軽量化をはかった。この結果、味覚、献立、カロリ



Basin of Siachen Glacier
—Approach to Apsarasas

ーなどは二次的なものになってしまった。このような基本計画は、我々の乏しい資金の面からも好都合であった。

アプローチ

ビラフォンド峠を遠望できるナラムに、我々のキャラバンが到着したのは六月一日だった。本隊が五月三日にパキスタンに入国してから、わずか一ケ月たらずの敏速な行動日程だった。隊員八名、連絡将校、コック一名、人夫九二名で構成されたキャラバンが、カパルを出発してから九日目のことだった。もう一日行程のアリブランサまでのキャラバンは、残雪の多いことを理由に、カパル以来連絡将校が反対していた。見たところ、アリブランサまで、モレーン伝いに容易に行けそうだったが、ナラムがキャラバン最終地になってしまった。ビラフォンド峠への荷上げに、二十名の人夫を雇った。彼らに食料を支給し、テント、若干の装備を貸与した。

翌日より荷上げが開始された。隊員にとっては、本格的な登山活動の開始であった。四日間でアリブランサ、さらに八日を要して峠までの荷上げをほぼ完了した。峠からBCまでの輸送には、ロロフォンド・キャンプ、シアチェン・キャンプを中継地として、隊員と七名の人夫が従事した。この輸送にあてた一ケ月の間に悪天で全員が停滞したのは、たった一日という好天に恵まれた。六月二十六日にBCが建設され、七月二日にはすべての物資が集結した。連絡将校はアリブランサよりゴマに下って、我我の帰りを待つことになった。

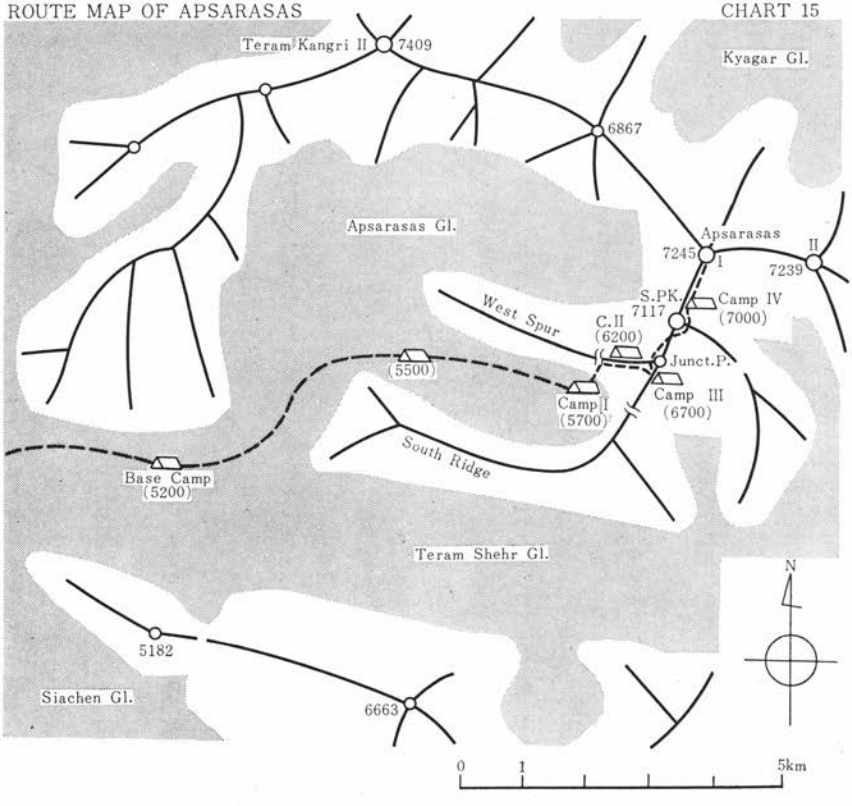
登路決定

一方、アプサラサス氷河内院にC1を設けるべくルート偵察が行なわれた。アプサラサス氷河の入口には高度差二〇〇メートル程のアイス・フォールがあり、大きなクレバスが口を開けていた。クレバス帯を抜け、南稜末端を北側に廻り込んだ内院に、七月三日C1を設けた。ここはアプサラサス西面の登路観察には絶好の地点であった。

ビラフォンド峠を越えてから、正面に聳えるアプサラサス山群の登路観察を続けた。南峰から伸びる南稜および、東に派生した顕著な支尾根にテラム・シェール氷河から登路を求めることは、頂上までの距離が長く不利だと判断した。当初の計画どおり、西面に登路を求め、アプサラサス氷河内院にC1を設けた。

C1から西面のルートを詳しく偵察した。南稜のジャンクション・ピナクルから上部は、南稜を辿って南峰に到り、そこから吊り尾根のような主峰と南峰のコルを経て容易に主峰に達せられそうに思えた。ジャンクション・ピナクルまでは南稜のコルからリッヂを登るルートと、ジャンクション・ピナクルへ直接突き上げる側稜を登るルートの二つが考えられた。南稜のコ

ROUTE MAP OF APSARASAS CHART 15



ル直下にある、急傾斜の氷壁には、小規模な懸垂氷河が数ケ所にあるが、幸にもルートから外れ、雪崩の恐れも小さかった。アイゼンの前爪が心地よく喰い込む硬さの氷壁に、コルに達するルートを拓くことはさほど困難ではなかった。一方、南稜のジャンクション・ピナクルから派生した側稜は、アプサラサス氷河の内院へ急激に落ち込み、その末端は再び盛り上って、内院を二分していた。この側稜は上から、雪のバットレス、幅広い雪稜と続き、なかほどには大きな懸垂氷河が掛り、その下は急峻な氷壁、下部は痩せた雪稜となって、側稜のコルまで一気に落ち込んでいた。南稜コル下の氷壁に比べて、雪崩の安全性に差異はないが、技術的に困難な個所が予想された。しかし、ジャンクション・ピナクルまで全ルートに固定ロープを設置すれば、数ケ所の休憩地が得られ、迂回ルートにはなるが、荷上げに適すると判断し、登頂ルートをこの側稜に決定した。

登攀・登頂

七月八日には、C1の荷上げが完了し、BCは、若干の帰路用食料などを残して撤収された。人夫は、八月十二日の再来を約して、黒いモレーンの上を飛ぶように帰っていった。いよいよ八名の隊員だけの登攀が始まった。

翌日、C1を側稜のコル直下に移動した。痩せた雪稜、懸垂氷河下の急峻な氷壁に、固定ロープは毎日少しづつ着実に伸びていった。午後の日射しをまともに受ける、西面に打たれたフィクス・バー、スクリュー・ハーケンは、翌朝打ち直さなければならない程、氷雪の融解が著しかった。昼下りの雪稜は股まで落ち込んだ。懸垂氷河を巻き、雪に埋れた大きなクレバスの中に、C2を設ける。C2まで七〇〇メートルのロープを固定した。C2への荷上げは、骨の折れるつらい仕事だった。

C2から眺められるサルトロ・カンリ、K12の南方から、モンスーンの襲来を思わせる雲堤が、だんだんと迫り、今まで安定していた天候は二十日から大きく崩れた。気温は意外に高く、ぼたん雪の降る悪天の中、C3へのルートが拓かれた。ジャンクション直下の急峻な雪のバットレス下から、南稜にトラバースした。すでに、C2から五〇〇メートルの固定用ロープを設置し、ほとんど使い果したため、このトラバースは固定ロープのない緊張を強いられるものとなった。

C1の六人用テントが放棄され、C2に隊員が集結して、頂上攻撃態勢が整ったのは二十四日だった。翌々日には、ジャンクション・ピナクルの岩峰下にC3が設けられた。この頃より気温は下り、強風に粉雪の飛ぶ日が多くなった。

七月二十八日、悪天ではあったが、石原、吉田はC3から比較的傾斜の緩くなった南稜を登り、南峰直下の氷壁に登攀用ロープ六十メートルを固定してから南峰の肩に達した。更に東面の雪壁を登り、十四時三十分南峰に初登頂した。頂上は、恐竜

の背のような鋭い雪稜で、テラム側は垂直に切れ落ち、馬乗りになることも出来なかった。主峰と南峰のコルへは、南峰の肩から東面をトラバースする以外にないことを、ガスの切れ間に確めた。二十九、三十日とAC建設を試みるが、悪天のため途中で引き返した。毎日続く風雪のため食料は底をつき、C3でAC用食料の半分が使用された。

八月四日。天候はわずかに回復の兆しを見せた。最後のチャンスを明日のアタックにかけ、C3を出発した。天気はしだいに良くなってきた。そして、われわれは南峰の東面をトラバースして、主峰と南峰のコルにACを設け、四名の隊員がAC入りを果した。午後からは、久し振りに晴れ渡り、国境稜線の向うに連なるチベットの山波も夕日に赤く染まった。

好天の期待もむなしく、翌日、翌々日は、テントから一歩も出られない程の嵐が続いた。六日、撤退命令がACにトランシーバーで伝えられた。嵐の咆哮の中、ACを撤収し、下山を開始した。ところが、南峰のトラバースに入ると、雪が切れ始め、青空が見え出した。隊員の要請で、もう一日の猶予がアタック隊に与えられた。このトラバース・ルートまで下ってきて、長い高所滞在による消耗の為か、突然不調になった隊員を、そのままC3へ降しC3から一名上がり、ACは再び三名の隊員で占められた。

八月七日は穏やかに明け、稲垣、薮田、宮本は二時間三十分の容易な登行で、九時主峰に初登頂した。

おわりに

今回の登頂は、恵まれた天候に負うところが大きかった。アプローチから登山期間の前半まで、安定した好天が続いた。登山期間の後半は、長期の悪天に見舞われたが、食料の喰い延しをして、最後に好天のチャンスを掴んだ。その好天は、撤収からアリブランサに下山するまで続き、身心共に消耗しきっていたわれわれには天恵の到りであった。

予想を上回る現地での物価、特に輸送費の高騰はわれわれの予算を圧迫した。止むなく計画の縮少を計り、現地で再三隊荷の一部をデポした。学術用機器類等を山岳地帯まで持参できなかったことは心残りであった。隊員は、特に輸送に相当な労力を費したが、これは輸送費の節減に役立つと共に、高度順化の為に良かったと思われる。しかし、それが長期間に亘ったため、疲労を蓄積させることになったかも知れない。

種々の要因から、当初の全員登頂は成し遂げられなかったが、主峰に三名、南峰に二名が登頂し、全員が七〇〇〇メートルの高度を経験するという一応の成果を収め、全員無事に帰国できたことは幸運であった。

〈記録概要〉

活動期間　一九七六年五月～八月

目　的　アプサラサス初登頂

隊の名称　大阪大学カラコルム遠征隊

隊の構成　隊長＝三沢日出夫（36）、副隊長＝石原敏雄（28）
隊員＝栗原完治（33）、稲垣佳夫（28）、薮田勝久（25）、宮本敬正（21）、吉田真三（21）
医師＝三木哲郎（25）
連絡将校＝MO BASHIR AHMAD（23）

行動概要＝五月二十一日カパル発、サルトロ河、ビラフォンド谷を経て六月一日ナラム着。ビラフォンド峠を越え、シアチェン氷河を横断して、六月二十六日テラム・シェール氷河上にBC（五二〇〇メートル）を建設。七月三日C1（五七〇〇メートル）、二十日C2（六二〇〇メートル）、二十六日C3（六七〇〇メートル）を建設。七月二十八日C3より石原、吉田は南峰（七一一七メートル）に初登頂。八月四日AC（七〇〇〇メートル）建設。七日稲垣、薮田、宮本は主峰（七二四五メートル）に初登頂。十四日BCを撤収、往路を引き返し八月二十四日カパル着。

シンギ・カンリ登頂（一九七六年）

中津哲夫

一九七六年八月八日、東北大学山岳部・山の会が派遣したカラコルム遠征隊は、シアチェン氷河左岸の未踏峰シンギ・カンリ（七二〇二メートル）に西面スタガール氷河から初登頂した。以下はその記録である。

シアチェン氷河

七〇年代初期、ヒマラヤ登山の状況の好転に伴い、十年来温めてきた計画を実践すべく、前年われわれはシア・ラでシアチェン氷河と接するコンダス氷河に踏査隊を送り、現地事情などの情報を収集、翌年に備えて来た。

四月十九日、隊荷をカラチからパキスタン国内を移送させるため今井、豊水は羽田を出発した。つづいて五月十日から十七日にかけ登山隊員九名が現地入りした。今迄の忙しさに比べのんびりとした日を過ごし、比較的スムーズに二十八日C一三〇輸送機でスカルドに着く。既に連絡が行っていたのか荒涼とした空港の傍にジープ、トラクターが我々の到着を待っていた。各各に荷を満載、その上に人が乗り街に向う。レスト・ハウスの脇のキャンプ地には数隊が先着している。ここでジープの輸送に関し一悶着があり、リエゾン・オフィサーの提案で空送料金に関する抗議文を観光省宛送付する。後味の悪い旅立ちだ。

九台のジープの内一台が運転を誤り、シオーク河に転落、重傷の豊水を日本に送り返す。貴重な戦力を欠くも、以後は大きなトラブルもなかった。総勢一四九名のキャラバン隊をカパルーで編成、一路ビラフォンド・ラを目指す。好意的なリエゾンオフィサーとサーダーに恵まれ、加えて天候も安定して順調に日程が消化されていた。隊長を迎えたいというリエゾンをゴマ

に残し、ビラフォンド川を遡上する。サルトロ・カンリ、K12テラム・カンリとつづいた日本隊に対する印象は良い。モレーン帯を右に左に進み、チュミックに着く頃から雪が降りはじめ、ロー・ポーター全員によるアリブランサへの荷上げを断念、三分の一を使う。アリからは二十名のポーターを選び、シアチェン氷河上に設ける予定のBCへの輸送を行った。高度障害も、中津が寝込んだ以外は軽くすみ、ポーターも一部に頭痛を訴える他はすこぶる元気である。

ラッセルは踝からふくら脛と少く、クレバスも考えていたより遥かに少なく、落ちる者もなく氷河の状態はベストだった。六月末にはほぼ全物資がビラフォンド・ラに上り、そこからテラム・カンリを盟主に七〇〇〇メートル級の山々が聳えているのを眺め、湧き上る充実感を満喫した。

ベース・キャンプ

ゴマで引き返す隊長とビラフォンド・ラから交信に成功、決意も新たに隊員自らスノー・ボートに荷を載せ緩やかなだだ広いロロフォンド氷河をシアチェン氷河まで一気に下る。五五五〇メートルの峠越へのお陰で高度の影響は全くない。

シアチェン氷河に近づくにつれ、目指すシンギの頂上がみえてくる。しかし下半は相変らず前峰の陰に隠れたままである。残雪も少なく、氷が露呈しはじめているが、午前十時をすぎると水分を含みシャーベット状になる雪にビッショリになり、時にアフタヌーン・フラッドに行手を阻まれる。当初予定したシンギ内院、南東側からのルートはいずれも雪壁か、細く急な岩稜が一〇〇〇メートル以上の高距をもち、絶望的である。順調な荷動きに気を良くして中継キャンプを一つ増やしシアチェン氷河を遡上、スタガール氷河とシアチェン氷河を分ける尾根のどこかをショート・カットして西側に廻り込むことにする。七月十二日、ほぼ計画通りBCを完成させた。その労をねぎらい賃金を支払って、九月の再会を約し今日まで行動を共にしたポーターを帰す。

スタガール氷河

危惧しつづけた長いキャラバンを大過なく了え、あとはじっくりとシンギを陥すことのみを考えていればよく、隊員の士気も頗る昂い。とはいえ、スタガール氷河は全くの未知数であり、机上研究のときも半ば除外しており、唯一チョゴリザからのパノラマ写真で遠くに小さく見える広い雪の氷河として印象にある他に資料は全くないという状況であった。スタガール氷河に移るルートとして、尾根の最底鞍部、トルキスタン・ラの一つ東のコルに上ることを考えた。コルまでは五十度近い傾斜のカール壁を突破しなければいけないが、一様な雪の状態が期待でき、氷塊もどうにか避けることができよう。しかし不思議

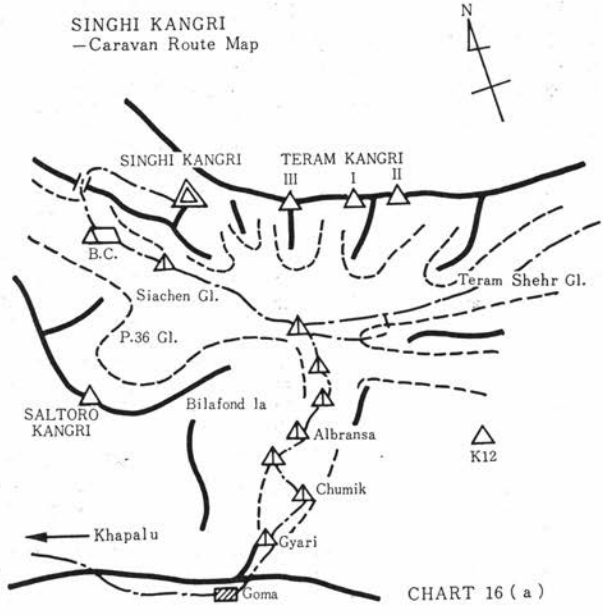


CHART 16 (a)

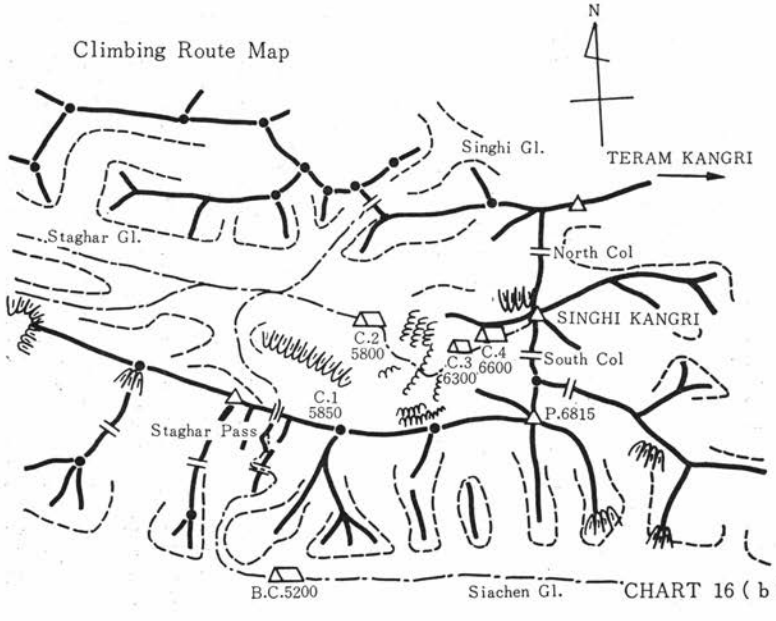


CHART 16 (b)

なくらいスタガール氷河への下降については何の疑念も抱かずいけるものだという幻想を描いていた。

BCからコルまで凡そ七〇〇メートルの高度差があり、壁の部分だけでも五〇〇メートルはある。計画の変更を決めるに先立ち送った偵察隊は十四時間かけ往復している。壁の右側は氷瀑のかかった壁をなし、一度は取り付いたが氷に追い返された。正面に中央稜と名付けた岩稜があり左にくの字型の鋭く美しい雪稜さらに左岩稜、左ルンゼと繋がり、シアチェン氷河に達する長い支尾根に連らなっている。偵察隊は、左ルンゼを詰めコルに達し、暗くなってキャンプに戻ってきた。ルンゼは降雪時の雪崩が恐ろしいのと、傾斜は強いもののくの字雪稜にルートをとることにした。

七時まではアイゼンが小気味よく効き、中央稜下部を搦め乍ら雪の小ルンゼ、雪壁を攀りくの字の基部に達する。雪壁の所所に氷が露呈しステップカットを行う。それ以外は適当な雪の堅さと量で不安なく通過できる。八時をすぎると、雪は水気を含み、もぐりはじめ、時折ザーと流れていく。ほぼカール底からコルまで切れ目なく七〇〇メートルのロープを固定する。下部のルンゼは一回の湿潤雪崩で埋没するだろう。七月中旬の天候の安定期を逃がさず、一人一日二十キログラムの負荷量で一気に九〇〇キログラムを、六日間かけコルからスタガール氷河側に少し下りたC1に上げた。

コルから尾根を辿ることは不可能であり、スタガール氷河に一度下り、シンギの南のコル目指し遡行することにする。しかし下降ルートの偵察一日目、二日目も芳しい結果は得られなかった。C1のある平坦地の端は切れ落ち、下降はコルへの上り以上にやっかいだった。しかし、ここまできたら手を拱ねいているわけにもいかない。大半の荷はC1に上ってしまっている。一度は滑車などの準備を考えた。けれども三日目になり、頂上と反対方向の支沢が容易なことが判り、ほっと胸を撫で下ろした。

スタガール氷河は幅二キロメートル程でシアチェン氷河に比べ河底は五〇〇メートル程高く、雪が深く積っている。陽射しが強くなると、股から腰までもぐり、行動時間は六時から十時迄に限られた。

スタガール氷河を二キロメートル程上流に登り、ほぼコルに届くルンゼ近くにC2を設ける。両岸共大きな懸垂氷河もなく雪崩の心配はない。ただ日中の暑さは耐え難い。ここまでくればあと一五〇〇メートル、C4を最終キャンプに頂上攻撃を行うことにした。

近年ヒマラヤも軽装備のラッシュ・アタックがみられるようになってきたが、やはりキャンプを一つ一つ設ける極地法に準ずる形式がもっとも確実で安全性は高い。殊に我々初めて七〇〇〇メートル峰を狙う者にとって調子やルートが良くても確実

に一つ一つ押えていくのが肝要だ。

C2からC4の間はさして困難もなく、六六〇〇メートルのC4に七〇キログラムの荷をあげ、六八〇〇メートルまでの偵察を済ませ、いよいよという段になって、一カ月続いた好天が去り、全員C2に足留を食った。それまでの天気推移から推し量り、二、三日で回復するものと高を括ったが、多くの隊の報告にあるように、一週間も悪天に見舞われ一メートル以上に達する降雪に各キャンプとも埋没するしまつだった。

八月四日、一度は出発の準備をするも再び天候悪化、テントに寝たきりの生活も限界に近い。しかしながら、とうとう七日、高橋他二隊員の第一次攻撃隊、手塚他三隊員の第二次隊が快晴の下C2を出発した。この日、高橋らはC4に入り、手塚らはC3（六三〇〇メートル）に泊る。

登　頂

明けて八日、雲がかかり昨日までよく見えていた頂上はC2から見えない。ここまでくれば攻撃には最良の日とはいえないでも、高橋達は出発した。高橋隊長は登頂の模様を以下のように記している。

「午前二時。高橋、片山、今井三名とも高度の影響のためか、アタック前の緊張のためか、よく眠れないまま起床。外は暗く高曇りのようで、下は雲海だが頂上は確実に見える。いつも真下に見えるC2は雲の下だ。C2は出発をためらっているらしい。偵察のとき六八〇〇メートルまで登り、頂上までのルートに自信をもっていたし、行ける日には行けるとこまで行ってみよう、進めなくなったらいつでも引き返せば良いと思い、出発する旨、C2に連絡する。五時片山、今井、高橋の順でアンザイレン、テントを後にする。六八〇〇メートルへは三十度の雪の斜面を通過、六時、先の最高到達点に着く。K2、ガッシャブルムは雲の中である。傾斜も落ち雪原になり、ラッセルも足首以上になる。七〇〇〇メートルからは左の中国側に大きな雪庇が発達し、右のシアチェン側は雪の急斜面で、シンギ内院に落ち込んでいる。風が強いためか斜面は堅く、所々こぶのようになって雪が固まっている。トラバース気味に先を急ぐ。近づくにつれ頭の中で考えている程ピッチが上らなくなってきた。十時三十分待望の頂上に、片山、今井、高橋の順に立った。

頂上は、中国側、テラム側は切れ落ち、シアチェン側は急傾斜で落ち込んでいる。西側には今まで登ってきた尾根がつづいているが、畳程の平坦地が頂上らしい頂上である」

翌日、手塚、塩原、古谷の四隊員が第二登に成功した。

帰　国

スタガール氷河をシンギ氷河の出合が見える地点まで下降、トルキスタン・ラ往復、テラムシェール氷河からイタリア・コ

ル往復、と登山以外の成果も多く得て、迎えにきた二十名のポーターと共に来た道を帰る。スカルドからのフライトは天気待ちもほとんどなくスムーズに運び、十月初めには全員元気に帰国した。

計画のルートを大きく変更して、迂回する結果となったが、天候とルートに恵まれ、七名もの登頂を果たすことができた。これは計画遂行に先立って決めておいた基本線に沿って行動ができたこと、よいポーターに恵まれ長いキャラバンにもかかわらず、ほとんどトラブルらしいこともなく進めることができたことによる。加えて隊付のリエゾン・オフィサー、マブーブ少佐は我々に対し非常に好意的であり、終始隊の立場を考慮して行動してくれ、そのため多くの好結果を得ることができた。サーダー三名の内ジャファールはポーターの信望も厚く、論的理に物事を考え得る男であり、オラム・アリも前年からの知己ということもあり我々と言わば対等の立場で付き合え、それらがいい方向に反映していた。この年のどの隊と比べてみても決してよい条件とはいえず、むしろ劣っていたにもかかわらず、予定通りの行動がとれたことは彼等の力に負うところが大きい。

〈記録概要〉

隊の名称　東北大学カラコルム遠征隊

活動期間　一九七六年五月～十月

目　的　シンギ・カンリ（七二〇二メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝佐藤春郎（55）、登攀隊長＝中津哲夫（29）隊員＝秋山康夫（29）、高橋昭平（27）、手塚重久（27）、今井順一（24）、片山正文（24）、*金森安孝（23）、塩原匡貴（22）、大平和宣（22）、**豊水正昭（22）、古谷信之（22）篠原義則（20）

*学術隊員　**負傷帰国

行動概要　五月二十八日スカルド着。三十日ジープでカパルに向う途中一台が川に転落し、重傷を負った豊水は帰国する。一三七名のポーターと共にカパルを出発、五日目ゴマに入る。ビラフォンド・ラを二十名のポーターと共に通過し、七月十二日シアチェン氷河上のBC（五二〇〇メートル）に全物資集結。十八日C1（五八五〇メートル）を建設。二十三日スタガール氷河上にC2（五八〇〇メートル）建設。二十七日C3（六三〇〇メートル）建設。C4（六八〇〇メートル）への荷上げ完了後に天気悪化、八月六日まで全員C2に停滞する。八月八日高橋、今井、片山がシンギ・カンリを初登頂。九日手塚、大平、塩原、古谷が第二登。八月二十一日BC帰着。九月十二日スカルド帰着。

報告書　『シンギ・カンリ登山報告書』東北大学カラコルム遠征委員会編（一九七六年刊）

バルトロ・カンリ（一九七六年）

高原三平

登頂記

一九七六年七月七日、午前三時三十分、満天の星のもと、阿部、矢萩、末木、戸山の四名はバルトロ・カンリⅠ峰を目指してC4を出発する。サポート隊の阿部、矢萩はⅣ峰とⅤ峰のコルまで先にトレースして末木、戸山と合流。四名でⅣ峰に登頂。そのままⅢ峰まで足を延ばし、午後一時に頂上に立つ。Ⅲ峰からⅠ峰へのルート中にはアップザイレンを必要とする場所もあり、しかもロングコースなので、止むなくサポート隊はⅢ峰の肩に待機して、Ⅰ峰アタックの二人が帰るまでにザイル工作をすることとする。

酸素なしの七〇〇〇メートル地点でのアップダウンはかなり苦しい行動で、前夜の睡眠不足も手伝って、スピーディーな行動はできない。Ⅲ峰の肩からアップザイレンでⅡ峰とⅢ峰のコルに降り立ち、そこよりⅠ峰への長い登りが始まる。

約四時間の苦しい雪稜登攀を強いられて、午後四時五十分に待望のⅠ峰山頂に辿り着いた。目の前にK2、ガッシャブルム兄弟峰、ブロードピーク、チョゴリザ、又遠くにはマッシャーブルム、ムスターグタワー、サルトロ・カンリ、シェルピ・カンリ等の山々が一望できる。Ⅰ峰頂上に隊員の名を記した日章旗とパキスタン国旗を埋め、帰路につく。Ⅱ、Ⅲ峰のコルまでは快調に下れたものの、Ⅲ峰への登り返しはきつく、サポート隊の工作に助けられながら、午後八時Ⅲ峰の肩で待つ阿部、矢萩と合流。当初はビバークを予定していたが、格好な月明りを利用してC4まで戻ることにする。一歩一歩確実に、登りのトレースと赤旗をたよりに進む。好天に恵まれたアタックとは言

え、二十時間以上に及ぶラッシュ攻撃でくたくたに疲れ、C4の天幕に転がり込んだのは午前一時（八日）をいくらか回っていた（戸山隊員記）。

こうして我々はバルトロ・カンリⅢ峰よりⅠ峰への初縦走に成功した。

登山隊について

今回の登山隊の母体となったのは、芝浦工業大学体育会山岳部・OB会である。山岳部・OB会としての歴史は古いのだが、海外登山の経験は浅く、一九六六年のペルーアンデス、一九六七年の台湾合宿があるに過ぎない。当然のことながら、遠征隊を組織することに長けているとは言えないであろう。しかしペルーアンデス遠征以後、次はヒマラヤ登山ということで、一九七〇年頃より若手OB現役部員の間で計画はされたのだが、様々の理由により実現する迄に至らなかった。その間数名の者が当学以外の組織に加わり、持ち帰った体験が拡まり、再びヒマラヤ熱が活発化してくる。カラコルム地域の解禁を契機として、どうしても行きたいという若手OB・現役部員が集まり、一九七四年十一月にカラコルム委員会を設置した。そして前回の実現できなかった問題点を検討すると同時に、一九七六年の出発を目標に計画を煮つめていった。

バルトロ・カンリについて

我々はどうしてバルトロ・カンリという山を選択したのだろうか。山を決定した考え方は隊の性格をよく表わしているように思われる。メンバーとして集まった全員に山は遊びであるという考え方が根底にあった。従って計画を進めるにあたり、全員の責任範囲において行動するという制約が生じたのは当然であった。しかし全ての事について責任を持つということに対して、我々の力は不足していたようだ。

山の選択については、次の二点について全員の統一見解を得た。

一、バルトロ氷河をアプローチとすることができる山であること。

二、全員ができるだけ高度を稼ぐことができて、尚かつ登頂可能な山であること。

バルトロ・カンリが決定される迄に時間は必要としなかったが、我々にとってバルトロ・カンリでなければならないとか、初登頂の山でなければならないといったことは必要条件ではなかった。これはヒマラヤ経験の無い我々にとっては、ごく自然な流れであると思う。いろいろの山が登られ、又登り方も以前とは相当違ってきた昨今ではあるが、我々にとってヒマラヤは新鮮なのだ。

山が決定したことより、ある限られた予算で実行しようとする時に、いくつかの制約条件がでてくる。これらの条件を適確に把握するのが海外登山において一番難かしいことであろう。様々な過程を経て考えられた案は次の七項目であった。

一、登山隊総予算　一六五〇万円

二、キャラバン開始時の荷重四・五トン

三、キャラバン開始時のポーター数　一六〇人

四、登山活動にハイポーターは雇わない。

五、キャラバンは現地食を主にする。

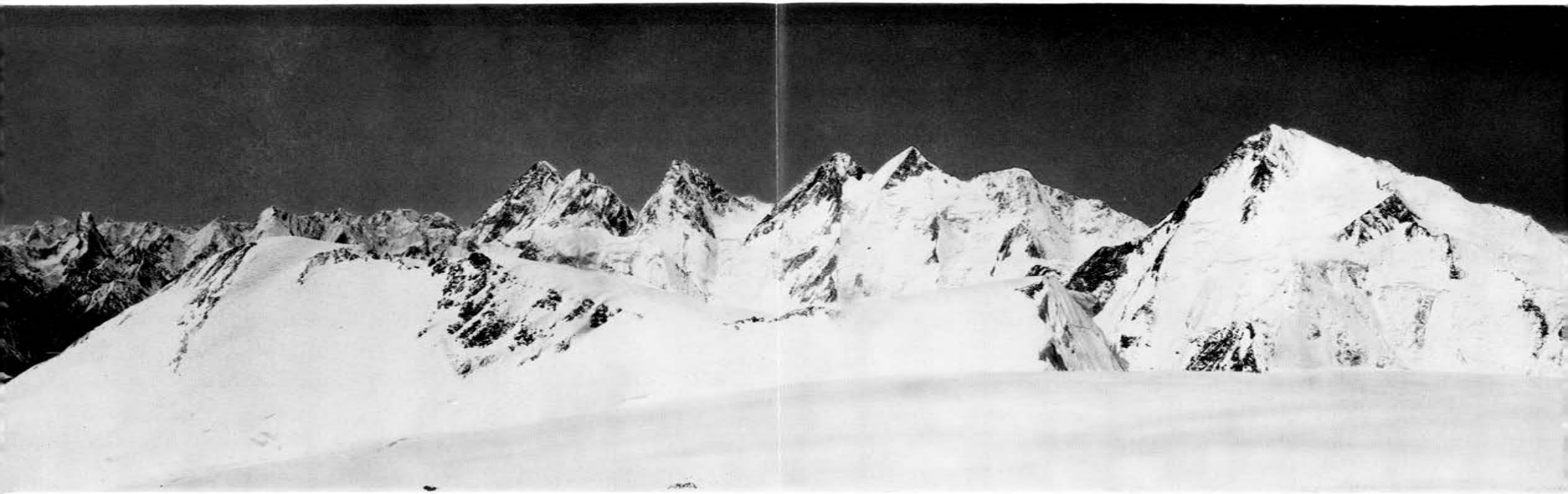
六、登山活動に酸素使用はしない。

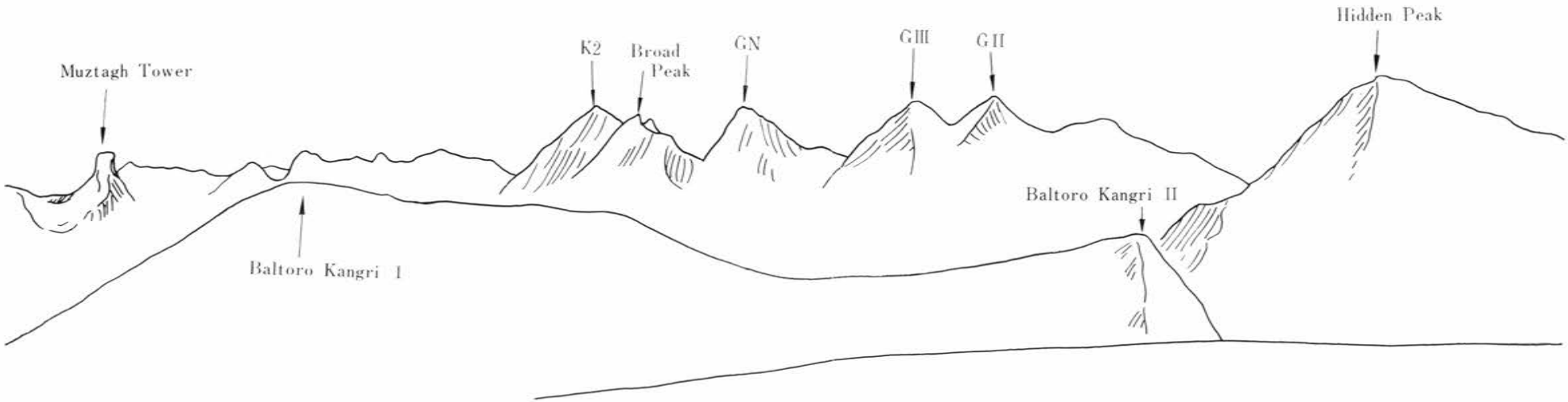
七、登山日数を四十五日とする。

登頂できた直接原因としては、天候に恵まれたこと、予想外に高所順応がうまくいったことなどがあると思う。しかし何といっても、次から次へと出てくる問題点に対しての対策が、各メンバーから随時出されたからではなかろうか。

バルトロ・カンリの高度について

G・O・ディーレンフルトの新高度表ではバルトロ・カンリⅠ峰が七三一二メートル、Ⅱ峰が七三〇〇メートル、Ⅲ峰が七三一〇メートルとなっており、一九六三年、東大隊の記録によればⅢ峰が一番高いとされている。バルトロ・カンリを考えた時、標高の解明に興味をもち、Ⅳ峰からⅠ峰まで縦走したらど

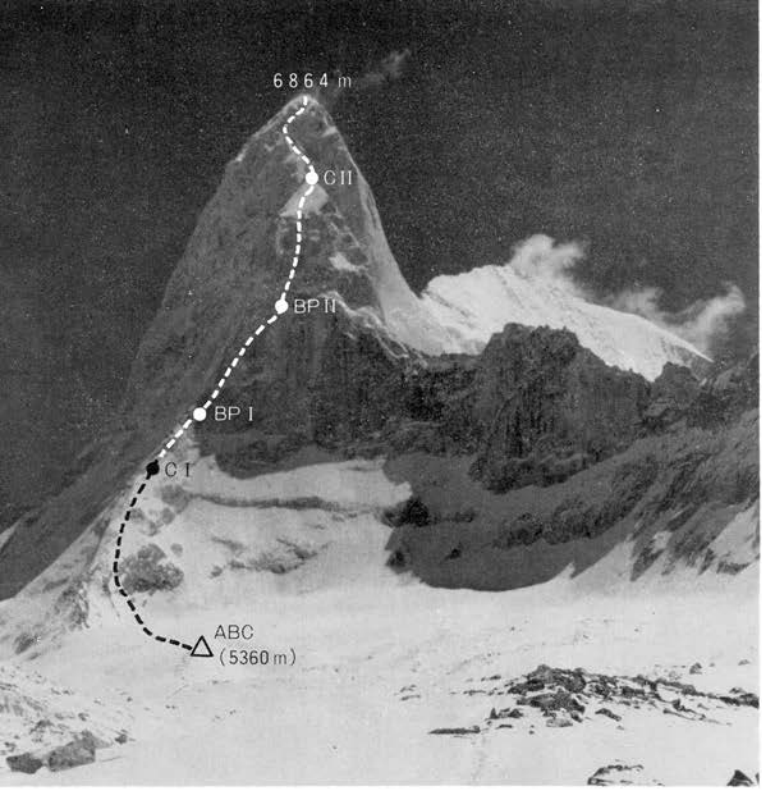




(Fig.23) バルトロ・カンリIII峰頂上よりの展望

Panoramic view seen from the summit of Baltoro Kangri III

(by S. Takahara)



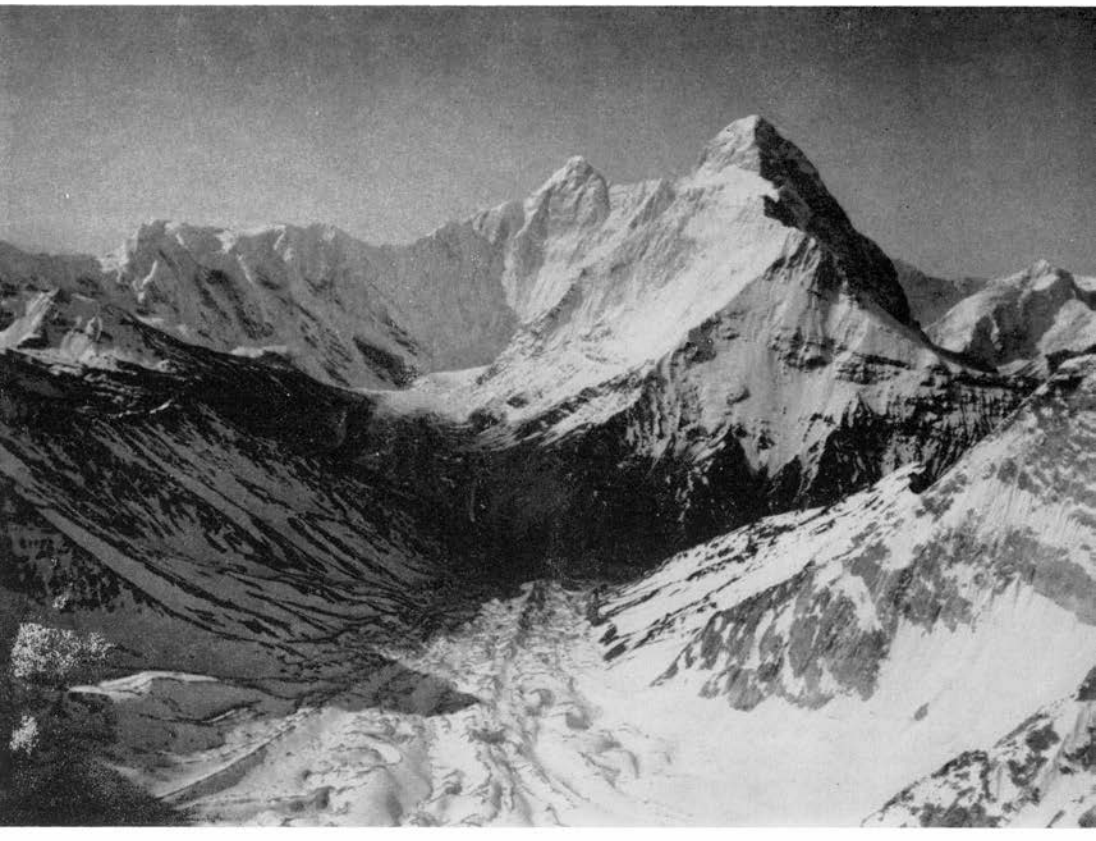
(Fig.24)
ラマニ氷河から望むチャンガバン(6,864)
Changabang seen from Ramani Glacier
(by N. Toda)

(Fig.25) チャンガバン頂上ドームの登攀
Climbing the summit dome of Changabang (by N. Toda)

(Fig.26) チャンガバン南西岩稜の核心部垂壁

Changabang : vertical wall on the center of south-west ridge.

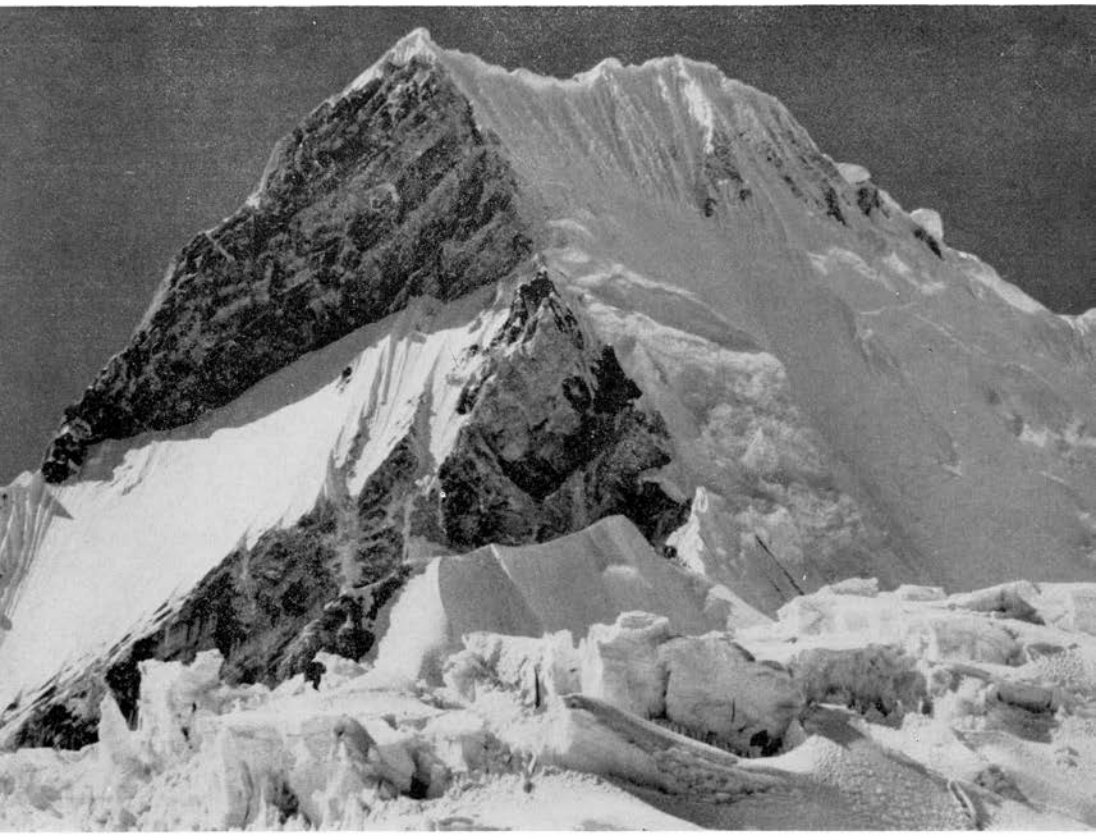
(by. N. Toda)



(Fig.27) チャンガバンC2より望むナンダ・デヴィ北面

Nanda Devi north face seen from C2 on Changabang

(by. N. Toda)



(Fig.28) イエルパハー(6,634)北西壁(左、三角形の岩壁)、頂上は右奥
North-west face of Yerpaja (6,634), summit on the right back side
(by. I. Kakimoto)

うだろうという考えが浮かび、未踏のⅠ峰まで行けば、この点が解明できると信じた。

実際に現地へ行き、コンウェイ・サドル付近から見上げると、Ⅱ峰がヒマラヤひだを持った立派なピークに見える。Ⅲ峰よりも高い感じがする。我々が携行した高度計でⅣ峰は約七二一〇メートル、Ⅳ峰の肩からはⅠ峰がⅢ峰に隠れてしまい、Ⅲ峰とⅠ峰はどちらが高いのか確認できない。Ⅱ峰の頂上で七三一〇メートルを高度計は指し、Ⅲ峰はかなり低く、Ⅰ峰も低く見える。Ⅱ峰はピークというよりはむしろ、主稜線からアブルッツィ氷河に派生している尾根のジャンクションに過ぎない。Ⅱ峰からⅠ峰までは、緩くなだらかな登りで、長い稜線が続く。Ⅰ峰の最高点で高度計は七二六〇メートルを示し、Ⅲ峰よりは五〇メートルほど低かった。この高度計はアブルッツィ氷河上五一〇〇メートルのキャンプで調整したものであり、気圧、その他による誤差を考えれば、高度計の目盛は正確でない。しかし四つのピークを歩いて判明したことは、一番高いピークはⅢ峰であり、次に高いピークはⅠ峰もしくはⅤ峰であって、Ⅱ峰、Ⅳ峰の順となる。従ってバルトロ・カンリの主峰はⅢ峰であることを明らかにしたい。

〈記録概要〉

隊の名称　芝浦工業大学カラコルム遠征隊

活動期間　一九七六年五月～八月

目　的　バルトロ・カンリⅠ峰及びⅡ峰初登頂、Ⅲ峰登頂（二登）

隊の構成　隊長＝秋山知也（30）、隊員＝高原三平（28）、戸山芳一（26）、阿部正博（25）、佐々木信也（24）、矢萩清（22）、末木元（22）、佐久間泰雄（19）、隊医＝高原和享（29）（昭和大学医学部）連絡将校＝モハマド・ラシド（24）

行動概要　五月四日ラワルピンディ集結。五月二十七日スカルド着。六月二日アスコーレ、六日パイジュ、九日ウルドカス、十二日コンコルディアとキャラバンを進め、六月十四日にBC（五一〇〇メートル）建設。アブルッツィ氷河上よりコンウェイ・サドルにルートをとり、六月三十日にC3（六五〇〇メートル）を建設する。戦法をラッシュ式として、七月六日にC4（六九〇〇メートル）建設。七月七日にⅣ～Ⅰ峰の初縦走に成功。七月十一日CⅣ、CⅢ七月十二日CⅡ十七日にはCⅠを撤収。七月二十六日に帰路キャラバン開始。八月五日スカルド着。八月七日には再びラワルピンディに集結する。

報告書　芝浦工業大学体育会山岳部・OB会カラコルム委員会編『バルトロ・カンリ　七六』（一九七六年十月二十二日発行）

チャンガバン南西岩稜（一九七六年）

戸田直樹

キャラバン

四月二十五日早朝、ラタ部落下の車道は時ならぬ人で、大にぎわいであった。トリスルへ向うインド隊の後発は、ダランシ・パス越えのラッセル中の先発を追って、ラタカルカに向う準備に追われている。そこへ日印合同ナンダ・デヴィ隊のトラックもやってきた。これではキャラバンを開始したくとも、前後を大遠征隊にはさまれ、身動きできない。インド隊員のいない小パーティの我々が一番しんがりにされてしまうことは、目に見えていた。

思い悩んだ末、大きな賭けをすることにした。それは、まだどの遠征隊も通過したことのない、リシ・ガンガ下流部の遡行をし、ノーマル・キャラバンルートに合流することである。こんな時、大きなバックもスポンサーもない代りに、自由と機動力を持つ強味が発揮される。

前年の偵察隊から「ポーター不足」を聞かされていたが、ネパールからの出かせぎポーターを五十人雇い入れ、問題を解決、現地のポーターと合わせ、総勢八十人程でリシ・ガンガの入口レニの部落を出発したのは、二十五日の昼過ぎのことだった。

第一日目のキャンプ地、パディングの対岸までは、しっかりした石だたみの道がつけられていた。翌二十六日、はじめから黒部峡谷が思い出されるようなへずりから始まり、この日二ヶ所に橋を掛けた。両岸には岩壁がそそり立ち、ちょっと見たところではどこに道があるのかさっぱり判らないが、所々くずれてはいるものの小道が続いていた。しかし、いつその道がなく

なってしまうか、心配でしようがなかった。そんなわけで、二十八日、先行していたトリスル隊をだし抜いて、ディブルゲーターに一番乗りした時のホッとした気持は、今でも忘れられない。帰路、ダランシ・パス越えをしたが、今回のリシ・ガンガ沿いのアプローチの方が、比較にならない程すばらしいルートである。

三十日、ネパール人を解雇して、二十人程のポーターと共に、マラディオディ～バギニ、バギニ～ベース間のピストンボッカを開始する。ABCが五四〇〇メートルとずい分高くなるので、隊員達には充分な高度順化の為の、かっこうな訓練となった。

五月八日に、今まで、ラマニ氷河に入って来た隊がBCを建てた地点（四八〇〇メートル）への荷上げを終る。だが私達は、そこをBCとしていては、とても登攀どころではなくなるので、もう一つ上部のキャンプをABCとした。翌日よりABCへの荷上げを、八人のポーターと隊員とで行ない、十六日には全物資の集結と整理を終え、半月遅れで登攀基地ができあがった。

登攀開始

予定を大幅に遅れていたので、ABCへの荷上げと平行して、十二、十三、十五日と、二名の隊員によりC1のルート開拓を行ない、十七日には調子が悪くBCに残っている二名を除いた全隊員で、C1の建設に向った。

ABC（五三六〇メートル）から十分程で南西岩稜に取りつき、五五八〇メートル地点から固定ロープを張り、九ピッチで予定地（五七五〇メートル）に到着。さっそく氷壁を切り崩し、ボックステントを張る。登り二時間弱、下りは三十分と、思ったよりスムーズにC1まで行けたので、十八日はABCに下ってから、再びフィックス開始地点までの荷上げを行なった。

翌十九日から二名がC1に泊り、上部ルート開拓、他の二名が一往復半の荷上げを二十一日まで行なった。連日天候も安定し、ルートも順調にのびているので、二十二日は久々の全員休養をとっていたところ、昼近くなってC1より会田がひとりで下ってきて、大野が雪盲になったことを告げ、再び戻って行った。こんなところが、今どき珍らしいトランシーバーを持たぬ隊の弱みである。二十三日には、調子の戻った狩野がBCより上って荷上げに加わった。

二十四日、戸田、会田にて、急な雪稜一〇〇メートルを二ピッチで登ると、稜は消え氷壁の登攀となった。いきなりカチン、カチンの青氷である。「アンデスの氷は世界一かたい」と言うが、とてもこれだけの氷には、出合わなかった。この日も、これまでと同様三ピッチのルート開拓を終えた。二十五日そろそろキャンプサイトを見つけなければならない、期待をも

って岩と氷のミックスした壁を登ったが、そこは狭い岩棚でしかなかった（五九五〇メートル）。そこから上部は全くの岩壁で、おおいかぶさる様な威圧感をもっている。とてもテントを張れる様な所などない。やむを得ず、五八七〇メートル地点にある、小さな岩陰を整地し、ツェルトを一張はった。このBP1は、一人はかろうじて背筋をのばして座っていられるものの、もう一人は背を丸めなければならぬ程低く、狭かった。

二十七日、BP1に泊った戸田、大野により、岩壁帯のルート開拓に入る。花崗岩のすばらしい登攀である。

二十八日からは、BCに残っていた浅野も荷上げに加わり、やっと全員がそろった。ルートも順調にのび、雪のバンドに出、これを南壁側に四十メートルいっぱいトラバースした地点を、BP2の予定地とする。翌日は、朝からめずらしく小雪が舞っていたが、雪のバンドから二ピッチ、前傾したフェイスをきわどいバランス・クライムで登った。

ABCからあおぎ見るところでは大した進歩もないが、何事も忘れ好きな山のことだけを考え登っていられる幸福感に浸りきっていた。

垂直の大岩壁

BP2（六一〇〇メートル）は、幅四十センチほどで、とても横になれる場所ではない。ボルト陣を作り、特製ツェルトを張る。これは内側からセルフ・ビレーがとれ、つねに天井から吊られている状態になれる。足もとはラマニ氷河まで一気に七〇〇メートルも切れ落ちている。

三十一日、腰かけたままのきゅうくつなビバークを終えた、小林、大野によりルート開拓が開始された。ボルトはほとんど使わず、クラック通しにルートをとるので、所々複雑なザイル処理が必要だ。二日には、戸田、会田がBP2に入った。すべての物がツェルト内のビレー用シュリンゲに吊られているが、さっそくその一本にビレーをとり、腰をかけたままの姿勢で食事をすませたあとは、ビレーシートに足をのせ、不自然な姿で眠りについた。

三日、十ピッチのユマーリングをつづけすさまじい高度感の中で高度を上げて行く。最高到達点から、凹角を直上。小ハングを越え浅いジェードルを登って四十二ピッチ目、大きな岩盤が今にもはがれそうな所を直上すると、目前に無気味な大氷壁がひろがっていた。やっとアイスキャップに達したわけだ。ガスの切れ目から私達を見つけたのか、ABCからの歓声が聞こえてきた。この核心部こそ、チャンガバン登攀そのもので、正真正銘の岩登りであった。

六月四日、C2用テント、食糧、ザイルなど七十キロ以上の荷を四つの荷上げ袋と二つのザックに入れ、BP2を出発。三ピッチずつ二人で交替しながら荷上げを行った。息ぎれがはげ

しく、脱力感になやまされた。十三ピッチ目、アイスキャップ下には、前日と同じ十七時に到着。そのまま氷壁に四ピッチのザイルを張り、荷上げに二往復した末にC2（六四八〇メートル）を設営したのは、二十二時半すぎのことだった。一日で三日分の仕事をやり終えた感じで、テントの中に転がり込んだら二人共何もする気も起きなかった。

全員登頂

六日、日本の冬山を思い起こすような風雪だったが、ボニントンの手紙に「通過は非常に困難……」とあったジャンダルムの登攀にかかった。スッパリと切れ落ちた東壁上部の細いバンド六ピッチで稜上に出ると、そこからナイフエッジの氷稜、雪壁、岩塔があいついで続いていた。しかし、寒風に吹かれながら、ナンダ・デヴィの奥にそびえるアピ、サイパル山群、ニルカンタやガンゴトリの山々に見とれる余裕も出てきた。そして、ドゥナギリの頂に夕陽が沈むころ、ルート開拓を中止してC2に戻るのであった。

十二日、戸田、大野により最後のルート開拓が頂上直前まで終了した。固定ロープは総計六十六ピッチにおよんだ。

六月に入り、全員休みなしでルート開拓、荷上げとがんばった甲斐があり、十三日には、小雪の降りしきる中、そろって頂上に向った。雪庇の出た雪稜をたどり、十三時すぎ、全員が頂上（六八六四メートル）に立った。

十四日、前日以上の風雪の中、二張りのツェルト、一張りの天幕を撤収、ザイルを回収しながら無人のABCに下った。十六日には一ヶ月ぶりにBCに下り、十九日にジョシマートに帰り着いた。

おわりに

はじめの一週間ほどは順調にルートがのびていたにしろ、全体から見るとその進展は遅々たるものだったので、これじゃいつになったら登れるのかなあと不安だったが、岩壁部分に入って好調さをとりもどし、半月経った成果は自分達でもおどろくほどのものだった。アイスキャップに出た時には、全員登頂を皆確信していた程だった。だがジャンダルム登攀に思わぬ苦戦をし、やはり相当手ごわいという感じを強くした。

振り返って考えてみると、「登頂しなければ……」といった見栄や外聞を気にしないで済む私達にとって、毎日好きな岩登りをやっていられたことこそ、一生忘れられないすばらしい経験だった。

＜記録概要＞

隊の名称　チャンガバン登攀隊一九七六

活動期間　一九七六年四月～六月

目　的　チャンガバン南西岩稜の登攀

隊の構成　隊長＝戸田直樹（26）、副隊長＝小林明（27）、隊員＝会田雅英（26）、大野晴美（25）、浅野幸男（23）、狩野輝好（23）

行動概要　4月25日ジョシマート発。リシ・ガンガを遡行、4月29日ディブルゲータ到着。4月29日マラ・ディオディ着。これよりピストンボッカをくり返し、5月8日BC（四八〇〇メートル）、5月15日ラマニ氷河上にABC（五三六〇メートル）建設。6月4日二〇〇メートルの垂壁を越え、C2（六四八〇メートル）建設。6月13日C2より全員登頂。6月14日各キャンプを撤収、ABCに戻る。6月16日ABCを撤収。6月19日ジョシマートに帰着。

報告書　『チャンガバン登攀隊報告書』（一九七七年刊）

アンデスの太陽の下で（一九七六年）

柿本育夫

ワンドイ南峰南壁登攀

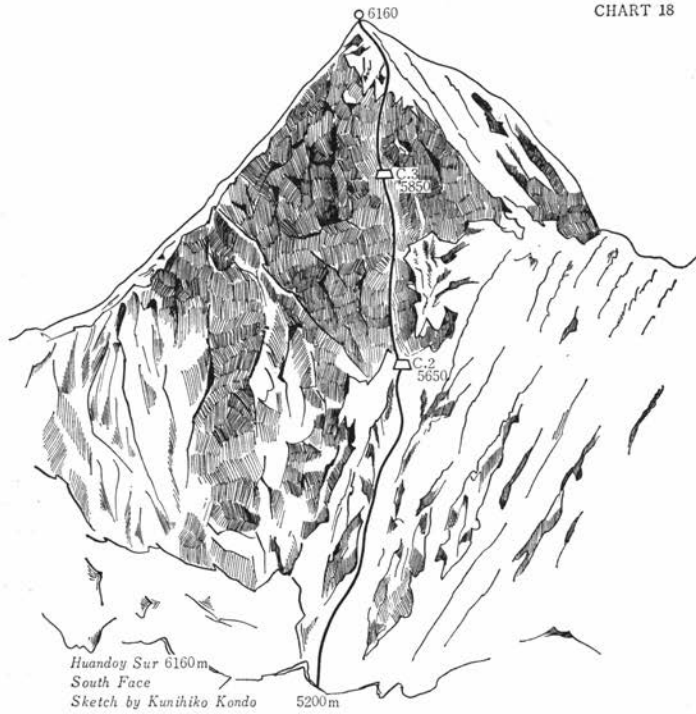
長く煩雑な準備に追われ続けた日々、この苦労なんで無為に終わらせようかと自分に言い聞かせたことも、六月三日ヤンガヌコ谷にテントを設営した時点で、過去のものとなった。山中深く入っても泥棒に悩まされ、テントを空にできない国民性には納得できないとしても、この大自然の中で行動できる自分の幸せを喜ばずにはいられない。

ペルーアンデスの課題とまで騒がれているワンドイであってみれば、他の隊とかち合うことも考えなくてはならなかったが、イタリア、フランス、我々と三隊の競争になろうとは想像もしなかったことである。加えてイタリア隊から合同登山の申し入れを受け、断わるのに一苦労という場面まで出て来た。

過去何隊かによってこの壁は中央部までは登られている。残る課題は上部五〇〇メートルの急な岩壁帯である。日本で手に入る全ての資料を検討し、対策は立てて来たものの、現場を仰ぎ見た瞬間はお互い顔色が変っていた。しかしC1、C2と建設が進むにつれ、生来の登りバカ精神をとりもどし、皆に明るさと余裕が出てきた。

氷河台地からいきなりそそり立つ急斜面は、フィックスロープのおかげで能率が大いにあがった。上部岩壁基部に達してC2設営、落石をさけるため氷を掘って氷洞を掘った。このC2は鳥の巣そのもので、何をするにもフィックスロープがたより、毎日のおつとめさえ苦行であった。

C2から、見あげてルートをさぐるも弱点がない。一度左よりに下り、バンド状を斜上するルートはイタリア隊がとる。と



すれば、覆いかぶさる岩壁に得られるルートはダイレクトルートしかない。ボルトとハーケンを無数にたたきこみ、一センチ一センチと高度をかせぎ、頂上までの四百メートルを勝ちとることにする。荷上げは、二百メートルロープで一気に上げる。二十キロの荷物とロープの重量、垂壁とはいえ、岩との摩擦で、三人で引上げても「死の荷上げ」と名付けたほどの難行だが、他に方法などあろうはずもなく、一日一回と決めてどうにかアタック隊の装備と食糧を上げることに成功した。又、岩壁帯では水が乏しく、C2から上げなければならない。我々はC1で濃縮調理した食糧をパック詰めしC2に上げ、壁でとれるわずかの氷をとかし適当な味にして食べることにした。

三人のアタックメンバー（近藤、林、吉野）は、全く太陽のあたらない南壁をじりじりと攀じる。上部はハング気味で、ルートの見通しはC1の指示によるしかない。人工テラス（特別製）を徐々に上げ、止り木生活をくり返して前進、六月二十六日、ワンビバークの覚悟で頂上アタックに出発した。この日、頂上付近は終日ガスに覆われ厳しい一日であった。

C1でも、夜がふけるとともに一段と気温が下ってくる。やっと真夜中に交信、氷を削ってどうにかヒバークできそうだと

伝えてくる。このアルバイトにもかかわらず三人とも元気だ。深夜遅くまで行動し不安定なヒバークをすごしても、彼らのことだ、明日は元気に頂上に向うにちがいない。

六月二十七日は快晴に明けた。夜明けとともにプリズムをのぞく。全く計画通りの位置にいるのには驚いてしまう。天候は我々の登頂を見守るように風もなく雲一つない快晴。八時過ぎいよいよ出発。残り少ないピトンを気にしながらも確実に高度を稼ぎ、稜線に抜け出る。そして十一時四十二分頂上に立った。全員の苦労はここに報われたが、こみあげるものもなければ興奮もない、ただ何の事故もなく、伊、仏両隊とのトラブルもなく完登できたことが非常にうれしかった。

完登後直ちに撤収に入る。C1の二名はBCへの荷下げ開始、アタック隊は登りのルートをそのまま下降ルートとし空中懸垂四〇〇メートルで無事C2帰着。さらに極度の疲労をおして、よれよれでC1までたどりついた。アタック隊収容のC2メンバーはC1経由一気にBCまで荷下げする。全員精力的な行動でBCに集結完了したのはは、六月三十日であった。

BCには入れかわりたちかわり伊仏両隊のメンバーが祝福に訪れる。特にR・ドメゾンに握手と共に「ベリー・グッド・ルート」とほめられたには照れてしまう。せっかくの訪問者と意志を通じ得る語学力もなく「サンキュー」、「グラシアス」のみなのが残念だった。

チャクララフ東峰南壁登攀

ワンドイのBCで一週間の休養の後、七月八日チャクララフに移動、南面の牧場の一角、四四〇〇メートルにBCを設営する。東峰南壁が眼前にそそり立ち、ふり返るとチョピカルキ、ワスカランがどっかりと坐している。足もとには小さくも色とりどりの花が咲き、まことに快適なBCである。

翌日六名で偵察、危険をさけ、正面壁との間に大きなクレバスをはさんだ五一〇〇メートル地点をC1予定地とする。不安定なクレバスにはフィックスロープを張り整備する。明けて七名で荷上げ、C1を設営した。

ルートを目で追い、これなら一気に、と思ったその夜から風雪となり、二日間停滞、天候回復後再びたどったC1への行程でも一度ならず雪崩が発生、手綱をしめろとの自然の警告か。幸いにもC1は健在であった。もり上がった位置の為、降雪が風にとばされたか、それとも降雪が少なかったのだろうか。この日、チャクララフ用に編成した三班のうち一班三名がC1に入り、翌日から約五百メートルの氷壁にルートを開くことになる。

ヒマラヤ襞の発達したこのルートでは、速やかな行動が安全につながる。見上げる視界一杯の巨大ブロックが、いつ落下するかは神のみぞ知るだ。慎重に大胆に第一班は高度を稼ぎフィ

ックスロープを張る。二日で氷壁を突破、上部岩壁基部の氷のナイフリッジを削って、C2を設営した。第一班三名、第二班二名がC2へ荷上げを行い、そのまま上部のルート工作にかかる。風の中、頂上に続く凹角の垂壁にべっとりとついた氷に手こずりながらも、この難関を突破、頂上への見通しをたてた。

一方重苦しいガスの中を荷上げ中の三名は、五百メートルの氷壁直前のシュルンドで待機中、いきなり雪煙と豪音に見舞われる。上部ブロックの崩落による雪崩だ。後日このスケールの大きさを見、幸運に胸をなでおろしたものである。

七月十九日、C2の二人（近藤、吉野）は東峰頂上を目ざした。チャクララフは全員頂上に立つことを申し合わせていたので、ザイル工作、ルート整備も行いながら登る。十四時三十分登頂。目前の西峰とこれを結ぶ稜線の雪の芸術はすばらしい。快晴の頂上で写真撮影の後、ゆっくりと下降、C2入りした三班にアドバイスして、C1まで五百メートルの氷のすべり台を一気に下降した。

翌日は三名が頂上をめざす。この日、一名が調子をくずし二名（林、橋本由）で頂上に立った。翌々日、C2より頂上に向った三名（石井、橋本勝、真鍋）は、氷の凹角で落石にみまわれ、トランシーバーをこわす。BCでは、ルートは整備されているし、天候も悪くない（ただ頂上付近はガスで見えない）ので、トランシーバーの故障と断定してかかるが、夜になると気にかかり、明朝登ることを話し

あう。この心配も夜中三人がBCに帰着して終りとなった。

こうして、余裕のうちに七人を頂上に送り、チャクララフ登山を完了した。メンバー個々の力が、思い通りこの山に通用し、実働十日間でこの南壁が我々のものとなった。皆の表情は底抜けに明るい。ここで一息つき、ワイワッシュに向うことにしよう。最大の課題、高度順応も全員完了、次の山が楽しみである。

イェルパハー北西壁登攀

ワラスでの休養を終えて、ブランカ山群とはがらりと山容の変ったワイワッシュ山群に入山した六名は（三名が離隊）、目標の山を二転三転の後、八月五日、ハウアコーチャにBCを建設し、イェルパハー北西壁への登山を開始した。三つ目ともなると手馴れたもので、手際よく順調に仕事が進む。場所はかわっても相変らずテントの泥棒番が欠かせない。

ポーターとして、現地人ヴァルガスとイサックを雇う。彼らの担荷力はすごい。ただし氷河の上を歩けるポーターは我々には高価すぎて雇えない。二人共、とても真面目で隊員と同等のつきあいをする。特にポーター見習いのヴァルガスは仕事熱心で頭もよく大いに助かった。

全員相変らぬ登高意欲で、長く険しいルートにもかかわらず、スピーディにテントを上げて行った。目標のルートへは、氷河の複雑な障害により、最も遠廻りを強いられ、尾根を越え反対側の氷河へ下降し登り直すという、能率の悪い長いルートとなる。C3まで順調にテントを上げるも、荷上げ量が上部に行く程少くなってくる。ルート工作をしながら荷上げをしなければならないきびしさの上、連日のすっきりしない天候にいらいらさせられる。晴れの日にはルートはカンカン照りとなり、荷上げの苦しさは倍加される。加えて、せっかく切ったステップも太陽にとかされすぐにくずれてしまうのだ。かき氷状になった氷壁の登行程、体力を消耗させるものはない。

C2建設の頃までは、ルート工作隊員も荷上げができていたが、岩壁帯に入って急に登行が困難となり、ルート工作一本にかからざるを得なくなる。相変らず天候はパッとせず、すでに乾季は終ったのではないかと不安になる。イェルパハーは六六〇〇メートル、やはり今までの山とはすべての面で違う。登高距離、テント数、氷河、雪崩、落石の音と、見るもの聞くものすべてにボリュームがあり、手ごたえ充分である。苦しい荷上げの合間にも、荷を下ろしすばらしい周囲を見ていると、何かしら疲れが遠のくように感じるから不思議だ。

ここ北面は太陽が当たり、日中は明るく暖かい。反面、落氷、落石にも悩まされる。大事にいたらないまでも、二人が被害にあい、以後の行動にブレーキがかかり、そうでなくても少い稼動力に逼迫を来たした。幸い、必要最少限の荷がすでに上部に

Yerpaja 6634m
Northwest Face
Sheteh by Kanihiko Kondo

あったので救われる。又、ほとんどのメンバーがC2の雪洞に入った夜、留守中のC1のテント三張りがことごとく氷河の上まで飛ばされるという事故にもあった。アンデスにも強い風が吹くことを教えられ、風速二十メートルを越えた風の恐ろしさを見せつけられた。

六〇〇〇メートルのC3から岩壁帯となる。極度に脆く、神経をすりへらされる。それでも弱点はあるもので、どうにか前進できる。ザイルを引いただけでもバラバラと落下する落石に、C2～C3間の氷壁の荷上げは危険きわまりない。上部岩壁ルート工作中はこの氷壁に取付くことを禁止した。二人の軽い負傷者を出したことから、C4のテントはC3を撤収してこれを当てる。工作隊も連日の悪天に少々あせるが、可能な限りのルート工作を行った八月二十日、三角岩壁ピークへの見通しがついた。今一日の晴天があれば十分登頂出来ると判断、明日も今日のような天候ならば頂上に向け出発することを決める。ここ数日午後からかならず降雪を見、日ましに岩壁に白さが増して来ている。アタック隊とC2との交信も視界が悪く、状況判断にたよる心もとないものとなる。幸いにも三名の登頂欲には少しの曇りもない。

明けて八月二十一日、雲の流れの速い風のある朝を迎える。長時間を要するアタックには少々不安ながらも、近藤、吉野、林は頂上めざして勇躍出発する。先日、ルート工作した地点に

達した頃には早くも雪が舞いはじめる。十三時、三角岩壁のピークに立つ。ここから頂上への稜線はC2の予測を大幅に裏切り、アンデス特有の雪庇に悩まされること延々三時間、ようやくイェルパハーの頂上に立つ。時に十六時十五分、頂上は降雪を加えて視界は全く悪い。少人数、少い日数、打続く悪天を克服しての登頂だけにほんとうにうれしかった。

アタック隊はC4帰着が二十時となる。そして翌日元気にC2まで下降、今回もただちに撤収を開始。八月二十三日、全員が四〇〇〇メートルのBCに集結した。BCも曇りの日が多くなり、雪がちらつき乾季の終りを見る。

十分な成果を得た今、大いに祝賀会でもやりたいところだが、いかんせん、その日の食糧にもことかくしまつ。唯一の食糧は近くの川でふんだんに釣れるマスである。焼いて、煮て、刺身で食べまくる。

八月二十六日、日増しに雪の降る回数が多くなる。全くタイミングのいい終了に安堵する。下山は馬十頭で十分だ。ハウアコーチャの住人イサックと別れて一路チキアンへと下山する。六人のメンバーも持てる力を十分発揮、今は満足感と共に気ままにキャラバンについて歩く。三カ月間の登山期間をフルに活用、後に悔いを残さない山行きができたことに満足する。貧乏隊故に多くの人に迷惑をかけてしまった。それでもなおかつ山行きが出来たのは、日系人の方々の暖かい援助、特に川上氏、谷川氏の御親切あらばこそと思う。

△記録概要▽

隊の名称　岡山クライマースクラブ・ペルーアンデス遠征隊

活動期間　一九七六年五月～九月

隊の構成　隊長＝柿本育夫（33）、登攀隊長＝近藤国彦（30）隊員＝橋本勝（28）、石井徹也（23）、橋本由利子（25）、真鍋周三（27）、吉野正寿（26）、片山照恵（53）、特別参加＝林泰英（28）、ポーター＝ヴァルガス

行動概要　6月3日リマからワラス経由ヤンガヌコ谷入山BC設営（三八〇〇メートル）。ワンドイ南峰南壁登攀のため、6月5日C1建設（四八〇〇メートル）、3日C2建設（五七〇〇メートル）、16日から27日にかけて上部岩壁四〇〇メートルに挑む。27日南壁を抜けワンドイ南峰（六一六〇メートル）に立つ。

7月8日ワンドイのBCからヤンガヌコ谷のどんづまりまで進みチャクララフ南面の四四〇〇メートルにBC設営。

7月10日チャクララフ東峰南壁にC1建設（五一五〇メートル）、16日C2建設（五七五〇メートル）、19日南壁を抜けチャクララフ東峰（六〇〇〇メートル）二名登頂。20日及び21日に二名と三名合計五名が登頂に成功。7月24日チャクララフを終了、ワラスに下山。

7月31日～8月4日ワラスからチキアンを経てワイワッシ

ュ山群西面に入山。ハウアコーチャにBC設営（四〇〇〇メートル）。ロンドイ、ラサック、イェルパハーを偵察の結果、イェルパハー北西壁に決定。8月5日より登行開始。6日C2建設（五〇〇〇メートル）、11日C2建設（五七〇〇メートル）、16日C3（六〇〇〇メートル）、19日三角岩壁半ばにC4建設（六二〇〇メートル）、21日三角岩壁のピークを経て三名イェルパハー（六六三四メートル）頂上に立つ。25日全員BC集結、イェルパハーを終る。

マルビティン中央峰登頂（一九七五年）

佐藤敏彦
森一彦

日本山岳会岩手支部結成の産ぶ声をあげ二十五年目、その間に昭和四十八年には地元八幡平に於て、第五回の日本ヒンズークシュ・カラコルム会議を主管、機熟し、行動の場をカラコルムに絞り気運は一気に上昇した。四十九年一月、準備委員会の発足と同時に、ルップガール・サール（七一九九メートル）に絞り、計画を具体化、推進した。五十年四月、パキスタン政府から登山許可は第二案のマルビティン中央峯（七二六〇メートル）に下りた。これはパキスタンの国内事情でインダス・ロードの閉鎖によるもので、当初から予測されていた事であった。その為に計画変更も問題でなく二十七日の隊荷発送まで慌ただしくもスムーズに仕事が進行した。

マルビティン山群について

チョゴ・ルンマ氷河源頭のマルビティン山群は、最高峰の西峯の他、東峯、北峯がすでに登頂されており、中央峯と、西峯の背の様な北西峯が未踏峯として残されていた。

東峯には一九五八年の英・パ合同隊が、北峯には一九六九年のポーランド隊が登り、一九七一年オーストラリア隊によって西峯（主峯）が登頂された。同じく一九七一年に京都カラコルムクラブ隊も南西のバスカイ氷河側から西峯をねらったが遭難事故から活動を打ちきった。一九七四年はイタリヤのボローニァ隊がバルプー氷河より中央峯をねらったが果せず、今年も我我と同時に中央峯をめざしたが、隊荷の延着によりスカルドに

足止めを喰い、他に転進した。

キャラバン

六月二十七日、午前三時、我々はスカルドを出発、一台のジープと二台のトラックに分乗し、シガール河沿いの最初の宿営地であるユノーを目指す。七時間汗と砂埃りにまみれ、十時到着。翌日はザーク（羊の皮で作った浮袋、縦四コ横六コ計二十四コを筏にくくりつけた乗物）に分乗し、一日がかりでシガール河を数回往復、渡河を完了した。

二十九日、夫々三十キロの荷を五十五名のポーターによりチュートランまで十二時間行動、この行程唯一の温泉で楽しいひと時を過ごす。部落民の多くの人に甲状腺腫と斑状歯がみられ弗素濃度の高いことを窺わせる。副隊長はここで別動となる。

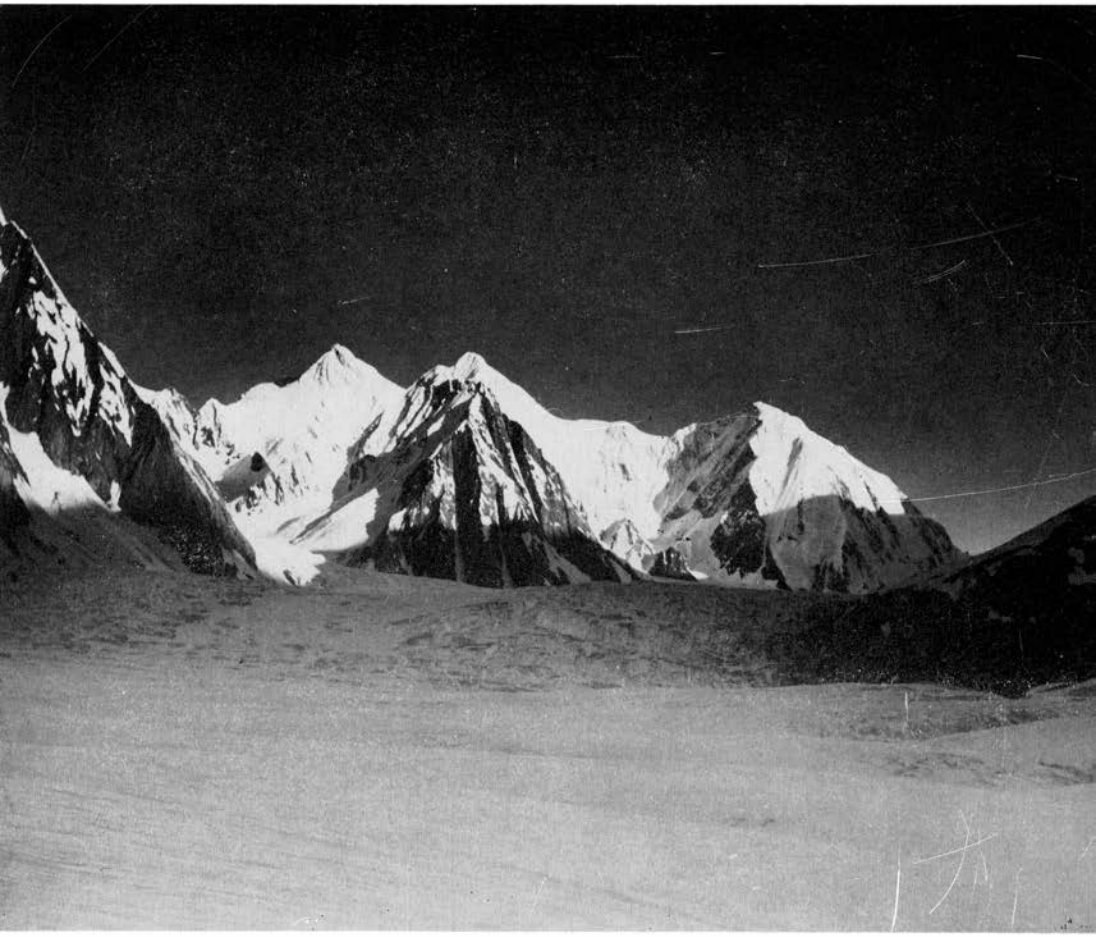
七月一日、チョゴ・ルンマ氷河先端の部落アランドゥに到着、ポーターの交替を行う。三日、ルートを氷河東岸のサイドモレーン上にとり、再びキャラバンを開始、五日ボロチョに到着、ここで始めてマルビティン山群を確認する事が出来る。ルートは氷河上にとられる為に、行動可能な少数のポーターでBC建設、予定地までデポしながらピストン輸送で荷上げを行う。

七月七日、チョゴ・ルンマ氷河上四二八〇メートル、通称バリショルと呼んでいる地点にBCを建設、翌八日、荷上げを全て完了、鯉のぼりを揚げ祝盃を重ねる。ポーターを帰したあとのBCは静寂に包まれ、盗難から解放されキャラバンの疲労もケシ飛んだ。我が隊の近くにスパンティクをねらう郡山山協隊のがあり、C2迄、前進キャンプを進めている処だった。八日、九日の両日、荷物の再梱包と登攀計画を行い、十日、登攀を開始した。

登　攀

国内に於ける登攀計画立案の際には、資料としての写真に良いものがなく、過去マルビティンを目指した各隊の記録から推察判断し、チョゴ・ルンマ氷河をポーラン・ラへ登り、ここにABCをおき、北峯西面のプラトーをトラバースし頂上に至るのが、長くはあるが、最も可能性が大であると考えられていた。今、現実に山を見据えその判断に誤りはないと確信したので、ポーラン・ラにC2を建設する事を目標として行動開始、十日、十一日と荷上げ、デポの繰り返し、十二日、村上、花坂、高橋、森の四名が五一〇〇メートル地点にC1を建設、同日BCから荷上げの小野寺、渥美を迎え入れた。

十四日、小野寺、渥美、高橋、森が悪天をついてロープをフィックスしつつ、ポーラン・ラへの荷上げを行なう。上部の状況何も見えず、荷をデポし、C1に下った。その間にも、伊藤、湯浅によるBCからのピストン輸送が行われ、着々と荷上量が増え続けた。高度順応と休養の為BCへ帰ろうとしたが、



(Fig.29) チョゴルンマ氷河上よりマルビティンを望む
左から東峰(6,970)、中央峰(7,260)、北峰(6,843)
Malubiting East(6,970), Central(7,260) and North(6,843)
left to right, seen from Chogo Lungma Glacier.
(by. K. Mori)

(Fig.30) C 4 (7,000m)からマンビティン中央峰を望む

C4 (7,000m), Malubiting Central in the back ground.

(by. K. Mori)

(Fig.31) 第一ステップより望むスキャン・カンリ南西峰(C.7,500)、主峰(7,544)、第四ステップ(C.7,100)
ー左より

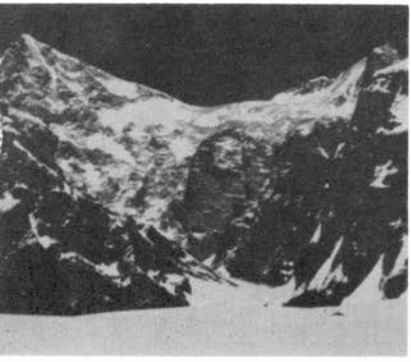
Skyang Kangri seen from the First Step, from left to right, South-west peak(C.7,500), Main peak(7,544), and the 4th Step(C.7,100)

(by. Gakushuin Univ. Karakorum Exp. 1976)

(Fig.32(a)) アビ・ガミンC5とミーズ・コル

Abi Gamin C5 (6,800m) with Mead's Col in the background.

(by N. Fushimi)



(Fig.32(b))

C 2・C3間より見たカメット(左)と

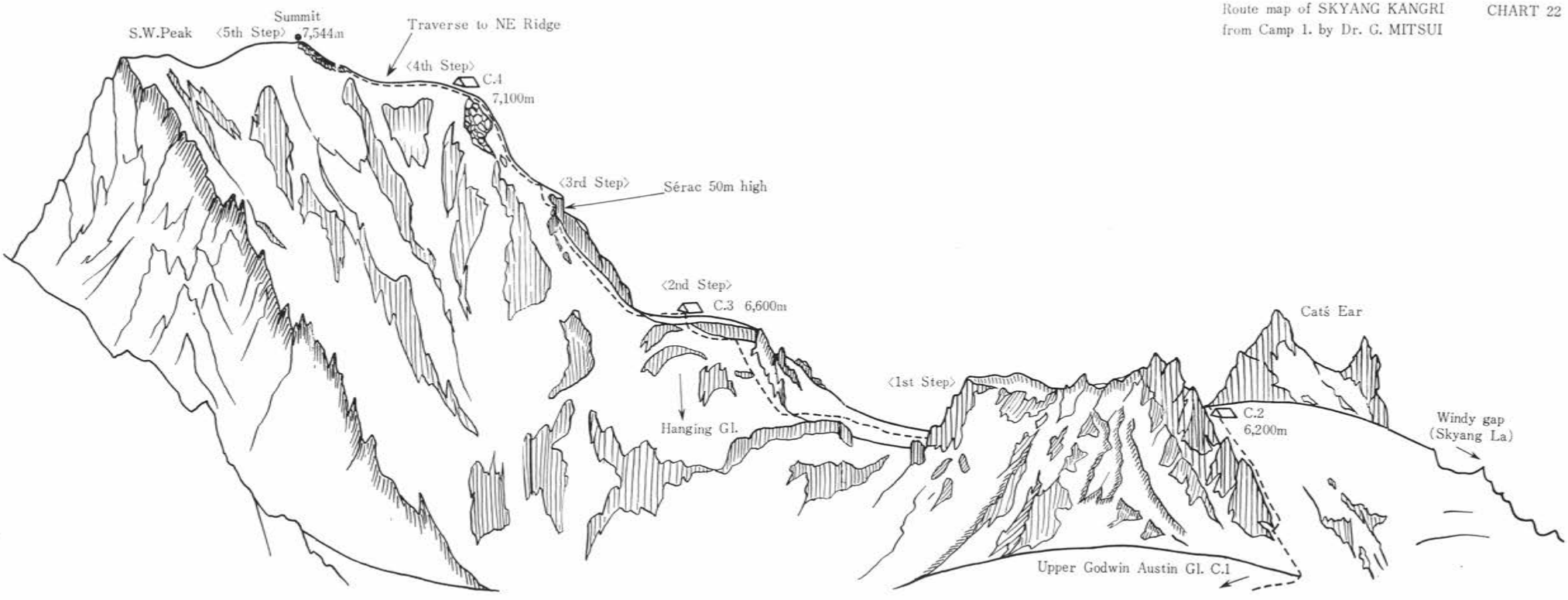
アビ・ガミン(右奥)

Kamet in the left and Abi Gamin in the back right seen from between Camps 2 and 3.

(by N. Fushimi)

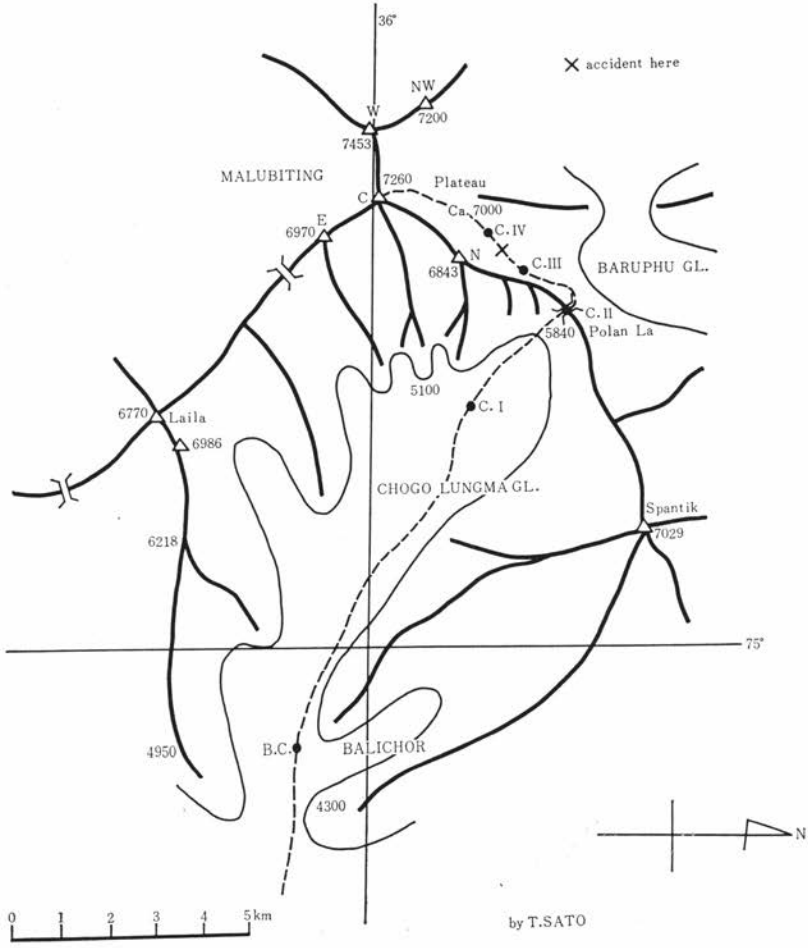
Route map of SKYANG KANGRI
from Camp 1. by Dr. G. MITSUI

CHART 22



The Sketch Map of MALUBITING

CHART 21



十五、十六日と風雪に見まわれ果せず、十七日になって新雪をラッセルしつつBCへ下った。四日好天三日悪天の天候サイクルもようやく掴めて、また十八、十九と好天、皮肉にも悪天に行動、好天に休養という結果が出た。二十一日には小野寺、高橋がポーラン・ラにC2を建設、他隊員は、荷上予定の荷を全てC1に集結完了させた。

二十四日、小野寺、高橋は引き続きルート工作を続け、全行程唯一の岩場にフィックス工作完了、C1から村上、渥美、森がC2入りし、C3建設の準備が整う。二十五日、風雪のため行動不能、天候のサイクルが狂い始める。

二十六日、C2の各隊員はC3の建設に向い、北峯六一〇〇メートル地点にC3を仮設した。二十八日には、伊藤、渥美が北峯キノコ雪下部六三〇〇メートル地にC3を建設した。ここでC2から上へ八名の隊員が揃い、いよいよ登頂への足がかりが出来上がった。三十一日上部の五隊員はC4建設を目指す。北峯西面の傾斜のゆるいプラトーは行けども行けども高度がかせげず、苦しいラッセルを余儀なくされる。ようやく六五〇〇メートルにC4を建設、明朝のアタックを期す。しかし、C4に五人、BCに三人と最も好ましくない配置になった。天候の悪化も予測されアタックのチャンスは一回限り、五名同時にアタックする事に決定した。

登頂と遭難

八月一日、頂上を目指す。途中、苦しいラッセルを強いられ、思いのほか高度が稼げない。六七〇〇メートル付近、中央峯北面の雪壁が目前に迫った所で、伊藤が不調を訴え、八ミリカメラを小野寺に託してへ下る。十七時、頂上直下で小野寺、渥美、高橋、森の四隊員は、中央峯北壁、七〇〇〇メートル付近にテラスを切り、ビヴァークの態勢にはいる。火器も寝袋も羽毛服もない長い夜が始まった。明朝の好天を祈りつつ、膝を抱え、寒さにうち震えながら。

二日、五時、朝日に照らされた時、体内の血液が駆けめぐるのが感じられた。はやる気持を押えつつ、七時、アンザイレンをし、コンテニュアスで雪壁を攀じる。九時、四名同時に頂上に立つ。南にハラモシュ、双耳峰のライラ、さらに後方にナンガ・パルバットの英姿を望む。第一目標だったルップガール・サールも見える。後髪を引かれる様に十時下降開始、十三時C4に帰着し、伊藤の出迎えを受ける。

三日、C4を撤収、下山開始。動作が緩慢なのは、高度障害の影響なのか疲労なのか、とにかく足どりが重い。途中C3を撤収、高橋、森、小野寺、伊藤、渥美の順でフィックスされた岩場へかかる。疲労度の激しい森は小野寺とアンザイレンをしていた。渥美の叫び声で振り向くと、伊藤は声もなく雪壁を滑

り落ちていた。途中露岩に飛ばされ、やがて、バルプー氷河に吸い込まれ視界から消えた。二重遭難を考え、四隊員はまずC2に帰着し、BCと交信救援を求め、当日捜索を断念し、明朝捜索開始を決定した。眠れない夜が明け、小野寺、渥美、高橋の三名は疲労の激しい体に鞭打って、バルプー氷河へ下降を開始した。BCから村上、湯浅、花坂が長駆救援に向う。森はC2で交信の中継を行う。十三時、北峯斜面大氷瀑とバルプー氷河のツメが交わる地点五七〇〇メートルに降り立ち、アイスフォールからアイスフォールへ、クレバスからクレバスへと捜索を続ける三隊員から、今は遺体となった伊藤マネジャー発見の報が入った。遺体の引き上げは不可能と判断、西国浄土の雪中に埋葬した。

五日、ズタズタに崩壊したアイスフォールを左右に避けながら、BCへ帰還、隊長と連絡将校ロディー大尉の涙の出迎え、登頂のつかのまの喜びも暗転した。

八日、BCを撤収、帰途のキャラバン開始、往路を十四日スカルドへ到着した。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会岩手支部カラコルム遠征隊

活動期間　一九七五年六月～八月

目　的　マルビティン中央峰初登

隊の構成　隊長＝笠原潤二郎（67）、副隊長＝佐藤敏彦（41）隊員＝伊藤寿（43）、村上力（39）、湯浅俊行（33）、花坂賢治（31）、小野寺正英（31）、渥美英樹（30）、高橋俊紀（26）、森一彦（21）、連絡将校＝アフタブ・ロディー（24）

行動概要　6月27日スカルド発。7月7日チョゴ・ルンマ氷河上のボルショル支流との合流点にBC建設。ポーラン・ラを経て、8月2日マルビティン中央峰に登頂。3日伊藤隊員遭難。4日遺体発見、埋葬。8日BC撤収。

報告書　『マルビティン中央峰初登頂報告』佐藤、小野寺編（日本山岳会岩手支部　昭和五十年十月二十六日発行）

スキャン・カンリ登頂（一九七六年）

贄田統亜

ベース・キャンプにて

我々がK2のふもと、五〇〇〇メートルの地点にベースキャンプを設営したのは、七月八日、本隊がスカルドを出発してから実に三十八日目のことであった。ベースキャンプより見上げるK2は、首がいたくなるような角度で見える。ここまで登ってきた下部ゴドウィン・オースチン氷河の方を見ると、コンコルディアの奥にチョゴリザがその端麗な白い姿を見せている。ブロードピークの頂上に渦巻く雲は、やはり八〇〇〇メートル峰の貫禄と言うべきであろうか。しかし、我々の目指すスキャン・カンリは、その姿の一端すらも見ることができない。

我々がスキャン・カンリの名を耳にしたのは、一九五八年のチョゴリザ遠征隊に我々の先輩、加藤、芳賀の両氏が参加し、帰国後の両先輩をまじえてクラブで会合をもった時であった。

その時以来、我々のクラブでは、カラコルムの話が出るたびに、この山の名前が出ていた。この二十年近くもあたためてきた計画が実現し、今このBCに立ってみると、うれしさよりも、不安と期待の錯綜した気持の方が強かった。

ポーターへの支払が一段落すると、もうエンゼル峰の頂上は暗くなり、ただK2の頂のみに陽が当っている。これまでの登山隊の報告に書かれていたような賃金についてのトラブルは一切なく、レギュレーション通りの計算で、支払いは済んだ。その計算が本当わかっているのかどうか知らないが、素直に公定ルートの賃金を受けとったポーター達は、明るいうちに少しでも下ろうと、隊長と握手をした後、三人、四人と下っていく。我々のリエゾンオフィサーは、タリク大尉と言い、全く山の素

人であるが、ここBCにいるのは淋しいのか、ウルドカスへ下るべくたくらんでいる。彼のコックと二人でウルドカスまで下るのは自信がないらしく、職権で何人かのポーターを押し止めてしまった。

我々のBCの一筋隣のモレーンの上には、K2の北東稜に挑んでいるポーランド隊のBCがある。北東稜の取付点は、我々が予定しているC1の近くであるので、親善と共に上部ゴドウィン・オースチン氷河の状況を聞くため、訪問する。彼等の話では、C1までは特に困難な個所はなく、彼等の内の二人がローテーションでC1まで登るので一緒に行こうと誘いを受けた。しかし、我々はまだ高度に馴れていないので、そういうわけにもいかない。彼等は決められたローテーション通りに動いており、C1に上る時は昼食をとってから出かける。そうすれば、上部キャンプの一食分が助かるというのである。

C1へ

翌七月九日偵察隊を除く全隊員は、休養を兼ねてBCの整備に当る。そして、贄田、錦織、深沢の偵察隊は、できればC1予定地までとゆっくり出発する。我々のBCがあるモレーンを踏み出そうとした時、ドーンという大きな音が聞えたかと思うと、朝日を浴びているK2から雪崩が落ちてくるのが見えた。アブルッツィ公のイタリア隊の報告によれば、K2から落ちる雪崩はブロードピークの岩壁にぶち当り、ブロードピークの雪崩はK2にぶつかると書いてあったので、どうかなと眺めていると、正にその通り、K2の雪崩の雪煙はブロードピークの岩壁で跳返っている。しばらくすると、BCにもチリのような雪が降ってきて、びっくりした。しかし、落ちる時と場所が決っているので、さほど驚くことのないことがわかった。

モレーンのはずれまでいくと、今、雪崩の出たルンゼがよく見える。K2より出ている三つのデブリの山を越える時には、思わず足が早くなる。一段目のアイスフォールは、中央やや右手を登った。左手寄りの方はクレバスでズタズタである。一段目はさほど苦労なく登る。しかし、技術的に苦労がないというだけのことで高度とラッセルの為アゴも舌も出てくる。一段目のアイスフォールを越えても、スキャン・カンリはまだ見えてこない。

ブロードピークの北面より落ちてくる氷河と合流する部分から上は、氷河の右手がクレバスでズタズタになるので、K2側によらなければならない。天候も悪くなり、第一日目はこんなところかと、引き返すことにする。

翌十日は、高橋以下ハイポーターも含め九名で荷上を行う。彼等は昨日の引返し点についたが、さらに上部に荷物を上げ、二段目のセラック帯の上に荷をデポして、夕刻五時半帰幕した。実に十一時間の行動である。高度差約六〇〇メートル、水

平距離で九キロメートルはあろうか、ルートが整備されても、同じ時間がかかったシゴキの区間であった。夜半より雪が降り出し、翌十一日は一日停滞。

十二日、全員でC1予定地まで荷上を行う。一昨日のデポ地点は、K2の上部懸垂氷河よりのブロックの散乱帯に近く、大きな塊が落ちれば影響がありそうである。我々のC1予定地を、上部ゴドウィン・オースチン氷河の左岸、セラ・パス寄りに決定する。スキャン・カンリは、目前にその全貌をあらわしており、下からステップを数えると、頂上は五段目となる。

七月十三日、BC建設後五日目にてC1建設、予定より早いペースである。コンコルディアで第一回目の高山病の症状の出たものがいたが、それ以後は頭痛程度で顕著な症状の出ているものはいなかった。出発前の検討会で、キャンプ間の高度差は五〇〇メートル、三回以上キャンプ間を往復した後新しい高度のキャンプに宿泊することを原則としていた。我々のルートは、この原則に合うようにステップがあり好都合であった。又個人別の高度順化表を作成し、高山病の予知予防を計った。

双眼鏡でルート偵察をすると、ウィンディ・ギャップ（スキャン・ラ）に登るには、東稜の末端にある岩稜帯をさけて第一ステップにある双耳峰（猫の耳と名付けた）と台形の岩峰（軍艦岩）の間につき上げるクーロアールを直接登ったほうが得策のように見えた。しかし、古くはセラの写真により、又最近では、一九七五年の日本のK2第一次偵察隊の写真により、この猫の耳が認められているが、稜線とのつながりが判然としていなかった。

C2へ

翌十四日、K2寄りをさけ、氷河の中心部を登る。陽が上ると、三方を三〇〇〇メートルの高度差をもつ山々で囲まれたゴドウィン・オースチン氷河の源頭は、天火に入っているように暑い。今迄の何回かの経験でこの暑さを知っている隊員は、つばの広いテニス帽等で涼しい顔である。C1より約三十分で、ポーランド隊のC1がある。彼等は、北東稜偵察の為、ウィンディ・ギャップまで登っているので、トレースが見える。しかし、その後雪が融け、クレバスがあいている。あと一ヶ月も早ければ、一九〇二年の英国隊のように、スキーでウィンディ・ギャップまで行くことも難しくはなかっただろう。我々もスキーを持参したが、ついに使用できる機会に恵まれなかった。

我々は予定どうり軍艦岩と猫の耳の間のクーロアールにルートを開くことにする。まず軍艦岩の真下の雪と氷のミックスした壁に、ザイルを四ピッチフィックスする。続いて岩壁にそってトラバースし、クーロアールに入る。さらにフィックスをつづけ、ふと手を伸ばすと、そこに氷漬けになったザイルを見つけた。昨年のオーストリア隊のものであろう。初めて六〇〇〇

メートルを越え、さすがにペースも落ちる。予定していた猫の耳まで行けず、途中にザイルをデポして下る。

十五日、C1の大宮司、藤大路、永田の三名は昨日のルートを伸ばし、猫の耳のつけ根に快適なC2予定地を見つけた。同時に、昨年のオーストリア隊のテントとツェルトを発見する。チョゴリザにおけるオーストリアのヘルマン・ブールのテントといい、このテントといい、なにか因縁めいたものを感じる。帰路、C2までのルートを確保し意気ようようと下ってきた三人の内、トップを歩いていた藤大路が、ヒドンクレバスを踏みぬき宙吊りとなった。BCよりC1に登っていた高橋、絹川は、三人がC1直前まで来たのでテントの中でお茶をわかしていると、なにやら外がうるさいので出てみると隊員が二人しか見えない。そして、たまたま通りあわせたポーランド隊の隊員が、荷物をおいてとんでいくところが見えた。あわてて靴をはき、アンザイレンして現場につくころには、ポーランド隊の協力のもと、カスリ傷一つなく救助された後であった。これまで、氷河上では難易にかかわらず二、三名にてアンザイレンをしていたが、これ以後、三名以上にてアンザイレンをすることに変更し、救出を容易にするよう配慮した。

C3へ

十八日、贄田、錦織、飯塚、深沢の四名で予定通り、猫の耳のつけね六二〇〇メートルの地点にC2を建設する。BCに下りている藤大路は、十五日のC2までのルート工作の為か、高度障害で予定のローテーション通りC1入りができない。三井隊長の診たてによると、顔と同様腸の中まではれあがっているそうで、下痢もひどいらしい。しかし利尿剤により、五分おきに数十回の排尿の結果完全に回復したとの連絡が入る。C1とC2の間も垂直距離六〇〇メートル、水平距離六キロメートルと長い。C2まで登ると、中国領の赤褐色の山波が見わたすかぎりつづいて見える。

C2からのルートは東稜上の広い雪原を横切り、第二ステップの急斜面へと向う。ルートの北面は、足もとより数千メートル切れおちている。第二ステップよりゴドウィン・オースチン氷河へ落込んでいるセラック帯をぬって進む。我々がゴジラの背と呼んでいたグサグサのセラックの中に、昨年のオーストリア隊のものと思われる赤いザイルが見えるが、近づくことも出来ない。急斜面に二五〇メートルのザイルをフィックスする。

第二ステップの直下には、アブルッツイ公らが登攀を断念した大クレバスがある。我々は、この大クレバスの為に二本継ぎの八メートル長さのアルミのはしごを持参したが、幸いなことに一ヶ所スノーブリッジでつながっていたので、難なく越えることができた。

C4へ

七月二十三日、まばゆいばかりの陽光の下一日ゆっくりと休養をとる。しかし、大宮司、絹川、永田はルートの赤旗を補強に行く。ポーランド隊のC1の上部が特にひどいので、その部分を特に補強する。帰りに彼等のC1に立ちより「北東稜より見れば、ヒドンクレバスの状況はよく見えるだろう。我々のルートはどうか」と聞くと、身ぶり手ぶりで言うには「かべにへばりついて、そろりそろりといくよりしょうがない。どのルートをとっても同じだよ」とのこと。特にルートは変更しない。

翌二十四日、いよいよC3を建設し、C4へのルートを作るべく、贄田以下六名がC2へ入る。二十五日、C2より高橋らのサポートのもとに、贄田、深沢は第二ステップの上にC3（六六〇〇メートル）を建設する。広い第二ステップの一番端である。第三ステップへの登りは、氷崖の直下にある狛犬の形をした岩を目標とする。ルートの右手は、大きなセラックに行手を阻まれている。第四ステップは、古いセラの写真によれば、第三ステップと同様、後退した氷河が残っているような形を示しているが、今はそれほど顕著ではない。七十年ものうちに大分様子が変ったようだ。しかし、氷の急斜面には苦戦をしいられそうである。できれば、第三ステップより北東氷河に移りたいところである。

■七月二十六日、いよいよ第三ステップへ第一歩をふみ出す時である。今迄とうって変って寒さが厳しく、風も強い。K2も、ブロードピークも、眼下に拡がるゴドウィン・オースチン氷河も、ちぎれ飛ぶ雪の中に見え隠れしている。空気の中の水蒸気が直接凍ったのか、こまかいチリ状の氷の結晶がまばゆい。取付点より、左手の岩と右手の雪壁のコンタクトラインにそって真すぐにルートを開く。頭上に見える氷崖が傾いているので、今にも落ちそうに見える。二〇〇メートル余のザイルを固定し、あたりを見まわすと、全くの吹雪の中である。C1に連絡をとり下りにかかるが、ザイルの終点からは方向が全くわからない。昨日つけた赤旗をたよりにC3を目指すが、わずかな間隔でも道を失ないがちになる。やがて、こちらの声に答えて、その日C3入りをした、大宮司、藤大路の声が聞えた。今迄なんとか行動ができたが、どうやら悪天の周期に入ったようだ。

翌二十七日より、わずかな天気の息の間をぬって、二人一組のパーティを次々に送り込むが、全くルート工作が進まない。特に、七月三十日より八月三日までは、各キャンプとも一歩も動けない荒天となった。とくにC3では降り続く雪にテントが何度も埋まり、この間C3で二メートル、C1でも一メートルにも及ぶ降雪を見た。又、C1では数回に亘りK2からの雪崩の余波を受けたが、幸いなことに直接の影響はなかった。

四日、十二日ぶりに仰ぐ陽光がうれしい。C3の二名は、第三ステップの工作を九日ぶりに再開した。前回の引返し点より、狛犬に向けジリジリと高度を上げる。大氷崖のつけ根を左にトラバースし、第三ステップを抜けようとするも、時間切れとなり、C3に引返す。出発以前より予想していた北東氷河の存在は確認できたものの、下降は不可能であり、第四ステップの登りをさけるわけにはいかない。しかし、我々の意気をくじくように翌五日も、又吹雪で明けた。

八月六日、再び快晴、この好天を逃してはすでにチャンスはない。C3から四人が出発、第三ステップの下からルートをのばし、長大な第四ステップへの斜面にへばりついた。初めは四、五十度の堅雪の斜面であったが、尾根は徐々に斜度を増しルート中最大のポイントである急斜面に消えている。この急斜面までの開拓に一日を費す。まだ核心部は手つかずのままである。

第一次アタック

八月七日、本日中に第四ステップへのルートを確保すべく、大宮司、藤大路に錦織、高橋を加え、四名がC3を出発。これらの工作隊をサポートし、長駆C4への荷上げをするべく、飯塚、深沢は、C2より未明に出発。昨日の引返し点迄は快調に進んだが、それより先は氷の斜面である。昔の氷河の名ごりであろうか、その硬い氷の表面に、ふわりと乗った新雪は全く足場にならない。氷を掘り出しては、アイススクリューを打ち込むが、周囲の氷にピシピシとひびが入り、不安定な支点しか得られない。ルート工作の先頭は遅々として進まぬが、後に続く者は、無風快晴のもと、まわりの山々を地図と照し合せながら、新しい視野からのバルトロ山群や、遠くシアチェン流域までの山々への雄大な展望を楽しむ余裕がある。あと数ピッチで傾斜も落ち、C4建設が可能となるが、高度の影響も加わり、一歩、歩を進めるにも刻々と時間が過ぎる。これ迄の天候のサイクルから考えると、次の悪天がくれば、今シーズンはもう好天は望めない。隊長と相談の結果、本日中にC4を建設し、明日アタックと一日予定を早める。そして、アタック隊員は、錦織、絹川と決定する。

しかし、日が傾きかける頃となっても、斜度は落ちない。すでに十八時、これ以上進むわけにはいかない。止むをえず、荷物をアイススクリューにしばりつけ、暗くなる頃C3に帰幕する。今日の工作は五ピッチ、高度差二〇〇メートルにとどまる。C3には、アタック隊の錦織、絹川、そしてサポート隊の高橋、永田が残り、他の四名はそのまま月明りを利用してC2まで下った。

八月八日、入山後すでに一ヶ月が経過した。今日こそはC4を建設しようと、C3の四名は勇躍出発する。

昨日に引続き氷壁の登攀が続く。アイスハーケンを連打し、一部アブミを使いながら、七時間に及ぶ苦闘の結果、氷壁部は突破したが、傾斜は一向に落ちない。第四ステップの肩のあたりで、すでに十八時に近くなる。テントの張れそうなスペースはどこにもないまま、やむなく斜面の雪をけずりC4を建設する。

八月九日、快晴の中を、C4の錦織、絹川は頂上にむかった。昨夜のあわただしい設営と、座るスペースしかないテントに、まんじりともできぬ一夜であったが、第四ステップまでは、両名とも調子よく登った。第四ステップは約七一五〇メートル、そこから頂上へのルートは東稜を登るか、東稜の右手の氷河を登るか、その氷河の更に北側にある北東稜を登るか、である。それぞれに一長一短があるが、北東稜に取付くルートが一番可能性がありそうだ。しかし、長い氷河のトラバースが苦しそうである。氷河は、この十数日間の新雪をべっとりと付け、ラッセルは絶えずヒザまであり、苦しい登高となった。急激に高度を感じるようになり、全身を倦怠感と執拗な睡魔がおそってくる。わずかな距離と思えたのに、時間はどんどん経過し、深い雪と、釜の底にいるような暑さに喘ぐ。氷河を横断し、北東稜の取付きまで来たところで、すでに十五時を廻り、このまま進み、ビバークをして明日頂上をねらうか、断念するか、一瞬迷ったが、ビバークには耐えられそうにないので、残念ながら、断念する。帰りは早く、十七時十五分にC4に帰り着いた。こうして、第一回のアタックは失敗に終った。

第二次アタック、ついに頂上へ

八月十一日、第二次アタック隊の藤大路、永田は、午前三時起床、出発にそなえる。一人は雑煮を作り、一人は携行する装備等をチェックする。四時三十分C1と連絡をとり、五時二十五分C4を出発する。一次隊の指示通り、東稜より、右手にトラバースし、立山の地獄谷のような氷河の源頭を横切り、北東稜に取付くこととする。C4から内院のトラバースは、およそ二時間半、一次隊のトレースは風で再び雪に埋まり、ひざまでのラッセルを交代しながら進む。この内院では、C1との連絡はできない。C2にいる絹川経由、連絡をとる。八時十五分、一次隊の引返し点である北東稜への取付点に着く。雪の急斜面を腰ほどのラッセルをしながら、スタカットで進む。雪が安定してきたので途中からコンティニュアスとする。北東稜上に出ると、再び中国側の山々が見えだす。若き日のコンウェイらの探検の舞台となったアギールの山々も眼下に見える。遠く、コンロン、天山の山々も見える。午前十時、トランシーバーからは、各キャンプからの激励が次々と入ってくる。

北東稜は岩が全くなく、真直ぐに伸びた雪稜である。頂上直下にある大きな雪庇だけが、スキャン・カンリの最後の砦であ

ろう。雪庇の下までは所々板状雪崩に注意しながら、慎重に進む。十二時十五分、大きな雪庇の右手を切り崩し向う側にアイスバイルをしっかりと打ち込んで体を持ち上げる。はやる心を押えて一歩、一歩、歩を進める。まわりを見廻すと、もう南西峰より高い。そうだ、ここが、スキャン・カンリの頂上だ。十二時五十分、トランシーバーに向って思いきりどなった。

＜記録概要＞

活動期間　一九七六年六月～九月

目　的　スキャン・カンリ（七五四四メートル）の初登頂

隊の名称　学習院カラコルム登山隊一九七六

隊の構成　隊長＝三井源蔵（51）、登攀隊長＝贄田統亜（36）

隊員＝錦織英夫（35）、高橋和哉（33）、大宮司康治（32）、絹川祥夫（29）、飯塚洋二（25）、藤大路美興（23）、永田秀樹（23）、深沢幸弘（21）

行動概要　六月二十五日全員スカルド集結。その日のうちにバハーへ。六月二十八日アスコーレ。七月四日ウルドカス。八日ベースキャンプをK2の麓ゴドウィン・オースチン氷河上五〇〇〇メートルに置く。十三日C1をセラ・パス直下五六〇〇メートルに建設。十八日C2を東稜上第一ステップ六二〇〇メートルに、二十五日C3を第二ステップ六六〇〇メートルに建設。二十七日より八月三日まで荒天で行動できず。八月八日C4を第四ステップ肩、七〇五〇メートルに建設。九日第一次アタック隊（錦織、絹川）頂上に向うも七二〇〇メートルで断念。十一日第二次アタック隊（藤大路、永田）十二時五十分、初登頂に成功。二十二日BC撤収。三十一日スカルド帰着。

報告書　『学習院カラコルム登山隊報告書』（昭和五十一年十月二十二日発行）

アビ・ガミン登頂（一九七六年）

―第二回日印合同女子ヒマラヤ登山隊―

伏見紀子

はじめに

一九六八年に第一回日印合同婦人ヒマラヤ登山隊が行なわれ、カイラッシュ峰（五六五六メートル、ヒマチャル・プラデシュ）登頂に成功した。今回の登山隊はその第二回目にあたり、日本山岳会婦人懇談会が計画し実行したものである。

一九七四年、滞印中の私が第一回隊員との話合いのなかから、カメット（七七五六メートル）の名が浮び、これをインド登山財団に提案申請した。カメットはインド・中国国境のガルワル・ヒマラヤに位置する、外国人には禁断の山であった。

一九七五年一月に日本山岳会とインド登山財団の主催のもとに、一九七六年春のカメット登山が許可された。このために婦人懇談会は研究会をはじめた。そしてその中から原則として、自己資金で参加者をつのり、隊員を選考した。

この隊の目的は、

一、カメットおよびアビ・ガミン（七三五五メートル）登頂

一、登山を通じての日印両国親善

の二つである。

登山隊の構成

隊　長　ミーナ・アグラワル（医師兼任）

副隊長　伏見　紀子（当時は須田姓）

隊　員　奈須　文枝

〃　高本　信子

〃　清水　春美

〃　富田由紀子

〃　チャンドラ・プラバ・アイトワル
〃　トリティ・エフ・バーディー
〃　バラティ・バナルジイ
〃　ラマ・セン・グプタ
教　官　ジャミティ・シン（ウッタラカシ）
コック　ギャルツェン・ミッチェン
サーダー　チュンジェ（ダージリン）
シェルパ　ラクパ・ツェリン　〃
〃　カミ・ツェリン　〃
〃　ヌリ　〃
〃　ソナ　〃
〃　ギャルツェン　〃
〃　アン・ペンバ　〃
〃　ラチミ　（ウッタラカシ）
オペレーター　ポール（インド陸軍）

日本側の隊員は四月二十九日、ニューデリーに向った。インド登山財団会長夫妻はじめ関係者の出迎えを受け、通関を簡単にすますことができた。

五月二日にインドの隊員と初顔合せ。初対面の者もすぐにうちとけて、共に準備にとりかかった。ニューデリー出発の五月十日までの短い期間に、登山の準備、ガンジー首相会見、そして歓送会等と日本側隊員は大使館への挨拶などのほかに、沢山の日本への手紙書きと、ゆっくりしている間もないスケジュールに追いかけまわされた。

五月十日、いよいよ山に出発。乗合いバスに乗ってスタートした時は、皆インドの真夏の午後にぐったりとして、風景を眺める余裕もなく眠ってしまった。

ジョシマートに向う道は、ガンジス河の流れにそった聖地ハリドワール、リシケシ、バドリナートに向う観光、軍事道路であるが、合同登山の利点というべきか、日本人は何もせずとも手続はどんどんすみ、宿舎も軍のゲスト・ハウスが与えられ、軍用トラックの乗り心地は悪いが、ずいぶんと気楽な旅であった。大まかな人、こまかい人、隊員はいろいろだが、お客さまのような顔をしながらも、五月十六日、キャラバン第一日目を三〇〇〇メートルをこえるマラリで迎えた。

この地域はインドと中国のボーダーラインであるので、写真も禁止されたが、あちこちにある軍のキャンプで、お茶をご馳走された。山に近づくまでは人くさい社交性が必要で、少々とまどったり疲れたりもした。今こうして日本語で書いているから何もかも、一見簡単であるが、すべて言語、習慣の異なる初対面の隊員、そして兵隊さん、土地の人々と、へたな英語でやりとりするのだから、いかに神経を使い、疲れるかということを、ご想像していただきたい。

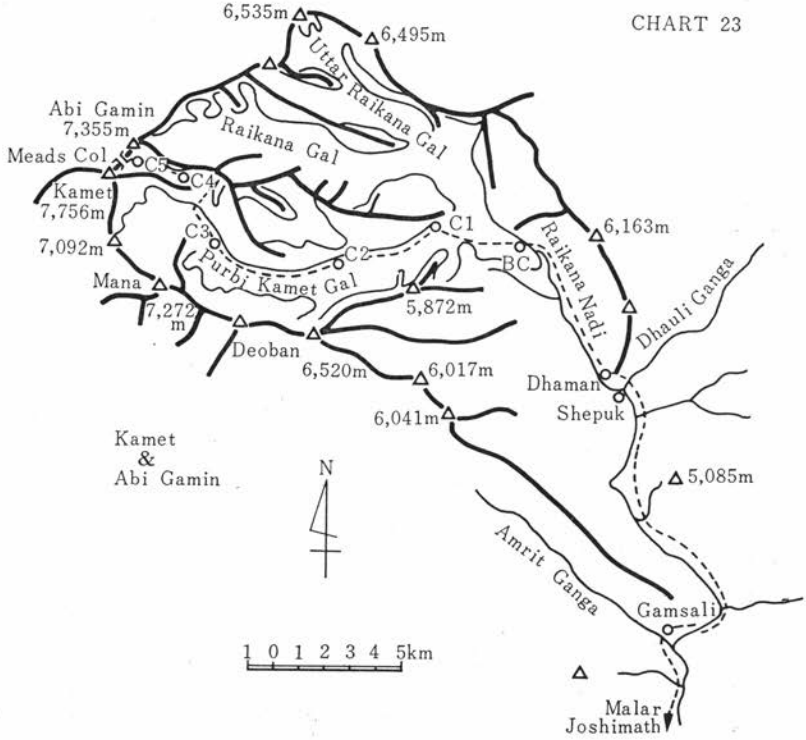


CHART 23
6,535m
6,495m
Uttar Raikana Gal
Raikana Gal
Abi Gamin
7,355m
Meads Col
C5
C4
Kamet
7,756m
7,092m
C3
C2
C1
BC
Purbi Kamet Gal
Mana
7,272
m
5,872m
Raikana Nadi
6,163m
Dhauli Ganga
Deoban
6,520m
6,017m
Dhaman
Shepuk
6,041m
Kamet
&
Abi Gamin
N
5,085m
Amrit Ganga
Gamsali
1 0 1 2 3 4 5km
Malar
Joshimath

登山活動

ライカナ氷河と東カメット氷河の分岐点近くの左岸モレーン上のベースキャンプ（四六〇〇メートル）は、ナンダ・デヴィの双耳峰が遥かに眺められる美しいところだった。ここからは、カメットはまだあの美しい姿を現わさないが、大きなメステントに十名の隊員が、仲よく生活をはじめた。

雪が多く、ミュール（ラバ）を使っての荷上げはできなかったが、羊が振り分けにした荷物を、雪のベースキャンプまで運んでくれた。出発前、日本で問題になっていたローカルポーターも二日間で手続でき、順調に荷上げされた。ルートは一九三一年初登頂のスマイス隊および一九五五年第二登のジャヤール隊のものとほぼ同様であった。

デオバン、マナ、と美しく聳える山々を眺めながら、東カメット氷河上を荷上げし、キャンプをすすめた。はじめて歩く氷河の登行は陽光も強く、さほど距離もないのにこの高度での行動は疲れを覚えたが、数日するとなれてきた。時々雷鳥のような鳥の鳴声もきこえたが、まだ雪におおわれた高山には花もなく、十名の隊員はカメットを夢みながら前進した。第一キャンプ（四八五〇メートル）は東カメット氷河のモレーンの上で、ここからいったん急斜面を下って、氷河上に降りて第二キャンプ（五一〇〇メートル）、第三キャンプ（五四五〇メートル）を設営した。

第二キャンプをほんの少し登った地点で、カメットを眺めることができた。紺碧の空の中、姿の美しいカメットが聳え、そして右奥にほんの少し、アビ・ガミンの先だけがみえる。カメットに近づくにつれて、あの頂に登りたいという欲望がわきあがってきた。

第二キャンプ、第三キャンプ間は、氷河がせまくなって、デオバン、マナ峰がせまっている。雪崩の音をきいた。第三キャンプは、アドバンス・ベースであった。ここにもベースキャンプと同じ大きなメステントがはられた。隊員十名に、最年長はコックのギャルツェン・ミッチェン、そしてハイポーター（シェルパ）七名がダージリンからやって来ていた。その他にサーダー役にウッタラカシの登山学校教官のジャミッタ・シン氏。あいきょう者の無線のオペレーターのポールは、真黒い顔をして陽気に第三キャンプまで登って来て、定時になると手廻し無線機で、ジョシマートと交信していた。この無線による交信は一九七四年のインド・ニュージーランド女子登山隊の遭難以来のＩＭＦ（インド登山財団の略）の配慮と思われる。

第三キャンプでは、隊長の発案で全隊員がアタックメンバーを推薦し合い、最終的には隊長と私の判断により、日本二名、インド二名のアタック隊員がえらばれた。これらのメンバーが上部キャンプをすすめた。アタック隊員たちは、昨年もかなり

の高度の登山を行っていただけあって、実際に強かった。

第四キャンプ（六一〇〇メートル）はカメットの東に連なる岩峰の下を廻り込むようにして、礫と氷のまじった不安定な堆石斜面を登りつめ、さらにスラブを迂回して、雪面を左に廻り込んだ氷河の台地であった。キャンプサイトの正面には大きな壁が屏風のようにひろがり、上部に青い青い氷が連なっていた。もうここからはカメットの頂はのぞめず、氷の上には青空だけが広がっていた。第五キャンプへのルートは最初、この屏風のような岩壁の右方がえらばれたが、最後の約一〇〇メートルが乗り越せず、ルートを左方に変更した。

第四キャンプから第五キャンプへは、一二〇メートルのザイルをフィックスした。第四キャンプから雪面を三〇〇メートルほど登り、岩に取りつく。もろい岩場で、左上気味にトラバース、さらに急傾斜な雪面を一五〇メートルほど直上すると広い雪原にでた。第五キャンプ（六八〇〇メートル）はミーズ・コル寄りに、隊員三名とシェルパ四名によって設営された。この頃、六月十二日から天気がくずれはじめる。第三キャンプも停滞となり、上部への荷上げが心配になるが精一杯の荷上げを行う。ただ地形上、交信がききとりにくくなった。

六月十五日、第六キャンプがミーズ・コル上、七〇〇〇メートルに設営された。翌十六日悪天のなか、カメットの頂をめざして吹雪をつき、深いラッセルがくり返されたが、アタックは中止されひき返した。その日、テントをもう少し上部、七一五〇メートルに移動した。

六月十七日もまた、悪天候であったが、午前六時にキャンプを後に、カメットの頂上をめざして再び進むが、相変らずのラッセルと吹雪になやまされ、午前十一時、七四〇〇メートル地点に到達した。あと残る高度差は四〇〇メートルであった。登る時間と下山のことを考え、登頂をあきらめざるを得ず、第六キャンプに引き返した。

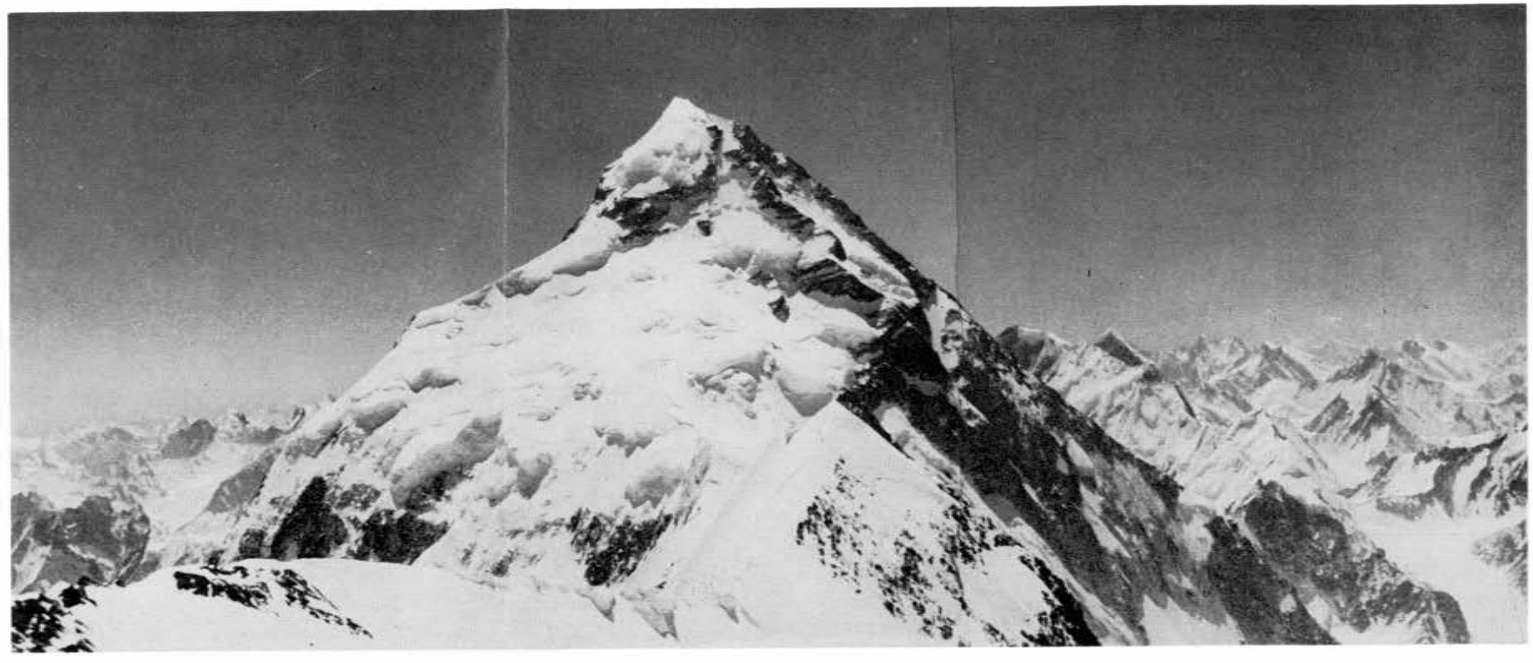
カメットを再度アタックしたいという気持はあったが、現実を考えると危険を冒すよりも、天候の回復が望めないので、明日はカメットと反対側に位置するアビ・ガミンを登ることにした。

アビ・ガミン登頂

（六月十八日　奈須文枝隊員の手記）

残された最後の食糧、ラーメン三個を五人で分けあって食べた。トリティ隊員、チャンドラ隊員、シェルパ二名と私は、午前七時C6（最終テント）をあとに、アビ・ガミンに向った。

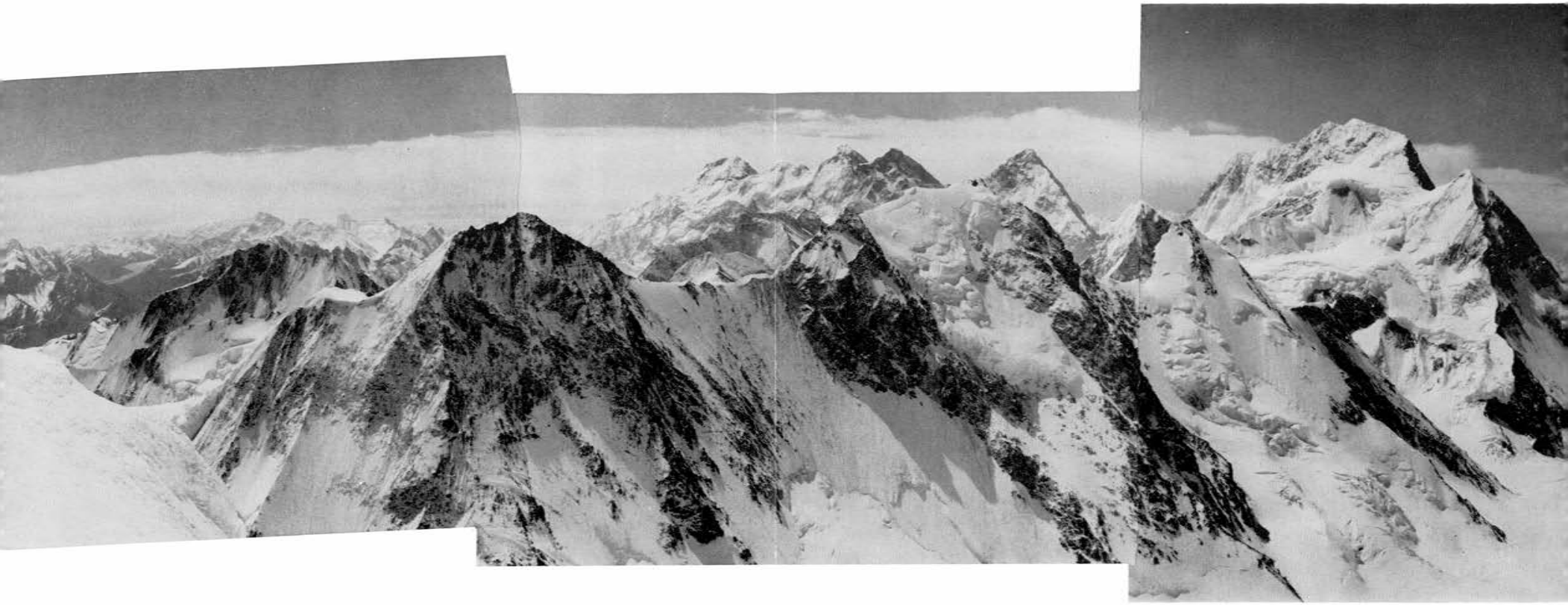
今日もまた作日にもおとらない吹雪と苦しいラッセルに悩まされる。隊員の一人が昨日まで挑戦してきたカメットをふりかえると、全員が何ものかに吸いこまれたかのように、立ちどまっては、荒れくるうカメットをみつめ合う。五人の胸中は同じ

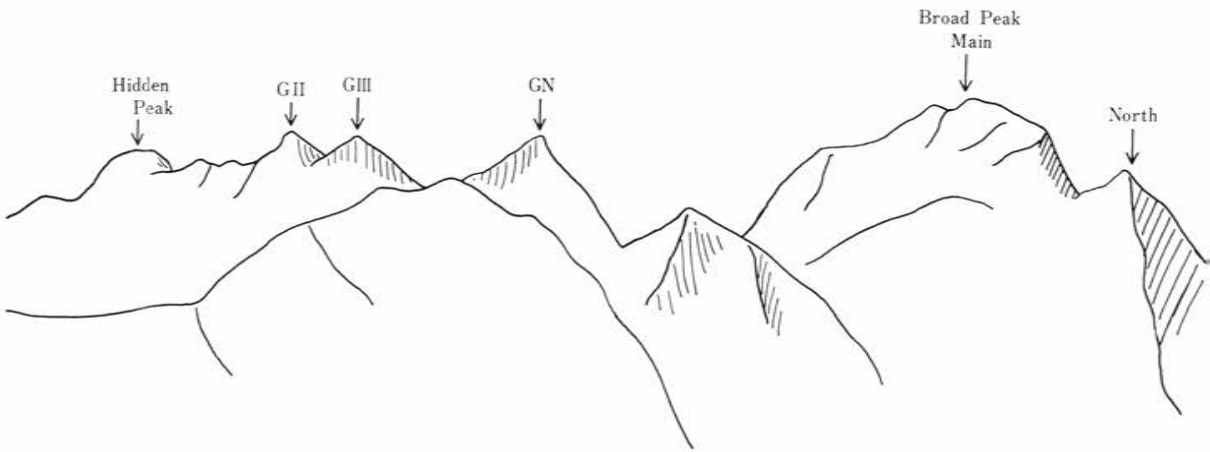


(Fig.34) スキャン・カンリ頂上より望むK2

K2 seen from the summit of Skyang Kangri

(by Gakushuin Univ. Karakorum Exp. 1976)





(Fig.33) スキャン・カンリ第三ステップより望むカラコルムの巨峰群

"Karakorum Giants" seen from Skyang Kangri, the 3rd Step

(by Gakushuin Univ. Karakorum Exp. 1976)

思いだったのだろう……（中略）。

からだを二つに折るようにして登っていたのが、アイゼンがききはじめ、急にらくになった。あとワンピッチで頂上だ。目の前の岩場を右側にまわりこむ。「ガンバレ！」と自分にいいきかせながら、一歩一歩進む。「フーちゃん。頂上！」と、トリティのはずんだ声。六月十八日、午前九時。トリティにつづいて私が頂上に立った。次いでチャンドラとシェルパが登ってくる。どの顔の鼻の下、サングラスの下も凍っているので笑っているのか、泣いているのか判別がつかない。風が強く立っていられない。あまりの寒さにシェルパは「早くおりよう」とわめく。なだめすかし、インドと日本の国旗をピッケルに結びつける。八ミリカメラをまわしたが、三秒でストップしてしまった。

チベット側は頂上からきれおちているので、トリティと私はシェルパに確保をたのみ、おそるおそるのぞきこんでみる。視界がきかず、ベールにおおわれたままとなってしまった。約二十分で頂上をあとにした。相変らずカメットの頂上ちかくは、狂ったように雪煙が舞っていた。下山も登りと同じように二時間ついやして、C6にたどりつく。

（以上『一九七六第二回日印合同女子ヒマラヤ登山隊報告書』（一九七六年十二月刊）から引用）

さて、下では十五日、第三キャンプより最年少の隊員、富田、ラマと私が第四キャンプへ上った。第四キャンプには、日本側の隊員、高本、清水の二人が留守番していた。隊長のミーナとバラティは第五キャンプに登っていた。この頃から第三キャンプには地形、天候のためか無線の交信が入らず、各キャンプ間の連絡が悪くなっていた。翌十六日、高本、清水はシェルパ一名と共に第五キャンプに荷上げに向った。

十七日、第五キャンプから隊長ミーナ、バラティ、高本、シェルパ二名が荷上げのため、第六キャンプを往復した。交信の結果、食糧、燃料ともOKということで、非常に疲労のシェルパのことを考慮し、また天候も悪く、第四キャンプから上部には荷上げは行われなかった。この時点でシェルパ一名が調子悪く、休養のため第五キャンプから第三キャンプへ下った。そして教官とコックと無線のオペレーターにローカル・ハイポーターが第三キャンプで停滞していた。

十八日、アタック隊がアビ・ガミンに向っていた頃、第五キャンプの隊員の一名が調子悪く、シェルパを残して、隊長、バラティ、高本、清水、シェルパ一名が第四キャンプに戻った。上部との連絡もとれず、期待と不安をもって時を過していたので、夕方、上部の雪面に黒い点となって降りてくるアタック隊員の奈須、トリティ、チャンドラとシェルパのラクパ・ツェリンとカミ・ツェリンの姿を認めたときは、大変うれしく、無事

に降りるよう祈った。次第に近づく仲間に、黙々と歩き出す者、お茶を持って出迎える者。アタック隊員は全力を使いはたし、キャンプに到着した。それぞれが一人一人の思いをこめて、アタックの隊員を迎えた。抱き合って喜び泣き合う者。カメットには登れなかったが、女性として最初のアビ・ガミン登頂をはたし、この一瞬、インド人も日本人もなく、ただ一つの山に対して目的をとげた仲間を感じた。奈須隊員は頂上で八ミリをまわしていた間、指に凍傷を受けたが、隊長の手当もあり、大事にいたらなかった。翌十九日、二名の隊員を第四キャンプに残し、他の隊員は第三キャンプに降り休養。

六月二十一日、第三キャンプを撤収。六月二十三日ベースキャンプ撤収。帰りは忙しかった。それぞれ仕事が待っていた。山を思い、反省をしている間もないくらい、皆の心が下界に飛んでいた。六月二十九日、ニューデリー着。

おわりに

私は六月二十日の夕暮の一時、もう訪れる機会の決してないだろうことを思いながら、陽光にうつしだされるカメットの一刻一刻を胸に刻んだ。白い雲がわき上り、夕陽に輝くカメットは、ずいぶん長い間の夢であった。私の青春のすべてが、日印で過ぎてしまった。

合同隊の副隊長などという役があたり、苦しかった。第一回が終り、六九年から七四年の申請、許可、七五年の準備、募金活動、そして七六年の出発、登山。カメットの不成功、アビ・ガミン登頂。下山、解散、なんとあっけない幕切れであろうか。

合同登山という枠組の中では、何もかも順調にいくことはあり得ない。ある面ではものの見方、考え方が全く反対のこともあるであろうし、その上不充分な言葉の表現で、お互いに理解できぬままに終ってしまったことも数多くあったに違いない。しかしそれらの事実を認めたうえでも、アジアの二つの国が、しっかり結び合うためのきずなとしての役割は果たしてきたと思う。今回、何よりも第一回目より、より良い登山をと、第二回の合同登山に対して理想を求めていたが、その結果はいますぐ目にみえて現われるというより、次回に生かされ、発揮されると確信している。

「外国の山に登って帰ってくるだけでなく、その国の人々に接し、親、子、孫の代までつづく人間関係をつくることだ」と病院のベッドに座って話してくださった、今は亡き松方三郎氏の言葉を大切にしたい。

（追記）一九七七年六月十四日、インド女子隊によってカメットは登頂された。隊長はミーナ・アグラワル、登頂者は日印合同女子隊参加のトリティ・エフ・バーディ、チャンドラ・プラバ・アイトワル、バラティ・バナルジィの三名であった。

追悼

日高信六郎氏（一八九三～一九七六）

忘れもしない昨年の二月、私は古い岳友日高信六郎氏の親切な口添えで、数十年ぶりで懐かしい日本山岳会に復活入会した。そのお蔭で、六月には久々で上高地を訪れウェストン祭にも参加し、大昔の山旅の想い出を満喫することが出来たので、帰京匆々日高氏に逢ってこの喜びを告げ、昔話を語り合いたいと大いに楽しみにしていた矢先、そこへ突然伝えられたことは、何と日高氏急逝というあまりにも悼ましい報せであった。これほどの残酷なすれ違いがあるであろうか。私は極度の失望感に打ちのめされてしまった。

山岳編集委員から故日高氏追悼の稿を求められたが、私は単に学生時代の古い山仲間というだけで、国内的にも国際的にも日本山岳界の大功労者であった、日高元会長の凡てを語り得る立場には毛頭ないのであるが、僚友の殆んどが世を去り独り生き残った者の務めとして、静かにその御冥福を祈りながら敢て筆を執ることにした。

日本山岳会第九代の会長日高信六郎氏は、幼にして北九州に育ち、福岡県立修猷館中学生の頃から山に憧れ、明治四十一年二月満十四才十ヶ月という記録的な最年少会員（会員番号一四二）として、日本山岳会に入会した事実は己に著名な歴史である。恰度同じ年の夏満十六才九ヶ月だった私が、富士登山を試み、山の魅力に惹かれ始めていたのも何かの宿縁であったろうか。

それから四年経った大正元年九月のこと、私は初めて日高氏と当時の一高寄宿寮東寮五番室で相識るようになった。真新らしい白線帽の紅顔に眼鏡をかけ、いかにも初々しい同氏の制服姿が今でも瞼に浮んでくる。紹介したのは私の山の相棒であり、日高氏と同郷同学の守島伍郎氏であった。山を愛するという共通点を持った三人はすぐに親しい山仲間になり、何回となく赤城山、男体山など近県の山々を歩き廻った。後年のことではあるが、日高氏が兄のように慕っていた同郷の盟友守島氏の外務省入り（終戦時駐ソ全権公使、戦後代議士）に感化を受け、その後を追って外交官生活に生涯を捧げた経過を見ても、その間柄が肯けるのである。

大正二年の夏、守島氏と私が一高山岳会を創設する時、日高氏の手引きで日本山岳会の小島烏水氏、高野鷹蔵氏、辻村伊助氏ら諸先輩の知遇を得、その懇切な指導と協力のお蔭で無事発足に成功し、槍ヶ岳を目指す四十名の大登山隊が全員無事故で登頂を果したことも、大正三年三月日高氏が山の同志又木周夫氏らと共に、一高山岳会を校友会公認の旅行部昇格に成功させ

たことも、すべて日高氏の山を愛する熱情から迸り出た成果であって、今以て一高旅行部仲間の輝やかしい語り草となっている。

その年の夏には日高氏は早速旅行部第一回登山隊のリーダーとなって、横沢類蔵、畠山善作らを引連れて槍、前穂、乗鞍などに登り、秋には又木氏と共に白峯三山を縦走した外、守島氏と私との三人水入らずで甲斐駒、仙丈岳を志し、屏風小屋で行者と雑魚寝したり、仙丈の頂上で大吹雪に見舞われ大慌てしたり、雷鳥を手掴みにして興じたりした、若き日の想い出が極めて印象深く残っている。この山登りこそ、私が日高氏と行を共にした最後の山旅となったからである。

更に特筆すべきことは、大正四年七月一高卒業の夏、日高氏は旅行部発展のため当時としては破天荒な海外視察大旅行を企画した。自ら世話役となって全国高校に呼びかけ、当時占領中のサイパン、トラック、ヤルート等の南洋諸島を巡航見学するという大規模なもので、各高校の教師生徒ら百余名が郵船加賀丸に便乗し、五十一日間に亘る有益な視察大旅行を成功裡に完了させた。生徒らが船舶の寝室で南京虫や蚤に悩まされたエピソードの中で、日高氏は不幸にもアミーバ赤痢というお土産を頂戴し、この大快挙の返礼に大学一年休学という犠牲を払うに至ったことは、まことに非運な出来事であった。

しかし、健康を取戻したとなれば、また山に惹き付けられる。大正五年秋には鐘釣より大黒鉱山跡を経て大黒岳を、翌六年には針ノ木越えで立山、劔、槍ヶ岳などを、いずれも岳友又木氏と共に踏破して鬱憤を晴らしている。これで体力に自信を得た日高氏は、大学二年の新学期から又木氏の主唱した柏風寮生活に欣然参同し、二年間に亘って同志数名と共に、将来に備えて学業に励み心身を鍛えるという修養を積んだのであった。柏風寮日記によれば、日高氏は平生又木氏と共にテニスを楽しみ毎冬寒稽古までしたほどであり、また乗馬には特に熱心で暇さえあれば原宿の馬場通いをしたという、若き日の行動が偲ばれる記載が残っている。

充実した学生時代の最後を過ごした日高氏は、大正八年三月東京帝大政治科を卒えるや、直ちに初志の通り外務省入りした。仏国大使館勤務を振り出しに、欧州、北欧、中華民国、或は本省に於て夫々要職に就き、終戦の翌年駐伊特命全権大使を最後として、四半世紀を越える栄ある外交官生活に終止符を打った。この長い間はお互いに職場も隔たり空白であったのは残念であるが、その中で唯一つの爽やかな風の便りは外でもない、日高氏が日本人として最初のモンブラン登頂者（大正十年八月）となったという朗報であった。

終戦の翌年久々に故国の土を踏んだ日高氏は、遠ざかっていた日本の山々に愛情を蘇えらせ、毎年の登山歴はそれこそ枚挙に遑がないほどである。昭和二十九年四月副会長に推され、三十三年十月第九代目の会長に就任、三十七年その職を辞したが、その後に至るまでも、国内的には山に関連の深い自然保護に力を注がれ、国際的には日本山岳会の声価を海外に高からしめたことは周知の功績であって、山と外交の二本建でその生涯

を歩きつづけてきた日高氏の面目躍如たるものがある。

今から数年前のこと、一高旅行部縦の会で、日高氏から、ネパール国へ旅行の際、馬から落ちて大怪我をした話を聞かされ、とても驚いた記憶がある。「昔あれほど乗馬熱心だったのにどうして……」と訝る私に「イヤ歳のせいか不覚なことでした」と、申し訳なさそうに微苦笑されたその顔が、つい昨日のように思われてならない。この落馬の話がキッカケで、私は日高氏が日本ネパール協会の会長であることを知った。数年前ネパール国王から授勲された事実に徴し、いかに日高氏が両国間の親善に努め、同国の開発に力を尽されたか、その誠意の程が偲ばれる大きな証拠である。

晩年の日高氏とは旅行部縦の会で話合うのが楽しみであったが、偶々四十九年三月日本山岳会のルームで開かれた山岳史懇談会の席上、一高旅行部の足跡について語り合った時は、流石に眼を輝やかして懐旧談に耽っていた。想えばこの楽しかったルームでの会合が、日高氏との永遠のお別れの場になろうとは！　次いで五十一年二月私の復活入会について話合った時、あの物静かな言葉使いが、日高氏の声を耳にした最後のものになろうとは！　山に始まり山で結ばれた私との深い縁の糸は山の話を最後にしてプツリと永久に断たれてしまった。何とも譬えようのない寂しさ虚しさである。

かくして一世の岳人日高信六郎氏は、昭和五十一年六月十八日日本山岳会名誉会員として、六十八年余という稀に見る長期在籍記録を残して、八十三才の長き生涯を閉じたのである。

戒名　誠光院信誉回道居士　合掌

「……主人は、山のお仲間と山のお話をしております時が、何にもまして楽しそうでございましたが、山の夢でも見ているのではないかと思はれますやうな、おだやかな最後の様子でございました……」

これは昨年九月、日高澄子未亡人から、日本山岳会員、一高旅行部縦の会幹事中村純二氏に寄せられたお手紙の一節で、同氏の許しを得てここに載せることにした。会員の皆さんと共に黙読して、日高氏の在りし日の姿を改めて偲び、山を夢みつつ安らかな永久の眠りにつかれた故人の御冥福を重ねて祈念して已まないのである。

（大木　操）

*

登山界の先輩がたの中には、後輩の育成に力を注がれた方は少なくないが、日高さんの場合は格別であった。御自身の意見は表に出さず、若者たちが動きやすいようにその環境を整備して下さった。もちろん日高さんの眼は、優れた企画とそうでないものとは鋭く峻別されての上のことであるが、当事者としては、思いきって個性を伸ばすことができたはずである。

本会における高所登山と日高さんとの関わりは古く、マナスル登山の初期からヒマラヤ委員会委員として活躍されておられたが、筆者にとっては、多少の関係を持った一九五八、九年のヒマルチュリ登山のことが特に印象深い。この計画は別宮会長、

日高、松方両副会長のもとにスタートしたものであるが、国を挙げてのマナスル登山のほとぼりがさめる頃であったためか、募金その他組織上のことがすんなりとは進行しなかった。また偵察隊出発後に別宮会長の思いがけない急逝という事態があり、日高さんが急遽会長に就任されることになった。

一九五九年度は、筆者は登山隊の留守業務を担当するために一年間理事会から離れていたが、この間の日高会長の御苦労は大変なものであったと推察される。日高会長はそのようなことは全くお顔に表したこともなかったが、登山計画終了後、筆者が会長より保管を依託された書信や証書類を見るにつけても、そのことは歴然としていた。

日高さんは一九六〇年秋、電源開発調査団長としてネパールを広く調査された。ヒマラヤとは縁の深いお仕事を前々から担当されておられたのであるが、この御旅行によってネパールに一層お近づきになられたようである。一九六四年日本ネパール協会を創立、亡くなられるときまで会長としての職務を全うされた。

日高会長は講習会ないしは研修会といった事業に大変熱心であった。こうした機会にはいつも親しく参加され、また必要に応じて自ら資金の調達までやって下さったことがある。当時最も組織的な講習会として、西穂高における、非会員を含めた全国的な登山技術指導者講習会があった。その詳細については本誌第五十七年の報告に譲るが、一九六〇年から三年間にわたり、毎年三月に七日間、各県山岳連盟または本会支部より選出された受講者各二名を対象に、登山技術の指導法を研修するのが、その目的であった。この講習会は後に海外登山技術研究会へと発展し、今日では日本山岳協会に引継がれている。

登山界が発展するためには、ある場合には組織いじりも必要であるが、一方、こうした組織の枠をはずして、広域の登山者が個々に接触することも極めて大切なものである。日高会長はこうした点について重点的に推進されたのである。

日高さんは外交官御出身にふさわしく、交際が大変に広い。よく旅行され、多くの人たちと接しられた。こうしたことは日本山岳会の会長という職務を行うにあたって、極めて有用な御経験ではなかろうか。

また日高さんは、外交官の仕事は受付に過ぎないと、よく言われていた。しかし日高会長は受付だけでなく、最後まで進行を見届けないと気の済まない方であった。外国との交流においても同様である。フランス語やイタリア語の文書は会長自ら処理して下さったが、英語くらいは書記が片づけなければならず、折目正しい書簡文など書いたことのない筆者は、外交文書の第一歩から勉強を始めたことを憶えている。外国からはときどき身勝手な手紙も舞いこんで来るが、会長はすべて返事を出すことを指示され、手紙一本にかなりの時間がかかる筆者にとっては苦労の種であったが、今にして思えば、この経験が職業上にも大変役立ったことを後に知ることができた。

日高さんは若い者の気持を常に汲んで下さった。身近な組織の中でも先輩となると近寄り難いものであるが、まして、よそ

の大学の大先輩ともなれば、めったなことでは口もきけないのが普通であるが、日高さんの気さくな呼びかけによって、日本山岳会というもともとかなり堅苦しい組織の中に溶けこんで行った人たちは数多いことであろう。筆者が理事の末席に連なってしばらくたった頃、若いメンバーの意見が問われたことがあった。そのとき筆者は憶面もなく、理事になって何か仕事でも与えられるのかと期待していたら、理事会で毎回先輩がたの議論を拝聴する以外に用はなく、まことに不本意であるといったようなことを、若さに任せてずけずけと申上げたことがあった。一般の人ならば、この不躾なやつが何をいうかで終ってしまうであろうが、日高さんはこのことをよく記憶されていて、後々に至ってお言葉の端に出たときは、こちらは冷汗三斗、身も細る思いであったが、日高さんの理解の深さの例として記した次第である。これも私事にわたることながら、日高さんが一九五三年に評議員に選任されて以来、一九六二年春に会長を退任されるまでの十年近く、理事としてお仕えすることのできた筆者は、まことに幸せものであった。

日高さんは忽然と逝かれた。その御逝去は私どもにあまりにも唐突な衝撃を与えた。ナンダ・デヴィ準備委員会顧問として、度々お眼にかかる機会のふえたことを喜んでいた折もおりであった。委員会に御出席願うときには、いつも誰かがお迎えに上がるようにしていたが、事務上の手違いによって、御出席を頂かない予定の会合に突然お見えになり、一同あわてたこともあった。以前を知る私どもにとって日高さんの足許は心もとない感じを与えはしたが、それでも普通の人とは比較にならずしっかりしておられた。それなのにナンダ・デヴィ初縦走の知らせをお聞きにならぬうちに亡くなられてしまった。登山隊が縦走に成功したのが一九七六年六月十五日であったが、日高さんはその三日後に逝去されたのである。最後の最後まで若者たちの活動に惜しみなく援助を与えて下さっていたのに、まことに残念という外ない。

略歴

一八九三年四月十日、神奈川県に出生（本籍地は福岡県）。
一九〇八年、本会入会（会員番号一四二）。当時中学二年生であった。
一九一二年、第一高等学校入学。十四年に旅行部設立。
一九一九年、東京帝国大学法学部政治科卒業、外務省に入る。
一九二一年、モン・ブラン登頂（邦人として初登）。
一九五三年、本会評議員就任。
一九五四年、副会長就任。
一九五八年十月、別宮会長逝去に伴い会長就任、六二年春退任。
一九六五年、名誉会員に推薦される。
一九六九年、『朝の山残照の山』出版。
一九七六年六月十八日午後一時、心臓衰弱のため逝去、享年八十三歳。

なお、前記『朝の山残照の山』には、登山歴を含むかなり詳しい年譜があり、また本誌第七十年「創立七十周年によせて」は、日高さんの略歴と読むこともできる。

（金坂　一郎）

藤島敏男氏（一八九六～一九七六）

三年前（昭和四十九年）の五月十八日、藤島さんを含めた私たち六人は、残雪豊かな会津の飯森山に登った。日中温泉からはかなりの道のりで、このとき藤島さんはひとつ手前の鉢伏山で前進を思いとどまり、私たちが飯森から下ってきたとき、鉢伏の山頂でまた一緒になった。実に美しい五月晴れの一日で、まだ真白な飯豊山塊が、ようやく芽吹きそめたブナ林の彼方に横たわり、遠く朝日連峰までよく見えるような快晴の午後であった。思えば、昭和三十四年一月から始まった私との山歩きのこれが最後の頂きであった。熱い緑茶に咽喉を潤しながら、残雪に輝く遠ち近ちの山々に囲まれた、この幸福のひとときを、私はいまでも忘れることができない。

藤島さんはその後六月に、八幡平に近い玉川温泉から栂森を経て阿仁の比立内へ出る山旅をやったが、私は同行できなかった。そして八月、恒例の御殿場生活が終ると、九月には国立ガンセンターで胃の開腹手術をうける結果になった。翌年は経過順調で、夏は御殿場で専ら体力の回復をはかったが、年末頃から再び不調となり、翌五十一年四月には再度ガンセンターに入院、現代の医学でやれる限りの治療をうけ、最後まで不退転の気力をもって闘病生活を続けたが、九月九日午後三時過ぎ、遂に還らぬ人となった。病名は胃癌であった。享年八十歳余は、人間の寿命としてむしろ長いほうだが、それまでの健康があまりに勝れていたので、身近かにいた人々は、この二年間の急激な変化に、ただ呆然とする以外になす術がなかった。殊に私にとっては交友四十年におよぶ最も親しい先輩であったから、永別に際しての悲哀落胆は容易に癒されるものではないが、JACにとっても最も大切な会員の一人を失うことになった。

藤島さんには生前『山に忘れたパイプ』（第二版・一九七六年四月茗渓堂刊）の著書があり、その巻末には自らの手によって、克明な「登山譜」がものされているが、JACでの業績については窺い知ることができないので、先ずその点を記すのが順序であろう。

藤島さんは大正八年十一月、日本山岳会に入会した（会員番号七一〇）。二十三歳、東京帝国大学在学中のことである。木暮（理太郎）さんと皇海山へ登った頃であり、入会後は急速に熱心な会員になったようで、大正十二年五月には、冠松次郎、槙有恒氏ら五名と共に初めて幹事となった。二十七歳という年齢は、幹事のなかでは最年少だったのではあるまいか。

昭和四年十一月、本会が初めて虎の門不二屋ビルに集会室図書室を設けることができたのは、主として松方三郎さんや藤島さんの尽力の賜物によるのだが、図書室の充実にも松方さんらと共に藤島さんは不断の努力を傾けた。

昭和五年六月の『山日記』の創刊、同年十月の会報（現在の『山』）の創刊にあたっても、藤島さんの果たした役割は少なからぬものがあった。そして昭和九年には評議員に挙げられた。

『山岳』の編集は最も重要なものの一つだが、藤島さんは第三十四年第一号、第二号（昭和十四年刊）、第三十五年第一号、第二号（昭和十五～十六年刊）の編集を行なっている。

昭和十六年二月、本会の社団法人改組以降も、引続き評議員として常に会の重要業務に参画したが、昭和二十年五月二十五日の戦災によって、虎の門の本会事務室が焼失した後、敗戦後まだ諸事極めて不如意の時代に、お茶の水に本会の建物を建設するにあたっては、卒先募金委員長の大役を引きうけ、二十四年三月には早やくも、本会は自前の建物をもつことができるようになった。この建設に際して藤島さんの払った努力と熱意には、ひとかたならぬものがあった。戦後の本会の発展が、お茶の水のクラブ・ルームなくしては考えられぬとき、戦火の余燼のまだ燻っていた当時、藤島さんが傾注した本会再建のための尽力は、決して忘れてはならないであろう。

戦後は理事、副会長、評議員として長期に亘り会務にたずさわり、若い役員の指導にも怠りなく、また会として初めての海外遠征であったマナスル登山に際しては、当初からヒマラヤ委員会のメンバーの一人として、屡々肯綮に当る意見を開陳した。

昭和四十年十月の本会創立六十周年記念式典の際、名誉会員に推挙されたが、その後も本会に対する関心は衰えることなく、昭和四十八年十二月、丸善で開催された「近代登山の先駆者たち」展覧会のときは、請われてその準備委員長をつとめるのを辞さなかった。会員籍にあること五十七年、その間役員四十二年、名誉会員十一年という計算になる。

以上私はごく記録的なことのみを述べてきたが、こうした形に現われたことばかりでなく、藤島さんくらい本会のクラブ・ライフを自らもエンジョイし、また本会がよいクラブであることに献身した人を知らない。各種の会合によく顔を出したばかりでなく、土曜日の午後は談話室での山談閑談を楽しんだ。土曜会という通称はお茶の水時代からのものだが、そうした雰囲気は虎の門時代にまで遡ると言えよう。また半世紀以上もの長い間、藤島さんくらい『山岳』や会報誌上に寄稿の多い会員も珍らしい。しかも、その文章に優れているものが多く、年月を経ても色が褪せていない。会員の追憶記の多いのも特徴と言えるだろう。

これらを通じて言えることは、藤島さんの会に対しての愛情が極めて強かったことと、会がよいクラブであるためには、人間関係が最も大切であると常に気を配っていたことが窺われる。「俺は司会屋じゃあないよ……」と言いながら、年次晩餐会の司会者を何年もつとめたのも、会に対する愛情や会員の要望にこたえたものであったろう。それだから藤島さんは、クラブから受けるものは常に無形の良さであることを強調し、その反面クラブから収奪することは、有形無形を問わず、極めてこれを忌み嫌ったのである。私自身、いま振り返ってみて、こうした点が藤島さんから受けた、最も大切な教えだったような気がする。と同時に、世代が変ってゆくＪＡＣに、この点だけは強く遺してゆきたい気分にかられることが、最近特に少なくな

い。

藤島さんというと、辛辣な皮肉をとばして、ひどくこわい腑曲りの人のように思われていたようだが、それは藤島さんに反俗の精神が強く、時流に阿ることを嫌った点と、ホンモノとニセモノの区別がはっきりしていて、容易にものごとに妥協しなかったからで、胸中に流れる友人に対しての愛情は、稀れにみる暖かさと細やかさの溢れた人であった。これは、ひとたび藤島さんと親しくなった誰しもが、ひとしく認めるところであろう。

最後に、藤島さんの山登りについて述べねばならないが、さきに触れた「登山譜」に尽くされているから、ここに縷説の要はない。ただその要点を認めるにとどめる。「登山譜」によると、最初の登山は明治四十五年の伊豆大島三原山だが（十六歳）山らしい山へ登ったのは大正五年六月、一高旅行部の一行との赤城山—尾瀬沼—桧枝岐—引馬峠—川俣が、初めてである。

大正年代の登山で特に記しておきたいのは、大正八年十一月の皇海山（木暮さんに同行）、大正九年七月、仙ノ倉山、茂倉岳、谷川岳（登山者としての最初の記録）、同年七月、利根水源の山々の縦走（木暮さんに同行）、大正十年七月、越後駒ヶ岳、中ノ岳、兎岳、北ノ又川下降（荒沢岳へは登れなかったがこの山は永く藤島さんの胸中にあったようで、三十五年後の昭和三十一年五月、六十歳の時、蛇子沢から登頂した）、大正十四年四月、鹿島部落から爺岳登頂、同年五月、守門岳、浅草岳、御神楽岳（御神楽岳はおそらく登山者として初めての記録）等である。この時代、二回に亘って木暮さんと同行したことは藤島さんのその後の登山に、強い影響を与えたと思われる。

昭和に入ってから十年までは、白馬岳、月山、尾瀬、巻機山、万太郎山、大朝日岳、秋田駒ヶ岳、八幡平、岩木山、鳥海山、八甲田大岳、北海道十勝岳等へのスキー登山が目につくが、昭和六年十一月の笈ヶ岳、千梃木山、奥沢下降は早期の登山であろう。

昭和十年に渡欧し十三年六月に帰国したが、その間ヴェッターホルン、ブリュームリス・アルプホルン、メンヒ、グロース・フィッシェルホルン、グロース・グリューンホルン、フィンシュテラールホルン、チナール・ロートホルン、マッターホルン、シトラールホルン、ブライトホルン等へ登頂したことが、記されている。

その後戦時に入っても、藤島さんの山登りは絶えることなく、全く山登りをしなかったのは、昭和二十一、二十二年の二ヶ年だけである。

戦後は、先ず昭和二十三年六月の第一回ウェストン祭に神河内へ入ったのを皮切りに、二十五年三月には十勝三股から石狩岳スキー登山、爾後年を追って登山の回数は漸増し、三十二、三年以降、即ち藤島さんの六十歳以降四十九年六月までの登山回数が、圧倒的に多いことは特徴といえるであろう。その時代に指向した山は、あまり人の登らぬ山が多く、避衆登山などという語を使い出したのも三十四、五年頃のことである。また同行者も二人から精々数名という小人数の気の合った仲間であっ

た。

昭和三十三年十一月十二日付の私に宛てた便りに「日本の山の独特な枯淡な味は、案外高くない山谷にあると思われます、大掛りな山登りだけだと、登る対象が限られて、折角沢山ある日本の山を、いくらも知らずに終ってしまふ惧れがあり、それは残念だとも言へます」という一節があるが、この時代の藤島さんの心境をよく伝えている。

併し、これはごく楽な山だけに登ったことを意味するものでなく、一日に十数時間を要するような登山にも、よく堪えることができた。一言でいえば晩年の藤島さんは、実に山に強かった人である。私と二人で鳥甲山に登ったときは既に六十九歳、会津朝日岳が七十五歳、共に十時間以上の登降で、この他にも七十歳を過ぎてから常人では真似のできない山登りが、幾つか見られるのである。

私は昭和三十四年以降、亡くなるまで七十回に垂々とする山登りを藤島さんとかさねたので、その思い出は書き出せばきりがない。併し、個人的な回想はここには慎しみたい。

藤島さんはまた山の本に限らず、およそ書物についての造詣も非常に深かった。戦災で烏有に帰した尨大な蔵書のなかには、日本では珍らしかったフランスの山の本が多かったと聞く。本ばかりでなく、文芸、美術、演劇、パイプ、タバコ、酒料理などの愉しみについても、格調の高い趣味人であったが、既に私に与えられた紙数をはるかに超えているので、ここに贅するのを避けたい。

顧みると藤島さんの一生は、日本銀行に半生をおくった人としては、自らも認めているように、山登りを中心として、したい放態、気随気侭に過し、放言三昧に暮した、まことに仕合せなものであった。それにしても、諸事四角四面の中央銀行という枠の中で、三十数年間自分の流儀を変えずに押し通した藤島さんの生きかたは、まことに見事だったというほかはない。しかし、あらゆる面でおそろしく几帳面で、徹底していたその性格から、銀行での仕事振りは真面目で厳しいものだったと想像する。

JACにとっては、今後再びこのような人が現われるとは思えないし、私にとっても、まさにかけがえのない先輩であった。

静かに瞑目して追悼の筆をおく。（一九七七年六月）

（望月　達夫）

*

藤島敏男さんは、唯一の著書である『山に忘れたパイプ』をあたかも日本山岳会員への形見のように遺して逝かれた。あのA5判五百数十ページにもおよぶ大冊をひもとけば、その六十年にわたる山登りについて、また半世紀を越える本会での活動について、いろいろと知ることができる点、まことに見事な形見といえよう。

「この本が出るまで」と題した自序のなかで、深田久弥、小林義正、望月達夫の「三酔狂人」にそそのかされた結果の上梓だと、しきりに強調されている。腰をあげるまで気の重いことは

あったかも知れないが、実のところ、この本への著者としての熱のあげかたは、並大低ではなかったに違いない。ことに手術のあとの第二版づくりの折など、驚くほどの入念さであったと聞いたし、その限定本を手にしたときの喜びの大きかったことにも、あの著書への深い愛着がうかがわれた。

日常なにごとにも折目の正しさを求める人柄だったから、こと書物に関する場合など、その評価はきびしかった。内容はもちろん印刷、用紙、装幀のすべてにわたって気に入らねば、なかなか合格点を与えない。著書におさめられている「装幀展覧会をみる」（昭和二十六年十一月『学鐙』への寄稿）を読めば、造本についての深い知識と愛情のほどが理解されるが、これは滞仏中、伝統芸術である装幀について実地に、その技術を学んだ体験を踏まえての発言なのである。昭和五年に刊行された梓書房版『スウイス日記』や『ハイランド』などの装幀などにも、故人の貢献があったと記憶している。

あれほど愛書家であった藤島さんが、戦災で一切の蔵書、愛蔵の品を焼失したのであるから、どんなに口惜しかったかは察するに余りある。パリ仕込みの革仕立の特装本の数々とか、アルパイン・クラシックスはもとより、荷風はじめ多くの文学作品の初版本蒐集など、すべてが灰燼に帰してしまったのだが、故人はそれらの喪失について、未練がましい嘆きを口にはしなかった。軍人どもの無暴を痛烈に批判はするが、みずからの被害を前面には出さなかった。むしろ、故人の語らざる心情を私などが感じたのは、あの書物を愛した人が戦後、蒐書の癖をきっぱりと絶ったからであった。読みたい本は日本銀行の図書室から借り出してくるのだと聞いて、人には語らぬ強い意地があるように思われた。戦争なかりせば……の感を新たにする。

藤島さんは友人の面倒をよく見る人だっただけに、本会でも先輩や知友の悲報に接すると、つとめて追憶の筆を執り、丹念にそれらの人たちの業績を記録した。著書のなかにも、それらが収められているが、とくに私は、石川欣一氏をしのぶ「軽妙酒脱なエッセイスト」と題する一篇に心を惹かれる。石川さんは、藤島さんの一つ年上、本会へも五年早く大正三年に入会しているので、藤島さんは「僕にとって山とパイプの先輩」と呼んでいた。『山へ入る日』はじめ山に関する好著で知られ、その語学力により立派な訳業をなしとげ、大町、対山館の百瀬慎太郎氏との山と酒の交わりは深く、たばことパイプについての権威でもあったから、石川さんには共感しあえる数多くの要素があったにちがいない。

たとえば、たばことパイプについても、石川さんが会長だった日本パイプクラブに藤島さんも属していた。「山に忘れたパイプ」がファースト・パイプだったというから半世紀も喫いつづけたわけで、それだけに年季の入った知識の持ち主であった。掃除の行き届かないパイプなどふかしていると、たちまち小言が出るとともに、ちょっとよこせと受けとって、火皿のカーボンを早速けずりはじめる。口やかましいが心やさしい故人の姿を、そこに見ることが度々あった。大先輩の近藤茂吉さんが差し出す特級品のシガーを、槙さんとともに手にしてご満悦

の姿など、本会の集いでよく見受ける風景であった。

松方三郎さんは超一流の食通だったのに酒とたばこには無縁だった。藤島さんの方は食べ物も酒も心から楽しむ口で、山歩きにも適度のアルコールは欠かさなかった。だが飲み方にもやはり独特の流儀をもち、たとえば、山頂での貴重な楽しみとして罐ビール一つ持参するにも、必らずコップを一つは忘れず、なみなみとつぎ終ってから乾杯という「格式」を重んじたことは周知のところ。酒をたしなむ友を好み、本会の土曜会などにも常連として姿を見せては談論風発、一座をにぎわせるあたり、心からクラブ・ライフを愛し、尊んだ人でもあった。

（島田　巽）

略歴

明治二十九年（一八九六）七月十二日、横浜市野毛山で生れる。暁星中学校、第一高等学校を経て、
大正七年（一九一八）九月、東京帝国大学法学部政治学科へ入学。
大正八年（一九一九）十一月、日本山岳会へ入会（会員番号七一〇）。紹介者は本人の言によると木暮理太郎氏のようである。幹事、理事、評議員、副会長等の役員を長年月つとめた。
大正十年（一九二一）三月、大学を卒業し五月、日本銀行に勤務する。以後松本支店、秋田支店、パリ駐在等を経て、熊本支店長、京都支店長、文書局長等を歴任し、昭和二十二年（一九四七）三月、監事に就任、昭和三十一年（一九五六）五月、監事を退任して鉄道会館監査役となる。
昭和四十年（一九六五）十月、日本山岳会名誉会員に推挙される。
昭和四十九年（一九七四）九月、東京・国立ガンセンター病院で胃の手術をうけ、十二月に退院する。
昭和五十一年（一九七六）四月、再び国立ガンセンターへ入院。九月九日午後三時過ぎ胃癌により病歿。葬儀は九月十一日、増上寺で行なわれ、山の友人を代表して槇有恒氏が弔辞を読んだ。法名は光嶽院敏誉紫雲居士、十月二十七日雑司ケ谷の藤島家墓地に埋骨された。
著書に『山に忘れたパイプ』（初版一九七〇年五月、増補二版一九七六年四月・茗渓堂刊）がある。
藤島氏の登山歴については、同書の巻末に収載されている「登山譜」に詳しく述べられている。（望月記）

伊藤秀五郎氏（一九〇五～一九七六）

伊藤秀五郎君は横浜の生れだが、北海道の自然に強く惹かれて離れず、出てもまた北海道へ戻り、ついに、その執着した北海道を終焉の地に選んでしまった。

秀五郎という名からは、莫盆を片手に下げた丹前姿の親分が浮ぶが、案に相違して、英国風の蕭洒な風貌で、自然と人世の苛烈さを静かに凝視しつづけた詩人であった。

彼は北大で生物学を専攻した学者であったが、学問的な研究者というよりは、謹厳な教育者として生涯を送った。

その一生は、北大予科教授から北海道学芸大学、札幌医科大学の教授を歴任し、途中には北海道教育委員会の教育長や、北海道教育研究所長という面倒な役職にも就いている。

晩年には札幌医大の名誉教授となり、また静修女子短大の学長を楽しく勤めていたが、不幸にも喉頭癌に冒され斃れたのである。

以上は表向きの人生記録であるが、彼には別の楽しい人生があった。それは山を眺め、山へ登り、山について考えつづける別の世界を持っていたからである。

私は彼より一年遅く北大の予科には入ったのであるが、山やスキーばかりでなく、いろいろな面で、一緒に楽しく青春を過した。

北大学生を主体とした札幌交響楽団で、彼はフレンチ・ホルンを、私はオーボエを長い間吹いていたこともあった。

また、北大スキー部の有志の集まりであった「山とスキーの会」の月刊誌『山とスキー』の、四年目の編集は彼が担当し、そのあとの六年目は私が引継いだりした。

彼がもっとも活躍したのは、北大スキー部を離れて北大山岳部を創設した大正十五年前後であった。

北大山岳部は彼と沢本三郎君の不屈の努力によって出来上り、第一期の主任幹事は沢本君、第二期の主任幹事には彼が就任し、ここにスキー部はスキー競技を主とし、山岳部には山好きが集り、やがて昭和三年には山岳部報第一号を出すまでに発展した。

この時代の彼は異常なまでの執念で、北海道の山々を登りまくり、同行者がなければ単独で、何日も山を歩いていた。

特に厳冬期の北海道中央高地に情熱を傾けていた。大正十四年の大雪山スキー登行では、建設されたばかりの黒岳小舎に食糧その他を荷上げしておき、そこから旭岳、北鎮岳、北海岳等を、吹雪に苦しみながら登り、十日間も雪の下の小舎で生活している。

また、昭和三年冬の石狩岳登山では、石狩川上流に予め二つの小舎を作り、最大の難所である石狩川大函、小函に厚氷が張るのを待って登頂に成功したのである。

彼の先駆的登山の一つに、北千島の北端に聳えるアライト島の、阿頼度富士への遠征を忘れることは出来ない。

北海道の中央高地が、もう千メートルも高ければ、氷河の一つぐらいはという話がいつも喋かれ、山仲間は氷河の上を歩く夢を脹らませていた。

そのころ、千島列島はすべて日本の領土であったが、北端は軍事上の要地なので地図は入手不可能であった。北端には阿頼度富士と呼ばれる高い山のあることは知られていたが、どんな山なのか調べようがない。

しかし位置は北緯五十度だし、標高も二千メートルを越すらしいから、もしかすると氷河が、という期待の山であった。

大正十五年の夏、彼は山友と二人で三ヶ月に及ぶ大旅行で、目指す阿頼度富士に登ったが、氷河はなかったと笑って帰ってきた。

これは有名な瑞典の探検家ステーン・ベルイマンの、北千島の調査よりも三年も早かったのである。

彼は北海道の山ばかりでなく、日本アルプスにも再三訪れ、

米国留学の帰途はスイスに立寄り、グリンデルワルトや、ツェルマットに遊んだりしている。

彼は真面目な勉強家であり、努力家であったから、先輩や友人達の信頼も篤かった。多少一本気すぎるところもあったが、円満に事をまとめることも上手であった。

特に彼に恵まれたものは、高い感受性と優れた文才であって、北海道の山々の原始的な美しさや魅力を、紀行や随想に、あるいは詩に詠んで、広く世に紹介した功績は大きい。

戦後も、北大山岳部OBの集りの「北大山の会」の会長になったり、日本山岳会北海道支部長を勤めたりして、北海道の山岳界に強い足跡を残している。

昭和四十九年四月、東京の癌研の診察をうけにきた彼は、一席を持った古い山仲間達を前に、事もなげに自分の病状を、淡淡として説明していたが、それが彼の姿を見た最後となってしまった。

略　歴

明治三十八年（一九〇五）一月二十日、伊藤富治郎五男として横浜市に生る。
大正十一年四月、横浜一中を卒業し、北海道帝国大学予科に入学。
大正十二年七月、層雲峡より大雪山に入り、松山温泉に出る。
大正十三年一月、吹上温泉より十勝岳へ。五月、北大スキー部有志による月刊誌「山とスキー」第四年目の編輯を担当す。七月、北アルプス槍、穂高へ。
大正十四年二月、夕張岳スキー登山。三月、大雪山黒岳小舎を根拠として旭岳等をスキーにて登山。
大正十五年一月、暑寒別岳スキー登山。三月北アルプス槍、穂高登山。七月、北千島北端アライト島へ。十一月、北大山岳部創立。
昭和二年一月、天塩岳、チトカニウシ山スキーにて登山。
昭和三年二月、石狩岳スキー登山。二月、東狩場山。九月、日本山岳会入会（会員番号一〇八七）。
昭和四年一月、戸蔦別岳、日高幌尻岳スキー登山。三月、北大農学部生物学科卒業、大学院へ進む。八月、石狩岳、ニペソツ山へ登山、千呂露川より日高幌尻岳へ登る。
昭和五年二月、夕張岳、芦別岳スキー登山。
昭和六年四月、東京女子経済専門学校教授。
昭和七年一月、日本山岳会理事、編集及び図書を担当す。
昭和九年四月、北大農学部講師。
昭和十年一月、米国ペンシルバニヤ大学の大学院へ留学。
昭和十二年、米国よりの帰途スイスに行き、グリンデルワルト、ツェルマットに遊ぶ。
昭和十五年三月、北大予科教授。五月、北大山岳部長となる。
昭和十九年四月、北大を依願退官し、軍需省嘱託となる。
昭和二十年五月、北大より農学博士の学位を受く。九月、中部日本新聞社参事。
昭和二十五年四月、日本山岳会評議員。
昭和二十八年六月、北海道学芸大学教授。
昭和三十年四月、北海道教育委員会教育長。
昭和三十二年九月、北海道教育研究所長。
昭和三十五年六月、北大山の会会長。十月、札幌医科大学教授。
昭和四十一年四月、大学教育事情調査のため、欧米六ケ国視察。

昭和四十三年七月、日高幌尻岳登山。同月、オプタテシケ山よりトムラウシ山へ登る。
昭和四十五年三月、札幌医大停年退職。七月、日高神威岳に登る。
昭和四十六年七月、日本山岳会北海道支部長。
昭和四十七年一月、札幌静修短期大学の学長に就任す。
昭和四十八年、北海道自然保護協会会長。
昭和四十九年二月、喉頭癌のため、北大附属病院にて治療をうく。
昭和五十年二月、国立癌センターにて手術を受く。四月、札幌医科大学名誉教授。十一月、日本山岳会名誉会員。
昭和五十一年二月二十二日、札幌医大病院にて逝去、享年七十一才。

主要著書

『風景を歩む』詩集、昭和三年厚生閣刊。
『北の山』昭和十年梓書房刊。
『クラーク博士と札幌農学校』IDE教育選書、昭和四十年民主教育協会刊。
『北海道の山旅』ぷやら新書、昭和四十三年北海道ぷやら新書刊行会刊。
『草原随想』昭和四十六年新樹社刊。
『北の山続編』昭和五十一年茗渓堂刊。
『山の風物誌』詩集、昭和五十二年茗渓堂刊。

（山口　健児）

斎藤直一氏（一八九五～一九七七）

斉藤さんは、昨年八月軽井沢の別荘に滞在中発病、帰京して東大病院に入院されたことは承知しており、お宅にお見舞の電話をかけたとき、奥さんのお話では、病気が永びくらしい印象をうけたが、年寄りの病気で恢復が遅れるのは、体力のおとろえからいってよくあることなので、そのうち全快されて、ふたたび元気な姿に接することを期待していたが、これがむなしいものとなり、訃報に接することとなったのは、かえすがえすも残念である。たんに古い山の友人を失ったという感傷ばかりでなく、ややこしい法律問題について、常に適切なアドバイスを頂いた筆者にとっては、大きな痛手をうけることになった。

斉藤さんは、五、六年前に前立腺肥大の手術をうけられたが、経過は順調で、その後完全に恢復されたようである。その証拠には、間もなく印度に旅行され、帰ってからのお話では、このときネパールにも入国して、ヒマラヤ連峯の雄姿を目のあたりに見てきたとのことだったから、たぶんカトマンズからローカル線の飛行機でポカラまでとび、アンナプルナの上空に接近したのではないかと想像するが、帰国後、講演をお願いしたのが実現できず、詳しいことがわからず仕舞になって残念である。

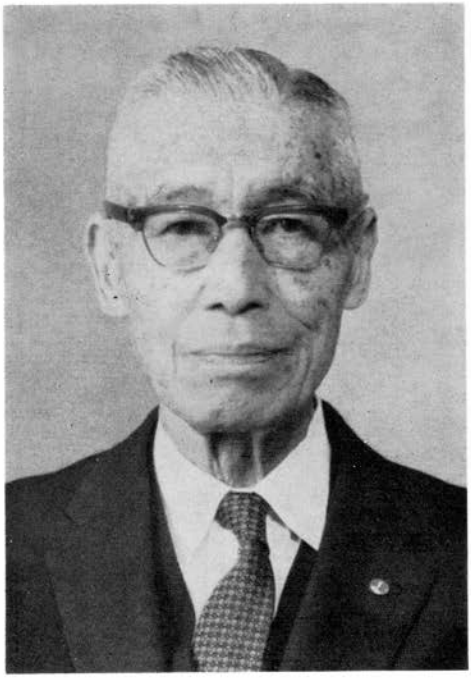
同君を知ったのは、高師の付属中学のときからであるから、六十有余年にわたるおつき会いで、筆者にとっては一年先輩にあたる。中学時代には、小石川の白山御殿町に住んでおられた。校舎が大塚にあり近かったから、学校の帰りに遊びに行ったこともある。ちょうど、植物園のうしろあたりで、小村欣一さんの邸宅も近くにあったと記憶している。

斉藤さんが中学四、五年のころ、父君は大阪控訴院長の要職に

名誉会員　日高信六郎氏
Shinrokuro Hidaka (Hon. Mem.)
(1893～1976)
(1974年6月上高地にて会員川北仁氏写)

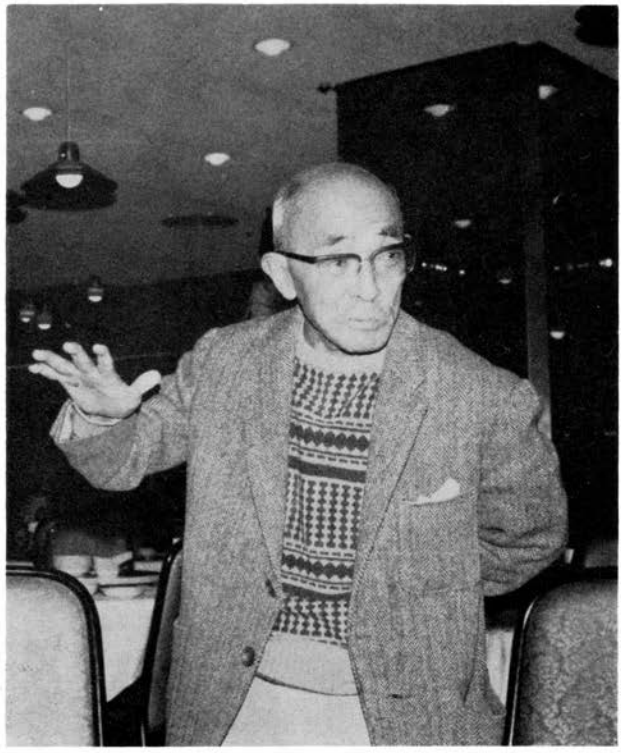
名誉会員　藤島敏男氏
Toshio Fujishima(Hon. Mem.)
(1896～1976)

名誉会員　伊藤秀五郎氏
Hidegoro Itoh(Hon. Mem.)
(1905～1976)

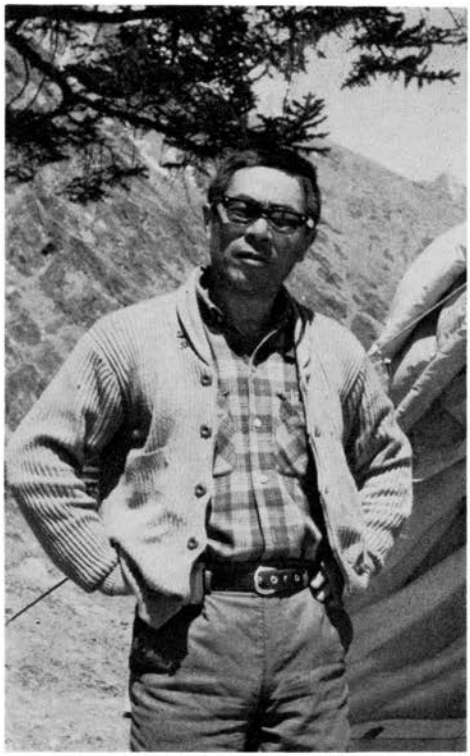


斉藤直一氏
Naokazu Saito
(1895～1977)

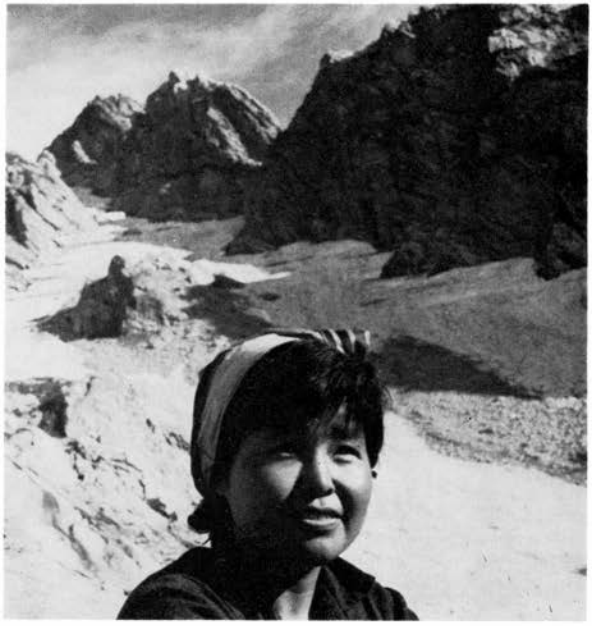
又木周夫氏
Kaneo Mataki
(1894～1977)



酒戸弥二郎氏
Yajiro Sakato
(1906～1976)



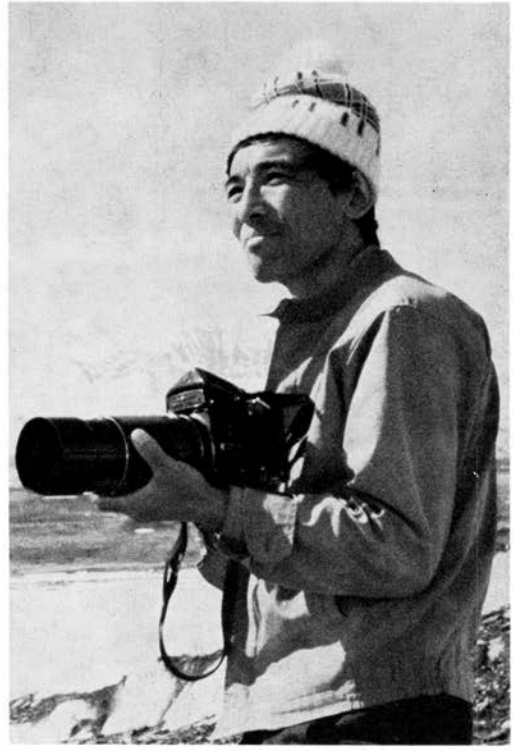
藤田佳宏氏
Yoshihiro Fujita
(1932～1976)



関田美智子氏
Michiko Sekita
(1939～1976)

中原万次郎氏
Manjiro Nakahara
(1899～1977)

石田吟松氏
Ginsho Ishida
(1888～1975)



阿岸充穂氏
Mizuho Agishi
(1935～1976)

あって、大阪で官舎住いをしておられた。夏休みで斉藤さんがここに滞在中に、一度訪問したことがあるが、この官舎は、堂島川の北側にあたり、広大な日本館の建物で、川に面した十二畳ほどの客室のほか、広い座敷が多いわりに、住んでいる人数が少なかったせいか、がらんとした印象を受けたのを覚えている。今かんがえると、緒方洪庵の適塾も近かったらしい。

君は中学時代に洗礼をうけ、一生厚い信仰心を持ちつづけ、早くから父君のあとをつぎ、法曹界で活躍する積りだったようで、東京帝大の独法科卒業後は、ただちに司法省にはいり、民事を主とした裁判官の系統の職にしたがわれた。昭和三十五年退官のときは、父君と同じ大阪高等裁判所長官の職にあったから、特別の感慨をもって職責を果されたことと思われる。

退官後は、弁護士として多くの民事事件にたずさわれたが、このうち日光東照宮の太郎杉事件は、山好きの斉藤さんが自然保護のため、行政官庁の官僚主義に挑戦して、首尾よく勝利を獲得され、外柔内剛の同君なればこそ、この成功をおさめた記念すべき事件といえよう。斉藤さんのお蔭で、太郎杉は神橋の橋畔に今なおその雄姿をみることができ、さらに数百年の命をながらえるであろう。

筆者の想像するところでは、斉藤さんと山とのかかわりあいは、明治四十五年頃からで、この年付属中学に臨時山岳会というのが誕生し、第一回の山行きが実現した。一行に参加した斉藤さんが、リュックサックを背負っていたのが仲間の注目を浴びた。殆んどの者が、これを持っていなかったし、知りもしなかったからである。叔父さんから送られたものだが、この人は医学博士というより、新進作家としてめきめき名をあげていた木下杢太郎だったかも知れない。この一行は二十七名で、白骨経由で上高地に入り、焼岳と前穂高に登って徳本峠を越して松本に戻り、帰京してみると、明治天皇崩御の悲報が待ちうけていた。今から勘定すると六十五年ほどの前にあたる。

同君は大正三年一高に入学されたが、この年に同校に旅行部が生まれたので、斉藤さんの登山熱は益々拍車をかけられ、やがて旅行部の委員として、各種企画の立案と実行上の責任者として活躍されるようになった。日本山岳会に入会されたのは、大正四年であるから、この前後の時期にあたる。それ以来会員として、日本山岳会の発展に変らぬ協力をつづけてこられたが、山に対する熱情が終身変らない証拠といえよう。筆者は明治四十五年に入会したが、戦時中海外に在住したなどで、斉藤さんのようなわけにはゆかず、偶々お目にかかったときなどに、山岳会の話を持ちだされて、肩身のせまい思いをしたものである。

同君のご逝去によって、古きよき時代の山歩きの話をする友人を、また一人失って淋しさを加えることになった。こころから斉藤さんのご冥福を、お祈りする次第である。（五二年八月）

略歴

明治二十八年（一八九五）十月二十八日、東京市本郷区西片町で誕生。誠之小学校、高等師範附属中学校、第一高等学校を経て大正九年十

月、東京帝国大学法律学科（独法）卒業。
大正四年（一九一五）日本山岳会入会（会員番号四〇〇）。昭和四十年（一九六五）永年会員となる。
大正九年、司法官試補、爾後東京地方裁判所判事、欧米各国出張（昭和四年）、前橋地方裁判所長、水戸地方裁判所長、司法省民事局長、高松控訴院長、札幌控訴院長、東京高等裁判所判事、福岡高等裁判所長官、大阪高等裁判所長官等を歴任し、昭和三十五年十月定年退官。弁護士登録（第一東京弁護士会）。昭和三十八年四月、東洋大学法学部教授となり四十七年三月退任した。
昭和五十二年（一九七七）六月二十七日、永眠。

（伴野　清）

（編者註）伴野清氏は元本会々員（会員番号二八四）。

又木周夫氏（一八九四～一九七七）

永年会員又木周夫氏の学生時代は、眼もとのパッチリした総明な美青年、社会に出てから壮年の頃は、ふっくらした温顔に笑みを湛えた好紳士、そして生涯山を愛しつづけた岳人、これが私の持っていたイメージの凡てであった。

偶々昨年十一月六日、一高旅行部縦の会の例会が、故日高信六郎氏、故藤島敏男氏らの追悼を含めて神田の学士会館で開かれた時、滅多に顔を出さない又木氏が態々熱海から参加した。全く久しぶりで懐かしさのあまり私は固く握手しながら挨拶を交わした一瞬、今までのイメージとは打って変って一まわりも細く痩せ、枯淡さの漂う物静かな風貌に先ず驚ろかされた。だが、お互いに八十路を越えて眉雪を頂くようになれば、これも自然の現象かと思い直し、会話を進めているうちに健康には何の異状もなく、相変らず弁護士の仕事を続けていることを聞くに及んで、何よりのことと心から喜び合った。そして会合は歓談の後、山の八ミリ映画を楽しんで散会した。

ところが今年の会報『山』の三月号で、又木氏（会員番号五八六）が一月物故との訃報を知り、僅か二ヶ月前に元気な姿にお目にかかったばかりであるだけに、一時は信じられぬ思いで、今更のように人生無常そのものを切実に感じさせられた。

又木氏が老躯を枉げて遥々熱海から馳せ参じた気持の中には、古い山仲間故日高氏を憶う切なる追慕の情が充ち溢れていたに違いない。それほどに二人の間柄は深いものがあった。又木、日高両氏は大正元年九月一高入学以来、科こそ違っていたけれど山を通じて固く結ばれ、一高旅行部の校友会公認に尽力し合い、これを成功に導いたことですっかり意気投合の同志となった。

旅行部成立の年大正三年十月には、当時山岳界の長老小島烏水氏によって美しく紹介された白峯三山を二人で仲良く縦走し、翌四年一高卒業直後の夏には、旅行部発展のため若い高校生らの海外視察旅行に参画し、又木氏は支那方面に日高氏は南洋方面に夫々先達となって活躍したので、画期的な大成果を収め旅行部部史の一頁を飾っている。若き日の又木氏はこの支那

大陸旅行中に何を感得したのか、支那は将来自分の骨を埋める地となるかも知れぬとの感想を洩らしていた。その真意を聴き損ねたのは今以て残念に思っている。又木、日高両氏の二人の山旅は依然として続く。大正五年秋には鐘釣温泉より大黒鉱山を経て大黒岳に、翌六年夏には針ノ木越えで立山、劔岳、槍ヶ岳などに共に登っている。

こうした両氏の間には、山以外にもっと幅広く人間的に結ばれた、美しい友情の歴史が生れた。その歴史とは柏風寮の共同生活である。大正六年九月、当時帝大独法科二年生だった又木氏の主唱で、最後の学生時代を最も有意義に送ろうとの趣旨の下に、本郷所在の同氏の自宅を提供して之を柏風寮と名付けて修養道場とし、政治科二年生の日高氏始め同志数名と共に二ヶ年に亘って切磋琢磨を積み、夫々自己の人格形成に役立たせたという興味ある事蹟である。

柏風寮生活では皆から景仰された又木氏が中心となって、読書会や講師を交えた談話会を開いて智を磨き、埼玉県野火止の平林寺に参禅して心を練り、また余暇には登山、ボート、テニス、スキー、乗馬などで体を鍛えるという、稀に見る充実した生活に徹した。大正七年十二月又木氏が日本山岳会に入会し、日高氏に続いて生涯を大自然の讃美者として捧げるスタートを切ったのも、この環境が然らしめたものといえるであろう。

柏風寮日記の或る日、又木氏の感想の一節に、

「万巻の書も千枚の絵にも優りて、我を教へ我を誡め導くものは大自然なり、我は自ら自然を愛するの誇りを有す」と、当時二十四才の若き君は卒直に信ずる所を述べている。又木君が日本山岳会の永年会員として生涯を終えたことは、正に信念を貫いた証拠であり、嘸かし本懐の至りで満足されたことであろうと感慨に堪えない。

大正八年三月又木氏は最優秀の成績で帝大独法科を卒業した。同氏の社会人としての生活については、幸い茅ヶ崎在住の二女岡崎千恵子さんから御消息を頂いたので、そのあらましを紹介して在りし日の同氏の俤を偲びたいと思う。

大正十年又木氏は当時の新高製糖社長高島小金治氏の長女と結婚、同社に入社して実業界に第一歩を踏み出し、後に日本自動車会社を経て、昭和十年若くして日本内燃機株式会社の社長となり、折柄の多難な時局に際し国家的に多大の貢献をする所があった。昭和十七年鎌倉山より茅ヶ崎に居を移した後終戦を迎え、世相も大変革したので三十年間親しんだ実業界を敢然去って、新たに熱海に法律事務所を開き晩年を弁護士業に精励された。元来又木氏は御両親の血を享けて学究肌であり、その上誠意溢るる仕事熱心だったので公私からの信頼が厚く、一般市民からも慈父のように慕われ平安な生活を送っていた。

しかし好事魔多し。昭和三十四年最愛の夫人を喪われてからは、生来信仰心の深かった又木氏は、祖先伝来の墓所のある鶴見総持寺に努めて参禅するようになり、また茅ヶ崎の岡崎家に来泊した時は愛孫達と憩いのひと時を過ごす傍ら、熱心に写経に励みひたすらに亡き夫人の御冥福を祈られていた由である。そして、昭和四十七年には遂に総持寺で得度をうけ、禅山玄路

の法名を授けられ、仏門に帰依したという厳粛なる事実を、このたび千恵子さんによって初めて知り、私は又木氏の晩年の心境を察して思わず眼頭を熱くしたのであった。

こういう脱俗の境地に在っても、又木氏は決して山だけは忘れなかった。恐らくこれが最後の山行となったであろうと、静岡支部の山本朋三郎氏からの便りによれば、昭和五十年十一月水窪の山住神社で紅葉会の懇親会後、峯つづきの常光寺山に登った時は、当時八十一才の又木老は若者同様足取りも軽く、手助けのつもりでザイルを差し出すと、縄付きはご免蒙ると冗談交りに断わる元気さであったと報ぜられている。

残念ながらこの元気さも、一年あまりのさだめであった。岡崎千恵子さんのお手紙には、

「今年（昭和五十二年）の元日茅ヶ崎へ参りまして、来年のお正月は迎えられるかどうかとフッと申しますので、おじいちゃまそんなことは絶対ありませんよとすぐ答えましたが、仏門に帰依した父には、自分の未来がわかったのかも知れません…」

と、涙を以て綴られていた。一月三日から風邪気味で寝込み、五日に目黒の厚生中央病院に入院、老人性肺炎のため一月十一日未明、遂に大自然の懐に眠るが如く成仏されたのであった。

そして、千恵子さんのお手紙の最後は、慈父を憶う切々たる言葉で結ばれていた。

「亡くなった父の顔は私から申すのもおかしいのでございますが、まことに穏やかで美しく、八十三年の生涯を力一杯生きた満足感に溢れておりました。やっぱり父は偉大な人であったと、しみじみ思われる此の頃でございます」

戒名　慈周院禅山玄路上座　　合掌

昨年秋学士会館の写真が手許にあるが、仏門に帰依した又木氏と凡俗の私とが、ピッタリ肩を並べて写っている。八十余年の生涯のうちの最初でしかも最後となった、たった一枚の貴重な記念写真である。又木氏とはかけ違って一度も山旅を共にしたことのない私が、このたび故人追悼の稿を寄せるに至ったことは、この想い出深い写真と併せて、全く奇しき因縁というの外はない。ここに重ねて、心より御冥福をお祈りして筆を擱く。

略　歴

明治二十七年（一八九四）一月十六日、鹿児島島津藩又木治太郎氏の二男として大阪に生る。

母菊字さんは動物学者石川千代松博士の姉。父の夭逝のため明治の末年より上京、本郷区居住。

明治四十五年三月、東京高等師範附属中学校卒業。

大正元年、第一高等学校独法科入学。

大正三年三月、一高旅行部を校友会公認の部昇格に尽力して成功。同年十月白峯三山に登る。

大正四年七月、一高旅行部主催海外視察旅行団に参加、支那本土各地見学。

大正四年九月、東京帝国大学法学部独法科入学、同年十月上高地入り。

大正五年十月、鐘釣より大黒岳へ、同六年七月立山、剣、槍、前穂へ登山。
大正六年九月、又木氏の主唱にて柏鳳寮生活開始。十二月関山へスキー行。
大正七年十二月、日本山岳会入会（会員番号五八六）。関山へスキー行。
大正八年三月、東京帝大法学部独法科卒業。
大正十年、新高製糖社長高島小金治氏長女と結婚。同社へ入社。
昭和六年、麹町区永田町より品川区上大崎長者丸に転居。日本自動車株式会社勤務。
昭和十年、神奈川県鎌倉山に転居。日本内燃機株式会社社長就任。
昭和十七年、神奈川県茅ヶ崎市に転居。
昭和二十五年、静岡県熱海市に弁護士事務所開設。同市の法律顧問。
昭和三十年、日本山岳会静岡支部の第二土曜会に初めて出席。爾後随時参加。
昭和二十四年六月、夫人の逝去に遇い鶴見総持寺に参禅、また写経に努む。
昭和四十四年、日本山岳会永年会員。
昭和四十七年、鶴見総持寺で得度をうけ、法名禅山玄路を授かる。
昭和五十年十一月、静岡支部紅葉会に参加、八十一才の高齢で常光寺山に登る。
昭和五十一年十一月、一高旅行部縦の会の例会に熱海より出席。
昭和五十二年一月十一日、目黒区厚生中央病院にて老人性肺炎のため逝去。享年八十三才。

（大木　操）

中原万次郎氏（一八九九～一九七七）

中原先生が富士山で遭難されたと云うニュースは、遠くネパールの山中で聞いた。その時は、驚きと同時に、ああ矢張りと云った感情が走り、私は静かで厳粛な気持にさせられた。先生が五月の静かな富士山で、静かに息を引き取られたように想像した私は、天寿を全うされたのだなあと思った。考えてみれば先生の穏やかで威厳に充ちた御性格と、化学界に立派な功績を残された充実した生き方が、私にそう云った想像をさせたのだと思う。最近になって遭難の時の様子を聞いて、痛ましく、また残念でならない。

私の人生は先生を始めいろいろな先輩、友人に影響されて変ってきたわけであるが、中原先生は私にとってもその中で最も影響を受けた人であった。大学三年の時、珪酸塩化学の教授と受講生と云う間柄で始まった関係は、その後因縁浅からぬ御交際をいただくことになった。卒業後、数回の海外登山に際して先生の研究室の一部を遠征隊事務所として使わせてもらったり、その他私事にわたっても何かと御世話になることが多かった。

先生の講義は終始、その人格を反映して風格がありかつ厳格であった。特に御専門であったセメントや耐火煉瓦について講義の際は熱がこもっていて、二十年経った今でもその時の教室

の中の雰囲気がまざまざと想い出されるほどである。工業化学科の中では、どちらかと云えば無機化学よりは有機化学の方に生徒の人気があったわけであるが、しかし先生の研究室は殊に先生の学究的雰囲気によって、学科中一番人気のある研究室であった。私は先生に遠慮してその研究室に入らなかったが、級の中でも一番真面目に勉強している連中がその珪酸塩化学研究室に入った。ともかく先生は、厳格でありながらも皆に慕われるお人柄であった。このことは、最近になって中原先生が行かれたアフリカやグリーンランドの旅行に際しても同じであって、先生のお人柄に触れて次の旅行も一緒にされている方々が多かった。一緒に居ると先生の徳と、一つの仕事に卓越した業積を持つ人々がしばしば持ち合わせている人間的魅力が、穏やかに周囲の人に伝わってくると云った感じであった。ここ数年、ヒマラヤ、ヨーロッパ・アルプス、キリマンジャロ、そしてグリーンランドと矢継ぎ早やに登山を重ねておられる姿を拝見して、私は時にギド・レイのアルピニズモ・アクロバチコを連想して先生の登山を眺めていた。しかし悲しくも、良く云われているように、山に登り続けていれば何時かは山で死ぬのではないかと云ったことが、晩年で危険のない登山をしていたとは云え、先生の場合も事実になってしまった。

数年前、エベレストのベースキャンプに旅行された時の御元気さは、驚くばかりであった。同行の若い人達が、高度四〇〇〇メートル前後で高山病に掛り頭痛や食欲不振を訴える中で、先生は御自分のペースで歩かれ、到頭四〇〇〇メートルのベースキャンプ迄登られた。几帳面な性格で、御一人で歩かれていても一向に危げなく、ともかく常に山に対して礼節を守ると云った態度で歩かれていた。

「ホホー、あれがエベレストですか」と云って、感慨深く見入っておられたお姿は、今でも忘れることが出来ない。

昨年、グリーンランドに行かれた時は、さすがに北極圏への旅行はきつかったらしく顔に傷をされて帰ってみえた。また信州の山に一緒に松茸狩りに行って、結局は一本の松茸も取れなかったりしたことは、今では懐しく思い出されるばかりである。

桂酸塩化学の権威者であられた中原先生の学界、業界における数々の功績は、その分野から離れてしまった私が今更述べるまでもなく高く評価され、何人の修辞の言葉も必要としない赫赫たるものがある。斯界の第一人者として、日本工業規格の制定、学会、協会及び教育方面での広範な御活躍があり、昭和四十年には勲四等旭日小綬章の受賞をされたことは記憶に新しい。

それにしても、最近では今迄仕事に向けておられた情熱を山に向けて、近年益々曼蛾とされていた先生のお姿を思い浮かべると、不慮の死で亡くなられたことは、たとえ天寿を全うされた生き方であったとしても、なお痛恨やみがたいものがある。何事につけ「宮原君、君ねェ」と云って話される先生の話し振りが、今も静かに瞑想すれば、容易に耳底に聞く事が出来る。私がこんな風に先生の追悼文を書いていると知れば、苦笑されながら、「宮原君、君がねェ」とおっしゃることも又容易に想

像出来るのである。

しばらく前、南米のアコンカグアに是非行きたいと云う御相談を受けた。アラスカにも行かれたいとのことであったが、中原先生としては頂上はともかく、五大陸の最高峰をたずねる計画を驚くばかりの情熱をもって実行されていた。これがエベレスト、モンブラン、キリマンジャロで中断された事は、御自身にとっても周囲の人々にとっても全く本意でないことであり残念である。ただただ山に逝かれた先生の御冥福を祈るばかりである。

略　歴

明治三十二年（一八九九）三月一日、兵庫県神戸に生る。
大正十年、東京帝国大学工学部応用化学科卒業。
大正十二年～大正十三年六月、商工省東京工業試験所技師。
大正十三年～昭和四十四年、日本大学教授。
大正十四年十一月、日本山岳会入会（会員番号九三七）。
昭和十八年～昭和二十一年、工業品規格統一調査会専門委員。
昭和二十三年～昭和二十四年、工業標準調査会臨時委員。
昭和二十四年～昭和五十二年、日本工業標準調査会臨時委員。
昭和二十八年、工学博士の学位を受く（日本大学）。
昭和三十六年、熟管理試験委員としての功績に通産大臣より感謝状を受く。石膏石灰に関する論文賞を受く（石膏石灰学会）。巧労賞を受く（窯業協会）。
昭和三十七年、左官材料と技術に対する功績で感謝状を受く（日本左官組合連合会）。
昭和四十四年、工業標準化事業の功績により勲四等旭日小綬章を受く。
昭和四十四年、日本大学名誉教授。
昭和四十四年～昭和五十二年、日左連職業訓練短期大学校長。
昭和五十二年五月十一日、富士山にて遭難、死亡される。
著書に『セメント石膏石灰』（村上恵一と共著、日刊工業新聞刊）その他便覧類がある。発表論文には七十件をこえる執筆がある。

（宮原　巍）

酒戸弥二郎氏（一九〇六～一九七六）

一九七六年十月四日午後、日本山岳会会員（会員番号一四八七）、京都大学学士山岳会会員、三高山岳部部員酒戸弥二郎は三階にある病院の心臓検査室にむかって、飄飄と階段を登っていった。彼の後輩である医師斉藤惇生の「先生、待ってください」とのいささか緊張した声を後ろに。それから二、三時間のち、

「弥二さんは酸素テントにあって明朝までもつかどうかが問題だ。意識は明瞭、部屋に入るたびに、誰か来たか、テントのなかからじろりと眺めはる」

との容態を、斉藤はつたえた。

翌五日午前二時、弥二さんはすでにテントから出、奥さんが塗られたクリームに頬を艶やかに染めて永眠してられた。パミールのベース・キャンプに眠る隊長をみる想いにかられ「弥二

さん。隊長」と胸のなかで呟いて、私はただじっとその顔を眺めていた。

一九六〇年二月、AACK（京都大学学士山岳会）は静岡大学教授酒戸弥二郎に、パミール遠征隊の隊長に就任することを要請した。AACKの三十周年記念に予定していたカラコラムのサルトロ・カンリ、テラム・カンリ計画は、パキスタン政府から登山許可がもらえず、それでも若い会員たちの意欲の芽を伸ばそうとできたのが、このパミール計画であった。隊長就任要請とは、この計画つまりワハン渓谷の探検とヒンズークシ山第二の高峰ノシャック（七四九〇メートル）の偵察を実行することである。そのためのアフガニスタン政府からの許可取得、経費の準備などあらゆる必要事項を隊長の責任で、その手腕でもって実現させ、成功させることであった。出発は時間的必然性で五月上旬ときまっていた。弥二さんは隊長就任を受諾した。五十四歳であった。

若い隊員たちは、小柄で頭と眼をひからせた隊長の静岡からの突然の出現にいささか驚いたが「おまえが広瀬幸治か、酒井敏明か、岩坪五郎か。そうか」との顔合せをすませ、ただちに遠征準備は始まった。二十日間の準備ののち、五月四日、若い三人は神戸港を出発した。隊長との再会は六月十五日、アフガニスタンのカーブル・ホテルであった。約五十日間で「老」隊長は入国許可をとり、経費を準備したが、その苦労を若い隊員たちは知る由もなく、また知ろうともしていなかった。今にして若者は、その苦労を偲んでいるが、すでに隊長はない。

アフガニスタンに入国したものの、まだまだ難関がよこたわっていた。私たちがようやくのことで得てきたのは単なる入国許可であり、ワハンへの入域も、ノシャックへの登山もまったく問題外であった。弥二さんはここで天性の外交的手腕を発揮した。在アフガニスタン日本大使、文部大臣、鉱山大臣ら関係要人たちに会い、当遠征隊支援に対する感謝の意をおおらかに表現してまわったのである。お礼の先手をうたれ、ついに閣議はノシャックへの登山を許可してくれた。ワハン渓谷入りは不可能となったが、ここにアフガニスタン最初の登山活動が、同国最高峰においておこなわれることになった。

七月十七日、ベース・キャンプを設営して偵察を始めたが、また大事件がおこった。十二名からなるポーランド隊が、同じノシャック登頂をめざして出現したのである。ここでまた弥二さんは隊長としての手腕の発揮を要請されることになった。偵察隊は登頂隊に変身せざるをえない。二人の隊員が六三〇〇メートルにキャンプをつくったとき、酒戸隊長は合同登頂をポーランド隊に申し入れた。しかしポーランド隊は態勢ととのわず、好意を謝しつつも結局辞退することとなった。

一九六〇年八月十七日午後六時、酒井と岩坪はノシャックに初登頂し、七二五〇メートルのクレバスでのビバークののち、十九日弥二さんに迎えられた。

「緑茶か、紅茶か、コーヒーか。何を飲みますか」

弥二さんの第一声を私は忘れることができない。何を所望したか覚えてないが、その声だけが耳に残っている。

酒戸弥二郎博士は京都大学農学部農芸化学教室の出身で、お茶の素である物質、テアニンの発見者である。もちろんそんなことは、そのときの私にはどうでもよかった。疲れきった身体と心にどの茶を飲むかと尋ねられたのが、やたらに嬉しかったのである。

「隊長のあの第一声を今も忘れることができません」これをもって弥二さんへの感謝と追悼の言葉としたい。

略　歴

明治三十九年（一九〇六）一月二十四日、大阪市に生る。天王子中学、第三高等学校を経て、

昭和五年、京都帝国大学農学部農芸化学科を卒業。同年四月より、農林省宇治茶業試験所に勤務し、同所長に就任する。

昭和八年十一月、日本山岳会入会（会員番号一四八七）。

昭和三十八年四月、静岡大学農学部教授となり、同学部長に就任する。

昭和四十四年三月、同大学を定年退官し、四月、英和女子短大教授就任。

昭和四十七年、同短大退官。

昭和五十一年十月五日、死去。農学博士。日本農学会賞受賞。

（岩坪　五郎）

藤田佳宏氏（一九三二～一九七五）

三月十七日（昭和五十年）の夜おそく、聖マリアンナ病院からの電話で藤田君が危いとの連絡があったので飛んで行ったが、時すでに遅く変り果てた彼との最後の対面となってしまった。前年の六月に入院してから数えれば十ヶ月足らず、肺ガンのために若き四十三才の生涯を閉じてしまった。

平素健康には人一倍自信があり頑健だった彼が、あっという間に病魔に冒されてしまったことは、白昼夢のような出来事であり、とても信じられない。

そして今、彼を偲ぶには余りにも生々しい想出の数々、二十有年の交流は長いようで一瞬の時を刻むように過ぎてしまった感じである。生命をむき出しに、共に山と取組んだ数々、吹雪の白馬杓子岳での遭難救助活動（昭和三十二年三月）、JACエベレスト本隊（昭和四十五年春）における最後のつめの段階で、サウスコルにいる彼とABCの私との間で、悪天候の中で登山続行の可否のやりとりなど、いい仲間だった彼との忘れることの出来ない思い出である。

病室を見舞ったある日、

「どうも。ペンがうまく持てないもんで時々メモしておくんですけど、チョット聞いてくれませんか」

と、いいながらしゃべり出した。

「山登りは山と人の調和にある、というのは遭難実態調査や、体験を通じて得た、借りものじゃない、血と汗の結晶ですよね。これは日本の山でもヒマラヤでも変らないと思うんです。エベレストもその延長上にあってこそ初めて、われわれの手におえる山として考えることが出来るんで、そう思ったとき、エベレスト・人そして十分な資金の裏付け、この三つの要素のバ

ランスがとれたときにその登山は内容のある、充足感に満ちた登山になるんじゃないかしら、そういう山登りをして成功したいし、そのためにはその三つの要素を十分に研究し、トレーニングし、準備しなければならんでしょうね。その三つの要素の頭文字をとって、3M作戦というキャッチフレーズで進めたいと思うんですがどうでしょうね」と。

私は聞いていて、胸の熱くなるのを押え切れなかった。こいつはここまでエベレストにのめり込み、先のないことを承知の上でか、自分の考えを残そうとしている。チャレンジしつづけて来た彼の人生の姿が最後までそこにあった。

彼の構想はエベレストの座談会（昭和五十年九月）でエベレスト南壁作戦として談話の形で発表された。

以下その要旨を紹介して彼の思い出としたい。

「……一九七六年から準備に入って八十年秋、八十一年春を一つに考えて遠征を出す、僕はそう考えている。八十二年三月までに報告書をまとめ、打上げコンパをやる。成功しても、失敗しても、アアいい山だったなアーという内容のあるすばらしい山登りをしたい。それが現在の考えです。

もう少し具体的に計画書について云えば、去年（一九七四年）七月に計画書の原案がすでに大塚さんからガリ版刷りで一回出ているなァ。去年の夏にはJACとの話し合いで八一年のアプリケーションを出している。そうすると今度は三回目の計画書というよりパンフレットのようなもの。まあ出来れば年内のうち、或いはチャンスとしてはボニントン隊の成否の時機を見計って出せば一番いいと考えている。

タイトルは "South Face Expedition 1981" あくまでも South Face であり、Everest Expedition ではない。俺たちのやるのは South Face である。

山と人と金について、エベレストの南壁、その山というものはどういうものかを数ページ。人については決っていないのだから炉辺会の戦後の歩み、このエベレスト作戦を推進してゆく人たちの横顔、経歴の紹介、お金のことについては、七四年からのすべてとこれからのもの、済んだもの、二億円ぐらいになるんではないか。ビックリしちゃう。あくまでも山と人と金のバランスだよ。

もう一つ大事なことを忘れたことがある。僕は隊の構成を選手と役員との関係のように分けて考えるということ。選手というのはつまり登はんメンバーで南壁軍艦岩から上でもって活躍する人たちのことで、南壁登はん隊長として植村直己が一番適している。植村がおそらく四十才ぐらいではないだろうか。チューレン・ヒマールの頂上に登った長谷川も一番充実し力のある年代だけど、植村の四十才は、それ位の力はある。あと彼にアシスタント、サブ・アシスタント各一名、ドクター一名。この四名は全部南壁のクライマーとして使える人間でなければいけない。だから年齢でいうと植村のアシスタントになるんだから、植村の一～二級下か三十五才までの者。サブ・アシスタントはもう少し下でもいいが、ドクターも三十～三十五才だろうな。何しろ活躍する場所が軍艦岩から上なので若い者がいい。

その四人の下につく人間というのは二十二、三〜三十三、四才どまり。僕がゴジュンバ・カンに行ったのは三十二才だよ。

七〇〇〇メートルの軍艦岩の上、八〇〇〇メートルから上にテントを二つ出すとするとリーダーを入れて大体二〜三パーティが常時休養していられるので、人数は十八人位になるな。これはつまり選手に当るわけだ。ところがMACに果して、今から六年後にそれだけの人数が揃うかどうかだがなァー。南壁で使う人間以外には、七〇〇〇メートル以下で、例えばアイスフォールの荷上げ、ルート各キャンプ整備、荷物の管理など、荷上げには積極的にシェルパを使う。南壁登はん隊とそれ以下の登山隊、つまり選手と役員とメンバーを全くはっきり分ければ、南壁の登はん隊はうんと若くなり、それ以下の隊員の年齢がうんと上っても可成りイケルんじゃないかと思うが、隊長も含めて七人位が妥当だと思うんだけど。勿論ドクターを含めてだ。

山の研究をすること、これはJACの南壁のとき或る人が一五〇万ぐらいの費用で飛行機を使って南壁の立体写真を作る。そうすれば、それとそっくりの岩場は日本ではここだということを断言してみせますといったんだ。五年前にそういうことを云ったのがいるんだからな。これから研究するグループは、それ以下の研究ではやってもしょうがないなァー。これは大変な問題だよ。

それからもう一つのグループとして人づくりの問題。トレーニング・トレーナーというか、明大で償いがつかないなら、他の大学や他のグループからいい人間をひっこ抜いて来る。こういうグループで南壁登山に遜色のない人間を作ってゆく。そういうグループも一つ必要だ。これも大変だよ。

それからもう一つは資金。これはとりあえず募金は必要ない、いわゆる会計でけっこう。会計、庶務、広報をひっくるめて総務。以上三つの問題の研究グループを早急に決めてほしい。」

皮肉なことに、ボニントン隊はこの三日後の九月二十四日、ドガール・ハストン、ダグ・スコットの二名がJACが一番先にねらった左俣ルンゼを抜けて南壁の初登はんに成功した。何とBCから三十三日間のスピードぶりであった。

彼が〝やられちゃいましたね〟と力なく一言云ったのを憶えている。

そして今年の春のヒマルチュリでは、若きエースの近藤芳春隊員が雪庇崩壊のブロックに直撃され死亡してしまった。

藤田がいたら何というだろうか。

「山で死んじゃだめだよ、無理しちゃだめだよ、山登りは山と人の調和だ、山は心で登るもんだよ……」と口ぐせのように言っていた彼のことがしきりと思い出される。

合掌

（大塚　博美）

略　歴

一九三二年十一月三日、東京神田須田町に生まれる。
一九四五年四月、私立京華商業中学に入学と同時に同校山岳部へ入り、

丹沢、奥多摩、奥秩父などを歩く。一九四八年四月同高等学校入学、北ア縦走、野沢等でのスキー、などを行う。
一九五一年四月、明治大学商学部入学。体育会山岳部に属し、積雪期の剣岳早月尾根、穂高・槍縦走、横尾尾根、北岳、後立山縦走等に参加する。一九五四年には同山岳部リーダーをつとめる。
一九五五年三月、明治大学卒業。
一九五七年三月、トモ子さんと結婚。
一九五七年八月、日本山岳会へ入会（会員番号四五二一）。紹介者は交野武一、大塚博美。
一九五八年、明治大学山岳部遭難対策委員となり、遭難実態調査に貢献する。
一九六〇年、明治大学アラスカ・マッキンレー登山隊に参加。
一九六一年四月より六八年三月まで、明大山岳部監督をつとめる。
一九六五年、明治大学ゴジュンバ・カン登山隊に参加。
一九六五年六月、遭難実態調査の功績により山渓山岳賞受賞。
一九六九年、日本山岳会理事に就任。
一九六九年及び七〇年、日本山岳会エベレスト遠征の第一次偵察隊及び本隊に参加。
一九七五年、エベレスト周辺のトレッキングに参加。
一九七六年三月二十七日、逝去。行年四十三才。

関田美智子氏（一九三九～一九七六）

関田さんと私とは、東京学芸大学山岳部で一緒になりました。私より一級上の関田さんは、体も大きく、とても頼もしいリーダーでした。人の話をよく聞いてくれ、笑顔を絶やさない関田さんに、私はとてもひかれるものを感じました。それ以来亡くなるまで、十七年のおつきあいをしてまいりました。

卒業してしまうと山からも友人からも離れてしまうのが常ですが、私達の場合卒業後の方が充実した山行を続けたように思います。二人でよく通った山は鹿島槍ヶ岳でした。赤岩尾根からはじまって、東尾根、天狗尾根、鎌尾根、ダイレクト尾根を登りましたが、卒業から七年間の積雪期を、鹿島槍ヶ岳につぎこんでしまっていました。

関田さんは岩のぼりの時左手でハーケンを打つのです。あぶなっかしくて見ていられないのですが、

「私、本当は左利きなのよ。親がみていないことは、左手でやっちゃうのよ」

と、いってコロコロと笑い、字と箸は右手よ、とつけ加えて又楽しそうに笑いました。

昭和四十年十二月から翌年二月にかけて、冬のヒマラヤ山麓をトレッキングしました。カトマンズからナムチェバザール、ビラトナガールへと二人で四十日余旅をしました。あの頃は今ほど海外旅行が盛んでなく、どちらの親も大層心配したようでした。関田さんのご家族には、羽田で初めてお目にかかりました。小柄なご両親で、二人並ぶとおひな様のようでした。関田さんは大柄でしたので、内心驚いたことを覚えています。

お父さんは口数の少ない方で、じっと娘を見守っているとい

う様子が感じられ、お母さんは下町の内儀さんらしい明るさを感じました。お二人共にこやかに娘の出発を見送っているという風でした。

ふつうの友人なら、ご両親とのつきあいはこの位で、それ以上進まないのでしょうが、その後、会の遭難や事件が起きるたびにお二人して出席されたので、何度もお目にかかりました。じっと会の進行と娘の姿を見守って、一言も口を聞かないで帰る、ということが多かったように思います。そういうご両親に甘えて、関田さんはずい分わがままに自分の好きな道を歩んできたようです。

ネパール旅行から帰ると、友人と二人でボリビア・アンデスへ向い、ワイナポトシに登頂しました。昭和四十二年七月のことです。

関田さんは学生の頃から、女性だけで山に登りたい、と云っていました。不遜ないい方に聞こえるかもしれませんが、この意味はどんな有名なルートや高い山に登れたとしても連れていってもらったら何の価値もない、ということを実践したかったのだと思います。そして、後継者を育てたい、人に夢を託したいとよく云っていました。

大学卒業後、エーデルワイス・クラブに入会し、五年間在籍していましたが、行きづまりを感じ退会し、新しい会を創りました。

昭和四十四年二月に、山岳同人凌雪会を創立し、新たに山への意欲を燃していました。関田さんは三十才になっていました。会のメンバーは若い人が多かったのですが、彼女に年齢の差を感じた人はあまりなかっただろうと思います。体力の点では若い人以上にあったかもしれないし、気も若かったように思います。

毎週山に通い、新しい仲間との山行を満喫していたようでした。でも私の目からみると、会のメンバーは関田さんによりかかり過ぎていたように見えました。関田さんは自分には厳しい人でしたが、他人に強制することがなかったからです。

卓越したリーダーが居る場合、よりかかる側からすれば、それが女であれ男であれ、同じことだったのではないかと思うのです。会のメンバーは関田さんという女性によりかかりながら、男性パートナーに連れていってもらう時と同じ感覚で、自主性をなくし、甘えきっていたようです。

関田さんは、リーダーという重荷は重すぎると、もらすことがありました。これは責任をとることをいやがった為ではありません。リーダーがいるために、話し合いもせず、深く考えもせずに山行が終ってしまうことに恐れを感じていたのです。

二回目のネパール小旅行に、四十五年三月に出掛けましたが、やはり関田さんの志向は山にあり、満たされない思いであったようです。

昭和四十七年六月に、アラスカ、マッキンレー・ウエスタンリブに遠征をしました。ヒマラヤへのステップとして、若い仲間を育てようとマッキンレーを選んだのですが、結果は無惨なことになってしまいました。

関田さんは、高度に上ると下痢をするようです。これも高度

の影響なのでしょう。マッキンレーでも下痢に悩まされていました。C1に関田さんを残して四人のメンバーが上部へ向っていきますが、途中具合の悪くなった一名をC4に残して、三人が頂上へ向い、そのまま消息を断ってしまいました。

主のなくなった三人のザックと共に帰ってきた関田さんは、熱風が足元からふき上げる真夏の羽田で、消然と立っていました。亡くなった家族からずい分理不尽な批判を受けていましたが、唯じっと耐えていました。嗚咽だけがきこえて来る受話器を持って、私も関田さんと一緒に泣いたこともありましたが、電話という仲だちがあればこそ、出来たことだったように思います。会えば、お互いにわざと悲しみにはふれずに、胸の中にかくしてしまって、心の中をからっぽにさせてあげればよかった、と今は心残りに思っています。そっとしておいてあげる方が立ちなおる近道だろうと思っていたのですが、こんなにもあっけなく逝ってしまうのでしたら、もっと楽な方法で乗り越えさせてあげたかったと思うのです。

マッキンレー遭難報告書をつくる作業に集まった時、聞こえてくるのは、関田さんの大きなため息でした。私はたまりかねて、

「関田さんは仕事をしなくていいから、私のチビを子守りしていて」

と、いってしまったことがあります。関田さんはほっとした顔をして、乳母車をおして散歩に出かけていきました。

でも、とうとう関田さんはつらい仕事をやりとげてしまいました。私は関田さんの強い強い精神力をみた思いがしました。

マナスルへ参加することを決心し、四十九年二月に羽田をとびたっていきました。送りには行かないわよ、と私は関田さんに云っておいたのですが、思いなおして羽田へ行ってみました。関田さんは意外だ、という顔付でしたけど、うれしそうにニコニコとして、隊員の出発前の声をテープにいれていました。

マナスルから帰った関田さんは、だいぶスマートになったと云っていましたが、私が移転してしまったのでなかなか会うことが出来ませんでした。「遠くへ行っちゃったわね」とよく云っていました。

五十年頃からだいぶ山行もふえて、心の痛手から立ちなおったことがわかりました。そして亡くなる前はK2のことをよく話していきました。五年来の苦しみから解放されて、行手に光を見い出した時、関田さんは逝ってしまいました。

五十一年五月、関田さんは、凌雪会のメンバーと久々の山行をしました。私には「五月四日が代休になるので、わりと長くいけるのよ」といっていました。最後の別れとは知らずに「又行くの」と気軽に考えながら「山から帰ったら、山菜取りに行こう、そうね五月末頃どう」と電話で話したのが最後でした。

五月一日、雨の中をメーデーのデモに参加した関田さんは、夜行で三人の会員と上高地に向いました。西穂山荘をこえ、西穂頂上手前にテントを張り、五月二日はそこに泊りました。翌五月三日、小雪の中を西穂高を越え、間の岳へと向っていまし

た。この頃雪はやみ、濃いガスがたちこめていたとのことです。

間の岳頂上を越え、コルへと下りかけた時、ラストを歩いていた関田さんは、

「あっ、いけない」

という叫び声を残して、飛騨側のガスの中へと、大きくバウンドしながら転落していったということです。落石の音がガラガラと、しばらく続いていたそうです。

葬儀で又ご両親にお目にかかりました。やはりにこやかにしていたのには、私自身学ぶことが多い思いでした。しかし遠くをみる目付きをしているお父さんに接した時、ご両親の深い悲しみを知りました。親として、娘の生き方の流れを変えようと、何度も積極的に努力したにもかかわらず、やはり娘の思い通りに好きな道を歩ませてしまった後悔をしていらっしゃるのでしょうか。そして、今ご両親は美智子さんの歩んだ岳人としての道を理解していると思います。

私は、関田さんが亡くなってから、あんなに二人で通った鹿島槍へも、穂高へも足を向けていません。山に行くと、もっと関田さんのことを思い出し、いたたまれぬ思いにかられるのではないか、かけがえのない友を召した山をにくんでしまうのではないかと恐れているのです。

享年三十六才、菩提寺は品川海蔵寺。

略　歴

昭和十四年（一九三九）五月十日、東京両国に生れる。
昭和三十七年、東京学芸大学卒業。
昭和四十年、日本山岳会に入会（会員番号五九三二）。
昭和四十年、日本女子大学大学院入学。
昭和四十三年、同大学院卒業。区立小学校教師、川崎高校国語教師を経て、
昭和四十三年より、東京都立心身障害者福祉センター勤務。聴能士として、難聴児の訓練にあたる。昭和五十一年五月三日、穂高、間の岳にて遭難死、三十六才。

（山田　靖子）

阿岸充穂氏（一九三五～一九七六）

阿岸さんとわたしはどういういきさつで知り合ったのか今もって思い出せない。日本山岳会に入会を希望されて尋ねてこられたことは確かである。入会が昭和四十年であり、その当時彼はヒマラヤに凝っておられ、地図や資料類が入手困難な頃であったが、バツーラ、ヒスパー、ムズターグの二十万分精図を作って深田久弥さんに見てもらったり、野望はつきなかった。

北海道学芸大学札幌分校に入学し、山岳部に入部してから、年を追うごとに行動が活発化し、冬山合宿なども行なわれるようになり、在学中は山岳部の隆盛に寄与された点は大きかった。卒業後も後進を指導のかたわら、昭和三十五年に積雪期の

日高山脈全山縦走の推進役を務め、また昭和三十七年には厳冬期知床半島主脈全山縦走のサポートをかって出て、北海道の冬山における二大壮挙を成し遂げるに至った。

そんな彼にわたしが近づいていったのも、年代が接近していたこともあろうが、伝統のない大学山岳部が偉業を成した尊敬心もあったろうし、また学生たちの溜場に誘われて、さまざまな相談を受けていたことも理由とされよう。

日本山岳会に入会された年の秋に、彼と唯一の山行になってしまった十勝岳山系の上ホロカメットク山と富良野岳の登山があった。夜行列車で札幌を発って、富良野市で教員をしている友人宅に泊めてもらい、翌朝、上富良野から十勝岳温泉に至って、好天のもとのんびりと上ホロカメットク山に登った。その日の夕刻に、明子夫人と大学のOBたちが十勝岳温泉にかけつけて、その夜はにぎやかな語らいが続いた。翌日、富良野岳に各人がスケッチを描きながら登った。そのときにH・G・A・Cと駒草を配した学芸大学山岳部のバッジを贈られ、今となっては懐しい遺品として大切に保存している。

その翌年六月に札幌の時計台画廊で北海道の山を主題とした写真展を開催し、山の仲間たちを驚かせた。大雪山、芦別岳、日高山脈、知床の山が主だったと思うが、当時まだ写真だけの個展があまり開かれていない頃であり、会場には生花が飾られ盛会であった。

昭和四十二年の夏にわたしの勤務先に尋ねてこられ、「こんど学校の先生をやめてアメリカの学校に入るのだ」と話され驚かされた。職をやめてまで、身寄とてないアメリカに夫婦揃って行くなんて、信じられない話であった。当時の北海道新聞に「先生二人がオシドリ留学」などと書きたてられたくらいで、羨ましくもあった。

渡米してからは、山の本や写真集、アルパインカレンダーなど送ってくれるよう頼まれ、しばらく交信が続いた。彼からはアラスカやロッキーの山々の地図が届けられ、シエラクラブの方々が北海道に訪れた際には、参考資料など送ってくれ、われわれの手助けもしてくれた。

サンフランシスコ州立大学に存学中の休暇には、フォルクスワーゲンを夫婦で乗りまわし、北米各地の山に登り、オシドリ夫婦の写真と共に羨しき山だよりが届けられ、再三にわたって山登りに来るようにお誘いを受けた。

卒業後、アギシ・フォート・アンド・デザインをロサンゼルスに設立し、仕事の方が軌道に乗ってくるに従って、お互の交信も途絶えた。昭和四十七年に開催された札幌オリンピック冬季大会にひょっこり現れて、われわれを驚かせた。久し振りの邂逅であった。そのときは日程の都合で、あまり長い話しはできなかった。いま思えば最後の別れとなってしまった時であり、残念なことをしてしまったと悔いている。

その後は、写真界における活躍はめざましく、二科展写真部会では各種の賞を受け、カメラ雑誌や山岳写真年鑑のページを飾ったりしている。そして写真集『大地の唄』を出版すべく、全精力を打込んで取材活躍をしているなかで、突如襲った不運

といおうか、考えも及ばない飛行機事故で他界してしまった。悔んでも悔み得ない死であった。

その年の七、八月には北海道学芸大学札幌分校山の会で「アラスカ登山隊」を組織して、その隊長としてフェアウェザー山に登る計画であったが、そのメンバーたちが札幌を出発する直前に、他界の報が知らされ、あまりにも無情なものがあった。

遺骨は札幌の平岸霊園で眠り、遺灰はアラスカのフェアウェザー山頂にまかれた。山と写真に情熱を注いだ君よ安らかに眠りたまえ。

略　歴

昭和十年（一九三五）、三月三十一日札幌に生まれる。
昭和三十三年、北海道学芸大学卒業、札幌市の市立中学校で教鞭をとる。
昭和四十年七月、日本山岳会入会（会員番号五九三六）。
昭和四十一年、第一回写真個展「北海道の山」を札幌時計台画廊で開く。
昭和四十二年九月、退職、渡米、サンフランシスコ州立大学に留学。
昭和四十四年、フリーランサーとなり、ロサンゼルスで活躍を始める。
昭和四十五年十一月、アギシ・フォート・アンド・デザインをロサンゼルスに設立。
昭和四十七年十月、第二回写真個展「死の谷」を銀座ニコン・サロンで開催。
昭和四十八年九月、二科会展に「砂丘」の細写真を初出品し初入賞。オリンパス光学賞を。
昭和四十九年九月、二科会展でコパル賞を。
昭和五十年九月、二科会展で日東光学賞と三年連続入賞。その他内外の各種写真コンテストに入選多数。
昭和五十一年（一九七六）六月四日、オレゴン州クラマスフォールズで空中撮影のため、セスナ一八二をチャーターし、離陸直前の機材搬入中、プロペラに巻き込まれ即死。

山　歴

昭和二十九年、黒岳からトムラウシ山。
昭和三十年、羅臼岳から硫黄山、十勝岳冬山合宿。
昭和三十一年、ニペソツ山から石狩岳を経て白雲岳、北鎮岳。愛別岳、永山岳で冬山合宿。
昭和三十三年、芦別岳。
昭和三十四年、幌尻岳からカムイエクウチカウシ山。
昭和三十五年、ペニカリベツ川から一八二九米峰、コイカクシュサツナイ岳。
昭和三十七年、北海道学芸大学札幌分校山岳部の厳冬期知床半島主脈全山縦走の第二サポート隊としてルサ川から硫黄山、羅臼岳をトレース。
昭和三十九年、ペテガリ川からペテガリ岳。
昭和四十二年、渡米後、ホイットニー、エマーソン、コロラドおよびカナディアンロッキーズ、レーニア、ベーカー、フードなどを登山。

（高沢　光雄）

石田吟松氏（一八八八～一九七五）

石田吟松画伯がお亡くなりになり、これでウォルター・ウェ

ストン師と親しく日本の山に登られた方が、ほとんど全部物故されてしまったのではないかと思う。

石田画伯がウェストン師と知り合ったのは、大正元年八月のことであった。明治大帝崩後数日後美術学校の友人数人と中房温泉に滞在していた折り、西洋人夫妻が妙義山の案内人を同行してやってきた。これがウェストン夫妻であった(妙義の案内というのは根本清蔵であろう)。ウェストン師はこのとき五十一歳、三度目の来日で、有明、燕に登るといったん松本に戻り、徳本峠を越えて上高地に入って、北鎌尾根からの槍ヶ岳、岳川からの奥穂高直登など充実した登山をやっているが、最初の足ならしの有明山登山に当時二十四歳の石田画伯が同行したのである。

八月十四日、ウェストン、根本清蔵、中房温泉若主人百瀬彦一郎、信濃民報記者二木亀一、写真班小沢某、それに石田深山(後に吟松と改める)の一行六名は、途中二回ほど休んで頂上に着いたのだが、このとき石田画伯が土佐紙の写生帳にサインを求めると"Walter Weston, English, Japanese Alpine Club Aug. 14, 1912"と書いてくれた。これにまた同行の石田深山、百瀬彦一郎、陪登松本信濃民報社二木亀一とその横に記念の署名をした。

このときのウェストン氏の服装は、薄い緑色と白の縞のワイシャツ、玉虫色のズボン、緑急毛糸の靴下、赤皮の靴、パナマ帽を黒い紐で後にぶらさげており、その姿がありありと記憶に残っていたと石田画伯はいっている。石田画伯の向いの部屋にウェストン夫妻は泊っており、畳に肘をつき、横になってビールを飲んでる珍しいスケッチも石田画伯は画き残している。

その後、石田画伯は満洲各地、朝鮮金剛山、南北中国を遊歴して三十年暮らし、昭和二十二年松本に引き揚げ、晩年は木曽上松寝覚ですごされた。昭和三十五年のウェストン祭や、会の年次晩餐会にも一度顔を出されたことがある。また昭和四十八年の三岳人展にはスケッチ帳三冊を出品していただいた。彩色された見事な細密画であった。

略　歴

明治二十一年(一八八八)三月十五日、長野県松本市南深志中町四七五で生まれる。
大正元年八月、ウェストン師と有明山登山。
大正八年～昭和二十二年、満洲、中国を遊歴。
昭和四十四年五月五日、日本山岳会入会、会員番号六七二二(紹介者石原憲治、吉沢一郎)。
昭和五十年十一月六日歿。

(付記)石田吟松氏については、会報二二四号「ウェストン氏と有明山を登った当時の思い出」、横田斉「石田吟松画伯を寝覚に訪う」、『山岳』第五十六年「石田吟松氏の写生帖に現われたウェストン師」を参照されたい。

(山崎　安治)

図書紹介

山・人・本

島田巽著　A5判　本文三四九ページ　索引一四ページ　一九七六年二月　茗渓堂刊　定価二四〇〇円

島田さんが、この本のなかでも採り上げているクロード・シュスターに、"Climbing-books are necessarily autobiographical" という言葉がある。そう言われれば、たしかに登山紀行文集の類は、多かれ少なかれ自伝的要素が強いのは、われわれが枚挙するのに、そう困難はいらない。

ところで、島田さんが本書の冒頭約一一五ページに亘って、この度あらたに筆をとられた「山・人・本―五十年のつき合い―」は、登山紀行文とは違った意味で、自伝的要素の強いのに気がつくのである。そして、この見出しが自ら本書の題名ともなったように、その内容が本書発刊を著者に動機づけた第一の要素であったことが、読んでみてはっきりうなずける。

付けられた小見出しによって、その内容をやや詳しく紹介してみよう。大正十二年に槙さんの『山行』を読んで感銘をうけた「ひとつの出会い」からはじまり、最初に買った山の洋書の思い出や、丸善の中村春太郎さんの紹介で藤島敏男さんを知り、日本山岳会に入会した頃を綴った「『青春の山』、etc」、ついで現在、山岳名著と言われているような山の本が陸続と刊行された「昭和はじめの開花期」がつづき、日本山岳会創立三十周年記念として催された展覧会の前後を述べた「山岳図書展覧会のころ」、さらに「北の友人たち」として坂本直行さんを十勝の原野に訪ねる話を書き、「読むエヴェレスト」ではヤングハズバンドの Epic にはじまって、幾冊かのエヴェレスト登山の本を語り、最後は松方三郎さんとの共訳『わがエヴェレスト』にいたり、「戦中書信」では、重くるしい世相や戦陣のどこにあっても、山の本を読んでいた仲間の便りに触れ、「烏水・小島さんを偲んで」には、戦災で焼失した山岳会が自らの建物を設けた当時のことや、それを見ずに亡くなった小島さんの追想が述べられ、「松方さんとの旅」でスイスやロンドンに旅した得難い思い出を綴り、最後に「登山家の文章」を配して、主として英国の山の本とのつき合い五十年の間に、島田さんが得てきた実感を、もの静かなかにも極めて格調高く語って、一章の締めくくりとしている。

朝日新聞の論説で永年きたえられた島田さんの文章が、読み易いなかにも決して低俗に堕していないのは言わずもがな。それのみでなく、つき合った人々、採り上げた本、何れもが色々の意味で優れていたことを思わせる。それは、とりもなおさず

著者自身の優れた資質と人柄によることを物語るものであろう。

なお私個人としては、この五十年の日本山岳会の歴史のある側面を生き生きととらえている点が興深く、世代の変ってゆく若い会員諸君に特に読んでほしい章で、それによって往時の山岳会の雰囲気の一端に触れて戴きたいと思う。また望蜀の感を述べるなら、人と本に就いてよく書かれているほどには、島田さんの山登りの記述が少ない。この点は少し遠慮され過ぎたのではなかろうか。

次の「折々の記」には「リーダーと人柄」など、曾て『アルプ』や『学鐙』などに発表された十四篇のすぐれた随筆が収められている。年月を経ても、なお新鮮さが失われていない。再録にあたって、あらたに追記が書かれているのも細かい配慮である。

「プロフィル」に採り上げられた小泉信三、関口泰、深田久弥、ギド・レイ、ヤングハズバンド、コンウェイなどの故人に対しては、島田さんの温かい心情や、或いはその業績についての深い造詣が感じられる。

「読後偶感」には和洋三十数冊の書評が載っているが、その殆んどが『山岳』や会報に編者から求められて書いたものだが、この面で山岳会は多年いかに多く島田さんに負っていたかを、改めて思わないではいられない。採り上げられた本は、何らかの点で島田さんの心に残ったり、また親しみの感じられたりしたものが多いようだ。

巻末には本書中に触れられた書物のリストが纏められ、索引の役目を果たしている。本扉にはブロックドンの『アルプスの峠』から選んだ銅版画が用いられているほかは、写真など一枚もないのが、かえってすっきりしている。

近頃の山の本としては異色でもあり、いかにも島田さんならでは書けそうもない好著だが、それだけに、ご本人にとっては、永年親炙した松方さんに見せられなかったことが、最大の心残りであろうと想像する。

なお本書には特装本（限定百部・定価一万七千円）があることを付言しておく。本文用紙鳥ノ子紙、表紙はヒラに表裏共ブロックドンの著書からの銅版画を、薄手の羽二重をかけて使い、背とコーネルにチョコレート色の牛革を用い、天金、アンカット、角ヤマ、背文字金押し、見返しはブルーの日本紙、本書の内容とマッチした極めて典雅な味わいのある、見事な出来栄えである。茗渓堂作の特装本中でも指折りのものであろう。

〔望月達夫〕

山は満員

渡辺公平著　A5判　本文三五六ページ　一九七五年十月　茗渓堂刊
定価二二〇〇円

この新刊を書店でみたとき、岳人の著書にしてはひどくふざけた題名だと思った。目次をみても書名と吻合しなかったのである。

それはさておき、じっくり内容を読んでゆくとくだけた文章にひきつけられ、共感をおぼえた。やがて『山は満員』とつけた意味がのみこめ、ふざけた書名どころか、まえがきにあるように「それは今日に生きるわれわれ登山者に与えられた課題」であり「登山大国ニッポンの出現を」手放しで笑ったわけでないことが理解できた。

早大山岳部で活躍され一九三〇年同学を卒業し戦前戦後を通して登山をつづけてきた著者だからこそ、このような書名をつけて広く山岳愛好の士に読まれて然るべき本を成したといいうる。藤島敏男さんは戦後に避衆登山を打ちだし『山に忘れたパイプ』がある。『山は満員』はそれとおなじ心情にありながら、今日目の前にある事実を直視し、戦前のわが国登山のしっけがなんとか今日広くゆきわたるように、との願いを孕んでいた。

本書の中身は四部にわかれる。

Ⅰ部は著者が戦後登られた静かな山々の随想にあててある。しかし著者は避衆登山に限定することなく、夏の白馬や槍にも登って混雑をさけつつ名山を味う工夫もこらす。

とはいえ名山ででくわすのは観光登山・観光施設・自動車道・生態系の破壊であり、それどころか二月の蔵王でカミナリスキーヤーに追突され、蔵王の休養二十日間におよんだ。しかも尾瀬の入山者年間五〇万となった今日では、尾瀬入山規制の必要を認めざるをえない。ここらで『山は満員』の実相がでてきてⅠが終る。

Ⅱ部はⅠと対極をなす静かなりし戦前の山についての随想。「八十里越と六十里越」や「御来迎」では古きしつけにふれ、さらにウェストンのわが国登山に与えた感化と恩義を語る数章がある。だからウェストン師のレリーフの前に立った時だけでも、登山についての反省がほしいと強調し、また山頂の祠を想えば信仰登山ではないにしても、自然や神というものにもっと敬虔な態度をもつべきだという、古い登山者の信念を述べざるをえない。そしておわりの二随想で、戦前の若き日の岳友を語りつつ、著者若き日のプロフィールも登場する。

Ⅲ部は一転して、戦後のわが国の登山成長期の展開に関する随想でみたされる。

まず「夏山復興」である。国破ぶるとも山河あり、竹ノ子生活や国鉄輸送力の荒廃期に日本の登山者は山への情熱に燃えた。しかしそこには戦争のために長い空白時代があり「山に対

する経験や訓練に大きなアナ」があいていたことを認めざるをえない。このことがやはり無理な冬山の遭難につながる一因であろう。

しかし成長した登山界は「遠征ニッポン」の壮挙の日を生みだした。さり乍ら著者はここで、急増した登山人口にむかって、簡単にはゆけぬヒマラヤにも無い日本の山の美や味を説く。そこに「失われた山麓」や「変りゆく峠」の悲歌はあっても、鈍行列車を利用して味わえる山はまだまだ多いし、そこに日常社会のエチケットを混む登山にもちむことの必要があると、軽妙な筆致で語る。およそ「梓川の水」が飲めないなんていうことは悲劇もいいとこで、それだからこそ『山は満員』の課題があるゆえんとなる。このことを解くのが、登山大国の登山者に与えられた今日の責任であるわけだと。

Ⅳ部は急転して、ヨーロッパアルプスの名ガイド数名の略伝となる。わが国登山黎明期の人格・技量ともにすぐれていた名案内人の正伝がないので、それを作るべきだとの反省に立つからであろう。あれば当然Ⅱ部におさまるべきもの。Ⅳは付記であろう。

さて本書におさめた諸随想は、登山専門誌の読者を対象としたものは少く、一般読者を対象に書いたものが多い。それらを編集して一冊としたのであるが、読了した私は四部構成の狙いを叙上のとおりに理解したのである。その主張は戦前戦後一貫して日本の山に登りつづけた人にして、はっきりなしえた叫びであろう。珍妙なる書名にあらず、登山大流行への警鐘であり、スローガンが書名となっていたのである。それだけにこの著作は、現代の山岳愛好者に広く読まれてしかるべき好著であり、急増した登山人口と山の生態破壊の矛盾を反省せしむる良書である。

一つ希望を述べれば、本書末尾に著者の登山譜がほしかった。まだ早いよ、と著者は云われるかとも思うが、戦前戦後にわたる登山足跡を活字に残すことは、本書の構成から判断して必ずや価値ある資料たるを疑わない。

〔柿原謙一〕

山を見る日

川崎精雄著　A5変型判　三四八頁
写真二一葉　一九七七年一月　茗渓堂刊　定価二九〇〇円

八年前に刊行された『雪山・藪山』に次ぐ著者第二の随筆・紀行文集である。

本文は随想二五篇、紀行一九篇の他、俳句四頁、著者の撮影になる写真二一葉から成り、題名は、冒頭の一文、すなわち旧い山仲間と上ノ原高原をゆっくり逍遥し、新雪を戴いた曽遊の山々を心ゆくまで嘆賞しながら、静かだった昔を懐しむ文章か

らとられている。

このような追憶的な随想や、俳諧雑誌に掲載された短文、あるいは地元である程度お膳立の整えられた優雅な登山の記録などは、著者自身あとがきで述べているように、特に若い人達の興味はひかないかも知れない。白銀の峰の神々しいまでの美しさや、処女雪を踏む醍醐味は、重装備を肩に、冬山に入らなければ味わえないだろうし、原始のままの池塘の夢幻的な光景や、野性動物との素晴らしい出合いは、概して探険的な前進の努力を何日も続けて、初めて体験できるものと考えられるからである。

しかし、本書を少し読み進むならば、何十年間も山に接し、山の苦しさや楽しさを知り尽くした著者の静かな情熱が、いたる所に滲み出しており、何気ない描写の奥に山旅の本質や、かけがえのない楽しさが切々と語られているのに気付くだろう。

上越や会津のひなびた湯の宿の主や、草深い出作り小屋のおかみさん、ひっそりした山峡にある小駅の駅員、あるいは軒先にぶら下げられた、なま乾きの凍豆腐を分けて呉れた農家の人人との交情の物語が、林主税、星清四郎、平野長英、小滝清次郎といった懐しい名前と共に登場する。またこれら山旅の同行者としては、木暮理太郎、藤島敏男、尾崎喜八、上田哲農、深田久弥、その他よき先輩や、仲間がつぎつぎに現われ、それぞれ個性的な対応をするのである。しかも往き帰りに利用されるのは混んだ特急や急行でなく、ゆっくり坐って行ける鈍行や、主に土地の人が乗るローカル線の列車である。

場所的には、名前だけではどの辺りか一寸判らないような峠の数々や、人が殆ど入らないセンノ沢、コツナギ沢、奈倉沢、霧来沢などが主な舞台である。さらに著者がこよなく愛する藤原の宿や、乙父、切明、月夜野といった秘境に類する部落が、いくつも出て来て活写されている。

一方「銀山平より尾瀬・藤原の旅」や「四月の笠ヶ岳より武尊山」などの旧い紀行は、それ自身迫力もあるが、今となっては貴重な記録であって一読に値する。

山頂に湧いては消える雲や、路傍の石仏の美しい写真なども、また自然に対する純粋な渇仰の気持をよく表わしている。

本書は、開発の異常に進んだこの狭い日本においても、自ら求めさえすれば、何時でも我が意にかなった快い山旅が実行できることを示して、私共に楽しい山行をすすめるものである。同時に若い頃青春の情熱を傾けて山に挑みながら、その後次第に山から離れて行った人々に対しても、山と人との良き関係を想い出させ、もう一度山に戻ろうという希望を与えるものではなかろうか。

多少気になるのは、このような文集で何ヶ所か重複が見られるのは止むを得ないとしても、重複が少々目立ち過ぎる点と、幾つかの紀行に簡単な地図が添えられていれば、もっと端的に山歩きの醍醐味が、読者に伝えられたのではないかという点である。

著者には、これからもいよいよ快心の山旅を続け、岳界のため、さらに第三、第四の文集を上梓して頂くことを心から期待

したい。

〔中村純二〕

ヒマラヤ・トレッキング

五百沢智也著　変形B5版　二〇八ページ（カラー写真一八二点　カラー全図五点　鳥瞰図等七八点　イラスト一一一点を含む）一九七六年五月　山と渓谷社刊　定価四八〇〇円

本書を読んで感動を受けたという読者が、遠くヨーロッパからやってきた。Lさん、小柄で魅力的なイタリア女性である。彼女は、ローマ大学でチベット学の権威ジュゼッペ・トゥチ教授にも教えを受けたという東洋学者であった。

東京のPホテルで、本書の著者五百沢さんと一緒に彼女に会った。

「イオザワ先生、あのご本、とっても、とってもすばらしかった。写真もきれい。スケッチも地図も……。この本を読んだら、またヒマラヤに行きたくなってしまった」

イタリア訛りはあるが、流暢な日本語だった。大きなゼスチャーをまぜながら、五百沢さんの本をほめちぎった。そして——。

「こんなすばらしい本を出されたのだから、きっと、イオザワ先生、百万長者になったでしょうね」

五百沢さんはテレながら答える。

「いや、とんでもない。残念ながら……。日本では、こういう本は、そんなには売れないのですよ」

よい仕事と多額の収入を直結した彼女の発想は健全である。だが、この世の常として、よい仕事必ずしも金銭的にむくいられるとは限らない。それどころか、足かけ五年を費したこの労作は、経済的にはかなりの犠牲を著者に強いたことであろう。

本書は、書名が示すようにヒマラヤの旅への「案内書（ガイドブック）」である。だが、それも通りいっぺんの案内書でないことは、本書を一読すればすぐにわかるだろう。

〈あとがき〉にも述べられているように、旅行案内書は「ともすれば、他書からの受け売りや人の集めた資料のつぎはぎになりやすい」のだが、五百沢さんはしつように自分の足で歩き、自分の眼で確かめながら、丹念に野帳に記録していった。本書は、五百沢さん自身のヒマラヤ・トレッキングの集大成であり「足づくり」の本でもあるのだ。

それは本書の特徴でもある数多くの地図類にも端的にあらわれてくる。たとえばカトマンドゥやポカラなどのバザール略図——。略図とはいえ、道の両側に商店が一軒一軒びっしりと描きこまれ、それぞれに説明がつけられている。むろん、すべ

て自分の眼でたしかめ、製図していったものだ。

ルート・マップも楽しい。たとえばタトパニからジョモソンまでの行程図――。カリ・ガンダキに沿って、五百沢さんの観察の眼が丹念に書きこまれている。樹林相、民家の形、地形、住んでいる民族、店で買える商品、作物……。

著者は地理学者で、国土地理院で十四年にわたり地図つくりに従事してきた、その道の熟達者(オーソリティ)である。だが、本書をささえているのは、単に技術的な手法ではない。職を捨ててまでヒマラヤ研究にむかった五百沢さんのひたむきな情熱と、限りないロマンなのだ。

本書を読みすすむにつれ、また美しいヒマラヤのカラー写真やスケッチ、図版に目をうばわれているうちに、読者は、五百沢さんのロマンの世界に惹きいれられていくことだろう。それと同時に、本書はヒマラヤの旅の原点ともいうべき姿勢についても教えてくれたような気がする。かつて、ヒマラヤに踏み入った初期の探検家たちは、未知の地域を明らかにすべく、自ら地図をつくるか、または測量の専門家を同行させた。学術的な観察もおこたらなかった。わが国からおびただしい人々がヒマラヤへと旅発っている。だが、そのうちの何人が初期の探検家たちの例にならっているだろうか。むろん、ヒマラヤの旅も個人的楽しみにすぎないのだから、どう旅しても勝手であろう。が、ヒマラヤの楽しみ方は、ただ歩くだけでなく、またただ登るだけでなく、限りなくある。五百沢さんは、その楽しみ方の一端をも示唆してくれた。

五百沢さんのヒマラヤに対する情熱は、当然この一冊にとどまることはあるまい。学術論文とは別に、ヒマラヤの各地域別の「案内書」も望まれる。また、カラコルムやヒンドゥ・クシュも、本書と同じ手法で出版されたら、どれほどすばらしいことか。今後の五百沢さんの活躍に期待をかけるのは、決して評者のみにはとどまらない筈だ。

ちかく本書の英訳版が発行されるという。翻訳者はハワイ大学の地理学者でデヴィッド・H・コーンハウザー教授。これで、わが国の秀れたフィールド・ワーカーの労作が、世界に知られることになる。日本の登山界にとっても喜ばしいことである。

〔向後元彦〕

ジャヌー北壁

小西政継著　合判　本文二五八ページ　付録一一ページ　写真二七ページ　一九七六年一〇月　白水社刊　定価一八〇〇円

本書は一九七六年春期に、東部ネパール・カンチェンジュンガ山群にあって、峻嶮のほまれ高いジャヌーの北壁へ挑んだ小西政継隊長以下十五名の勇敢な登山家達の成功物語である。非

常にスッキリした読後感をもって本を閉じることのできた数少ないヒマラヤ遠征記のひとつである。

正確に云うと、彼等の登路はジャヌー東稜の北側支稜であって、実際の北壁には全く手がつけられていない。強力な山学同志会隊といえども、手をふれることすらできなかったジャヌーの北壁――頂上から二三〇〇メートルをジャヌー氷河の源頭へ向ってスッパリと切れ落ちた花崗岩のものすごい絶壁こそは、今後のヒマラヤ登山の最困難な課題として、クライマーの上にそびえ立ち続けるであろう。

同じ山に挑んだことのある者として（評者は一九七四年、ジャヌー遠征成城大学隊の一員である）、特に山学同志会隊には多大の興味と関心を持っていたが、昨夏神戸の山岳研修センターにおける小西隊長自らの報告会を詳しく聴取し、またその時の懇談会を通じての感じから、この本の上梓を心待ちにしていた者の一人である。

近年吾国から出るヒマラヤ遠征隊は毎年数多いが、その内容について吟味するとき、国際的、あるいは世界の一流レベルと云う観点からすれば、興味の薄いものが殆どを占めていて、読む価値の少い報告書類が多いが、この遠征記は、正真正銘の、いわば銘酒の値打ちがある。今後ヒマラヤにおいて高級登山をやろうとする意気を持った登山家にとっては、必読の一書として伝わるべき内容を数多く含んでいる。文章は平易で簡潔、何のてらいも気取りもないもので、自分達の考え方と行った事実を正確に伝えようと云うことに著者の主眼が置かれているように思われ、たいへん読みやすい。しかし行動の内容自体はまれにみるきびしく激しいもので、その迫力は行間ににじみ出て居て、訴及力十分である。山の書物の中には文学的内容の高いもの、高度の思想が盛られたものなどがあり、これらにとっては文章の技術、いわゆる修辞学は大切な要素となるであろうが、行動の書、つまり遠征記とか登攀記と云った類の文章は、正確で平易で簡潔なことが一番良く、読者の心を最も強く打つのは実行した登山の質の高さである。この意味において本書はかなりの成功を収めているやに思われる。

著者と私の年齢は、一才彼が下であるが、我々のジェネレーションの登山家の間で特に「クライマー」と呼ばれ、二十代の年齢（一九五〇年後半から六〇年代にかけて）の時、冬の滝谷や谷川岳、あるいは北岳バットレス、カクネ里、剱岳などと云った日本では最もきびしい岩登りに熱中した社会人山岳会を主体とする一群の人々は、それ程数が多くもなく（東京、名古屋、大阪に主として在住して、数十人程か）、お互に各自の登山のことをよく知っており、また戦後の物資不足から、ままならぬ装備、食料での高度登山の実行に苦労し、或程度の連帯感を共有している世代でもある。小西氏や私を含むこのジェネレーションのクライマー達の日本の冬山におけるきびしい実践こそが、当時欧州に較べて技術的水準の低かった日本の登山界のレベルアップをリードして来たものと観ているし、自負もしている。例えば高田光政氏は欧州アルプスにおける嚆矢として、アイガー、マッターホルン、グランド・ジョラスの三つの北壁を、

そのすぐれた登攀技術で次々と登って見せ、「日本の山でのきびしい実践を経れば、欧州の一流レベルもやれるのだ」と云う自信を、その後に続く同世代、あるいはより若い世代に植えつけた功績の大きさは、測り知れないものがある。かようにしてこの世代の一群は、「高度登攀技術をより困難で高い山で実践する」ことを海外の山で体を張って示して見せ、日本登山界の一面をリードしてきた。

小西氏らのジャヌー北壁の登山もこの同世代の心意気と風潮の延長線上に位置しているものであって、なおかつ、これが最高レベルの日本の登山だと、世界中に胸を張って云える、いわば登山の集大成の一つである。

ジャヌーと云う山は北面から登ると、南西面から攻めるとにかかわらず、徹頭徹尾高級登攀技術を駆使しなければ登れない山である。小西氏も書いているが、いわゆる欧州アルプスの登攀をヒマラヤの高度で常時不断に要求される山である。つまり、世界で最も峻嶮かつ困難な山であり、しかも姿が美しい。それでこそ十五年前に、当時世界最強のクライマーの巣であったフランス山岳会が、その選抜軍（フランス第三隊、隊長リオネル・テレイ）を送ったのであり、私達成城隊も、強力なニュージーランド隊も（山学同志会隊に先がけ、一九七五年秋期に東稜北側支稜—山学同志会が後を追ったルート—にとりつき十月二十日、二人の隊員がC5地点から東稜七三〇〇メートル地点まで到達したが、迫り来る秋の寒気と烈風のため力つきて進行を断念している。）そして山学同志会隊もここを理想の山として選んだのである。

これらいずれの隊もがジャヌーを選んだ理由には、極めて似たものが共通して流れているが、その第一にくるのが、マンメリズム以来、登山活動を支える古典的信念となっている「危険への挑戦」である。危険と困難は質が異ると云う論があるが、それは間違っている。これは同系列の物である危険より困難が、よりグレードが低いと云うに過ぎない。ジャヌーが登山家に提示する諸問題は、客観的に考えれば、明らかに「危険」その物である。これらを「困難」へデグレードし、かつ「可能」域へまで近づけるもの、これが登山技術である。

近来ヒマラヤの用兵術論議が盛んであり、種々な論点から過剰で、頭デッカチで、わかりきったことを持って廻った云い方の議論がかまびすしいが、これらは素人を感心させる「こけおどし」ではあっても、ジャヌーのような山を実際に攻める場合は、基本的にもっと大切なことがある。登山技術と云うものは、抽象的に存在するものではなく、個々の登山家の登攀の腕前として、小西氏の言を借りれば「腕の良い岩の職人」の技倆として、基本的に存在する。タクティックス論のごときは、つきつめれば組織体運営の原理に他ならず、あえて登山技術の一部門として仰々しく議論せずとも、社会生活を一人前に営んでいる人が誰でも一般に承知しているところの通念である。したがって何か高級な新理論のごとく錯覚して有難がる筋合のものではなく、登ろうと云う意欲のしもべとして適当に利用すればよいことに過ぎない。

これから先、ジャヌーの如きヒマラヤの高度登山を志す若い登山家に忠告するとすれば、最も力を入れて勉強すべきことは、「訓練に訓練を重ね、きびしい岩や氷の実践を積み重ねて、登攀の腕前を自から練磨しつづけること。それによって得られた実績と自信が、ヒマラヤの岩や氷を前にしても動ぜぬ気力と闘魂の根源となる。そして参加する個々人の力倆の総和が遠征隊の力量を決定づけ、登山の成功をもたらす」。要約すれば以上の様なことを小西氏は、さまざまな角度から、ジャヌー登攀記を通じて訴えている。若い登山家諸君は、いたずらに口舌の徒となって頭デッカチの空論にうつつを抜かす愚を避けて、自ら困難な登攀を実践する行動の人となってほしいものだ。

小西氏は云う。一人や二人のエースを揃えても、この力に頼って登れる程ジャヌーは甘いものではない。「全員が対等のアルピニストとして誰もが荷上げし、ルート工作をし、ザイルのトップに立てる」ことが重要である。すなわち全員がエース級の登攀技術の持主であることが、基本的前提となって、はじめてジャヌーの計画は成立する。事実、小西隊はこの様な隊員を揃えているところが、最大の強みであった。

ニュージーランド隊の記録には直接当っていないので明らかでないが、秋期の悪コンディションに、ほぼ八〇パーセントまでジャヌー北壁の問題を解決して、同志会の成功に多大の貢献をなした処をみても、相当の実力があることは明らかであり、他方フランス山岳会の第二隊（ジャン・フランコ隊長）、初登攀に成功した第三隊（リオネル・テレイ隊長）においても、当時世界的第一級レベルの岩と氷の職人を網羅した編隊となっている。第二登に成功した成城大学隊も、テレイ隊や小西隊に較べて数の点でやや見劣りがすると云うものの、中心隊員の技術の高さは、世界一流である。

ジャヌーの攻め方については小西隊もそれ以前の隊も、基本的にフランス第二隊のジャン・フランコが採用したやり方、すなわち二人ないし三人のザイルシャフトがきびしいルート開拓に当り、これを数名のシェルパが荷上げなどのサポートをする、前線隊が疲れたらBCないしABCに下り、次に控える別のザイルシャフトがくり上って前線に出、順次これをくり返してゆく。特定の人にバテ込みのしわよせが集らない様にし、これが隊の戦力を最大に保つと同時に、高度順応を早め、全員が均等のコンディションで登頂の時期を迎えられる。したがって条件さえ整えば、全員に登頂のチャンスが廻りくると云う用兵術を採用して成功している。いや、ジャヌーの頂上を落すには、これ以外のやり方はないのだ。このジャン・フランコの提示したモデルは、単純にして合理的、なおかつ頂上に立ちたいと云う意欲ある隊員のやる気を結集する上で心理的効果絶大であり、今後も古典的方法としてヒマラヤの難峯攻略に採用され続けるであろうことは疑いを入れない。しかし、この方法が実行可能になるには、くどい様だが、隊員一人一人の技倆の高さが基本的前提である。このことはジャヌーを攻めた各隊が痛感して、一様に記録に述べている処である。

私は、小西氏や同志会の人達の登山に対する姿勢に共感を覚

える点が多いが、あれこれ溯って考えてゆくとき、我々のジャヌーにおける先人である、フランコやテレイの残した思想と足跡の偉大な感化力に思い至るのである。彼等がジャヌーで演じた死闘と華々しい成功は、僥倖の要素は一つも無く、偉大な信念とそれを裏付ける実績からもたらされた、いわば「勇者がそれにふさわしい美女を得た」ものと納得できる。その敬服すべき先人の獲物を、自らの知恵と努力で追体験し、北側の新ルート初登攀により登山史の一頁を飾ることのできた山学同志会の幸せなクライマー達には、心からおめでとうを云いたい。

冒頭私は、この遠征記はスッキリした読後感をもって本を閉じることができたと述べた。その理由はいろいろある。一人も怪我人を出さず、しかもシッカリしたルート工作の完成によってシェルパ三人を含む十三名の隊員の四次に亘る登頂成功。小西隊長の強力なリーダーシップの下に強い団結を以てルートを拓き、苦楽を分ち合った隊員達。兵站線を支えたサーダーのカルマ以下シェルパ達。何もかも成功物語につきものの力強い活動に満ちた記録である。私事に亘るが、カルマは私事のサーダーでもあり、一九七三年春期京大隊のカンチェンジュンガ西峯を成功に導いたベテランサーダーであるが、成城隊においては怪我の為、C3から登山活動を中止して下山しており、ジャヌー第二登の栄光にはあまりあずかっていないが、小西隊において、サーダーとして男を上げ直せたこと。また小西隊長らと一緒に第二次登頂に、シェルパとして一番乗りしたペンバ・ツェリンは私達の隊では、困難な状況下で力強く期待に答えて活躍し、隊員の皆から最も愛されたシェルパであるが、その彼が、小西隊では登頂できて嬉しそうな顔でいる写真がみられ、男の本懐を達したこと、などがある。つまり多勢での登頂、シェルパの筆頭者の努力に答える為に頂上に連れてゆくこと等々、私達の力不足と不運な状況下で果せなかった目的を、同志会の人達が果して呉れたことだ。

「組織、特に遠征隊の統率とか模範というものは、豊富な知識やすぐれた能力のみではできないことだ。文献や体験の知識をベラベラ口にし、まくしたてることよりも、無言の実践力が最大の効果を発揮する。また、つらいこと、苦しいこと、いやなことは人に命令するよりも、まず自分自身でやることだ。若い隊員をリードする登攀リーダー、隊を動かす隊長の統率力の根源は、こんな努力の中から生まれるものだろう」

これが小西氏のリーダーシップに対する基本理念である。こう云う行動の人が隊長となり、隊員の一人一人が真剣に各自の持場に努力する。てらいや甘えは許されない、登山家の桧舞台ジャヌー。そして彼等の正当な努力と登攀能力に見合った報酬としての大成功。読後感は実に爽やかであり、喜んで書評の筆をとった一本である。

〔橋村一豊〕

Changabang

by C. Bonington, M. Boysen,
A. Hankinson, D. Haston, B. Sandhu
and D. Scott
edited by A. Hankinson
Heinemann, London, 1975, pp. 118

ガルワール・ヒマラヤのチャンガバンは高度六八六四メートルと、ヒマラヤにある山としては決して高くはないが、カラコルムのムスターグ・タワーなどと並んで、古くからその峻険なる山容が知られていた。ナンダ・デヴィ内院を囲む障壁の北西の角を守り、内院への侵入に立塞ってきたチャンガバンは、古く十九世紀後半にすでにヒマラヤの先駆者達によって、登攀不可能という形容で紹介されていた。この本は一九七四年プレモンスーンに、この鋭峰チャンガバンに挑んだ英国・印度合同登山隊による初登頂の記録である。

ガルワール・ヒマラヤはインド独立後ほどなくして外国人には全く近付けない山域となってしまったので、古くから知られたこの鋭峰を試みる登山隊はずっと現れなかった。この山を最初にめざしてやって来たのが、ボニントン率いる小規模な英印合同隊であった。彼らはガルワール・ヒマラヤが外国人に再び開かれてから訪れた最初の登山隊であった。しかしこの本では、登山許可取得及び合同隊が組織された経過には言及されていない。日本から登山隊が出かける上で比較的重要視され、また実際莫大な時間と労力がさかれる組織作りが、このように手軽に行なわれていることに羨望を感じる。この比較的小規模なチームの編成に、翌年エベレスト南壁に見せるボニントンの力量の一端がうかがわれる。

本書はこの地域での登山に一番大きな障害のキャラバンにかなりのウェートを置き、また合同隊としての問題のいくつかを指摘している。キャラバン路の困難さなど有りきたりの問題は別にして、ポーター不足でインド側リーダー（合同隊サブリーダー）がキャラバンのしんがりを務め指揮をとることになる経過と関連して、リーダーシップに対して疑問が出されているが、インド側は輸送、英側は登攀に関して責任を持つと割り切ってしまうところは面白い。また、英国隊員の合同隊参加についての意見及び合同隊運営方法など非常に興味深く読んだが、彼らの登攀技術はインド隊員とは格段の差が有ると割り切ってリードすることに徹したやり方に、旧宗主国民としての意識とインド人に長く接して来た歴史を感じさせられる。

登山はベース・キャンプ建設後十三日目に登頂するという、全くイギリス側のリードによる早いペースで終る。当初予定した西稜をあきらめ、東稜へ変更したため、チャンガバン氷河に入るまでが困難であった。しかし頂上の高度も低く、行動開始も非常に早い、そして行動時間も長いアルプスでの登山形態を

そのまま持ち込んでいる。

最後にイギリス側四隊員の妻たちが、夫が長期間家を空けて出かける山登りに対する感想を求められているが、彼女らの赤裸々な反応に、西欧社会における個人や家族のとらえ方にまったく日本と違うものがあるのを見ることができる。

この本はイギリス側によってまとめられ、インド隊員の意見・感想等はサンドゥ陸軍大佐の個人の反映があるに過ぎない。他の隊員がどう感じているか興味のあるところである。しかし現在のインド人登山家大半の登山の動機は、我々のそれとはかなり異質なものであるから答は画一的なのかも知れない。このような外国との合同登山を通して、将来彼らの山登りがどのような方向に志向して行くか楽しみである。

チャンガバンはこれ以後一九七六年までの三年間で、めぼしい登山はすべて小規模な登山隊によって終ってしまった。二つのイギリス隊がそれぞれ西稜と南東壁から、そして日本隊が南西岩稜から登頂したのである。チャンガバンを始めとするこのガルワール・ヒマラヤの山々は、すばらしい登攀の実践の場であることをこの本は教えてくれている。

〔梶　正彦〕

北の山　続篇

伊藤秀五郎著　菊判三二六ページ
一九七六年十二月　茗渓堂刊　定価二七〇〇円

北海道の山に関して、特に大正末期から昭和初期にかけて、北大の山男たちが果たした役割は、独占的でさえあった。著者はそのグループの大きな存在で、大正十五年北大山岳部を創立、昭和十五年同部長となっている。

本書には『北の山』以後に書かれたもの、及び『北の山』に除いたものとを含めて、紀行、研究、論説、随想、エッセイ等計四十六篇が収録されている。

紀行関係にはいずれも、パイオニアとしての気概と当時の若さが充満し、北海道の山の雰囲気を味わせてくれる。

「さあ私達は、このささやかなる晩餐に感謝しよう。私達の空き切った腹は、この温い味噌汁と、柔かい豊富な飯とより外に何物をも望みはしない。そうして食後に熱くて甘いココアでも飲んで、安らかな眠りの上に一日の疲労を回復しようではないか」（「冬の十勝岳」）

「三月の黒岳小屋日記」「石狩岳スキー登山」「冬の北日高山群」などの前進基地としての小屋建設に見る熱情もさることながら、土地や小屋が容易に（であったかどうか）得られた当時

の北海道の事情が、どんなに山男たちに楽しかったかを想像させる。

著者の努力は登山だけに止まらず「日高山脈の地名について」のように地名研究にも向けられる。単なる聞書きでなく、川の流れ、麓から見える山、というように、自らの考察も含まれている。熊を転ばした山、大いなる陸地、川貝のある所、などアイヌの素朴な呼名が楽しい（このようなアイヌの呼名、例えば雪解水をどっと押し流す山、とか、反り返った山、などの山名語集の有無を私は知らないが、無ければ是非作って欲しいと思う）。

また大雪山系や北日高山脈に於ける三角点測量の年月日研究（「北の山余録」）も「北海道に於けるスキー登山の発達」も貴重なものである。特に後者は一九二九年執筆で「北の山」に省かれたもの、これを拾い上げたのは編者のお手柄と言うべきであろう。

「行為と冒険」は、学校山岳部に対する、の添え書がある論説だが「山登りに限らず、あらゆる場合にゆとりをもつことは必要である」という語句が見逃がせない。

登山とは、そして、登山家とは、に対する答は難しいが、著者もまた「登山の本質に関する一考察」で、その難しさを説いている。

「登山家は、必ず詩的情想をもつ」と言い、山登りは一つの思想であり、一つのスポートである、という点に著者の姿を見る。「山登りは、登山家にとって生活であり、精神的な創造でもある」とも述べている。昨今のように行為が先走って、山とは何か、という問題が置きざりにされている時代にあって、一九二八年に書かれた本文は、一読の価値があるといえよう。

詩人である著者の随想は、さすがにのびのびしたタッチである。熊の話は、北海道の山に無くてはならぬ話で、みな面白い。特にオヤジの足跡と気づかず有難がって、沢を下ったなぞは最高である。沢下りの気分もよく出ている。「北海道の早春」は無論よいが、私は「風景について」の一文に殊に惹かれた。

略歴によれば、著者は昭和十九年（一九四四）軍需省嘱託となり名古屋の工場に赴く、とある。この文は一九四九年四月筆で、「四月も半ばを過ぎた十六日というのに伊勢路の春はまだ浅い」に始まる風景に寄せての感懐である。草に座し、鈴鹿の山山を眺め、春景色にひたりながらも、北の山野へのノスタルジーや、嘗て旅した欧米の地への回想がわく。敗戦を味わった中年層のペーソスが、全文に流れている。私自身も戦後間もない頃、行きつけの或る山峡に行って、山に向かって考えた経験があるので、著者の心象にうたれるのである。

「無言の対話」は、実にからっとした文である。「山がそこにあるから」かどうか考えてみるのもよかろう。日本では山へ行く連中が考えなさすぎるために、山が紙屑だらけになり、小舎の羽目板がひっぱがされ、と著者は嘆く。そして自分も考えてみた末、山登りは人格の陶冶、という捕捉し難い名答を考えたと言うので、甚だ愉快だ。ザイルだピッケルだと人間の手足が乱暴を働いても、山は傷つく心配がない、と言うあたり、学科

試験から解放された学生か、母の手から逃げ出した裸児みたいである。

当然ながら著者の目は、自然、開発、自然保護に向けられる。アメリカのソルト・レーク砂漠（例えば）の中に、将来大緑地や大都市が建設されるかも知れない、と書き、今までのアメリカ人の精神形成にこのように散在する砂漠が、何らかの影響を与えたのではないか、と考える。また、今日の日本のように、自然が破壊されて顧られない国にあっては、国民的自覚を実現させるために、学校に於て自然保護という必修科目を設けよ、と力説する。

さて本書の目次を記しておこう。先ず著者と親しかった三田幸夫氏の心温まる序文がある。以下紀行研究関係一三、論説三、随想一七、追憶と書簡関係九、エッセイ四。略歴・登山譜、あとがきは編者の林和夫、望月達夫両氏。装幀とカットは坂本直行氏。良書と呼ぶに吝かでない。

最後に私事ながら、私は伊藤氏にお会いする機会がなかった。一九七三年九月、日本山岳会北海道支部の芦別岳現地小集会に、会員高沢光雄氏に誘われて参加した時は、伊藤さんは健康が一だんと勝れなかったらしくご不参だった。伊藤氏は大学教授だから、憶病な私は、少々びくついていたのだが、お会い出来なかったことは、やはり残念だった。私は、同氏のものに山岳誌上で時折接しはしたが、まとめて読んだのはこの「続篇」が最初で、そのためか却って鮮明な印象を受けた。

この書の中に「濁川温泉」なる随想がある。私は北海道の山の帰途に、このひなびた温泉に泊まる予定だった。その近くにある狗神岳（八九九メートル）へも登りたかったのである。ところがニセコや羊蹄山に登ったのが祟って、更に東京へ帰る途中で東北の山を歩く日数が不足しそうになった。それで森町の駅で足をプラットフォームに下ろしかけて、やめにしてしまった。著者は一九六三年一月に行った濁川温泉を、落ちついた湯治場として書いている。この文さえ読んでいたら、あの時森町のフォームに両足下ろしたものを、と悔やむこと大である。

〔川崎精雄〕

会務報告

昭和五十一年（一九七六）一月～昭和五十二年（一九七七）六月

◇**一月理事会**　一月九日（金）ルーム

出席者　今西、望月、浜野、高遠、近藤、小倉、山本（良）、大森、皆川、大倉、黒石、田村（俊）、橋本、田村（宏）、浅田、小原、佐藤、浜野（正）、宮下

▽議事・報告

一、秩父宮記念学術賞授賞候補推薦の件

二、ルーム家賃値上げの件

三、ナンダ・デヴィの件

四、支部長会議運営内規の件

五、婦人懇談会報告の件

六、遭難対策、集会委員会報告の件

（詳細は「山」三六九号参照）

◇**二月理事会**　二月五日（木）ルーム

出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、皆川、黒石、神崎、橋本、浜口、浅田、太田、小原、浜野（正）、折井、宮下

▽議事・報告

一、ナイロン・ザイルの件

二、テンジン・ノルゲイ氏歓迎会の件

三、ナンダ・デヴィ登山準備報告の件

四、カメット登山準備報告の件

五、学生部・指導・集会委員会報告の件

（詳細は「山」三七〇号参照）

◇**三月理事会**　三月六日（金）ルーム

出席者　今西、織内、望月、高遠、山本（健）、近藤、小倉、山本（良）、大森、皆川、大倉、黒石、田村（俊）、神崎、浜口、浅田、太田、小原、佐藤、浜野（正）

▽議事・報告

一、昭和五十一年度事業計画（案）承認の件

二、昭和五十一年度収支予算（案）承認の件

三、定款一部改正（案）の件

四、総会日程の件

五、ナンダ・デヴィ登山準備報告の件

六、集会・図書・海外連絡委員会報告の件

（詳細は「山」三七一号参照）

◇**四月理事会**　四月九日（金）ルーム

出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、山本（健）、小倉、大森、皆川、大倉、黒石、田村（俊）、神崎、橋本、林、太田、浜野（正）、折井、宮下

▽議事・報告

一、昭和五十年度事業報告の件

二、昭和五十年度収支決算および財産目録報告の件

三、山岳研究所建設収支決算報告の件

四、昭和五十一年度監事候補者の件

五、ナンダ・デヴィ登山隊準備報告の件

六、カメット登山隊準備報告の件

七、山研・集会・指導・海外連絡委員会報告の件

（詳細は「山」三七二号照）

◇**四月評議員会**　四月九日（金）ルーム
出席者　今西、織内、望月、佐藤、浜野、折井、宮下、藤島、津田、島田、田口、村山、大塚
▽議事・報告
一、昭和五十一年度通常総会提出議案の件
二、昭和五十一年度監事候補者推薦の件
三、ナンダ・デヴィ登山隊準備報告の件
◇**支部長会議**　四月二十四日（土）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、笠原（岩手）、藤島（越後）、蒲生（信濃代理）、大沢（山梨）、山本（静岡）、樋口（東海）、松井（岐阜）、中田（富山）
▽議事
一、総会提出議案説明の件
二、家賃値上げの件
三、現地小集会の件
◇**昭和五十一年度通常総会**　四月二十四日（土）東京都千代田区神田駿河台・全電通労働会館
出席者　今西会長以下一〇六名（他委任状一、三一六通）
▽総会次第
一、会長挨拶　今西　錦司
二、会務報告　今西　錦司
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和五十年度事業報告　浜野　吉生
五、昭和五十年度収支決算、財産目録報告　山本健一郎
六、監査報告　林　和夫
（右、承認）
七、上高地山研収支報告の件　山本健一郎
（右、承認）
八、昭和五十一年度事業計画および収支予算案の件　浜野　吉生　山本健一郎
（右、原案どおり承認）
九、定款一部改正（夫婦会員制度の設置）の件　今西　錦司
（右、原案どおり承認）
十、昭和五十一年度役員（監事）選任の件
△監事▽太田敬（再任）、飯野亨（新任）
十一、昭和五十一年度除籍の件
十二、支部報告
岩手（笠原）、越後（藤島）、信濃（蒲生）、山梨（大沢）、静岡（山本）、東海（樋口）、岐阜（松井）、富山（中田）
（詳細は「山」三七二号参照）
◇**五月理事会**　五月七日（金）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、近藤、小倉、山本（良）、皆川、大倉、黒石、田村（俊）、神崎、橋本、浜口、浜野（正）、折井、宮下
▽議事・報告
一、理事の任務分担追加の件
資料管理担当（浅田）、支部（神崎）
二、常務理事選任の件
神崎忠男氏を追加
三、明治大学ヒマルチュリ登山推薦状交付の件
四、山研、山岳編集、集会、指導委員会報告の件
五、婦人懇談会報告の件

（詳細は「山」三七三号参照）

◇**六月理事会**　六月四日（金）ルーム

出席者　織内、望月、浜野、高遠、近藤、小倉、山本（良）、神崎、大森、皆川、大倉、黒石、橋本、太田、小原、佐藤、浜野（正）、折井

▽議事・報告

一、日本山岳会学生部ガルワール登山隊推薦状交付の件

二、集会、山研、図理、自然保護委員会報告の件

三、青年懇談会報告の件

（詳細は「山」三七四号参照）

◇**七月理事会**　七月二日（金）ルーム

出席者　織内、望月、浜野、高遠、山本（健）、小倉、山本（良）、神崎、大森、皆川、黒石、田村（俊）、橋本、浜口、浅田、太田、飯野、小原、浜野（正）、折井、宮下

▽議事・報告

一、東洋大学ヒマラヤ登山隊推薦状交付の件

二、新ルーム購入プロジェクトの件

三、ナンダ・デヴィ初縦走成功報告の件

四、日印合同女子隊アビ・ガミン登頂成功報告の件

五、名誉会員日高信六郎氏逝去報告の件

六、白山現地小集会報告の件

七、越後支部創立三十周年記念集会報告の件

八、集会、海外連絡、図書、自然保護委員会報告の件

九、婦人懇談会報告の件

（詳細は「山」三七六号参照）

◇**九月理事会**　九月三日（金）ルーム

出席者　今西、望月、浜野、高遠、小倉、神崎、大森、皆川、原、大倉、黒石、田村（俊）、橋本、浅田、小原、浜野（正）、宮下

▽議事・報告

一、ナイロン・ロープの件

二、亜細亜大学カラコルム学術登山隊推薦状交付の件

三、ＵＩＡＡ大会派遣者の件

四、ルーム購入の件

五、日印合同女子登山隊帰国報告の件

六、学生部ガルワル・ヒマラヤ登山隊出発報告の件

七、パミール国際キャンプ参加帰国報告の件

八、ナンダ・デヴィ登山隊帰国報告の件

九、集会、海外連絡、指導委員会報告の件

十、婦人懇談会報告の件

（詳細は「山」三七七号参照）

◇**十月理事会**　十月八日（金）ルーム

出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、山本（健）、近藤、山本（良）、神崎、黒石、田村（俊）、橋本、浅田、浜野（正）、折井

▽議事・報告

一、愛知学院大学カラコルム学術遠征隊推薦状交付の件

二、自前ルーム購入の件

三、ＵＩＡＡ総会出席の件

四、集会、遭難対策、自然保護、図書、指導、山研委員会報告の件

（詳細は「山」三七七号参照）

◇**十一月理事会**　十一月五日（金）ルーム

出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、山本（健）、小倉、皆川、黒石、田村（俊）、橋本、浜口、小原、佐藤、浜野（正）、折井、宮下

▽議事・報告

一、ルーム小委員会メンバーの件
二、UIAA総会出席報告の件
三、学生部ドゥナギリ峰登頂成功報告の件
四、山日記編集委員会報告の件
五、青年懇談会報告の件
六、高所登山、集会委員会報告の件
（詳細は「山」三七八号参照）

◇**十二月理事会**　十二月四日（土）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、近藤、小倉、山本（良）、神崎、大森、原、黒石、橋本、浅田、小原、浜野（正）、宮下
▽議事・報告
一、ルーム購入計画小委員会メンバー決定の件
二、図書、集会委員会報告の件
三、山岳編集、学生部、指導委員会の件
四、婦人懇談会報告の件
五、年次晩餐会の件
（詳細は「山」三八〇号参照）

◇**支部長会議**　十二月四日（土）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、笠原（岩手）、柴田（秋田）、伊達（宮城）、後藤（山形）、藤島（越後）、蒲生（信濃代理）、大沢（山梨）、山本（静岡）、松井（岐阜）、中田（富山）、今西（関西）、野口（東九州）
▽議事
一、会務報告の件

◇**一月理事会**　一月十三日（木）ルーム
出席者　織内、望月、浜野、高遠、小倉、神崎、皆川、大倉、黒石、田村（俊）、橋本、太田、小原、浜野（正）、宮下
▽議事・報告
一、昭和五十二年度各委員会予算の件
二、昭和五十年・五十一年度会費未納者の件
三、集会、高所登山委員会報告の件
（詳細は「山」三八〇号参照）

◇**二月理事会**　二月四日（金）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、山本（良）、神崎、大森、原、大倉、黒石、田村（俊）、橋本、浜口、太田、小原、浜野（正）、折井、宮下
▽議事・報告
一、「山岳」発行の件
二、フィルム貸出規定案の件
三、新ルーム購入の件
四、カラコルム学術遠征隊一九七八年推薦状交付の件
五、昭和五十二年度予算方針の件
六、総会日時の件
七、遭難対策、高所登山、集会、図書委員会報告の件
（詳細は「山」三八一号参照）

◇**三月理事会**　三月四日（金）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、近藤、小倉、皆川、原、大倉、黒石、田村（俊）、橋本、浜口、小原、佐藤、浜野（正）、折井、宮下
▽議事・報告
一、昭和五十二年度事業計画（案）の件
二、昭和五十二年度収支予算（案）の件
三、定款一部改正（案）の件

四、新ルームの件
五、スイス・アルプス名画展後援の件
六、青年懇談会報告の件
七、指導、図書、山岳編集、高所登山委員会報告の件
（詳細は「山」三八三号参照）

◇**四月理事会**　四月八日（金）ルーム
出席者　織内、望月、浜野、高遠、山本（健）、小倉、大森、皆川、大倉、黒石、橋本、浅田、太田、小原、浜野（正）、折井、宮下
▽議事・報告
一、総会提出議案の件
二、昭和五十一年度事業報告および財産目録、収支決算の件
三、昭和五十二年度除籍の件
四、本会ルームおよび図書室購入と、そのための資金の一部を借入金とする件
五、定款一部改正、昭和五十二年度事業計画および収支予算（案）、役員候補者の件
六、上高地山岳研究所利用料金改訂の件
七、学生部指導委員会報告の件
八、青年懇談会、婦人懇談会報告の件
（詳細は「山」三八四号参照）

◇**四月評議員会**　四月八日（金）ルーム
出席者　織内、望月、浜野、小原、佐藤、浜野（正）、折井、宮下、藤島、津田、島田、堀田、田口、藤井、松丸
▽議事・報告
一、昭和五十二年度総会提出議案の件
二、昭和五十一年度事業報告、財産目録、収支決算の件
三、昭和五十二年度事業計画（案）、予算（案）の件
四、定款一部改正の件
五、昭和五十二年度役員および評議員候補者推薦の件
六、昭和五十二年度除籍者の件
七、本会ルームおよび図書室購入と、そのための資金の一部を借入金とする件

◇**支部長会議**　四月二十二日（金）ルーム
出席者　今西、織内、望月、浜野、高遠、山川（北海道代理）、笠原（岩手）、柴田（秋田）、村上（山形代理）、藤島（越後）、蒲生（信濃代理）、大沢（山梨）、山本（静岡）、尾上（東海）、松井（岐阜）、今西（関西）
▽議事
一、「山岳」発行遅れの件
二、本会ルーム購入の件
三、ルーム購入資金の件
四、支部の現況報告の件

◇**昭和五十二年度通常総会**　四月二十二日（金）東京都千代田区神田駿河台・全電通労働会館
出席者　今西会長以下一一六名（他委任状一、二五五通）
▽総会次第
一、会長挨拶　今西錦司
二、会務報告　今西錦司
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和五十一年度事業報告　浜野吉生
五、昭和五十一年度収支決算、財産目録報告　山本健一郎
六、監査報告　太田　敬

（右、承認）

七、昭和五十二年度事業計画および収支予算案の件　浜野吉生　山本健一郎

（右、原案どおり承認）

八、定款一部改正（入会金を基本財産繰入れから除外）の件　今西錦司

（右、原案どおり承認）

九、本会のルームおよび図書室購入と、そのための資金の一部を長期借入金とする件

（右、承認）

十、昭和五十二年度役員および評議員選任の件

昭和五十二年度の役員および評議員として次の各氏を選任した。

（理事および評議員の任期は二年間）

△理事▽副会長望月達夫、皆川完一、小倉董子、山本健一郎、高遠宏、黒石恒、田村俊介、橋本清、浅田治男、大森久雄（以上再任）会長西堀栄三郎、副会長折井健一、鈴木郭之、大森薫雄、宮下秀樹倉知敬、中川武、越田和男、牧野内昭武、嵯峨野宏（以上新任）

△監事▽飯野亨（再任）、村山雅美（新任）

△評議員▽浜野正男、橋本誠二、松丸秀夫、丹部節雄（以上再任）大野俊夫、山崎安治、織内信彦、太田敬、渡辺兵力、金坂一郎、山本朋三郎、小谷隆一、松田雄一、水野政博、近藤信行、野口秋人、中村純二、細川沙多子、伊達篤郎、小原晴子（以上新任）

十一、昭和五十二年度除籍の件

十二、新クラブルームの経過報告　望月達夫

十三、新会長挨拶　西堀栄三郎

（詳細は「山」三八三号、三八四号参照）

◇**五月理事会**　五月十六日（月）ルーム

出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、山本、中川、橋本、大森（久）、皆川、鈴木、大森（薫）、黒石、越田、田村、嵯峨野、飯野山崎、金坂、小原

▽議事・報告

一、理事の任務分担の件

ルーム移転・会員担当（望月副会長）、支部担当（折井副会長）、総務担当（宮下、高遠）、財務（山本）、山研運営（小倉）、集会・支部（中川）、遭難対策・ルーム移転（橋本）、会報編集・書評（大森久）、山日記編集（皆川）、海外連絡・自然保護（鈴木）、医療（大森薫）、山岳編集（倉知）、婦人懇談会（黒石）、図書（越田）、高所登山（田村）、学生部指導（牧野内）、指導（嵯峨野）、青年懇談会（浅田）

二、常務理事選任の件

宮下秀樹、高遠宏、山本健一郎、小倉董子、中川武、橋本清、大森久雄の七氏に決定

三、常任評議員の件

浜野正男、山崎安治、金坂一郎、松丸秀夫、近藤信行、小原晴子の六氏に総会後の評議員会で決定

四、ルーム購入資金募金の件

五、集会、自然保護、山研、指導、高所登山、遭難対策、図書委員会報告の件

六、青年懇談会、山日記編集委員会報告の件

（詳細は「山」三八五号参照）

◇**六月理事会**　六月十三日（月）ルーム

出席者　西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森

（久）、皆川、鈴木、倉知、黒石、越田、田村、牧野内、嵯峨野、浅田、浜野、山崎、金坂、小原

▽議事・報告

一、事務職員交代の件

二、ルーム建設資金募金の件

募金委員会を設置（委員長・西堀会長）

三、明治大学ラムジュン・ヒマール登山隊推薦状交付の件

四、年次晩餐会会場の件

五、高所登山、医療、集会、自然保護、海外連絡、指導、山研、図書学生部指導、書評委員会報告の件

六、山岳編集委員会報告の件

七、青年懇談会、婦人懇談会報告の件

八、委員会委員の名簿は会報に発表

（詳細は「山」三八六号参照）

◇小集会

▽第三三一回　昭和五十一年一月十五日～十八日（木～日）八方尾根中大山荘

スキー親睦会

▽第三三二回　昭和五十一年二月二十日（金）伊吹山

支部懇談会

▽第三三三回　昭和五十一年三月二十日（土）ルーム

新入会員オリエンテーション

▽第三三四回　昭和五十一年六月二十一日（月）サクラエックスレイ会議室

北極単独行報告　植村直己氏

▽第三三五回　昭和五十一年七月二十日（火）ルーム

ダウラギリⅣ峰カモシカ同人報告　高橋和之氏

▽第三三六回　昭和五十一年九月二日（木）東京・朝日新聞社講堂

ナンダ・デヴィ初縦走報告

渡辺兵力・鹿野勝彦・梶正彦・長谷川良典・加藤保男・伊丹紹泰の各氏

▽第三三七回　昭和五十一年九月九日（木）ルーム

スケッチ教室①　講師　山里寿男氏

▽第三三八回　昭和五十一年九月十六日（木）ルーム

スケッチ教室②　講師　山里寿男氏

▽第三三九回　昭和五十一年九月二十日（月）ルーム

アビ・ガミン登頂報告　須田紀子氏

▽第三四〇回　昭和五十一年九月二十一日～二十三日（水～木）

八ケ岳山麓

スケッチ教室③　講師　山里寿男氏

▽第三四一回　昭和五十一年十月二日～三日（土～日）

谷川岳集中登山

▽第三四二回　昭和五十一年十月五日（火）ルーム

各国山岳会情報　講師　吉沢一郎・鈴木郭之・松沢憲夫、田村俊介・近藤等の各氏。

（詳細は「山」三八〇号参照）

▽第三四三回　昭和五十一年十月八日（金）

サクラエックスレイ会議室

ジャヌー登頂報告　小西政継氏

▽第三四四回　昭和五十一年十月二十日（水）東京・湯島会館

会員会議　講師　佐藤久一朗・村井米子・山崎安治・近藤等・安川茂雄・近藤信行・広島三朗・雨宮節・加藤保男の各氏

▽第三四五回昭和五十一年十月二十五日（月）ルーム
神奈川岳連ローツェ報告
▽第三四六回　昭和五十一年十一月十日（水）ルーム
芝浦工大バルトロ・カンリ登頂報告　秋山知也氏
（詳細は「山」三八〇号参照）
▽第三四七回　昭和五十一年十一月二十一日～二十三日（日～火）富士山五合目御庭小屋
登山技術講習会（指導委員会と共催）
▽第三四八回　昭和五十一年十一月三十日（火）ルーム
バミール国際キャンプ報告　神崎忠男氏
▽第三四九回　昭和五十一年十二月七日（火）東京・全電通労働会館
映画会「探検の先躁者たち」
「エベレスト一九二四年」　講師　三田幸夫氏
「天山山脈のドゥルージバ峰初登頂記録」　講師　田村俊介氏
「積雪期北アルプス初縦走・大正十三年」　講師　山崎安治氏
「シルクロードの旅」
（詳細は「山」三七九号参照）
▽第三五〇回　昭和五十一年十二月十二日（日）東京・知行院
もちつき大会（青年懇談会と共催）
▽第三五一回　昭和五十一年十二月十七日（金）ルーム
忘年会（婦人懇談会と共催）
▽第三五二回　昭和五十二年一月十四日～十七日（金～月）
八方尾根中大山荘
スキー親睦会
▽第三五三回　昭和五十二年三月二十六日（土）ルーム
新入会員オリエンテーション
▽第三五四回　昭和五十二年四月二十三日～二十四日（土～日）
奥多摩御岳山　親睦登山
（詳細は「山」三八五号参照）
▽第三五五回　昭和五十二年五月二十日（金）ルーム
ドゥナギリ北稜報告　牧野内昭武氏
▽第三五六回　昭和五十二年六月一日（水）
山菜勉強会　講師　片岡　博氏
（詳細は「山」三八五号参照）
▽第三五七回　昭和五十二年六月十一日～十二日（土～日）
越後浅草岳
山菜山行
◇**主なる行事および集会**
▽小林義正さんを偲ぶ会（図書委員会主催）
昭和五十一年二月二十日（金）ルーム
「山」三七〇号参照
▽高所登山研究会（高所登山委員会主催）
昭和五十一年三月十三日～十五日　立山・文部省登山研修所
▽第四回山岳史懇談会（図書委員会主催）
昭和五十一年三月十七日（水）ルーム
「旧制甲南高校山岳部を語る」
講師　香月慶太、田口二郎、喜多豊治、伊藤文二、伊藤房子の各氏
「山」三七二号参照
▽第七回山岳図書を語る夕べ（図書委員会主催）
昭和五十一年三月三十日（火）ルーム
谷文晁「名山図譜」をめぐって　講師　関根吉郎氏
「山」三七二号参照
▽山形支部結成二十五周年の集い（山形支部主催）

昭和五十一年四月三日（土）　羽黒山
「山」三七一号参照
▽第十四回木暮理太郎翁碑前懇親会
昭和五十一年五月十五日（土）金山平
▽第十七回登山技術講習会（指導委員会主催）昭和五十一年五月二十二日～二十四日　穂高岳沢
▽第三十回ウェストン祭
昭和五十一年六月六日（日）上高地
「山」三七四号参照
▽現地小集会（集会委員会共催、岐阜支部、石川支部主催）
昭和五十一年六月十二～日十五日　白山
「山」三七六号参照
▽越後支部創立三十周年記念懇親会・山行（越後支部主催）
昭和五十一年六月十九日～二十日　湯沢温泉、苗場山、
「山」三七五号参照
▽自然保護委員会上高地集会
昭和五十一年七月十日～十一日　上高地
「山」三七五号参照
▽名誉会員・日高信六郎氏を追悼する会
昭和五十一年七月二十二日（金）国際文化会館
「山」三七五号参照
▽第五回穂高涸沢テント集会（青年懇談会主催）
昭和五十一年八月八日～十五日　穂高涸沢
▽第九回図書交換会（図書委員会主催）
昭和五十一年十月二十三日（土）ルーム
「山」三八一号参照
▽自然保護委員会第二回上高地集会
昭和五十一年十月三十日～三十一日　上高地　「山」三七八号参照
▽第十九回紅葉会（静岡支部主催）
昭和五十一年十一月六日～七日　富士山麓大渕丸尾自然公園
「山」三八〇号参照
▽東海支部講演会
昭和五十一年十一月十九日（金）名古屋愛知県文化会館「ヒマラヤ登山隊三つの記録」
▽第十八回登山技術講習会（指導委員会主催、集会委員会共催）
昭和五十一年十一月二十一日～二十三日
富士山五合目御庭小屋付近
▽昭和五十一年次晩餐会
昭和五十一年十二月四日（土）京王プラザホテル　出席者二六七名。
「山」三七九号参照
▽この一本展（辻村伊助氏遺稿他）
昭和五十一年十二月四日（土）京王プラザホテル
「山」三七九、三八〇、三八一、三八二号参照
▽ヒマラヤを語る会（高所登山委員会主催、集会委員会共催）
昭和五十二年二月二十六日　新宿住友ビル
▽第一回山岳絵画展（図書委員会主催）
昭和五十二年二月二十八日～三月五日　東京・日本橋丸善画廊
「山」三八二、三八三号参照
▽野沢温泉スキー親睦会（集会委員会主催）
昭和五十二年三月十一日～十四日
▽第八回山岳図書を語る夕べ（図書委員会主催）
昭和五十二年三月十五日（火）ルーム

講師　岡　茂雄氏

▽第五回山岳史懇談会（図書委員会主催）

昭和五十二年三月十七日（木）ルーム

学習院山岳部の話　講師　加藤泰安氏「山」三八六号参照

▽マナスル登頂二十周年記念パーティー

昭和五十二年五月九日（月）グランド・パレスホテル

▽第十五回木暮理太郎翁碑前懇親会

昭和五十二年五月十四日　金山平

「山」三八五号参照

▽第十九回登山技術講習会（指導委員会主催）

昭和五十二年五月二十一日〜二十三日

穂高岳（タタミ岩尾根他）

▽名誉会員・藤島敏男さんを偲ぶ会

昭和五十二年五月二十五日（水）国際文化会館

「山」三八五号参照

▽第三十一回ウェストン祭

昭和五十二年六月五日（日）上高地

▽大台ケ原視察山行（自然保護委員会主催）

昭和五十二年六月十日〜十二日　大台ケ原

▽雪崩研究会（遭難対策委員会主催）

昭和五十一年八月三十一日（火）、九月七日（金）、十月二十一日（木）十一月十一日（木）、十二月十五日（水）、十二月二十四日（金）、昭和五十一年一月二日（水）、四月十九日（火）ルーム

◇海外登山界との交流

▽本年度は二十カ国六十団体と情報および機関誌の交換をおこなった。

▽ＵＩＡＡ（国際アルピニスト連合）一九七六年度総会に佐藤テル評議員が出席（昭和五十一年十月四日〜九日、スペイン、バルセロナ）。

▽テンジン・ノルゲイ氏歓迎会

昭和五十一年二月十二日（木）東京・湯島会館

▽インド登山財団とのジョイントで派遣したナンダ・デヴィ縦走隊は昭和五十一年六月東・西峰間の初縦走に成功（日印ナンダ・デヴィ登山隊・総隊長渡辺兵力）。「山」三七三、三七四号及び本書一頁参照。同じくインド登山財団とのジョイントであるカメット峰登山隊（女子隊）は昭和五十一年六月十八日アビ・ガミン峰登頂に成功（日印女子ヒマラヤ登山隊・日本側隊長須田紀子）。「山」三七三、三七六号参照。

▽パミール国際キャンプに参加したパミール登山隊（隊長原真）は、昭和五十一年八月七日、八日にコルジェネフスカヤ峰とコミュニズム峰の登頂に成功。「山」三七五、三七六号参照

▽学生部ガルワル・ヒマラヤ登山隊（隊長牧野与昭武）が昭和五十一年十月二十一日と二十四日ドゥナギリ峰の登頂に成功。「山」三七九号及び本書一五頁参照

▽インド登山財団サリン氏歓迎会

昭和五十二年五月十四日　ルーム

一九七六年度役員

会　　長　今西錦司

副　会　長　織内信彦、望月達夫

常務理事　浜野吉生、高遠宏、山本健一郎、近藤信行、小倉董子、山本良三、神崎忠男、大森久雄

理　　事　皆川完一、原真、大倉昌身、黒石恒、田村爽介、橋本清、田村宏明、浜口欣一、浅田治男

監　　事　太田　敬、飯野　亨

常任評議員　小原勝郎、佐藤テル、浜野正男、折井健一、宮下秀樹

評　議　員　藤島玄、津田周二、島田　巽、堀田弥一、田口一郎、今井田研二郎、今西寿雄、橋本誠二、中丑清兵衛、村山雅美、藤井運平、松丸秀夫、大塚博美、山口節子、丹部節雄

支　部　長　大塚武（北海道）、笠原潤一郎（岩手）、柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）

藤島玄（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、樋口敬二（東海）、松井辰弥（岐阜）中田清兵衛（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

一九七七年度役員

会　長　西堀栄三郎
副会長　望月達夫、折井健一
常務理事　宮下秀樹、高遠　宏、山本健一郎、小倉董子、中川　武、橋本　清、大森久雄
理　事　皆川完一、鈴木郭之、大森薫雄、倉知　敬、黒石　恒、越田和男、田村俊介、牧野内昭武、嵯峨野宏、浅田治男
監　事　村山雅美、飯野　亨
常任評議員　浜野正男、山崎安治、金坂一郎、松丸秀夫、近藤信行、小原晴子
評議員　大野俊夫、織内信彦、太田　敬、橋本誠二、渡辺兵力、山本朋三郎、小谷隆一、松田雄一、水野政博、野口秋人、中村純二、細川沙多子、伊達篤郎、丹部節雄
支部長　大塚　武（北海道）、笠原潤二郎（岩手）、柴田均二（秋田）後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）藤島玄（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、尾上　昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、中田清兵衛（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXI·LXXII 1976·1977 **Issued in December 1977**

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

Nanda Devi Traverse 1976 ····· Katsuhiko Kano ····· 1 (1)
Dunagiri North Ridge 1976 ····· Akitake Makinouchi ····· 4 (15)
Sherpi Kangri 1976 ····· Kazumasa Hirai ····· 5 (29)
Jannu North Face 1976 ····· Masatsugu Konishi ····· 6 (40)
Purian Sar 1975 ····· Yoshiro Uchida ····· 7 (100)
Apsarasas 1976 ····· Toshio Ishihara ····· 9 (107)
Singhi Kangri 1976 ····· Tetsuo Nakatsu ····· 10 (114)
Changabang Southwest Ridge 1976 ····· Naoki Toda ····· 12 (124)
Malubiting Central 1975 ····· Toshihiko Sato ····· 13 (137)
Skyang Kangri 1976 ····· M. Nieda ····· 14 (142)
Abi Gamin 1976 ····· Michiko Fushimi ····· 16 (150)

In Japanese

Grading of Japanese Rocks by RCC II ····· Yoshinobu Suda ····· (50)
Alpine Polution in Ohdai-ga-Hara ····· Somei Tamura ····· (61)
Talk on History of JAC—30 years after the War ····· (74)
Baltoro Kangri 1976 ····· Sampei Takahara ····· (120)
Under the Sun of the Andes ····· Ikuo Kakimoto ····· (129)
In Memoriam ····· (157)
Book Reviews ····· (189)
Club Notes : 1976 & First Half of 1977 ····· (204)

Editor : Nobuyuki Kondo

Editorial Staffs : Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanesaka,
Hiroshi Nakajima, Ryozo Yamamoto, Jusetsu Setsuda,
Chizuko Ikeda, Kei Kurachi

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sakura Bldg., 1-6-1 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo.

Office Bearers and Committee

1976 (April 1976–March 1977)

President : Kinji Imanishi
Vice-Presidents : Nobuhiko Oriuchi, Tatsuo Mochizuki
Honorary Secretary : Yoshio Hamano
Honorary Editor : Nobuyuki Kondo
Honorary Librarian : Ryozo Yamamoto
Honorary Treasurer : Ken'ichiro Yamamato
Auditors : Takashi Ohta, Toru Iino

Committee

Yoshio Hamano
Nobuyuki Kondo
Hisao Omori
Tsune Kuroishi
Tadao Kanzaki
Kin'ichi Hamaguchi
Hiroshi Takato
Nobuko Ogura
Kan'ichi Minagawa
Masami Ohkura
Kiyoshi Hashimoto
Haruo Asada
Ken'ichiro Yamamoto
Ryozo Yamamoto
Makoto Hara
Shunsuke Tamura
Hiroaki Tamura

Council

Teru Satoh
Ken'ichi Orii
Hideki Miyashita
Yaichi Hotta
Unpei Fujii
Katsuro Obara
Gen Fujishima
Tatsumi Shimada
Jiro Taguchi
Seibei Nakata
Hiromi Ohtsuka
Masao Hamano
Shuji Tsuda
Seiji Hashimoto
Kenjiro Imaida
Toshio Imanishi
Masami Murayama
Hideo Matsumaru
Setsuko Yamaguchi
Sadao Tanbe

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Takeshi Ohtsuka
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Yajuro Itoh
Shinano : Norinaga Okuhara
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Seibei Nakata
Gifu : Tatsuya Matsui
Kwansai : Toshio Imanishi
San'in : Osamu Oda
Kumamoto : Koichi Mitani
Iwate : Junjiro Kasahara
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Tokai : Keiji Higuchi
Ishikawa : Yujiro Kobayashi
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

Office Bearers and Committee

1977 (April 1977–March 1978)

President : Eizaburo Nishibori
Vice-Presidents : Tatsuo Mochizuki, Ken'ichi Orii
Honorary Secretary : Hideki Miyashita
Honorary Editor : Nobuyuki Kondo
Honorary Librarian : Yasuji Yamazaki
Honorary Treasurer : Ken'ichiro Yamamoto
Auditor : Masami Murayama, Toru Iino

Committee

Hideki Miyashita
Nobuko Ogura
Hisao Omori
Nobuo Omori
Kazuo Koshida
Hiroshi Sagano
Hiroshi Takato
Takeshi Nakagawa
Kan'ichi Minagawa
Kei Kurachi
Shunsuke Tamura
Haruo Asada
Ken'ichiro Yamamoto
Kiyoshi Hashimoto
Hiroyuki Suzuki
Tsune Kuroishi
Akitake Makinouchi

Council

Masao Hamano
Hideo Matsumaru
Toshio Ohno
Seiji Hashimoto
Ryuichi Kotani
Akito Noguchi
Tokuro Date
Yasuji Yamazaki
Nobuyuki Kondo
Nobuhiko Oriuchi
Hyoriki Watanabe
Yuichi Matsuda
Junji Nakamura
Ichiro Kanesaka
Haruko Obara
Takashi Ohta
Tomosaburo Yamamoto
Masahiro Mizuno
Satako Hosokawa

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Takeshi Ohtsuka
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Yajuro Itoh
Shinano : Norinaga Okuhara
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Seibei Nakata
Gifu : Tatsuya Matsui
Kwansai : Toshio Imanishi
San'in : Osamu Oda
Kumamoto : Koichi Mitani
Iwate : Junjiro Kasahara
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Tokai : Noboru Onoe
Ishikawa : Yujiro Kobayashi
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

Nanda Devi Traverse 1976

Katsuhiko Kano

Nanda Devi is very well known to mountaineers throughout the world, not only because it is the main mountain of the Garhwal Himalaya in India, but also for the beauty of its twin peaks, Nanda Devi West (7,816 m) and East (7,434 m). We, a volunteers group in the Japanese Alpine Club (JAC) approached the Indian Mountaineering Foundation (IMF) for proposing to organize a joint-expedition aiming at the traverse of the twin peaks and received favourable response from IMF in September 1974. Thus, in the Summer of 1976, the traverse was attempted by the IMF–JAC joint expedition.

We had, however, several problems to be solved in order to carry out the expedition. Not a single traverse at this altitude had so far been accomplished. Various complicated factors which usually are inevitable in case of joint expeditions had also to be considered in preparing the expedition. Well-known difficult approach to the Nanda Devi Sanctuary was another headache.

The expedition was composed of 7 members of IMF and 14 members of JAC. I was appointed as the leader and Colonel Jagjit Singh as the deputy leader. After months of intensive preparations, the Japanese members gathered in New Delhi on April 12, 1976 and there joined with the Indian members. On April 25, the party left Joshimath for the tiny village of Lata, the last outpost on the route, and started to climb towards Daranshi Pass (4,250 m). Crossing the snow-covered Daranshi Pass was sure a tough-one. The highlight of this tough caravan was the two-day march from Ramani to Patalcan—the entrance to the Nanda Devi Sanctuary.

On May 12, the Base Camp was established on moraine at the height of 4,900 meters at the foot of Nanda Devi. Although a part of our baggages could be carried up to the sanctuary by helicopter lifts, we had to carry most of our baggages on our shoulders through notorious Rishi Gorge. After the establishment of BC it was decided to send four Japanese members and four Sherpas back to look after the load carried by porters. This left only a limited number of members, high-altitude porters and supplies at BC, so we had to concentrate our efforts on climbing of Nanda Devi East. Climb towards Longstaff's Col (5,900 m) was along a steep snow-covered gully. The pitch 50 meter below the Col was particularly tough, involving climbing on 60° of hard ice slope.

On reaching the Col, Camp E 1 was established. From there, we climbed along a steep slope to the right of a spired pinnacle, and after the pinnacle across a sharp ridge, where Camp E 2 was established at 6,350 meters.

On May 20, despite of lack of equipments caused by delays of load carrying the climb to Nanda Devi West was started. It was easy climbing up to Camp W 1 (5,700 m). From there, the route was made through snow-covered face toward the south ridge from the West Peak. Camp W 2 was established on the south ridge at 6,200 meters. Above Camp W 2, the climbing route was made fairly smooth, but higher camps could not be established due to the shortage of equipments and food.

In the meantime, on May 29, Prem Chand and Shigehiro established Camp E 3 (6,900 m). On June 3, Hasegawa and Takami reached the summit of East Peak. If it were a peak-climbing-expedition, this would mean the success of the expedition. However, in our case, it was only the starting point to the traverse and we had to make further efforts for finding the route to the next Camp. Hasegawa and Takami explored the route to the West Peak on the traverse ridge and found that we would be able to go on the ridge without fixing ropes. On this day, the last part of our baggages reached at BC. However, it was not possible to make immediate lift of supplies to the higher camps, as the members and experienced sherpas, who had looked after load carrying, were not in the best shape because of continuing hard work.

By that time, the weather changed for the worse, with prevailing mist and fog in the morning, and relatively heavy and wet snow. Comparing the weather of two peaks, the weather was worse in the East Peak than in the West Peak although the distance was only three kilometers as the crow flies.

On June 9, Prem Chand, Shigehiro and Kiryu reached the summit of the East Peak with a high altitude porter and established Camp E 4. On the same day, the route was opened in the West through a big loose rock wall above Camp W 3. Now the party on the East side was ready to start the traverse. However, the delay on the West side continued and might cause unwilling stop for further proceedings of our plan.

On June 13, however, the weather above 7,000 meters was fine, with thick cloud lying below that level. We decided to start the traverse. Hasegawa and Takami left Camp E 4 at 5 : 10 a.m. and started the steep descent from the summit. At 6 : 40 a.m. they went into the traverse ridge—an extremely sharp .ridge with a drop of 2,500 meters on both side. Snow on the ridge being

very firm, the party followed the route without much difficulty, until they reached the Pinnacle, which proved to be the most difficult part of the traverse, taking them almost five hours.

The supporting party in the West had also a tough time. On June 12, four members led by Kato tried to get to the traverse ridge from Camp W 4, but failed due to the danger of avalanche. On June 13, Kato, Teramoto, Kobayashi and Nawang Phinju were battling their way, traversing through a steep snow-covered slope to the ridge. They finally reached the snow field on the traverse ridge at 3 : 30 p.m. As they were pitching their tent on the snow field (Camp W 5), they found the traverse party on the top of the Pinnacle. Kato and Teramoto returned to Camp W 4 at 10 : 10 p.m.

On June 14, there was a storm and all parties were immobilized.

On June 15, at 6 : 40 a.m., Hasegawa and Takami left Camp W 5 and climbed towards the summit of the West Peak along the ridge. After confirming that they had left, Kato and Teramoto left Camp W 4 for the summit through the south ridge.

The route from Camp W 5 to the top of the West Peak was through a big rock wall with powdered snow and was extremely difficult to follow. At about noon, the weather turned harsh and Kato and Teramoto worried about possibility whether they could receive the traverse party at the summit, in particular, they felt that the traverse party might not be able to find the way down through the big rock wall beneath the summit if the weather would further deteriorate. Moreover, nobody can wait for a long time at the summit suffered by the bad weather and altitude.

But to our great joy, God finally helped us. When Hasegawa and Takami reached the summit at 3 : 00 p.m. after completing the traverse from the East Peak, they just met Kato and Teramoto in the mist—they reached the summit only 15 minutes earlier. (See Chart 1 & 2, Fig. 1~5)

Dunagiri North Ridge 1976

Akitake Makinouchi

Dunagiri, which is located just north of Nanda Devi, was first climbed through S.W. ridge by a Swiss Party in 1939, and it was again climbed through S. face by two British climbers in 1975. It's northern side, however, was left untrodden.

Our team was composed of 8 members : Norio Teramae, Minoru Umemoto, Naohiko Osugi, Noboru Takenaka, Takio Masuda, Takashi Sakai, Dr. Shoji Seki, and I as the leader. We set up Base Camp at 4,000 m on the east side of the Gannakui Glacier on September 21, after a four-days march-in from Suraithota.

Our first and most important problem to be solved was to find the way to the north ridge. At first we tried to go up through icefall, a short-cut route to a 6,100 m peak on the north ridge, but after a two days reconnaissance, we found we were running too much risk because of falling ice blocks, therefore, we returned to Base Camp.

After then, we selected another route which led to lower part of the north ridge through a big gully. The entire route was more difficult and longer but less dangerous than the ice fall route.

We set up Camp 1 (4,500 m) halfway in the gully, Camp 2 (5,000 m) in snow plateau, Camp 3 (5,600 m) on snow ridge on the north-east face of 6,100 m peak, Camp 4 (6,060 m) just below 6,100 m peak, and Camp 5 (6,700 m) above steep ridge of ice and rock, a crux of the route.

It was really tough work of 10 days to fix ropes on the steep rock faces and sharp gendarmes. We had to fix ropes about 3,000 m in all and 30 m of rope ladders. And after all we could pitch Camp 5 on October 20.

On October 21, Takenaka, Osugi and Sakai started from Camp 5 at 8 : 00 a.m. and reached the summit at 12 : 00 a.m. after climbing easy snow slope. Again on October 24, Teramae, Umemoto and Masuda made second climb to the summit. (See Chart 3～5, Fig. 6 (a)～8)

Sherpi Kangri 1976

Prof. Kazumasa Hirai

In 1974, the Alpine Club of Kobe University sent an expedition party consisting of 8 members to Sherpi Kangri (7,380 m), which was the first expedition aimed at approaching her. She had been quite unknown hitherto. They climbed the Sherpi Gang glacier up to the pass named Sherpi La (5,700 m) and investigated the climbing route. They tried to climb the east ridge, and the height of 6,400 m was the highest reached point.

In 1976 the Club decided to send another expedition to Sherpi Kangri again. The expedition consisted of: Prof. K. Hirai (leader), T. Tanaka, M. Tsurutani, N. Okamoto (medical doctor), M. Nakamura, T. Inoue, S. Ogata, Y. Kimoto, C. Itani, K. Hiroishi, and Liaison Capt. Asad Ullah Jan Mir.

We started from Khapalu with 138 low-porters and 6 high-porters on June 16 and arrived at the foot of the first ice fall of Sherpi Gang glacier on June 24. The transportation of the luggages up to B.C. pitched at 4,850 m on the upper side moraine of the third ice fall was finished on July 6.

Two possible routes to the summit can be considered: one is the east and the other west ridge. We selected the latter as suggested by the reconnaissance in 1974. The Advanced B.C. was set up at 5,250 m near by the foot of the 4th ice fall. Climbing the Vyandak glacier, we pitched Camp 1 at 5,850 m on July 12, which was just below the west ridge. With great efforts we climbed the ice wall of locally 90 degree up to the west ridge. It took about a week to fix the rope and to make the route safe. Camp 2 was pitched at 6,350 m on July 23. Then, we had to cross over Eagle Head, 6,550 m, one of the hardest parts of the route. The most part of the ridge was sharp and steep, icy and rocky. It was August 9 that Camp 3 was pitched at 6,800 m.

At 4.15 a.m. of August 10, Inoue and Ogata departed from Camp 3. As the rock wall above Camp 3 could not be climbed directly, they traversed dangerous ice slope on the right side of the rock. The upper part of the west ridge was armed by the saw-toothed rocky ridge. But they luckily found the snow ridge just on the east side of the ridge for they were free from climbing the rock. It was 9.15 a.m. when they stood on the top of Sherpi Kangri. No better weather could be expected for attacking. All the mountains of Karakorum could be seen. They returned back to Camp 3 at 1.00 p.m. where two

supporting members, Nakamura and Itani, waited for them.

Camp 2 and 3 were withdrawn on August 11. All members came back to B.C. on August 14. The return journey from B.C. was begun on August 17 and arrived at Khapalu on August 22. (See Chart 6 & 7, Fig. 9~12)

Jannu North Face 1976

Masatsugu Konishi

We, Sangaku Doshikai Mountaineering Club, made first ascent of the North Face of Jannu in pre-monsoon season in 1976. Thirteen members and three Sherpas stood on the summit. The New Zealand expedition (post '75) route was almost followed. We built B.C. (4,500 m) on Jannu Glacier on March 15. After climbing the right side rock of the ice-fall, C 1 (5,050 m) was set on the plateau on 21 and C 2 (5,500 m) on the névé on 26. New Zealander's foods were found there. Above C 2, taking round above the ice-fall, route was developed to the lower rock section of the north face. We divided the party into four (consisted of three or four) and route making, load lifting and rest were done in turn by the party unit.

The rotation functioned almost perfectly on the hard wall to the final stage. There was a hanging glacier under the big ice-wall which runs diagonically on the center of the north face. A party found white ropes remained just under the glacier on the ridge. Then the overhung section, which was the most difficult rock walls of 500 m high above 200 m of rocks, appeared (N.Z. team called it "Wall of Shadows"). It took us a week and 1,500 m of fixing rope was used. Finally wire ladder was set and many steps were cut on the ice face. C 3 (6,200 m) was set 100 m above the C 3 of N.Z. team, by cutting ice terrace on April 10. C 4 was made 300 m above C 3 on the hanging glacier on April 18, after climbing the ice-wall and crossing the avalanche paths. C 5 (7,150 m) was set on April 25 on the big ice-wall. Three more days were needed to reach the east ridge. C 6 (7,400 m) was made just under the summit ridge and just short of the junction with S.W. ridge on May 9.

On 11 Nobuyuki Ogawa, Shomi Suzuki, Naoe Sakashita and Kazuyoshi Konno started from C 6 at 8 : 00. Konno felt ill on the way and returned to

C 6 but the other three reached the summit at 15 : 30. On 12 Konno climbed at the summit by solo and Masaru Samba, Sherpa Pemba Tsering, Phuri and I climbed from C 5. On 13 Haruichi Kawamura, Toshio Akiyama and Haruyoshi Kawakami stood on the summit from C 5 and on 14 Toshio Jofu by solo from C 6, and Ryoichi Fukada, Kazushi Katahiro, Toshitaka Sakano, Sherpa Gyalzen from C 5. On 15 although the remaining two climbers and a Sherpa prepared for the sixth summit bid at C 5, the bad weather prevented the last attempt.

(See Chart 8, Fig. 13~15)

Purian Sar (6,293 m), 1975

Kyoto Karakorum Club

Purian Sar is locally called "A fairyland with an angel". The peak has been tried twice, once by Kyoto University party from Japan in 1956 and again by a party from Poland in 1970.

We arrived at the Base Camp in Badswat on July 22, 1975. From July 23 we started reconnaissance of Badswat Glacier and another glacier called the No. 2 Glacier. After then we decided to climb through Badswat Glacier. Nineteen years ago, the Kyoto University party traversed the forest of Badswat from B.C. and got into the end of No. 2. Glacier. But it seemed that the geographical features had changed since then, and we had to go down once to the glacier from B.C, to find a new route to C 1. We spent much time in finding a good route since it was a long way to go to C1 from B.C. We had to place a temporary camp as relay point at a small flatted spot in the bush located at 4,020 m high. It took us two days to lift up our goods to C 1. We did not use any high-altitude porters. To reach C 1, we chose the route crossing a branch ridge of the fake Mt. Badswat (It turned out to be a fake afterwards). We started B.C. each morning as early as possible, for we had to pass through three dales which had falling rocks. There stood craggy cliff and a snow wall right below C 1 (4,700 m), where we fixed a rope of 150 m long and set up C 1 on July 27.

We tried to reach Camp 2 by traversing under the projecting glacier coming down from the fake Badswat. But since the glacier were moving and there was a danger of avalanche in the afternoon, we set up a temporary camp near the

glacier and carried up the goods several times in the morning.

We were very uneasy because we were unable to look over the peak from B.C., nor from C 1, but we thought that we would be able to find a route to the summit if we could reach on the plateau (snowfield). At last we found ourselves on the big plateau on the thirteenth day after setting up B.C. We could see the full picture of Purian Sar for the first time from there. It looked like an eagle or a hawk spreading his wings. We had never thought of the plateau being this large. It was a massive snowfield like the Snow-Lake.

On August 5 we established C 2 (5,400 m) in the midst of this great snowfield. From there we could see the untrodden Kos Sar and a nameless peak (6,628 m) to the north and Kho-i-Chiantar. At first we thought we could attack the peak from C 2. But after reconnaissance we decided to set up C 3. Next day all of our seven members worked for setting up C 3. There were 900 meters still to be climbed from C 2 to the summit. Crossing the great snowfield in about three hours, we reached the north-west ridge. We fixed a rope of 80 meters long on the snow wall under a rock and we set up C 3 (5,600 m) beside this rock. Four members, Furuichi, Hayashihara, Inoue and Itoh, remained there as the first attacking members.

On August 7 the weather was fine as expected. They left C 3 at 5 : 20 a.m. and trudged along the north-west ridge. Since there was a cornice on the left hand, they took the right side of the ridge. There was a group of rocks above the col, but they went along the ridge. Then they climbed the 50 meter snow wall, keeping clear of the crevasse. Finally they reached the summit of Purian Sar at 11 : 00 a.m. The summit was enough for three or four persons to stand on. To the north, Kampire Dior and Batura ranges could be seen. But Rakaposhi to the east was completely covered with thick clouds.

On August 8 the second attacking party, Uchida, Takahashi and Nakajima, succeeded in climbing the summit in fine weather, too. Thus all of us were able to stand on the summit. Our members were: (Leader) Sinichi Hotta, (Deputy leader) Yoshihiro Uchida, (Doctor) Hirokazu Takahashi, (Members) Tsuyoshi Furuichi, Hiroshi Inoue, Ryuji Hayashibara, Yasutoku Itoh and Teruhiko Nakajima. (See Chart 12 & 13, Fig. 17 & 18)

Apsarasas 1976

Toshio Ishihara

We, Karakorum Expedition of Osaka University Mountaineering Club 1976, made the first ascent of Apsarasas (7,245 m), a virgin peak rising at the north of Siachen Glacier in eastern Karakorum range.

Our party was composed of following members : Leader; Hideo Misawa, deputy leader; Toshio Ishihara, members; Kanji Kurihara, Yoshio Inagaki, Katsuhisa Yabuta, Tetsuro Miki (Doctor), Tadamasa Miyamoto, Shinzo Yoshida, and liaison officer; Captain Mobashir Ahmad.

On May 21, we left Kaphalu with 92 porters and a cook. We safely arrived at Naram after 9 days march. Then, 8 of us and 20 selected porters started to carry up our loads to Bilafond La (5,550 m). It took us next 12 days to finish this work. Our liaison officer went back from Alibransa to Goma, and stayed there waiting for our success. As we carried about 20 kg loads each during our long approach, acclimatization seemed to have been easily achieved, but at the same time this might be one of the reasons for our fatigue which might prevent us to continue our activities at the last stage of our expedition.

On June 26, we finally built the Base Camp (5,200 m) on the side-moraine near the junction of Teram Shehr Glacier and Apsarasas Glacier, on July 2 all loads were gathered at B.C.

We began to make a route to Apsarasas Glacier and on July 3 Camp 1 (5,500 m) was set up at the Inner Apsarasas Glacier. From there, we decided to climb the steep spur on a west flank of the South Ridge. We named it the West Spur.

On July 9, Camp 1 was removed to just below the col of the West Spur. Fixed ropes were set on narrow snow ridge and steep ice-wall which was under the big hanging glacier in the middle of the West Spur. On July 20, Camp 2 (6,200 m) was built in the large crevasse buried with snow, just over the hanging glacier. We climbed snow face toward the junction pinnacle of the West Spur and the South Ridge. We used almost all of our ropes between Camp 1 and Camp 3 (we fixed about 1,200 meters of ropes). On July 26 we built Camp 3 (6,700m) under the rock peak junction, but the weather turned worse afterwards.

Nevertheless, Ishihara and Yoshida reached the South Peak (7,117 m) from

Camp 3 under the bad weather condition on July 28.

On August 4, after 2 times of our unsuccessful attempt in the blizzard the final camp (7,000 m) was built at last between the Main Peak and the South Peak (we traversed the South Peak eastward). Next 2 days, heavy wind and snow disturbed our attack to the Main Peak. On August 6, because of lack of foods, we left the final camp to return to camp 3 in the strong storm. When we tried traversing the South Peak, suddenly the blizzard stopped. Therefore, we changed our mind and got back to the final camp again.

Next day (7th) Inagaki, Yabuta, Miyamoto climbed the Main Peak after easy climbing for 2.5 hrs in the fine weather. Luckily enough, this fine weather continued until our return journey to Alibransa. When we arrived there, we were very tired because the climbing took us more than two and half months.

(See Chart 14 & 15, Fig. 19 & 20)

Singhi Kangri 1976

Tetsuo Nakatsu, M.S. and Haruo Sato, M.D.

Abstract

Tohoku University Karakorum Expedition climbed Singhi Kangri, (7,702 m) a beautiful virgin peak in the east Karakorum. The first ascent was completed by S. Takahashi, M. Katayama and J. Imai on August 8, 1976, and the second by S. Tezuka, K. Ohira, M. Shiobara and N. Furuya on the next day.

Members

Professor Haruo Sato, M.D., Leader, Tetsuo Nakatsu, M.S., Climbing Leader, Yasuo Akiyama, M.D., Shohei Takahashi, Shigehisa Tezuka, Junichi Imai, Masafumi Katayama, Yasutaka Kanamori, Kazunori Ohira, Masaaki Toyomizu, Masataka Shiobara, Nobuyuki Furuya, and Yoshinori Shinohara.

Liaison Officer, Major Hussain Mahboob. High Porter; Mohd Jaffar and Mohamachoo.

To the Siachen Glacier

The main party flew to Skardu from Rawalpindi with cargo on May 28.

Eleven members and the liaison officer of Pakistan Government started from Skardu by 9 jeeps chartered on 30. The way to Khapalu is about 100 km on the so called jeepable road along the Indus River. We had an accident that a jeep slipped into the Shayok River at 6 miles to Khapalu, and one of us (Toyomizu) was seriously injured (jaw fracture and dislocation of left shoulder). Given emergency treatment at Skardu Hospital, he went back to Japan on June 20 and completely recovered.

The caravan started Khapalu on June 9, including 137 porters, one liaison officer and ten members. The caravan route to the Base Camp expected on the Siachen Glacier, was traced by passing through several small villages such as Sulmo, Urse, Paloa, Dansom, Pallit and Goma. The liaison officer stayed at Goma, waiting for the leader, who arrived there on June 29. When our party arrived at Chumik, the weather became worse with snow falls. So we gave up to bring the porters up to Alibransa, dismissing about two thirds of them. Twenty porters were selected for carrying further foods and equipments passing through the Bilafond La (5,550 m).

We could have the first view of the summit of our target when we advanced near the Siachen Glacier. The route was originally planned to approach from the south-east side of the mountain, however, it looked very difficult and almost impossible, because of huge snow walls and narrow rocky ridge of about 1,000 meter high. We were forced to look for another way to the summit. A round-about route, through the Staghar Glacier approaching the peak from the west side, was investigated intensively. A short-cut was finally found, crossing through a saddle, tentatively called the Staghar Pass, on the long ridge dividing the Siachen from the Staghar Glacier. On July 12, all members and goods were gathered at the Base Camp (5,200 m) on the Siachen Glacier, about a few miles east of Sia La.

On the Staghar Glacier

The way to the Staghar Pass from the Base Camp was the most difficult part. It was protected by 50 degrees snow face and ridge, and 700 meters of rope was fixed on the route. From Camp 1 (5,850 m) constructed near the pass, we went down to the Staghar Glacier through a small branch glacier and established Camp 2 on the Staghar Glacier (5,800 m), which was actually the advanced base camp. Camp 3 was established on the south saddle of Singhi (6,300 m), and Camp 4 (6,600 m) was completed on July 28. There were little difficulties on

the route between C 2 and C 4. Everything was ready to start to attack the summit at the end of July, however, all members were forced to stay in C 2 for 9 days because of bad weather with snow storm.

On August 7, the first and second attack parties started C 2 and stayed at C 4 and C 3, respectively. On August 8, the first party left C 4 at 5.00 a.m. and reached the summit at 10.30 a.m. The route was almost snow slope and the steepest part was about 30 degrees. Climbing up higher than 7,000 meters, we faced with huge snow-roof developed on the left side (Chinese side) and a steep snow slope on the right side falling down to the inner Singhi sanctuary. The summit was only a few square meters flat, from where gorgeous spectacles of the surrounding mountains of the Karakorum, such as K 2, Gasherbrum, Saltoro Kangri, K 12, Rimo and Teram Kangri were seen, although covered somewhat by clouds. On the next day, the second party reached the summit in a beautiful weather.

We did not use Oxygen at all. Although we had a little hazards to sleep in high camps, we had no difficulty for climbing activities.

Epilogue

After the climbing, some small explorations were carried out in the Staghar Glacier and to the Italian Col through the Teram-Shehr Glacier. In the field of medical survey, about 70 patients with goiters were examined in 6 villages along the Saltoro River. (See Chart 16 (a) & 16 (b), Fig. 21 & 22)

Changabang Southwest Ridge 1976

Naoki Toda

Members of our expedition were Akira Kobayashi, Masahide Aida, Harumi Ohno, Yukio Asano, Teruyoshi Karino, and I as the leader. We used no high-altitude porters.

On April 25, we started our approach march along Rishi Ganga from Reni and arrived at Dibrugheta on April 28. We did not see any snow on the way and there was no dangerous or difficult part, therefore, it should be better than the route via Dharanshi Pass as an approach way.

We built the Base Camp at 4,800 m on Ramani Glacier on May 8 and settled ABC on May 15 at 5,360 m at the foot of the Southwest Ridge.

As the rock ridge was getting steeper, we started to fix ropes from the height of 5,580 m. C 1 was placed at 5,870 m on the ridge by cutting ice slope into a ledge. We climbed straight up the Southwest Ridge but the ridge changed into vertical rock wall above 6,000 m.

On June 4, after 4 days tough work to overcome this difficult vertical rock, C 2 was established on the ice cap (6,480 m). Above there to the Gendarme, we climbed rock and ice and found us standing at the narrow snow ridge with cornices where our supply of fixed-ropes was finished. However, at the same time, we found that we had overcome difficult part of this mountain.

All of us reached the summit at 1 : 00 p.m. on June 13. It was the 33rd day since ABC was set up. (See Fig. 24~27)

Malubiting Central (7,269 m), 1975

Toshihiko Sato, Kazuhiko Mori

Malubiting Central was the only unclimbed 7,000 m-peak in the Chogo Lungma Glacier region. We, Iwate Section of the Japanese Alpine Club, despatched an expedition party of ten-members led by J. Kasahara and T. Sato to Malubiting Central.

We settled B.C. at Balichor (4,280 m) on Chogo Lungma glacier on July 8. C 2 was settled at Polan La on July 31. From the col we climbed up to the plateau on north of Malubiting. M. Onodera, H. Atumi, T. Takahashi and K. Mori started C 4 on the plateau on August 1 and after a bivouac on the west face they made the first ascent of the Central peak. However, H. Ito was killed by a slip when he was descending the north-east ridge on his way back from C 4. Other members were T. Murakami, T. Uasa and K. Hanasaka.

(See Chart 21, Fig. 29 & 30)

Skyang Kangri 1976

M. Nieda

Forward

Skyang Kangri has history of exploration which is related to K 2 in its early stage. In 1902, an English party (led by Eckenstein) made the first attempt to K 2 after failing twice because of difficulty in ascending 8,000 m peaks. At this time, one of the members climbed the col at the head of the Godwin-Austin Glacier by ski and named it "The Windy Gap" (presently called the Skyang-La). In 1909, an Italian Party (led by Duke of Abruzzi) challenged Skyang Kangri after an attempt to K 2. But they were forced to retreat at 6,600 m high blocked by a big crevasse on the east ridge which stretch from Skyang-La up to the summit. Since then, this mountain has drawn no attention of alpinists, as they became more interested in climbing higher mountains. In 1975, however, an Austrian party (led by Deutschmann) attempted it from the east ridge same as the Italian did. But the leader was killed at 7,000 m high and they gave up to continue the climb.

Commemorating the centenary of Gakushuin University, this plan was made.

Our party was composed of; Leader, G. Mitsui M.D., Climbing Leader, M. Nieda, H. Nishigori, K. Takahashi, Y. Daiguuji, Y. Kinugawa, Y. Iizuka, Y. Fujiooji, H. Nagata, Y. Fukazawa.

Ascent

On June 25, 1976, we arrived at Skardu after waiting for the flight for three weeks in Rawalpindi, and within the same day we started the approaching march. On July 8, we settled our Base Camp at 5,000 m high on the Upper Godwin-Austin Glacier, at the foot of K 2. On July 13, we pitched C 1 at 5,600 m high just near Sella Pass on the Upper Godwin-Austin Glacier. There were so many crevasses between B.C. and C 1 that we could hardly imagine that in 1902 one of the members of the English party climbed this glacier by ski. We could see the whole view of Skyang Kangri at C 1. We set our route on the east ridge which has five steps. From Windy Gap we went through steep ice walls up to the foot of an ear-shaped peak located on the first step (We named it as the Cat's Ear). On July 18, we set up C 2 at 6,200 m high at the

foot of the Cat's Ear where we found abandoned tent of the Austrian Party. Owing to a lot of hidden crevasses between C 1 and C 2, most of the members fell into the crevasses but fortunately nobody was injured. On July 25, we built C 3 at 6,600 m high on the second step. Between the first and the second step we found a big crevasse which beated the Italian party in 1909. Fortunately, thanks to a snow bridge on the crevasse, we could easily cross it.

On July 26, we started to fix ropes on the ice wall to the third step, but as the weather worsened, we had to return to C 2 without making progress. On August 4, we resumed our attack to the third step after waiting ten days for the recovery of the weather. After all we could manage to pass through the third step with much toil and we found the fourth step very steep and protected with glass-like ice. On August 8, after three days' hard work, we established C 4 at 7,000 m high cutting the ice to make enough space for the tent which hung half stretched out into the air. Two members (Nishigori and Kinugawa) remained C 4 to try the summit. On August 9, they started C 4 in clear weather and they climbed up above the fourth step (7,150 m). There were three possible ways. One is to try for the east ridge, another to ascend the glacier north of the east ridge and the last to climb the northeast ridge after traversing the glacier. They chose the last one. After traversing the knee-deep snow on the glacier, they decided to return at 7,200 m high because they were tired.

On August 10, Fujiooji and Nagata moved C 4 to the place at 7,100 m high and on 11th at 5 : 25 a.m., they started C 4. Following the same route as the first party, they climbed steep and snowy slope up to the northeast ridge. They reached at the edge of the summit at 0 : 15 p.m. After digging a tunnel into hanging cornice, they finally were on the summit of Skyang Kangri at 0.50 p.m. They enjoyed a clear view of K 2 and other 8,000 m peaks in Karakorum. All the mountains in the Biafo, Hispar and Siachen Glaciers were also clearly seen.

Remarks

According to the reports by the preceding parties, they had to dismiss the porters hired at Skardu and hire the local ones at Askole. However in our case we could use porters hired at Skardu up to B.C. because of their insurance system. They were willing to work without making any strikes, and were workable even under cold weather and high altitude. Troubles we had during the march-in were that the liaison officer was not cooperative to us. After returning to Japan, we reported it to the Pakistan Government who gave us the following

reply.

(1) Party can request the change of the liaison officer who seems inadequate for his task.

(2) Party can nominate any liaison officer, for instance, who was cooperative to the previous parties.

(3) From this year onward the government shall select approximately 30 special officers from the Ministry of Defence or the Ministry of Tourism.

(See Chart 22, Fig. 31, 33 & 34)

Abi Gamin 1976

The Indo-Japanese Women's Expedition II

Michiko Fushimi (Suda)

It was in 1968 that the first Indo-Japanese Women's Expedition was organized and Kailash (5,656 m) in the Himachal Pradesh was successfully scaled by all ten members including four Indian members. This was the second Indo-Japanese Women's Expedition to Kamet and Abi Gamin, and this party was contemplated by the Women's Meeting of the Japanese Alpine Club.

The Indo-Japanese Women's Expedition II, sponsored by the Japanese Alpine Club and the Indian Mountaineering Foundation, had hoped to climb both Kamet (7,756 m) and Abi Gamin (7,355 m). The first ascent of Abi Gamin by women was made on June 18 but we were unsuccessful in two attempts on Kamet due to bad weather. Our Indian members were Dr. Meena Agrawal, leader, Chandra P. Aitwal, Thrity F. Birdy, Rama S. Gupta and Bharati Banerjee. Our Japanese members were Fumie Nasu, Harumi Shimizu, Nobuko Takamoto, Yukiko Tomita and I as deputy-leader. We took the same route as that of the Smythe's party in 1931 and of the N. Jayal's party in 1955. After leaving New Delhi on May 10, we got to Base Camp at 4,600 m near the confluence of the Purbi Kamet and the Raikana Glacier on 19. We established camps as follows: C 1 (4,850 m) on May 23; C 2 (5,100 m) on May 26; C 3 (Advanced Base) (5,450 m) on May 29; C 4 (6,100 m) on June 5; C 5 (6,800 m) on June 12; and C 6 (7,150 m) on June 15. We made two unsuccessful attempts on Kamet on June 16 and 17. On 18 Chandra Prabha Aitwal, Thrity Birdy and

Fumie Nasu with Sherpas, Lakpa Tsering and Kami Tsering reached the summit of Abi Gamin.

I think a joint expedition would only be successful having mutual understandings between the two countries with different culture, and I wish to have the next opportunity soon.

I would like to give a high value on the late Mr. Saburo Matsukata's sayings, who was then lying on the hospital bed, that it is important to make an everlasting human-relationship with foreign partners. (See Chart 23, Fig. 32)

SACS MILLET

デザインの良さだけを注目しないでください。

たとえば写真のミレーザック……。一見しておかわりいただけるファッショナブルなデザインです。でも、どうかそれだけに気をとられないでください　ハンドレスト、クイックファスティングベルトバックルなど細かい部分もいろいろ改良。ミレーザックはあくまで機能性が信条です。もちろん機能性とファッション性を兼ね備えているほうがよりグッドだと信じていますが…。

SACS MILLET

MADE IN FRANCE

日本総代理店

リーベルマン・ウェルシュリー・エンド・コンパニー・エス・エイ

スポーツ用品事業部

〒160 東京都新宿区西新宿2－1－1

新宿三井ビル TEL(03)344－2711(代表)

YOSHIDA TENT
OGIKUBO TOKYO

40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案
1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　吉田喜義商店

東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京(399)2548　(398)8469(夜間)

Restaurant
FONDUE Brigand STYLE
山賊フォンデュ

山賊料理

ブリガンドの意味は「山賊」。
自然を愛する勇者です。
ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい。

M·KATAGIRI
SINCE
1914
TOKYO JAPAN

山とスキーの専門店

キスリング
クレッターザック
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
片桐盛之助
電話 東京(831)｛1794番 / 6680番

信頼されて50年

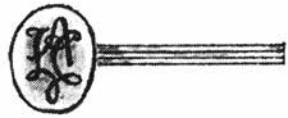
山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

山友社 たかはし

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432・1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1－5－11 TEL (271)1560・8575
新宿店 〒160新宿ステーションビル4階 TEL (352)6564

日本山岳会の記念品・バッジを作ってます。



株式会社 ラマーノ

〒102 東京都千代田区三番町24三番町ハイム ☎ 03(262)0525

CGV・6136

滋養強壮に
新グロモント

●虚弱体質
●肉体疲労、栄養障害、
食欲不振時の栄養補給に。

豊かな
生活環境を築きあげる……

（建　材）	（機　器）	（電　機）
●カーテンウォール	●NKフィルター	●電気洗濯機
●アルミ自然発色NKカラー	●各種浄水・廃水処理装置	●冷凍ショーケース
●サッシ ドア	●熱交換器 装置	●冷蔵ショーケース
●用途別サッシ ドア	●熱交換器用フィンチューブアライトロン	●オープンショーケース
●各種間仕切	●ウエルフィン	●ウォータークーラ

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三

東京都千代田区大手町２－６－２　〒100

TEL 東京（03）270－6511（大代表）

保険は愛です。力です。

まごころの共栄火災です

まごころ KYOEI

共栄火災海上保険相互会社

本社 東京都港区新橋1－18－8 〒105 TEL(03)591－6431(大代表)

数々のエクスペディションで実証された高性能、高品質

ザンター羽毛服

海外遠征隊重装備用

羽毛服Ⓐ

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：1,050g
価格：L￥41,000　M￥40,000

パンタロン

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：610g
価格：L￥24,000　M￥23,000

国内の冬山登山向

羽毛服Ⓑ

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：850g
価格：L￥37,000　M￥36,000

本格的クライマー向
行動用

登攀用羽毛服

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：550g
価格：L￥24,000　M￥23,000

ニッカ

色：紺・赤　サイズ：L・M
総重量：420g
価格：L￥19,000　M￥18,000

●主要販売製品
羽毛服、パンタロン
登攀服、ニッカ
アンダーウェア、ベスト
フード、ミトン、シューズ
シュラフ各種

株式会社
ザンター
東京都世田谷区野沢2-20-1　☎03(410)8808

本格派の

頼れる パートナー

美津濃登山品は、
幾多のアルピニストの信頼にこたえてきました。

BERG®
MIZUNO

● 美津濃登山品は、このマークが目印です。

▼ K2日本登山隊に使用された、大型アタックザック。
YRA-1100

▲ イタリア・ガエルネ社製の、本格的 縦走用登山靴。
YKM-6000

MIZUNO
VICTORY 美津濃

秀山荘で登山を完成

ハイキング用品から遠征隊装備迄

あなたの登山が安全で楽しいものであること
を願って、当店では商品を厳選しております。

●二村ピッケル　（ナンバーネーム入り）

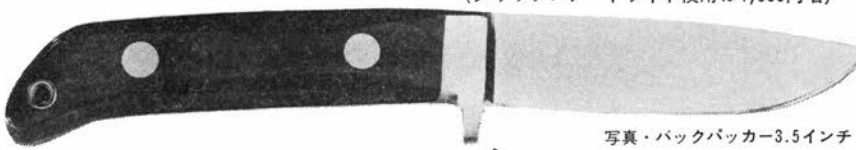
あなたの為に一本一本注文製作する名品です

真空材……39,000円　　大気材……33,000円

●二村カスタムナイフ

最高級カスタムナイフを注文製作、RC60の刃は切れ味
バツグン（ケース付・グリップ黒檀）

4 インチ　ドロップポイント……24,000円
4.5インチ　ドロップポイント……27,000円
5 インチ　コーティリティ……33,000円
3.5インチ　バックパッカー……25,000円
（グリップにアートライト使用は4,000円増）



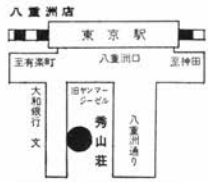
写真・バックパッカー3.5インチ

■地方の方は通信販売をしております。

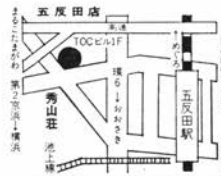
秀山荘

●営業時間

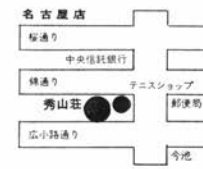
平　　日＝AM10：30～PM8：00
日曜・祭日＝AM11：00～PM6：00



八重洲店／中央区八重洲4－1
☎03-281-8456



五反田店／品川区西五反田7－22－17
TOCビル1階ミツコプラザ内
☎03-494-3247



名古屋店／名古屋市千種区内山町3-85
☎052-741-2010

文化と情報を提供して
北から南へと大きく広がります。

BOOKS KINOKUNIYA

紀伊國屋書店

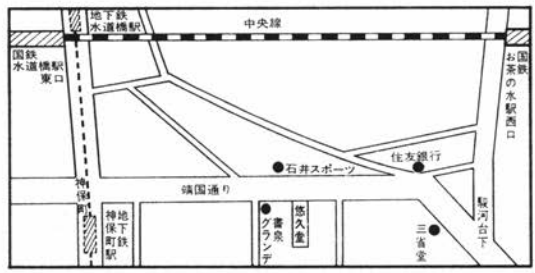
東京都新宿区新宿3-17-7 TEL(354)0131(代)

渋谷店・日比谷店・玉川高島屋店・アドホック店
新宿住友ビル店・吉祥寺東急店・川越丸広店
小田急ハルク店・大手町ビル店・新丸ビル店
京王プラザ店
札幌店・厚別店・琴似店・小樽店・新潟店・梅田店
熊本店・サンフランシスコ店・ロスアンゼルス店

山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係者の御相談もどうぞ—地方出張も致します



㈲悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町1－3
☎03（291）0773・0920

丸善の山岳関係洋書ご案内

●近着新刊

SOLDIERS ON EVEREST. By Jon Fleming and Ronald Faux. With 20 p. of photographs, 4 in colour. '77. 256 p. (HMSO) ..... Paper ¥1,280

1976年5月，英国登山隊々員J.H.ストークス，M.P.クレーンによるエヴェレスト登頂記録をドラマチックに再現。

EVEREST THE HARD WAY. By Christ Bonington. With 85 colour photographs. '77.(Arrow Books) ..... Paper ¥840

刊行以来ベストセラーとして定評あるアルピニスト必読書のペーパーバック廉価版。

THE MOUNTAIN YEAR: The Year in Britain, The Alps, Himalaya, Conservation, Gear, Addresses. Vol. 1. '77. (Climber & Rambier) ¥560

英国山岳界の活動，トピックス，その他諸データをコンパクトに収集する新年鑑。

●好評発売中

WALL OF SHADOWS: The New Zealand Jannu Adventure. By Graeme Dingle. Forew. by Sir E. Hillary. With 38 colour photographs. '76. 178 p. (Hodder) ¥4,450

ICE WITH EVERYTHING. By H.W.Tilman. With 19 photographs. '74. 142 p. (National Publishing Co.) ¥1,870

Ⓜ 丸善
東京・日本橋
☎(03)272-7211

ニッチの

登山・ハイキング シリーズ

定評ある著者陣容！
全56巻
定価各450円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

①奥武蔵　武甲・雲取
②奥多摩　大菩薩
③奥秩父
④陣馬・高尾　秋川渓谷
⑤丹沢山塊
⑥富士・五湖　三ツ峠
⑦箱根　熱海・湯河原
⑧奥日光　奥鬼怒
⑨尾瀬　銀山湖
⑩軽井沢　妙義山
⑪伊豆半島　大島
⑫三浦半島　鎌倉
⑬美ヶ原　霧ヶ峰
⑭谷川岳
⑮八ヶ岳　蓼科山
⑯那須・塩原　鬼怒川
⑰磐梯・吾妻　安達太良
⑱志賀高原　草津白根
⑲上高地　乗鞍岳
⑳黒部・白馬　唐松岳
㉑房総半島
㉒浅間・菅平
㉓蔵王連峰
㉔八幡平　岩手山・駒ケ岳
㉕霧ケ峰　白樺湖・蓼科山
㉖雲ノ平
㉗妙高・戸隠　野尻湖・黒姫
㉘南アルプス北部
㉙中央アルプス
㉚南アルプス南部
㉛北アルプス
㉜加賀白山　白川郷
㉝飯豊・朝日
㉞大雪山　層雲峡・然別湖
㉟槍・穂高　アルプス銀座
㊱立山・剱　黒部渓谷
㊲東海自然歩道 I
㊳東海自然歩道 II
㊴東海自然歩道 III
㊵入笠山　守屋山・高遠
㊶笹渡・鳥甲　清津峡
㊷越後三山　奥只見・巻機山
㊸御岳　大菩薩
㊹金剛山　葛城・岩湧山
㊺六甲・摩耶
㊻比良連山
㊼大峰・吉野
㊽大台ケ原　大杉谷
㊾赤目・青山　室生寺
㊿鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(51)大山・蒜山
(52)三瓶山　帝釈峡
(53)秋吉台　三段峡
(54)九重山　久住高原
(55)英彦山　耶馬渓
(56)阿蘇山

※保存用には
日本登山地図集
I 中部山岳・信州篇
II 関東・上越篇
をどうぞ――定価各4,800円

雷鳥マークのカラー表紙に衣替えして新発売!!

地図の 日地出版
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03 (261) 5126
支店　大阪市南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06 (252) 7421

●世界最初のヒマラヤ山岳地図資料集！

ダウラギリⅥ峰

新発売

Mountaineering Maps of the World

学研版 世界山岳地図集成

——ヒマラヤ編——

●編集＝諏訪多栄蔵他●監修＝吉沢一郎　定価＝19,000円

■本書の特色

●各山域ごとに、入手の容易でない大縮尺(20万分の1程度)のレリーフ4色地図を掲載。

●各地図は、従来のヒマラヤ研究の成果をまとめた最新の内容で、本邦初発表の地域も収載。

●カラー約100点、モノクロ約50点の写真、見ているだけでも楽しい内容。また、山並が実感として伝わってくる鳥瞰図や細かに調査されたわかりやすい概念図も豊富。

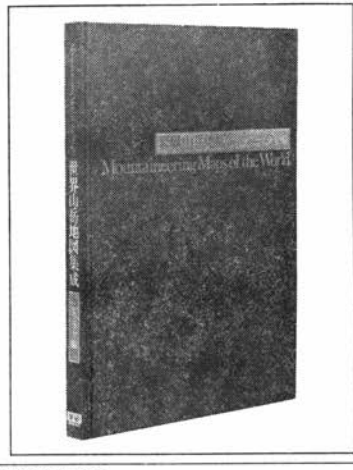
●地図は、ローマ字表記で、欄外に検索に便利なカタカナ表記の山名索引があり、山名探しが容易。

●本文は、ヒマラヤ全域にわたる各山の解説、各登山隊のルートを紹介した登はん史、参考文献などの資料がまとまっており、研究資料としても大変便利。

●さらに、トレッキングガイドが豊富で、ヒマラヤの山歩きを目ざす読者にも十分に役立つ。

●地図が見やすいよう、特に開きをよくした製本。

●体裁　B4判／328ページ／上製本／カラー／32ページ　地図／50ページ(25図)　本文／その他／196ページ



続刊　カラコルム・ヒンズークシ編
53年6月下旬～7月上旬発売予定

登山対象山域を中心に図取り本格的な山岳地形図集

学研版 日本山岳地図集成 全2集

縮尺 5万分の1／吉沢一郎他編

第1集 北海道→中部山岳(北部)編
第2集 中部山岳(南部)→九州編
全2集セット 現金価格24,000円(分割払もあります)

内容見本ご希望の方は最寄りの書店にご請求ください。

学研 学習研究社・販売局 〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111(大代表)

旅の山菜 片岡 博
山菜21種との出会いと味わい方を綴る1500円

山菜記(正・続) 片岡 博
滋味あふれる随想集！…… 正880円・続620円

新版 山を考える 本多勝一
世界をわかせた著者が綴る好エッセイ 980円

きたぐにの動物たち 本多勝一
北方動物と人間とのかかわりを描く… 980円

山のパンセ 串田孫一
自然文学の不朽の名著。ロングセラー 1500円

若き日の山 串田孫一
処女出版作、中・高時代の作品も収録…1500円

心の歌う山 串田孫一
荒廃した精神と自然に抗する著者……1800円

上高地の大将 木村 殖
クマやカモシカ相手のアルプス40年… 980円

谷川岳ヒゲの大将 高波吾策
谷川岳に生き、親しまれた著者の一代記 980円

剣岳の大将文蔵 佐伯文蔵
剣沢小屋主人の貴重な自伝と記録…… 980円

はるかな尾瀬 朝日新聞前橋支局編
自然と人間とのかかわりを鋭く追求…1500円

飛騨のやきもの 長倉三朗
やきものとその歴史を初めて体系化…2500円

炉辺山話 岡 茂雄
山にまつわる名編を収録したエッセイ…1300円

私たちのシルクロード 平山美知子 平山郁夫 装画
平山郁夫夫人のユニークな探訪記……1400円

シルクロードの十字路で モタメディ 遙子
東西交渉史研究家がつづる遺跡訪問記 860円

●ブルーガイド海外版
ネパール・パキスタン ヒマラヤ・トレッキング
世界一豪華な山岳展望と町の詳細案内 1380円

●ブルーガイド海外版
ヨーロッパ・アルプス
すべてを紹介した初のアルプス案内……680円

東京銀座1-3-9 **実業之日本社** 振替東京1-326

白水社

数々の業績に輝くベテランたちが情熱のすべてを傾けて執筆した登山技術書の決定版

日本山岳会編

登山の技術

全2巻

四六判
図版・写真多数

上巻

三八二頁　価二〇〇〇円

序論　金坂一郎
リーダーシップ　宮下秀樹
トレーニング　濱野吉生
山歩き　川上隆
食糧　神崎忠男
岩登り技術　湯浅道男・堀田弘司
確保理論　金坂一郎

下巻

三八六頁　価二〇〇〇円

積雪期登山　野村哲也
氷雪技術　湯浅道男・堀田弘司
山スキー　柳沢昭夫
露営　松永敏郎
雪崩　金坂一郎
高所登山入門　宮下秀樹
登山技術の変遷　山崎安治

ジャヌー北壁　小西政継著　一八〇〇円

処女峰アンナプルナ　最初の八〇〇〇米峰登頂　エルゾーグ　近藤等訳　一四〇〇円

アンナプルナ南壁　ボニントン　山崎安治訳　二〇〇〇円

星と嵐　—六つの北壁登行　レビュファ　近藤等訳　一五〇〇円

ザイルのトップ　フリゾン-ロッシュ　近藤等訳　一三〇〇円

ヒマラヤの高峰　全3巻　深田久弥著　望月・諏訪多・雁部編　各巻五八〇〇円

101 東京都千代田区神田小川町3－24／振替東京9－33228／電話291－7811(代)

山岳名著選集

中央アジアの高峯

●原真・田村俊介編●A5判●2,500円

ソ連アルピニズム連盟が主催する国際パミール・キャンプに参加した日本山岳隊は、みごとコムニズム峰を征服し、一隊はコルジェネフスカヤ峰にも登頂を記録した。本書は、その苦闘の全記録であり、「パミール入山事情」の、数少い貴重な資料となろう。

好評既刊

天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝

遥かなる天山

●アルダン・セミョーノフ著●田村俊介訳●A5判●2,500円「ロシア探検家の父」と謳われたピョートル・ペトローヴッチ・セミョーノフの伝記である。

シルクロードの城塞

パミール

●田村俊介著●A5判●2,500円 パミールは雄大なる全容を現わした。本書は、レーニン峰遠征登山記に加え、パミール全般について著した好書。

エヴェレスト登頂記

●ジェームス・アルマン著●丹部節雄訳●A5判●2,500円 本書は、アメリカ・エヴェレスト遠征隊登頂の公式記録である。

冬のアイガー北壁初登攀

●トニー・ヒーベラー著●横川文雄訳●A5判●1,200円 〝冬のアイガー北壁初登攀成功〟の全記録である。

ダウラギリ登頂

〝白い山 ダウラギリ〟に挑み、初登頂に成功した、スイス・ヒマラヤ遠征隊の公式報告書である。

●マックス・アイゼリン著●横川文雄訳●A5判●1,500円

ベースボール・マガジン社 〒101 東京都千代田区神田錦町3-3
●最寄りの書店でお求めください。ない場合でも取りよせてくれます。

山と溪谷社の豪華写真集

◉日本山岳写真集団創立10周年記念《豪華永久保存版》

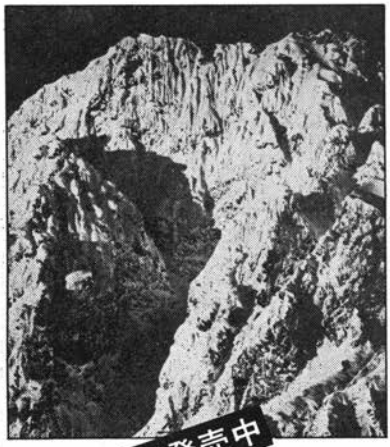
山々のあらゆる美しさを完璧に表現した空前の写真集

新田次郎＋日本山岳写真集団の山に賭けた情熱の結晶

美しき山

総編集・新田次郎

撮影・日本山岳写真集団
山域解説・徳久球雄



好評発売中

限りなく日本の山を愛し、いつくしむ暖かい眼をもつ作家・新田次郎氏と、日本山岳写真集団の13人のサムライが、ガッチリと手を組んで作り上げた、まさに手造りの豪華写真集

菊判変型／布紙併用堅牢箱入り／段ボールケース付

★定価9800円

本書お買上げの方に洩れなく

『美しき山』カレンダーを進呈！

『美しき山』を書店または本社直接に、お買上げになりました方々に洩れなく山と溪谷社オリジナルの『美しき山』一九七八年版カレンダーを差上げます。大きさはA4判／一色グラビアのすばらしい作品集です。

山本和雄作品集

穂高

日本アルプス・穂高岳——そのアルペン的山容の美しさは数ある日本の山岳景観の中でも第一位に推される。残雪に、新緑に、紅葉に、四季おりおりに彩られた穂高の峰々は、ときに豪壮な山岳美を、ときにほのかな詩情を漂わせて私たちの胸をゆさぶる。

山と溪谷社創立45周年記念出版

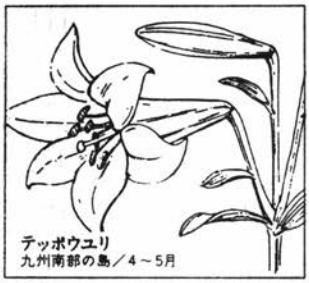
菊判変型／布装厚表紙保存版

発売中★9800円

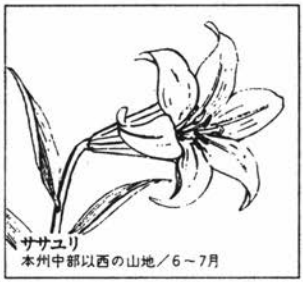
山と溪谷社

〒105 東京都港区芝大門1-1-33
振替・東京8-60249／☎(436)4021

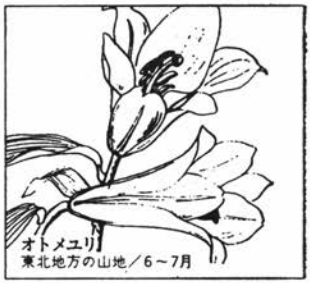
日本全国で
一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月

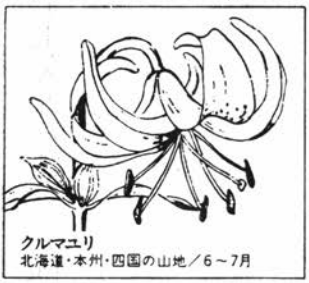


オトメユリ
東北地方の山地／6～7月

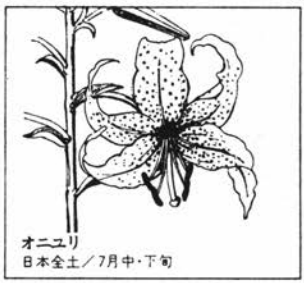
ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月

イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬

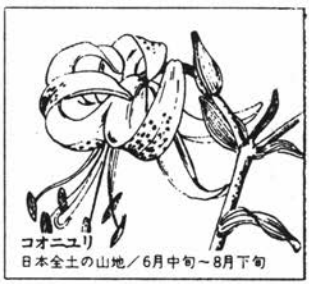
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



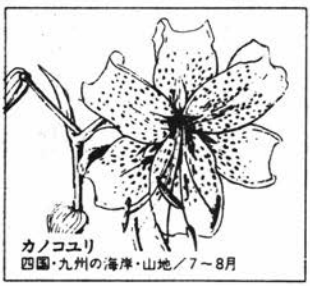
クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余ヵ店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

協和銀行

山日記 一九七八年版

日本山岳会編　A六ポケット判――――定価九五〇円

『山日記』は、できるだけ広い範囲の登山者に利用して頂くよう編纂され、殊に若い世代の人々に一人でも多く活用して貰うよう企画されています。山党同志の洒落た贈物として喜ばれています。プレゼントカード付。

快晴の山

織内信彦　A五判三三八頁――――定価二、五〇〇円

彼は氷ノ山以来五年間十幾つの山行が、みな好天に恵まれたというから誠に幸運な天気男と言えるだろう。「回想の山々」「人と本」「海外紀行」等に就いてもゆっくり読ませてもらう事を楽しみにしている……(三田幸夫)

ナンダ・デヴィ縦走 一九七六

日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編　24×23カラー一五〇・本文四二頁――定価三、九〇〇円

ガルワルヒマラヤの盟主、ナンダ・デヴィの主峰東峰間の初縦走を為し遂げヒマラヤの高峰の登山にひとつの新しい可能性を切りひらいた日印合同登山隊の記録を、豊富なカラーで再現。

日高山脈 自然・記録・案内（第二版）

北大山の会編　A五判三六二頁――――定価二、四〇〇円

日高山脈は他の山岳のひらけ方に比べれば、往時のおもかげを十分に残しており、今なお岳人に注目されている。本書は北大山の会がながく年にわたる踏査、記録の成果をまとめたもので、日高の全容が見事に描かれている。

山の本販売目録 一九七七（二集）

茗渓堂編　B六判二三四頁――――定価九五〇円

この図書目録は一九七五年版を増補、改訂したもので、書店で入手可能な山と探検をテーマとする本約一、〇〇〇点を選んで作成した。とくに海外登山の記録と報告書類、東京以外で発行されたものは極力集めるよう努めた。

淡彩画絵はがき 北海道の山・原野・花

坂本直行　一集・2集（6枚一組）――――各三〇〇円

一集＝桐の実・初冬の中部日高・むしゃりんどう・まゆみ・おおめしだ・初夏の大雪山黒岳

2集＝えぞしゃくなげ・初冬の利尻富士・えぞふうろう・ふきのとう・はまぼうふうの種・五月のトムラウシ山

●出版目録送呈●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。

茗溪堂 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1　電話03-291-9442 振替東京8-24723

山岳　第七十一・七十二年（通巻一三〇号）
一九七七年十二月一日発行
価三〇〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都文京区湯島一ノ六ノ一
さくらビル内（〒一一三）
電話　東京八一三局二二八六番
振替口座　東京四八二九番
発行人　西堀栄三郎
編集人　近藤信行
〈編集委員〉
山崎安治・金坂一郎・中島寛
山本良三・節田重節・池田智津子
倉知敬
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二ノ一
電話　東京二九一局九四四二番
振替　東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

日本山岳会創立70周年記念出版

覆刻 日本の山岳名著

企画・編集　日本山岳会

●日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著

❶志賀重昂「日本風景論」……政教社 明治27年
❷高頭式編「日本山嶽志」……博文館 明治39年
❸小島烏水「日本アルプス」全四巻 明治43年～前川文栄閣 大正4年
❹鹿子木員信「アルペン行」……政教社 大正3年
❺田部重治「日本アルプスと秩父巡礼」……北星堂 大正8年
❻槇有恒「山行」……改造社 大正12年
❼冠松次郎「黒部谿谷」……アルス 昭和3年
❽大島亮吉「山―研究と随想」……岩波書店 昭和5年
❾板倉勝宣「山と雪の日記」……梓書房 昭和5年
❿藤木九三「雪・岩・アルプス」……梓書房 昭和5年
⓫武田久吉「尾瀬と鬼怒沼」……梓書房 昭和5年
⓬辻村伊助「スウイス日記」……梓書房 昭和5年
⓭辻村伊助「ハイランド」……梓書房 昭和5年
⓮小島烏水「氷河と萬年雪の山」……梓書房 昭和7年
⓯伊藤秀五郎「北の山」……梓書房 昭和10年
⓰今西錦司「山岳省察」……弘文堂 昭和15年
⓱Walter Weston: Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, 1896 John Murray, London

別巻　木暮理太郎「山の憶ひ出」増補版　全二巻
解題書（A5判・二七〇頁）斯界研究者16氏共同執筆

■全18点22冊　付・解題書〈全巻一括配本〉
特典　特別賞料＝日本山岳会会報第一号（昭和5年）～第一〇〇号（昭和15年）覆刻合本進呈

推薦者
●遠い青春との再会　井上靖
●貴山の気風を変える　東田稔一
●全岳人の期待と喜び　渡辺公平
●時宜を得た意義深い仕事　西堀栄三郎

■現金価格190,000円　■10ヶ月割賦価格204,000円　■24ヶ月割賦価格223,000円（割賦価格は実質年率15.75%）

大修館書店　東京都千代田区神田錦町3-24　☎ 294 2221〈大代表〉振替 東京40504

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXXI·LXXII

1976·1977